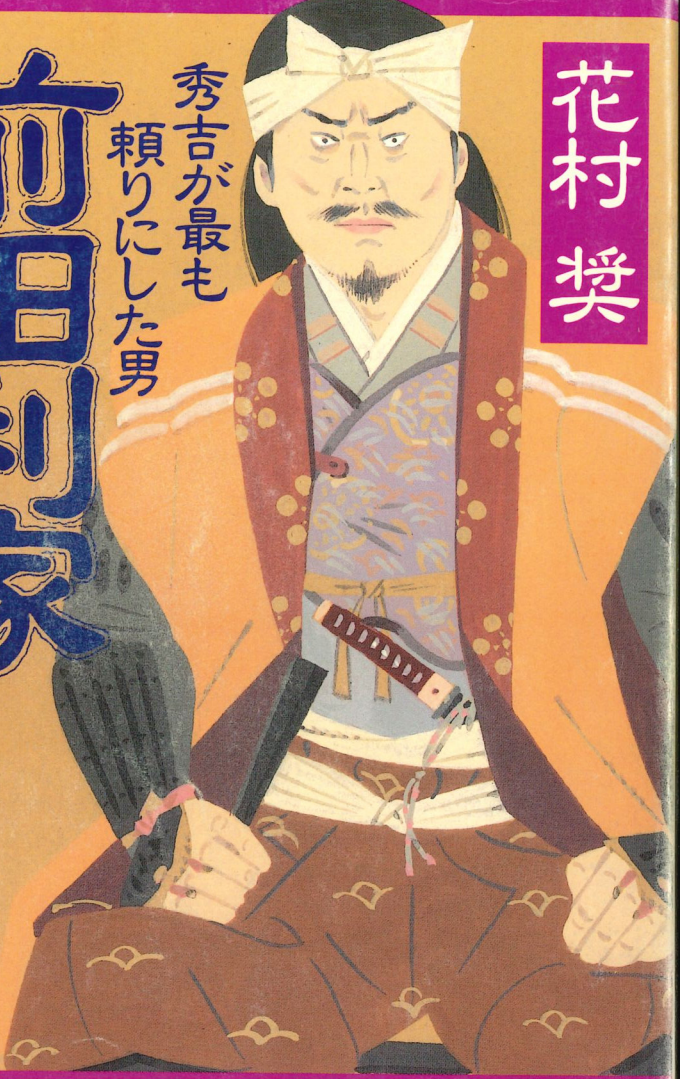
前田利家

秀吉が最も頼りにした男

花村奨

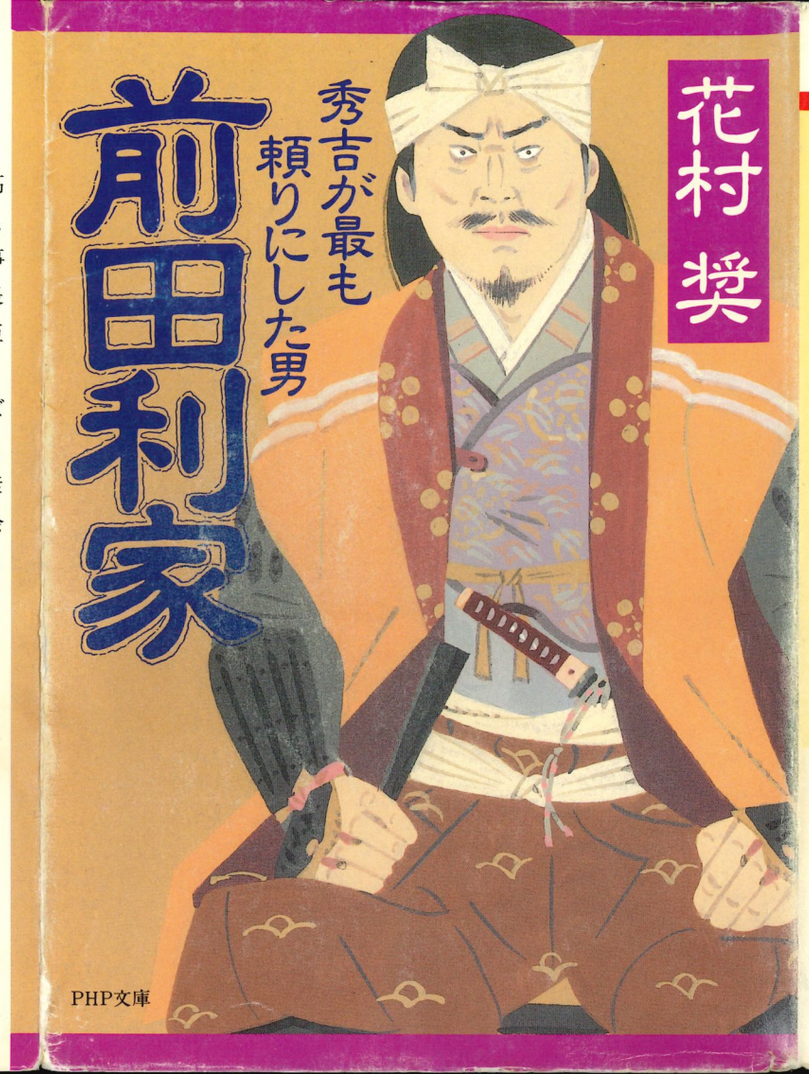


PHP文庫

天下取りリレーといっても、信長は中途で高ころびに転んで脱落し、秀吉は完走しながら、バトンタッチに失敗している。これを仮に事業に例えるなら、織田会社は、ワンマン社長の自己過信がひきがねになって倒産し、豊臣会社は一代限りで潰れたということである。その点、前田会社の初代社長利家は、いわば織田・豊臣両社の子会社から出発しているが、一代にして百万石の大会社をつくって、家康が礎いた大徳川会社とは、もう親会社、子会社という関係ではなく、ほぼ対等の立場をとるほどの会社に育てている。

本書「あとがき」より

装幀——上田晃郷
装画——西のぼる



は12-1
花村 奨
前田利家
PHP文庫
695

9784569568713
1920193006957
ISBN4-569-56871-8
C0193 ¥695E
定価：本体695円＋税

前田利家
秀吉が最も頼りにした男
花村 奨

弟・秀長を病で失ったとき、秀吉は嘆きながらこう呟いた。「秀長に代わって、わが豊家のために尽くしてくれる者は、まず利家以外にはいまいなあ……」と。「サルよ、イヌよ」と呼び合った幼少時代から、「殿下、大納言」と呼びあう晩年に至るまで、秀吉と利家の友情は絶えることはなかった。——天下取りという修羅場に入る愚を避け、徳川に並ぶ加賀百万石の礎を築きあげた名将の生涯。

PHP文庫

PHP文庫
好評既刊
［直江兼続］中村 晃
［智将 真田幸村］阿見宏介
［斎藤道三］高橋和島
［長宗我部元親］荒川法勝
［佐々成政］郡 順史

前田利家

秀吉が最も頼りにした男

花村奨

PHP文庫

花村奨

前田利家

PHP文庫

前田利家

秀吉が最も頼りにした男

花村奨

PHP文庫

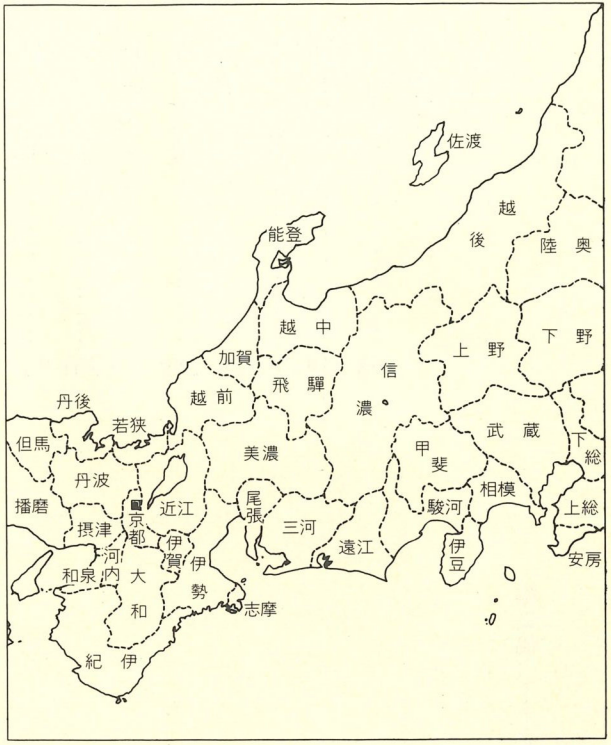
前田利家＊目次

○本表紙図柄＝ロゼッタ・ストーン（大英博物館蔵）
○紋章＝上田晃郷

小夜ノ川……8
大うつけ殿……33
再会……58
十阿弥成敗……80
熱田の森……98
桶狭間……119
寧々……140
稲葉山城……163
家督継承……185
信長怱忙……198
叡山焼き討ち……219
朝倉・浅井の滅亡……236
長篠の合戦……251
能登一州を領す……270
本能寺の変……289
勝家とお市……306
天下一統……325
利家病む……349
白山鳴動す……368
関係年表
あとがき

編集協力——元気工房

前田利家



戦国時代の日本中心部

小夜ノ川

(一)

少年といっても、伸び盛りの肢体は若竹のようにすくすくと育っている。手足も逞しく、身の丈はもう、五尺に近い大柄であった。

だが、顔つきはまだ、あどけない。色白・豊頬、きりっとした眉、涼しい眼もと……美少年と言えた。

彼は、この礫が好きであった。

礫は、尾張国愛智郡荒子村で二千貫文（五千石）を所領する前田縫殿助利昌の居館の裏手から、一町ばかりのところにある。

礫には、磨き上げたようにつるつるした丸っこい石、砕いたように不定形なざらざらした石、削り取ったように鋭く尖った石などが、白・黒・赤・青・碧と、色もとりどり、拳大から人頭大くらいなのがごろごろしていた。

いまは五月半ば。ところどころ、石塊のあいだから萌え出た青草が、さやさやと川風に揺れるほどに伸びている。

礫の中央、幅五間ほどは水が流れている。真っ青に澄んで……とまでは言えないが、濁川ではなくて、水底までよく見えた。浅いところは少年の膝くらい、深いところでも胸くらいまでしかなかった。

土地では、この川を「小夜ノ川」という優しげな名で呼んでいた。が、もともとは大小の石のごろごろしている礫から、親に先立って死んだ不孝な子が堕ちる地獄に在るという「賽の河原」を連想して、賽ノ川と呼んでいたのであろう。

「どれ、もう一と突きやってみるか」

と呟いた少年は、腰をおろして休んでいた礫から立ち上がった。

小袖の裾を短く手繰って帯で堅く縛っていた。脛は丸出し、いつ結ったとも知れない頭髪は長く伸びて、前髪が乱れている。

右手に長さ六尺ばかりの棒を持っていた。いや、ただの棒ではない。戦場で散々に使ったあげく、何かの理由で廃棄された古い槍であった。穂先がキラリと光った。

草履でごろごろした小石を踏みつけて水際に近づいた少年は、眸を凝らして川面を、そして水底をじっと睨みつけた。

鮠・諸子・鮒・鯉など、清流を好むもの、濁流を好むものが混り合っていて、この辺りは魚の宝庫であった。

小夜ノ川は、東美濃岩村の霧ヶ峰辺りを水源にしている。土岐、稲津、多治見……と、美濃東南部の山の峡を土岐川という名で流れ下る。美濃の池田を過ぎて尾張へ入るとすぐ、正伝山

麓に湧き水を湛えた正伝池からこぼれる水を加え、その辺りから名を庄内川と変え、尾張平野を北から南につらぬき、伊勢湾に流れ込む大川の支流でもあった。

したがって、鮒や鯉は、小夜ノ川の源の湿原に生まれ育って下降し、鮠や諸子は、本流の庄内川から紛れ込んで遡行してくるのである。

「えいっ！」

「やっ！」

少年は、鋭く叫んで、魚影めがけて、二度、三度、四度……と、倦かず槍を突き出していった。が、いくら突いても、魚の動きの素速さにかなわなかった。スイとうまく槍の穂先を躱すと、小莫迦にしたように銀鱗を燦めかして逃げていく。

「やれ、いまいましや」

少年は自分にとも、魚にともなく呟き、チッと舌打ちする。しかし諦めたわけではない。さらに次つぎと魚影を狙いつづける。

「えいっ！」

と突き、

「やあっ！」

と、突き立てていく。が、結果は相変わらず空しかった。

「ほんまに下手くそやなァ。見ておれん」

少年の背後で、溜息まじりに呟く声がした。

少年は、きっとして振りかえった。いつの間に来ていたか、背後二、三歩のところに、女が一人、突っ立っていた。

女といっても、年の頃は少年と同じくらいであろう。無雑作に束ねた赤茶けた髪を、襟首のあたりで赤い紐で結んでいた。継ぎを当てた汚れた布子を着て、捩りの堅そうな縄帯を締めた恰好は、男童と変わらなかった。

縄帯に、手編みらしい不細工に歪んだ魚籠を吊るして、少年の槍と同じくらいの長さの竹槍を持っていた。

陽に焼けた顔が黒い。だが、吊り上がり気味の細くすっきりした眉、勝ち気らしいつぶらな瞳、きりっとむすんだ口もとは恰好がよい。まず美少女と言えた。

だが、言うことが小憎らしかった。

「お前さの突く手が速いのは言うことなしや。が、狙いどきを間違えとる。そんなことでは百万べん突いたとて、一尾の魚も突けはせんぞ」

「小癪なことをぬかしおる！」

少年は、剛力と、乱暴で名を売っている。彼の姿が見えると、磧で遊んでいた村童たちがみな怖れをなして「まずい、あばれイヌのお出ましじゃ」と、一人残らず逃げかえってしまうほどであった。

「そういう汝なら突けるというのか」

少年は殴りつけるように言って、少女を睨めつけた。

「妾の腕もまだまだや。百ぺんが百ぺんとはいかん。でも、百ぺん突いたら、二十尾、三十尾ぐらいなら突けるな」

「まことか？」

いや、まさかと思った。少年は意地わるく言った。

「百ぺんのうち、二十や、三十は突くという汝の腕前を、おれに披露して見せろ」

「ひとさまに見せるものではない。が、お前さには特に見せて進ぜよう」

少女は、少年と並んで水際に立った。

しばらく魚影の動きに眸を凝らしたあと、無言でさっと竹槍を繰り出した。

それも二度までは失敗だったが、三度目には見事に五寸ほどある鮒を突き刺した。

「うーむ、見事じゃ！」

少年は思わず嘆声を上げた。

少女は竹槍を引いて、まだぱたぱたしている獲物を、無雑作に摑んで魚籠に放り込むと、またすぐ同じ動作に移った。

やはり三度に一度か、五度に一度は見事に獲物を取った。

その身なりの貧しげなこと、もの言いの粗野なことなどで、侮りを浮かべていた少年の眼色は、いつか敬嘆に変わっていた。彼女の竹槍を突く手、引く手の鮮やかさには、胸のすく思いがした。

「きょうの殺生は、これまでや。もう魚籠がいっぱいになったでな」

少女は、手もとに引いた竹槍を立てて、きらきら光る眸を、少年に向けた。

「魚の突きよう、ようわかりんさったじゃろう？」

「いや、わからなかった。ただ、おまえの竹槍の突く手、引く手の鮮やかさにはおそれいった。その手練、自得のものか？」

少年は言葉遣いも少し改めて尋ねた。

「ジトク？　自分でくふうしたかということか……それはちがう。お父に教わった。お父なら、百ぺんが百ぺん、失敗はせん。狙った魚は必ず獲る」

少女は顔に、かすかに誇らしげないろを浮かべた。

「そうか、たいしたものだな。名人中の名人だ」

少年は惜しみなく感嘆した。そして、それはどんな男であろうか、少女の身なりから考えて武士ではなかろう、百姓か、漁夫か、何にしても、いっぺん会ってみたいと思った。

「おまえの家は何処だ？　ここで、おまえに会ったのは初めてだが、家は遠いのか？」

「そう遠くはない。荒子観音さんの裏の方じゃ。……そこに越して来て、まだ半月ほどや。それにお父はいま、家にはおらん。旅に出ておる」

少女は、魚突きの名人である彼女の父に会いたい、叶うなら、その業を見たいという少年の気持ちを見抜いたように言った。

「魚を突くくらいなこと、お父に教わるまでもない。お前さなら、わっちの言うとおりやったら、すぐわっちぐらいにはなる」

「……」

「お前さは、じっと停まっている魚を狙うからしくじるのや。どんな魚でも、一気に一町も二町も泳ぐものではない、一気に泳ぐのは、せいぜい三尺か、四尺じゃ。そこで人が息を吸うほどのあいだ停まって、また三尺か、四尺……。くだるも、遡るも、その繰り返しじゃ」

「……」

「それじゃによって、狙った魚は、息を吸うほどのあいだ停まったとき、こっちは吐く息といっしょに突きを入れる。それが獲物を取るコツや。これ、みんな、わっちがお父に教わったことや」

少女は、ふふふ……と笑って、話をつづけた。

「お前さも、そうやって突いたら、三月くらいで百ぺんに一尾、五十ぺんに一尾くらいは突けるようになる。……お前さは手筋が良えから、二年もやったら、必ずわっち以上の上手になる。わっちなどは、五つの夏から始めて、ここまでくるのに五年もかかった」

「五つから五年というと、いま十歳か。それならおれと同い齢だな。……おれは、おまえを七つか八つくらいと思っておった」

「身丈が小さいからな。わっちはお前さを十五、六かと思っていた。お前さは身丈が大きい」

同い齢とわかると、打ち解けた気持ちになった。

「おまえは荒子に来て、まだ半月ほどと言ったが、それまでは何処にいた？」

「美濃の可児郡の姫ノ郷と言ってもわかるまい。草深い小さな里じゃ。わっちは、そこで生まれて、そこで育った。ついでに名前も言っておくと、とらじゃ。虎はこの国には棲まわんが、唐土にいて人を喰う強い生き物じゃそうな。お父は、おっ母の腹が大きうなると、男の児が産まれるのを願って、虎吉という名前を考えておったそうや。あいにく、わっちが産まれたので、そのままとらとしたそうや」

とらは気性の明るい、話し好きのようであった。

「ははは……虎は虎でも、メス虎だったわけか」

思わず笑った少年は、慌てて言った。

「ごめん、ごめん。メス虎は取り消しだ。姫で産まれた虎なら姫トラだ。……おまえの名だけ聞いて、おれの名を言わぬではわるい。おれの名は……」

「聞かいでもわかっている。荒子のお城の若のお犬さま……。それくらいは、お前さの威張った口の利きようや、良え身装で察しがつくわな」

「どうも油断のならんおなごじゃな。いや、おそれいったわい」

「そうやろう。トラはイヌより強い、油断大敵じゃ。それにわっちは、魚突きのお師匠さんや。これからも、この辺で逢うようなことがあったら、お前さが名人上手になるまで、みっちりと絞って進ぜるわな」

とらはそれだけ言うと、ふふふ……と笑い声を残して駆け去っていった。

「まるで風だな」

少年お犬、つまり、荒子（現在の名古屋市中川区荒子町）の城主、前田利昌の四男坊は、小

石のごろごろした磧を踊るように素速く駆けていくとらの姿を啞然として見送った。

天文十六年（一五四七）……夏の日の遅い黄昏が、磧をおおい始めていた。

(二)

毎日ではなかった。二日おきか、三日おき、長いときでも五日目くらいには、前田のおイヌは、小夜ノ川の磧で、姫トラと出会った。

示し合わせていたわけではないから、時も、処も定まってはいなかったが、出会えば必ず魚の突きくらべになった。

いや、突きくらべというより、姫トラを師匠と仰いでの、おイヌの突き稽古というべきであった。

姫トラ師範は厳しかった。荒子城の若だからといって、手加減も、用捨もしなかった。

「それ、それ、今じゃ……、早よ突かんか！」

と喚き、失敗すれば、

「のろまめが！　一瞬おくれたではないか！」

と、叱った。

おそらく、とらも、そんなふうに父に怒鳴られ叱られながら、稽古に励んだのであろう。

同じ魚でも、鮠は鮠、諸子は諸子、鯉は鯉と、種類によっても、大小によっても、一気に泳ぐ距離が違い、攻撃を躱すときの姿勢にも相違があった。水流の具合によって、一気に泳いだあとも、さらに直進するか、僅かに左右に向きを変えてすすむかも、よく見定めねばならない。

それには、一尾々々の行動に心気を凝らすだけでは足らない。根気よく、数多くの魚に当たって、それぞれの習性をしっかりと摑み取らなくてはならなかった。

一と月、二た月……では、おイヌは、姫トラにかなわなかった。しかし、ちょうど一年が経って、ふたりが初めて出会った初夏の頃が再び訪れた時分には、おイヌは姫トラと同じほど、どうかすると姫トラを越えるほどの獲物を得るようになっていた。

「さすがやなァ……。わっちが初めに思ったとおり、お犬さまは手の筋が良え。いまの調子でつづけんさったら、わっちのお父には及ばぬまでも、百のうち、七、八十は突く腕前になりんさるやろう」

と、姫トラは満足そうに言った。

「これも、おまえという、よいお師匠のお陰じゃなァ」

おイヌは、自分の獲物はすべて、

「束脩の代わりだ、取っておいてくれ」

と、いつも姫トラにやってしまった。

姫トラが持ちかえった魚を、米に代え、銭に代えていること、つまり生活の料としているらしいと感じていたからである。

そんなふうにして、また三月ほど経って、天文十七年（一五四八）の夏も過ぎようという頃

であった。日暮れ時になり、おイヌが豊漁の魚籠を、いつものように渡そうとすると、
「お犬さまには、きょう限りもう、会えぬようになった」
と、姫トラは言った。
「もう会えぬ？　なぜだ？」
「お父が、荒子から出ていくことになった」
いつも勝ち気らしく光っていた姫トラの目がさびしそうに、少し翳って見えた。
「荒子から出ていく？　どうしてだ？」
「訳はわっちには解らん。お父が荒子にはもう、用がのうなった、美濃の姫ノ郷に帰ると言わっしゃってな……」
「まえから聞こうと思っていたが、おまえのお父というのは、何をするひとじゃ」
とらには話していなかったが、おイヌは彼女がどんな家で暮らしているのか、秘かに見に行ったことがある。
それは、荒子城から、下之一色街道を少し東に行った荒子観音の裏山にあった。大きな杉の木の森かげ一面に生い茂った笹群の中に、一軒だけぽつんと建っていた。家とも呼べないほどの小さい板葺の小屋であった。
とらが川漁に出ている時刻で、その父なる男も留守のようであった。
おイヌは、蓆で囲っただけの屋内を、そっと覗いてみた。三坪ほどの土間に、幾重にも藁が敷いてあった。それだけが、居間でも寝部屋でもあるらしかった。道具といっては、夜着にするらしい襤褸と、わずかな食器だけ。
荒涼とした光景だった。
煮炊きは外でするらしく、石囲いしたかまどの下やまわりに、木灰が仄白くたまっていた。
農具らしいもの、漁具らしいものは見当たらない。とらの父は百姓でも、漁夫でもないらしい。
（といって、この住みようでは、商人でもないようだ……）
おイヌには謎であった。その謎は、おいおい解いていくとして、話を磧に戻そう。
姫トラは、おイヌの問いに答えて言った。
「お父の名は八蔵。……何をしておるのか、わっちも知らん。家には、ほとんどおらんので、わっちは一人も同じこと、いつもさびしかった」
「……」
「でも、荒子の二年は、お犬さまのおかげで、わっちもたのしかった」
いつも男の子のようにはきはきとしゃべる姫トラの声が、くもって悲しげである。
「うむ。おれもおまえのおかげで、魚突き上手になってありがたかった。……そうか、行ってしまうのか、さびしくなるな」
おイヌも声を落として言った。
相変わらず陽焼けして浅黒かったが、この二年のあいだに、とらは女童の顔から、乙女の顔に変わっていた。紅を差したように赤い恰好のいい唇を噛むようにして、目を翳らせている可

憐さ。おイヌは名残り惜しかった。

「でも、何も死んでしまうわけではないから、きっとまた会えるさ」

姫トラは声を励まして言った。

「……」

「こんど会うまでには、わっちが目を見張るくらいの魚突き名人になっておいでよ。……そうそう、お父がよく言っていた。魚を突くも、いくさで敵を突くも、時分を計る呼吸は同じだ、と。お犬さま、荒子城の若らしい立派な大将におなりよ。……長いあいだ、わっちみたいな身分ちがいの者と、仲良くしてくれてうれしかったよ。……じゃね、おさらばだよ」

「待て、待て、姫トラ！」

おイヌは、あっさり別れていこうとする彼女を、あわてて引き止めた。

「おまえ、着ているものを脱げっ」

「着ているものを脱げだと？」

姫トラはびっくりしたように言った。浅黒い顔を赤くした。

「お犬は、わっちを裸に剝いて、何とするつもりだ。莫迦な真似をしたら、承知しないからな」

と、竹槍を構えた。

「姫トラのど阿呆め」

こんどは、おイヌが赤くなって言った。

「おかしな勘違いをするな！」

「……」

「男物では、丈も柄も合わんだろうが、おまえが着ているものよりはましだと思う。おまえ、おれの着物と着替えていけ」

「……」

「長いあいだ、おまえに槍指南を受けながら、何の餞別もやらんでは心苦しい。せめてもの志だ。着ていってくれ」

「そんな……。それではお犬さまが裸になっちまうではないか」

「かまわん」

おイヌは、姫トラに背を向けた。すると帯を解き、着物を脱いで、さっと、うしろに放り出した。褌一つでも、そう寒くは思わなかった。十一の少年とも思えぬ筋骨逞しい、いい体をしていた。

「裸のままでは、館に戻りもならん。おれがこうしているあいだに、早く着替えろ。その代わり、おまえが着ているものを脱ぎ捨てていけ。おまえが去ったあと、おれがそれを貰って着る」

「でも、それでは、あまり……」

異性であることも、身分ちがいであることも忘れて過ごしてきた日々だったが、ここに来て、さすがに姫トラは躊躇った。

「やい、ぐずぐずするなっ。日暮れの川風は、裸には冷たくてかなわん。早く着替えて、さっさと行っちまえ！」

「わっちが着るには勿体ないが、お犬さまのせっかくの好意、遠慮なく受けることにするよ」

いつもの明るい声で言って、姫トラは着替えの音をさせ始めた。しばらくして、

「お犬さま、もうええよ。こっちを向いておくれな」

男物、女物といっても、男も女も右前に着衣した時代だったし、未成年の着物にそれほどの変わりはない。姫トラは、自分の身丈に合わせて、大柄のおイヌの着物をたぐって帯を締め、長い袖は折り返して、上手に着こなしていた。さっぱりした姿は、女っぽい色気さえ感じさせた。

「うむ、けっこう似合うではないか。家に帰って、ちょっと縫い直せ。もっと恰好よくなるぞ」

「ありがとう」

姫トラは素直に頭を下げた。

「お犬さまのやさしい心遣い、とらは生涯、忘れないよ。いつかきっと恩返しする。……このうえ、何かしゃべっていたら、きっと泣いてしまう。みっともないから、これで、さよならするよ」

姫トラは、不意にぺこんと辞儀をすると、竹槍を抱え、腰に吊るした魚籠を揺すって、いつもの風のような早さで、磧を駆け去っていった。

おイヌは、磧に残っていた姫トラのつぎはぎだらけの着物を拾い上げた。意外にも、洗濯したばかりのようで、垢染みても、脂じみてもいなかった。

「……が、やっぱり、ちょっと女くさいな」

と呟きながら、思い切って左腕を袖に突っ込んでみた。肘の辺りまでしかなかった。肩幅も窮屈だった。無理に引っ張って右腕を袖に突っ込むと、ビリッと音がして背中の布が裂けた。前も合わず、裾も膝までしかなかった。縄帯を締めて、

「まァ、素っ裸よりはましだろう」

と、槍をかついで歩きだした。

館の裏手をこっそりと入って、誰にもないしょで小袖に着替えて、姫トラのぼろ着は始末してしまうつもりだったが、武器庫の脇にそっと槍を置いたところで、喜十に見つかってしまった。

「わか。そ、その恰好は……」

喜十はしょぼしょぼした細い目を、無理に剝き出すようにして、しゃがれ声を立てた。

喜十は、前田の先代利隆の時代から仕えてきた小者で、もう六十を越していた。しかし器用な質で、武器庫の隅に廃物として捨ててあった折れた槍の柄をすげかえて、錆びた槍の穂を研いだり、磨いたりして、おイヌの魚突き用につくってくれたのは彼であった。

父の縫殿助利昌に嫡男として格別に目を掛けられていた兄の利久からも、温和で、母から寵愛を受けていた次兄の利玄、三兄の安勝からも、手のつけられぬやんちゃ者と怒られてばか

りいるおイヌを、

「お犬さまこそ、ゆくゆくはこの前田の家名をあげる器量を持ったお子じゃ。自重しなされや」

と、贔屓している喜十であった。

「やあ、喜十爺か。爺は知るまいが、こういう恰好が今の流行だぞ」

「とろくさい！　年寄りをちょうらかすもんやないぞなも。まあ、お犬さまは、そのへんに忍んでおってちょう。すぐに替えの小袖を持ってくるでよう」

喜十は急ぎ足で館の方へ歩いていった。

「やれやれ、初めに会ったのが、母上でも、兄上たちでもなくてたすかったわい」

母や、兄たちだったら、野良犬を見るような嫌な顔をして叱言を言うにちがいなかった。この際、喜十は確かにありがたい助け船であった。

(三)

小夜ノ川は、名前どおりに優しいだけの川ではない。

長雨つづきの梅雨どきや、秋の雨台風のあとには、両岸の広い磧を埋め尽くした濁流が溢れて、荒子村や、対岸の前田村の田畑を水浸しにし、時には家を押し潰し、押し流した。

東海地方を直撃する台風は、旧暦時代の当時では七月か、八月に多かったが、天文十八年(一五四九)九月三日夜から、四日昼までの時節外れの台風は、豪雨をともない荒れ狂って通

り過ぎていった。

稲の収穫はもう終わっていたが、やや小高い丘にある荒子の館や、観音堂や、その周辺を残して、大方の民家が水浸しになった。

おイヌは、おだやかに流れる小夜ノ川の磧も好きだったが、濁流逆巻く小夜ノ川の暴れ川の姿も嫌いではなかった。

館を囲む土塀の裏の隠戸から、そっと脱け出そうとしたが、喜十に見つかってしまった。

「お犬さま、何処に行かっしゃる！」

(小さな目をしょぼしょぼさせているくせに、あいつの見張りの確かさには、あきれるな)

おイヌはしかし、喜十が自分に甘いことを承知していた。

「何処にも行きはせん。塀の外で村里のようすを見るだけじゃ」

「暴れ川には、絶対、近づいてはならんぞな。水はまんだ増す一方じゃでよう」

「わかっておる」

おイヌは門外に出ると、丘を下っていった。

台風一過の午後の空は、つい一刻(二時間)ばかりまえまでの荒天が嘘のように青く晴れ上がっていた。

が、地上は……いや、水上というべきであろう、濁流が渦巻いていた。小夜ノ川の濁流だけなら知れたものだが、本流の庄内川上流の降雨がよほどのものだったようだ。氾濫した流れは小夜ノ川を一筋に巻き込んで暴れていた。

田畑の潰滅や、民家の流失は、領主の財政にも影響する。おイヌの父前田利昌は、足軽・小者に命じて、百姓たちに救援の手を差し伸べていた。

土嚢を担ぎ回る者、突っかい棒をかついだ者、足軽・小者・百姓たちが、一体になって、防水につとめ、家屋の流失防止に懸命になっていた。

おイヌは、野小屋のような一戸の流失を防ごうとして、赤児を背負った若い百姓と、その女房らしい若い女が、突っかいにする棒を手にして、うろうろとしているのを目にした。

（あれでは捗がいかん。よしっ！）

加勢に行ってやろうと、一歩踏み出した途端、

「むだなことはおきゃあせ！」

びっくりするくらい大きな声がして、おイヌの帯をつかんで引き戻した者がいた。

（何やつ？）

おイヌが振り向くと、小柄な男が、おイヌをやるまいとして、顔をサルのように真っ赤にして引っ張っていた。

「汝めっ、なぜ邪魔をする！」

おイヌは怒鳴りつけた。

男は、おイヌの帯にかけた手をはなして、

「それ、あれをよう見やあせ」

と、頤をしゃくった。

おイヌが加勢に行こうとした家はばらばらに崩れて、流されていた。若い夫婦は、手を取り合って眺めていたが、やがて諦めたように、胸の辺りまで漬かる水の中を、丘の方に向かって泳ぐように歩き出していた。

「あれで良えのじゃわな。水はまだどんどん増えとるでなも、おみゃあさまが加勢に駆けつけんさったとて、あの家は助かりはせなんだやろ。いや、助かるどころか、家といっしょに、みんなが流されて水に呑まれるだけじゃったろうなも」

男は落ち着き払っていた。男は……いや、よく見ると、おイヌとあまり違わない年頃の少年であった。

赤茶けた蓬髪をうしろで一つに束ねて、藁しべでくくっていた。汚れた小袖に縄帯を締めて、足に汚れた脚半を巻き、何やら包み込んだ濃紺の平つつみ（のちの風呂敷）を背負っていた。一見して旅商人と知れる風態だった。

「あんな小屋は、半日もあったら、また建てられるわな」

汚い少年は、ゴーゴーと唸る水音に挑むような大声でしゃべった。

「嵐の後には、必ず今日のように晴ればれした日が来るし、どんな大水も時が経てば退きよる。自然のそういう理に逆らって、無理したり、勝とうとしたら、怪我するか死ぬか、ろくなことはない」

「……」

「それは人の世も同じでなも、時の勢い、人の勢いに逆ろうたら、ろくなことにならん。上手

に時流に乗った者は、きのうの灯油売りが、今日は一国一城のお殿さま、反対に乗り損のうた者は、大名の座から転がり落ちて、一所不住の流れ者ぐらしじゃわな」

山城国（京都府）西ヶ岡の郷士の伜に生まれ、長じて油商に婿入りし、天文十一年（一五四二）には、美濃の名族土岐家を滅して稲葉山城の城主となった斎藤道三や、戦国争乱の中で敗亡していった大名たちのことを言っているのだが、荒子界隈だけを、自分の天地と思って暮らしてきた少年おイヌには、何のことやらよく解らなかった。

ただ、自分とあまり齢頃も違わぬくせして、大人ぶったことをしゃべりまくる汚い少年に、少しばかり腹が立ってきた。

「坊主っくりみたいなことをぬかしおる！」

おイヌは、唾でも吐くように言って、相手の顔を睨みつけた。

陽焼けと垢で、黒く汚れた顔の頬から頤にかけて、削いだように痩せていたが、顴骨だけが高かった。額は狭く、少年のくせに、はっきりと二本の横皺があった。鼻梁は抓んだように細く高く、あぐらをかいた鼻の孔は大きかった。薄い眉の下の落ち窪んだ目はしかし澄んで利口そうに光っていた。

（こやつ、何かに似ておる。……そうだ、サルに似ている、猿面だ）

おイヌがそう思ったとき、

「坊主っくりみたいか。ははは……、おら、ほんまに坊主っくりになろうと思ったこともあったけど、あの訳の解らんことを、むにゃむにゃ唱えるお経というもんが覚えられんで、お寺を追い出されたがや」

サル少年は、大声で言った。

「それからあとは、瀬戸物（陶器）屋の薪割り小僧をやり、鍛冶屋の手伝いをやり、織物屋の見習いをやり、かれこれ七つ八つ、奉公先を替えたが、何処も長つづきせなんだ。追い出されたり、逃げ出したりでなも」

よくしゃべるサルである。

「それで、いまは独り立ちして商いをやっとるだわ」

「商い？　何を売っておる？」

「木綿針だわ。それも、わざわざ美濃の関まで出かけて、鍛冶が暇をみてつくった上物の針を仕入れて売り歩いているだわ」

綿種が、わが国に初めて輸入されたのは、この時代から約七百五十年まえの延暦十八年（七九九）だったが、栽培方法が拙くて失敗に終わった。ふたたび輸入されたのは、まだほんの十数年まえだった。こんどは三河などで栽培に成功した。

国産の綿花による綿糸が得られるようになって、綿織物は急速に普及し、麻着に代わって肌触りのよい綿着を用いる者が多くなり、木綿針の需要も増えていた。

「では、いまは商いの途中ということか？」

と、おイヌは言った。

「はい。針を関で仕入れて、商いはまず地元からと始めたが、どうも尾張者は吝嗇で、疑ぐり

深くて、あまり商売にならんなも」

「地元から始めたというと、おまえは尾張の者か？」

「はい。おらが在所は、ここから近い中中村（今の名古屋市中区中村中町）だわなも」

ここまで書けばもう、おわかりだろう。このサル少年こそ、のちの太閤、豊臣秀吉である。

おイヌは、初め何となく、汚い猿面少年を軽く見ていたが、話しているうち、正直そうで、率直で、しかもすこぶる愛嬌に富んだ彼が好きになった。同じ尾張者と聞いて親しみも感じた。

「釣鉤ならともかく、縫針など、おれには無用のものだが、母者や、おなごどもなら買うかもしれん。ちょっと、おれのところに寄ってみろ」

「母者、おなごどもと言わっしゃると、お前さは、武家の衆かなも」

サル少年は、すこし言葉を改めた。

「うむ。そこの荒子の館の伜でな」

「わァ、これはこれはお見それして、ご無礼したなも。荒子のお城の若さまでござりましたか」

「……といっても、おれは四男坊でなァ。名前さえあるやらないやら、戌戌の年（天文七年）の生まれじゃによって、誰もが、おイヌ、おイヌと呼んでいるわい」

「おイヌさま？　ほれァまた奇縁じゃなも。おれ……いや、わしは与吉といって、天文六年、酉の年の生まれでなも。ほんまなら、トリ吉とでも呼びそうなものやが、ひとはみな、サル吉とか、小ザルとか呼びよります。わしの顔、そんなに猿公に似とるかなも」

「サル吉か？」

誰の見る目も同じか……おイヌは可笑しかった。

「犬猿の仲などと言って、イヌとサルは仲のわるいものと決めているが、おれとわぬしとは気が合いそうだ。どうだ、館に寄ってみないか」

「お城にはもう、寄らせていただきました」

サル吉は、苦笑いして言った。

「この騒がしいときに、針売りなどに用はない、とっとと失せろ、と門番衆に抓み出されましたじゃ」

「そうか。それァ気の毒したな」

「なに、そんなことには馴れっこでなも。べつに門番衆がわるいのじゃありません。こんなときに商売気を出したおいらが間違うとりましたわ」

「……」

「いつかまた、ご縁によっておイヌさまにはお目にかかりましょう。おいら、もうしばらくは、尾張のうちで歩き商いをつづけるつもりじゃでなも」

サル吉はそう言って、軽く辞儀すると、水の寄せない丘づたいに、ひょこひょこと歩き出した。そして、しばらく行って振り向くと、笑いながら、

「おイヌさまよう、このエテ公づらをお見忘れなくなあ！」

と大声で言って、振り上げた手を二度、三度大きく振った。
おイヌも黙って、手を振り返した。
サルとイヌ——後年の秀吉と前田利家の、束の間の初対面であった。

大うつけ殿

(一)

天文二十年（一五五一）、おイヌは十四歳になった。
父の縫殿助利昌は、どちらかといえば大柄の偉丈夫だったが、利久、利玄、安勝、この三人の兄たちは尋常の体軀をしていた。母親似であった。
おイヌは父に似たのであろう。後年、六尺豊かな偉丈夫になったが、十四歳ごろ、すでに三人の兄たちを追い越して、父の背丈に迫る大柄の少年になっていた。
もう「お犬、お犬」では済まされなくなった。利昌は、たかだか二千貫文の小領主の伜には分に過ぎた名前とも思ったが、正月祝いに、家の者、重だった家臣の集まった席で、
「向後は、お犬を、犬千代と呼ぶことにする。みなも、左様、承知しておくよう……」
と申し渡した。
「そちももう、そろそろ元服せねばなるまい。小夜ノ川で村童を相手に遊び呆けている齢ではないのだ。かぶいた恰好を改めて、武術の鍛錬、学問の修得にいっそう精を出さねばならんぞ」
と、犬千代になったばかりの伜に、厳しい顔をして訓戒することも忘れなかった。

春になって早々、犬千代を上総介さまの近習として出仕させるようにとの内命がくだされた。伝えに来たのは、織田上総介信長の伯父の津田信家であった。

信家が帰ったあと、

「もう、ぶらぶら遊ばせておく齢ではないゆえ、出仕はまことに結構だが、信長どののところではのう」

と、利昌は浮かぬ顔をした。

「まことに……」

と、嫡男利久も腕を拱いた。

ここで、この頃までの織田家について、概略を書いておこう。

尾張はもともと、細川氏・畠山氏とともに、足利将軍家の三管領中の筆頭で、武衛家とも称した名門斯波氏が、越前と兼ねて守護になっていた国である。

だが、応仁の乱以後、斯波氏の勢力は、内紛も起きて、急速に衰えていた。それに乗じたのが、在地のことすべてをまかされていた守護代の織田家だった。

やがて、尾張における織田の勢力は、主家の斯波氏の及ばぬまで強力になった。

『信長公記』に拠れば、天文期（一五三二～五五）の尾張は、岩倉城（岩倉市）に在って、丹羽・羽栗・中島・春日井の上四郡を支配した織田伊勢守（上織田家）と、清洲城（西春日井郡清洲町）に在って、海東・海西・愛知・知多の下四郡を支配した織田大和守（下織田家）によって二分されていた。このうち下織田家には、同じ織田を姓とした三人の奉行、因幡守・藤左衛

門・弾正忠信秀がいた。が、中でも清洲城の西二里半（約十キロ）の那古屋城にいた信秀が、智力・武力とも、もっとも勝れていた。

信秀は地理的にも恵まれていた。肥沃な農地のひろがる木曽川下流を占めているうえに、商品流通の拠点として尾張随一を誇った港都、津島を領内に持っていた。

彼が経済的に如何に恵まれていたかは、天文十年（一五四一）に伊勢の外宮造営費を、同十二年には、皇居の修理費として四千貫文という莫大な献金をしていることでも解る。

このことは、後年、信長の中央進出に際して大いに役に立った。天皇・公卿・庶民のすべてが信秀の子なるがゆえに、結局は信長を受け入れたのである。

とにかく、信秀が地位を固めるにつれて、駿遠の雄、今川、甲斐の武田が、虎視眈々と狙う尾張一国の守りは、彼に一任せざるを得なくなっていった。

その織田信秀の家にも悩みはあった。それは、幼名を吉法師といった信秀の嫡男の、行状の奇怪さであった。

吉法師は乳呑児のころから疳が強く、よく乳母の乳首を噛み破ったという。どの乳母も長つづきせず、乳離れするまでに、七人か八人、乳母が代わったという話まで伝わっているほどである。

天文十五年、十三歳で元服して、三郎信長となっても、彼の素行は少しも改まらなかった。

町に出るときは、湯帷子を片肌ぬぎに着て、半袴に朱鞘の大刀、腰には火打ち袋や、ひょうたんを沢山ぶらさげ、髪は茶筅に結って、それを紅や萌黄の糸で巻き立てるという、大名の若

君というよりは、無頼の徒の恰好。

しかも、人目かまわず、柿でも瓜でも、歩きながら噛る。人の肩に寄りかかって、ぶらりぶらりと歩いたりする。

家臣たちはにがにがしく思い、町の者も、

「大うつけ者（大バカ者）」

と陰で罵った。

傅役に付けられていた家老の平手政秀がたびたび諫言したが、すこしも効き目がなかった。

政秀は、信秀に、

「奥方でもお迎えになれば、三郎さまの行状も少しは改まるのではありますまいか」

と、信長に室を迎えるよう提案した。

「だが、かやつがうつけ者であること、いまや尾張中に知らぬ者はないぞ。しかるべき家の姫で、嫁に来ようという者などいないだろう」

「斎藤道三に、齢頃も似合いの美しい女御がございます」

「なに、美濃の蝮の女をだと！」

美濃の蝮……は道三の渾名である。一介の灯油売りから、美濃の名家土岐氏にくらいつき、陰険な権謀術数を尽くして主家を乗っ取った稲葉山城主を、世ではそう呼んで、怖れ嫌っていた。

下剋上の時代、同じようにして成り上がったのは、何も道三ひとりではなかったのに……。

織田信秀は、つねに負けいくさに終わっていたが、たびたび道三とは戦っていた。そういう点でも、政秀の提案には驚いたのである。

「おそらくは、蝮がうんと言わぬだろう」

「いや、そのへんの掛け合いは、拙者におまかせください。なに、美濃だとて、尾張と同様に今川・武田の侵略には恟々としています。三郎さまと姫を結んでの濃尾同盟を、無下に断わりはしますまい」

「うむ。それで、三郎の行状が改まるなら、一挙両得だ。よし、おぬしにまかせよう。巧く話をつけろ」

信秀は結局、政略結婚に賛成した。

天文十七年（一五四八）、十五歳になったばかりの信長は、道三が、東美濃の名門明智氏の女に産ませた娘帰蝶を嫁に迎えた。その美しい名のとおり、美貌の姫であった。尾張では、美濃から来た姫というので、美濃姫をつづめて濃姫といったが、信長は、

「お濃」

と呼んだ。そして、新婚のころは、

（こやつも、蝮めの送り込んだ美しい諜者に過ぎぬわ）

と思っていたから、新妻に親しみ溺れることはなかった。ろくに口を利こうとせず、所業もいっこうに改めなかった。

『信長公記』には、信長の大うつけ者ぶりを記する一方、信長が毎朝、馬の稽古をし、三月か

ら九月までは庄内川で水練に励み、鉄砲は橋本一巴に、弓は市川大介に、兵法は平川三位について学び、しげしげと鷹野に出かけたと述べている。

家来たちに槍仕合をさせて、槍は短いよりは長いほうが有利と考え、三間、三間半といった長槍を作らせたとも伝えている。

信長の表裏まったく異なった所業を伝え聞いた武田信玄は、

「彼奴の狂態だけを見て計ってはならん。どうも油断ならない相手らしいぞ」

と、腕を拱いて、深く思案したという。

ではいったい、信長自身の本心はどうであったか……

戦いに明け、戦いに暮れる乱世であったといっても、長年に亘って京都とその周辺を中心に培われてきた貴族の習慣や文化が、破壊し尽くされていたわけではない。いや、それはむしろ地方武士の憧れであり、究極の目標にさえなっていた。

したがって、地方の大名や豪族たち……たとえば駿遠の大守、今川義元のように、服装から生活様式まで、公卿風を真似る者もあった。

武力をもって成り上がった新興の織田家にすら、貴族文化に憧れる風は生じていた。織田信秀が、皇居修理のために莫大な献金をしたのも、後世で言うような勤王精神からばかりではない。それによって、少しでも高い叙位を得て、貴族社会に入り込みたかったからである。

天文二年（一五三三）、山科言継が勅命を帯びて尾張に下ったときの話が伝えられている。

信秀は、城内に新しい一郭を築いて言継を迎え、彼の滞在中は、連日のように和歌の会、蹴

鞠の会を催して歓心を買うに努めたというのである。

信長の傅役、平手中務政秀なども、いちはやく京風に馴染もうとした一人であった。物腰やわらかく、貴族的な礼儀作法を喧しく言って、信長を尾張一国の大名の後継者に相応しい優雅な人に育てていこうと焦慮したのであった。

しかし、信長は、そうした教育方針にことごとく反抗したのである。他人から見て正常ではない異風……つまり、かぶいた風を見せたのも、反抗の一つのあらわれであった。

（武門の頭領であるべき足利将軍家は、長い京生活で貴族風に馴染み、その結果が天下の騒乱を招いてしまったではないか。武家は、あくまでも武家らしく振る舞っていく。そうでなくては、この乱世は治まらない）

信長の心中には、そのような英雄の気概といったものが宿っていた。それに気づかない者が、彼を「大うつけ」と罵り、侮ったのである。

彼の「大うつけ」ぶりを、いっそう世に高めるような出来事が起きた。

天文十八年三月三日、織田信秀が、疫病にかかって死んだ。四十二歳の働き盛りだった。

その後一年間、喪は秘められ、翌十九年三月三日になって、万松寺で盛大に葬儀が行なわれた。受領して上総介と名乗った信長は、父の葬儀の喪主だというのに、なかなか式場には姿を見せなかった。何度も使いが走って、ようやく出て来た信長の姿を見て、僧侶たちも、家臣たちも、「あっ」と驚き、顔をしかめた。

髪はいつもながらの茶筅まげ、袴もつけていなかった。柄を、縄でぐるぐる巻いた大刀、脇

差を腰にして、鷹狩りにでも出かけるような恰好である。

彼は、非難がましい人々の目などは、いっさい無視していた。つかつかと仏前に進んでいくと、抹香をくわっと一摑みして、ぱっと仏前に投げつけた。

「殿！　な、なんということを！」

平手政秀は悲痛な声を立てて進み寄ると、信長の着物の裾をつかんだ。信長は、うるさい蠅でも払うように、ぱっと政秀の手を払い除けて、悠々と式場から立ち去っていった。

「信秀さまによって大きく興った織田家も、あの後嗣どのでは」

「長くはつづきますまいな……」

参列していた前田利昌・利久父子は顔を見合わせて、声低く言った。そう思ったのは、前田父子だけではなかった。

うつけ者丸出しの信長に比べて、弟の勘十郎信行は、平素から礼儀正しく、誰の目にも怜悧な若者に見えたが、葬儀の席でも折目高に肩衣、袴を着けて、亡き父を偲ぶ姿もまことに尋常であった。

（上総介さまでは、お家の行く末が案じられる。むしろ勘十郎君を立てて……）

と、信長の腹心の林佐渡守秀貞の弟、林美作守や、勘十郎付きの家老柴田権六勝家などは秘かに考え、それには勘十郎を寵愛していた生母の土田御前も同心だった。

彼らが勘十郎信行をかついで、信長に実際に謀叛の旗を立てるのは、なお後年のことである。が、いざという時には、勘十郎側に立つ気分の濃かった利昌・利久父子は、犬千代を信長

の近習に差し出すようにという津田信家からの内示には、少なからず悩み迷った。結局、

「まあ、本人が何というか、犬千代の考えを聞こう」

ということになった。

犬千代は、父と兄から話を聞くと、しごくあっさりと答えた。

「わたくし、那古屋に参ります」

「だが……」

と、利昌はちょっと眉をひそめて言った。

「そちも聞いていようが、上総介さまは尋常ならぬお方だぞ」

「何も無理に参るには及ばぬ。気がすすまぬなら、遠慮なく言うがよい。ただ今、体をわるくしているとか何とか理由をつけて、断わることもできるのだぞ」

と、兄の利久も言った。

「いえ、わたくしは、喜んで那古屋に参ります。上総介さまなら、わたくしとは性が合いそうでございます」

犬千代はむしろ、たのしそうな顔をした。

「うむ、そうか」

と言って、利昌と利久は顔を見合わせた。

（そういえば、上総介さまもかぶき者、お犬めも尋常ならないやつ、相性はいいかもわからん。……しかし、どんなことになるやら）

おかしくもあり、心配でもあって、利昌と利久は顔を見合わせて、苦笑いした。しかし、ふたりとも、心の片隅では、

（確かに勘十郎信行には人気があり、後押しする重臣も多い。だからといって、将来、兄弟争いが起きた場合、勘十郎側が必ず勝つかどうかは解らない。信長が勝つかもしれない。前田家の末長い安泰のためには、ふた股かけて犬千代を信長の許に送り込んでおくのもわるくはない……）

という、打算もなくはなかった。

こうして、結局、犬千代は信長の近習になった。このときいっしょに、佐脇家の養子になっていた犬千代の弟、藤八郎良之も近習として、信長に仕えた。

天文二十年（一五五一）八月、犬千代は、やはり津田信家を烏帽子親として元服し、孫四郎と字し、利家と名乗った。

（二）

信長に召し抱えられた利家の最初の知行高は五十貫文であった。一貫が二石五斗の計算だから、石高でいえば百二十五石である。十四歳の半大人の初任給として、わるいほうではなかった。

その代わり、元服早々、清洲城にいた織田三奉行の一人、彦五郎との戦いに、さっそく狩り出された。命を懸けての百二十五石であった。

晴れの初陣だったが、実戦の経験のない利家は、敵勢を目のまえにして、奮い立つより、正直いって、恐怖が先立ってがたがた震えた。

だが、見回したところ、震えているのは自分だけではなかった。誰もが、平素になく蒼い顔をして、眉をつり上げていた。落ち着きなく、足をがたがた震わせていた。

（何だ、おれだけではないのか）

と思ったら、可笑しくなった。

おそらく敵方も同じで、みんなが蒼くなり、眉をつり上げて震えているにちがいなかろうと思ったら、いっそう可笑しくなり、同じ条件の者同士で戦うなら、一歩でも早くぶつかっていくほうに利があるはずと考えた。

（小夜ノ川で、姫トラと競って、あのすばしっこい小魚どもを突きまくったおれだ）

と、槍には自信がある。

（小魚に較べれば、人間は姿態も大きく、動きも鈍い）

魚を突くよりはやさしいはずである。

「ようし、やってくれるぞっ！」

利家は、精いっぱいの大声で叫んだ。途端に、身震いが止んで、手足の動きがらくになった。敵勢を寄せつけるや、先頭にいたやつの咽喉くびめがけて、信長考案の三間半の長槍を、しゅーっと突き出す。

「ぎゃあーっ」

と、のけぞる敵から、さっと引いた槍の柄を堅く握って、左右にびゅん、びゅんと振り回しながら進んだ。敵の二人、三人が頤を斬られて倒れ、膝を割られて倒れては転げまわる。

利家は、横転したやつの脇腹に思い切って槍を突き立て、足で踏んづけて引き抜く。その凄まじさを見た敵兵は、先を争って逃げ出した。

逆に味方は、

「新参者の孫四郎ひとりに功を奪われてなるかっ」

と、奮い立った。

大柄の利家は、人目につきやすい。

「あの大男の暴れ者、何やつであるか？」

信長は、近侍していた津田信家に訊ねた。

「荒子の前田利昌が伜、孫四郎利家。まだ十四歳の小童でござる」

津田信家は、自分が烏帽子親であるだけに自慢顔で答えた。

「うむ、あいつか。伯父貴が目をつけただけのことはあるな」

初めて目通りさせた前田犬千代のやんちゃ者らしい目の光、それでいて稀なる美童ぶりを、信長はよく覚えていた。

「われらが烏帽子親をつとめて元服させ、犬千代を孫四郎利家と改めさせてござる」

「前田孫四郎利家か。よし、よく覚えておこう。使いものになりそうな小童じゃ」

信長は大きくうなずいた。

世評では「大うつけ者」だが、人使い名人の多くがそうであるように、信長は、これぞと思う者の姓名と顔は、一度で覚え、覚えたら決して忘れなかった。

このときの戦いの結果、信長は居城を那古屋から清洲に移し、腹心の林佐渡守秀貞を那古屋城主にした。

「このたびのいくさの上総介ざまの指図ぶり、なかなかのものであった。大うつけどころではないかもしれんぞ」

と、これまでの信長観を改める者もいた。が、

「いやいや、あれくらいの小戦さに勝ったからとて、感心することはないわい」

と言う者のほうがまだ多かった。

というのも、清洲に移ったのちも、信長の行状にはいっこうに変わりがなかったからである。相変わらず髪は紅や萌黄の平打で茶筅に巻き立て、帷子に半袴、朱鞘の大刀をぶち込み、腰に火打ち袋や、ひょうたんを幾つもぶらさげるという異風で、近習を引き連れて外出もすれば、朝の乗馬もやる。

「今日は遠乗りをする！」

と、不意に言い出すのも稀ではなく、そんなときは、

「馬丁はいらぬ。孫四郎を呼べ」

と必ず利家に供を命じた。打ち揃って二里、三里、どうかすると四里、五里と遠乗りした。

信長は恰好はともかく、きりっとした美男子だったが、利家も美少年だった。

ふたりともあまり陽焼けをしない体質だった。小半日、直射日光を浴びて遠乗りしても、顔は酒を飲んだときのような桜色になるだけ、それも三、四日も経てば、もとの色白に戻った。それは後に長い戦場暮らしをするようになってからも変わらなかった。渋紙色した荒武者づらの多い中で、信長と利家だけは、涼しそうな白面をしていた。

清洲の町でも、はるか郊外の農村でも、信長・利家主従が馬を並べて通りかかると、若い女たちが飛び出してきた。

「清洲のお殿さまも良え男やが、前田さまもええ男」

「いっぺんでええ、添い寝をしてみたいもの」

「おきゃあせ。それこそ及ばぬ鯉（恋）の滝登りというもんや」

現代の若い女性のように取り澄ましてはいない。彼女たちは率直に思ったことを言い、頬をあからめて、手を振ったりした。

「やあ、やあ、きれいな花の出迎えじゃのう。うれしいぞよ」

信長は、大きく手を振って応えながら、

「あの者たちの半分、いや、八分まではそちに手を振っているのだ。応えてやれ」

と、利家にも手を振らせた。

女たちは喜んで、飛び上がって手を振った。

信長も、利家も、女嫌いではなかったが、特に女好きでもなかった。手を振る女たちの美醜には、全く無関心だった。

「美濃の土岐頼芸などは、女子の情に溺れていたばかりに道三蝮の餌食になりおった。……おれは妻とは申せ、蝮の娘の情に溺れたりはせん。……ははは、男は女に惚れてはならぬ、惚れられるものなりだ。そちも、いずれは妻を迎えねばなるまいが、おれがいま言うたこと、忘れまいぞ」

と、女たちに手を振りながら、真面目な顔をしてそんなことを言う信長だった。

遠乗りのときばかりではなかった。

信長は、何かにつけて、

「お犬を呼べ！」

と、幼名で呼びつけて相手をさせた。同じかぶいた者同士で、意思がよく通じ合い、話がよく合ったからである。

『亜相公御夜話』にある「信長公ご秘蔵にて、一時もおん離れなく、ご奉公のよしのこと」や、『三壺聞書』の「さながらご兄弟の如く親しくましまして、余りに容儀勝れさせ給い、ご器用にましませば、十五歳の頃より同床にて、月夜の友とならせ給い、御前にましまさねば御膳も召し上られず、上下肩を並ぶる人もなし」といった記事を悪読みして、信長・利家が男色関係にあったように書いている人もいる。

当時の武将・武士の世界で、男色はいやらしいことでもなく、非難を受けることでもなかった。しかし、すでに書いたように、利家は少年ながら、筋骨逞しい六尺の大男であった。閨の友向きではなかった。

信長の寵愛が深かったのは、信ずべき家臣・武将としての将来性を、高く評価していたからである。男色とは関係ない。

(三)

怖るべき今川・武田の攻勢に備えて、濃尾連盟を考慮した美濃の蝮、斎藤道三は、愛娘帰蝶(お濃)を織田信長に嫁がせはしたが、信長は、

(蝮の腹の中ぐらい解っておるわい。彼女は美しく装った美濃の諜者よ)

と、お濃のまえでは、前に書いたように、わざと気難しい顔をして、ろくに口を利こうとしなかった。

実際に道三は、帰蝶を尾張に送り出すに際して、

——三郎信長めの「大うつけ」が、世に伝える如くほんまものか、見せかけか、よう見定めること。

——尾張には、信長を廃して、弟の勘十郎信行を跡目におす一派があって、状況は混沌としているようす。万一、異変が起きた場合は、直ちにこの父のもとに報らせること。

——ならぬ辛抱をする必要はない。信長めが、ほんまものの大うつけと解ったときは、いつなりとも美濃に立ち戻れ。

など、懇々と言い聞かせた。

信長が考えたとおり、道三は、半ばは諜報機関を尾張に張り付ける気で、帰蝶を送り出したのであった。

だが、信長に嫁いでお濃となった帰蝶は、父道三の思うようにはならなかった。

彼女は、ただ美しいだけではなかった。辛抱強く、聡明な女性であった。

信長が自分を避けるにつとめ、口もろくに利こうとしないことなど、意にも介さなかった。

信長が世評どおりの大うつけ者に非ずと見抜いたのは、織田家中でも、お濃がもっとも早かったかもしれない。

信長が物乞いか浮浪の徒のように、腰に火打ち袋や、ひょうたんを五つも六つもぶら下げているのも、火打ち袋は、夜中に暖を取り、明かりを必要とする場合に備えてのこと。ひょうたんには毎朝、新しい水をいっぱいに詰め替えて、いつ異変が生じても、数日は飢えと渇きに耐えるための用心。大刀、脇差に巻いた縄も、ただの縄ではなくて、鉄砲の火縄用……など、お濃は、ちゃんと見抜いていたのである。

(あのひとは、いつも戦陣に居る心掛け……、乱世の武人は、そうでなくてはならない)

と、よく理解していた。

信長が好む、鷹狩り、夏の川遊びにしても、単に獲物を得ることをおもしろがってではない。山野でも、磧でも、従卒を二軍に分けて、実戦さながらの激しい猛訓練を行ない、あるいは獲物の多寡を競わせる。

そして、獲物はすべて、その場で料理させ、焼鳥・焼魚にして、将兵たちに差別なく、公平に配分して食べさせる。

ときには、そっと酒瓶を運ばせておいて、慰労し、自由に歓談させる。親睦を図り、その日の演習について、討議させ、反省させるのである。

お濃は、そういうこともよく知っていた。

（大うつけ者どころか、末頼もしい夫……）

と思っていた。

しかし、父道三には、決して見たとおり、思ったままを洩らさなかった。ときたまの便りには、何の変わりもないこと、自分も達者であること、つまり、道三にとって何の参考にもならないことばかりを書き送った。

信長は遠乗りしたとき、利家に、

「男子は、おなごに惚れるものに非ず、惚れられるものなり」

と言ったが、道三は感度のいい男である。

（帰蝶のやつ、すっかり信長めにいかれおったようじゃ。男に惚れた女はもう、くその役にも立たんわい）

と、諜報機関が、まったく役立たずになったことを悟った。

帰蝶はもう、あてにはできなかった。その他の諜者の報告は、信長は父を失い、上総介となっても、所業いささかも改まらず、大うつけ者なりという、これまでどおりのものばかりであった。

そうなると、道三は、信長に惚れてしまったらしい娘の身が心配になった。世評の如く信長がバカ大将なら、遠からず駿遠の今川か、甲斐の武田の餌食となって織田は滅びる。帰蝶も無残に死ぬことになる。

そうさせぬために考えられるのは、

（おれが誰より先に、尾張をもらってしまうことじゃ。おれなら、むざと帰蝶を死なせはせぬ）

という蝮らしい毒を持った考えであった。

（それにしても、おれ自身は、信長めに一度も会うたことがない。よし、決着をつけるまえに、いっぺんこの目で、彼奴のうつけづらを見ておいてやろう）

と、道三は思い立った。

「一度、婿どのに会って懇談いたしたい」

道三は、使者を立てて信長に申し入れた。

どうせ、何かしら理由をつけて、面会を断わってくるだろう、それなら恫喝をこめて再度、使者を送り、それで聞かなければ戦さに持ち込もう……と、道三の腹は決まっていた。

ところが、案に相違して、信長はいっぺんで面談を承知した。

天文二十二年（一五五三）四月下旬……面接は、本願寺領で、一種の中立地帯になっていた濃尾国境の富田の正徳寺で行なうことに決めた。

道三は、約束の時間よりも早めに富田入りした。街道端の民家に身をひそめて、信長の一行を待った。

それと知る由もない信長の行列が入ってきた。供衆はおよそ七、八百。三間半の長柄の槍五百本を押し立て、弓・鉄砲も三百挺は持っていた。

鉄砲が、わが国に伝来した天文十二年（一五四三）から、まだ十年しか経っていなかったが、異風好みの信長は、泉州堺の商人の手を経て、あるいは、製法を伝受した江州国友村の鍛冶に打たせて、すでに五百挺の国外・国内製の鉄砲を手に入れていた。将来の武器の主力として、信長ほど早く鉄砲を重視した武将は他になかった。

行列のちょうど中ほどに、馬乗の信長の姿があった。前田利家もいた。

利家などは、まず尋常な身装であったが、信長の恰好は異様であった。いや、信長にしてみれば、それが普段の姿である。髪ははでやかな萌黄の平打の紐で茶筅に巻き立て、広袖の湯帷子を着ている。あきれたことに、何のまじないか、背のところに雄大な男根が染めつけてあった。

虎と豹の毛皮を交互に縫い合わせた四布の半袴もいやらしかったが、噂どおり腰のまわりに火打ち袋や、ひょうたんを七つ八つもぶら下げているわけは、道三には解らなかった。

「これは、これは……」

道三といっしょに覗いていた美濃家老の春日丹波が、あきれ返って言った。

「聞きしに勝る大うつけのようでござるな」

「さよう。恥ずかしげものう、でかでかと男根の大紋を……、狂うてござるな」

同じ家老の堀田道空も顔をしかめた。

信長一行は、やがて正徳寺に着いて、しばし休息を取った。そのあいだに、道三らも民家を引き揚げて、こっそりと寺に戻った。

約定の時間がきて、正式の対面の場とした本堂に信長が姿を見せた。最前、道三とともに信長の行列を覗き見した春日、堀田の両人とも、思わず、

「ほう」

と、嘆声をあげ、目を見張った。

（これが、先刻、馬上にあったのと、まことに同じ人物か）

と、驚いたのである。

茶筅の髪は、上品な折り輪毛髪に結い直し、衣服もすっかり改めて、褐色の長上下を着け、脇差を前半に差していた。美男だけに、その姿は一段と優雅に見えた。

「これはこれは、お早ばやのお越しで」

と、鮮やかな変身ぶりに見とれている両家老や、居並ぶ美濃の重臣たちのあいだを、おじけるふうもなく礼儀正しくすすんで、縁の柱に背を凭せてどっかりと坐った。

道三も、実はとうに来ていた。本堂に引き回した屏風のうしろに隠れて、信長のようすを窺っていた。

（ふぅーむ、なかなか味な真似をやりおる）

と、彼も、信長の変身の鮮やかさ、堂々たる態度に驚いたが、ここで貫禄負けをしてはならない、時分を計って、さっと屏風を押し除けると、風を巻くように出てきて、どっかと坐っ

た。

が、信長はどこ吹く風と見向きもしないで、黙って坐っていた。

一瞬、しらけた空気が漂った。たまりかねて堀田道空が、

「あるじ、山城守にござりまする」

と、声をかけた。

『信長公記』によると、信長は、

「であるか……」

と、一言、まことに人をくった返事をしただけであったという。しかし、道三に対しては、

「初めて見参いたす。拙者が織田上総介信長でござる。舅となり聟となったも浅からぬ縁あってのこと。向後ともよろしくお願い申し上げる」

と、礼儀正しく、行き届いた挨拶をした。

(これが世評に高い大うつけ殿の挨拶か)

と、めんくらった道三も、坐り直して、

「これは申し遅れまいた。拙者が斎藤山城守道三でござる。よろしうお願いいたす」

と、信長に負けないくらい、丁重に挨拶した。

やがて酒肴が運ばれてきた。双方、腹に一物も二物もある男同士だが、舅・聟として和やかに盃を交わして歓談した。

道三は、

「あの者、よくお仕えしているであろうか」

と、帰蝶のようすも訊ねた。

「家臣どもにも親しまれているようでござる」

と、信長は答えた。

自分の気持ちを言うには、信長のような男でも少し照れくさかった。彼は、はじめの一、二年こそ、お濃を蝮が寄越した美しき諜者、気を許してなるかと思っていた。しかし、共に在ることすでに五年余、蝮の躾がよほどよかったのか、その天性なのか、正直で明るく、それでいて挙措上品で、家臣たちからも親しみ慕われているお濃に、信長は気を許し、愛情を感じてきていた。

舅と聟の初対面も、まずは和やかに終わって、帰路に就いた信長一行を見送ったあと、道三は堀田道空に訊ねた。

「きさま、かの男を何と見た?」

「いやはや、おどろき申しました。道中の姿形と、正徳寺での振る舞いの変わりよう、そのすばやさ、まるで妖怪か、変化に会うたようで、いささか気味わるうございました」

「妖怪変化か……」

道三は、深い溜息をついて言った。

「だが、ただの妖怪の類ではないな。残念ではあるが、わしの伜ども、やがては、あの大うつけ殿の門前に馬をつなぐことになろうのう」

門前に馬をつなぐ……とは、降伏し、臣従することである。

一方の信長は、正徳寺を出たあと、本願寺領から尾張領に入るとすぐ、

「これを機会に、殿は殿らしく、平生もその姿形で」

とすすめる側臣たちに、

「こんな恰好では、好きな鷹野にも、川遊びにも出かけられぬわい」

と答え、民家に立ち寄って、折り輪毛髪をくしゃくしゃに崩して、もとの茶筅まげに結い直した。衣服も、

「お犬、手伝え」

と、やや離れたところにいたお気に入りの利家を呼んで、手伝わせて、汗くさい湯帷子に着替えてしまった。そして、

「帯！」

「刀！」

「火打ち袋！　ひょうたん！」

と言われるままに、利家は、それらを取り上げて信長に渡しながら、ふと、荒子の小夜ノ川の磧で、姫トラと着物を交換したときのことを想い出していた。

（あれは十歳、十一歳のころであった。あれからもう五年……姫トラも十六になった勘定だ。娘盛りを迎えて、美い女子になったことであろう。故郷の美濃の可児郡の姫ノ郷に戻ると言っていたが、いまもそこに居るかどうか、どのような暮らしをしているであろうか……）

まだ小童だったむかしを思い、明るくて話し好きで、女鹿のようにきびきび動き、風のように速く駆けた姫トラへの懐かしい追憶を破ったのは、

「お犬、何をぼんやりと考え込んでいるか。支度は済んだ、出かけるぞっ」

という、平常の姿に戻った信長の闊達な声であった。

再会

(一)

弘治二年（一五五六）――

利家が、信長の近習になって、もう六年近くたった。

その年月のあいだには、織田家にもいろいろなことがあったが、利家がもっとも意外に思ったのは、先代信秀から、信長の傅役を命じられて以来、保育・後見に努めてきた老臣平手中務政秀の自殺であった。

政秀の自殺は、天文二十二年（一五五三）四月末に行なわれた信長と斎藤道三の会見に先立つこと、僅か三月まえの閏一月十九日のことだった。

政秀の自殺の直接の原因らしい話を、『信長公記』が伝えている。

信長が、政秀の嫡男、五郎右衛門長政の愛馬を見て、

「いい馬だな。おれに譲ってくれい」

と、たびたび頼んだ。が、長政は、その都度、

「われらとて、ひとかどの武者でござる。乗り馴れた馬を手放すわけには参りませぬ」

と撥ねつけていた。

そのことで、信長が機嫌をわるくしていると知った政秀は、長政に言った。

「言い出したら利かない上総介さまと、そちも、よく承知のはずだ。譲って差し上げろ。あれくらいの馬の代わりは幾らでも見つかるではないか」

だが、長政は承知しないばかりか、

「父上のお言葉ながら、大うつけ殿には、たとえ千金を出そうと言われても、譲るわけには参りませぬ。……寄越せと申されるのが、勘十郎君であるなら、この場で、無料で喜んで差し上げますがな」

と言って笑った。そばで聞いていた長政の弟の監物と、甚左衛門までが、

「兄上の仰せ、もっともでござる」

「あの大うつけ殿に乗り回されては、馬が可哀相でござる」

と言った。

三人の息子の言葉は、政秀の胸に強く突き刺さった。保育役としての自分の失敗が、三人を勘十郎側に回らせているらしいことに、責任も感じた。

そのための自殺であったというのである。

だが、この『信長公記』の話は、どうも作者太田牛一の作り話くさい。

それよりはやはり、自身、貴族化していた平手政秀が、信長に貴族教育をほどこそうとして礼儀作法をやかましく言い、文芸学問の稽古をうるさく強いて、少しも聞き入れられないばか

りか、彼の目から見て、田夫野人としか思えない信長の行動に、保育の失敗を感じての諫死的自殺だったのであろう。

「政秀、早まったり」と言うべきである。もう少し生きていて、富田正徳寺での信長・道三会見に立ち会っていたら、彼の杞憂も吹っ飛んで、自殺には及ばなかっただろう。

その点、斎藤道三は、自分と同型であって、より端倪すべからざるものを秘めている信長に、一種の畏怖を覚えた。そして信長は信長で、道三の生きているあいだは、ついに美濃攻めを行なわなかったことで知れるように、道三に親しみと恐れを感じたのであった。怪物、よく怪物を識るということであろう。

いずれにせよ、利家が信長に仕えて六年近くを経た弘治二年ごろでも、道三はともかくとして、織田家内部では、信長を大うつけ殿と見ている者が多かった。

彼らは、信長を追放か抹殺して、末森城（名古屋市千種区）にいた信長の弟、勘十郎信行を立てようと思っていた。その密計の主謀者は、末森城の家老、柴田権六勝家、那古屋城にいた林佐渡守秀貞、同苗美作守光春兄弟ら、先代信秀以来の重臣たちであった。

彼らの動静は、諜者たちによって、刻々、清洲城の信長に伝えられていた。信長は、清洲前線の於多井川畔の名塚に砦を築いて、信頼できる佐久間大学盛重に守らせた。

八月二十二日、ついに林兄弟、柴田勝家が、勘十郎信行をもり立てて叛旗をひるがえし、名塚砦に押し寄せた。佐久間大学は、早馬を立てて清洲に報らせた。

信行付きの家老として末森城にいた柴田勝家は、若年の頃は、道で人に会うと、

「おれは曲がったことが大嫌いじゃで」

と言って、決して自分では道を譲らず、相手に避けて通らせたという、逸話の持ち主であった。

事実、曲事をせず、武勇に勝れ、人情に厚く、信長とはよく気の合うほうであった。信長が川遊びと称して、軍事訓練をする場合、一方の将を勝家にさせていたほどである。

（権六が付いている限り、勘十郎も莫迦な考えを起こすまい、よしんば起こしたとしても、権六が、巧く押さえつけるだろうと思っていたに……）

信長は、いまいましく思う一方、

（もやもやした尾張の空気を晴らす、絶好の時が来た）

と、北叟笑みもした。

信長は、すばやく清洲城内に陣触れして、出陣した。真夜中だった。

軍勢の中に、前田利家がいたのは言うまでもないだろう。

さる天文二十三年（一五五四）夏、信長に召し抱えられて以来、草履取りから振り出して、いまは小者頭になっていた二十歳の小猿――後の木下藤吉郎（豊臣秀吉）もサルづらを真っ赤にして走っていた。

二十四日、両軍は稲生原で激突した。

清洲勢は七百、敵勢は七千――勘十郎信行の人気が、信長に十倍していたと言えなくもない。だが、平素、信長に鍛え抜かれていた清洲兵は勇敢だった。

一方、猛将勝家の指揮する敵勢も怯懦ではなかった。多勢を恃んで押しに押してきた。戦死者、負傷者が増えるにつれて、しだいに清洲勢は後退しはじめた。

優勢に気をよくした敵兵の先頭に、弓の名手として、よく名を知られていた宮井勘兵衛恒忠がいた。

彼は、馬上で指揮する信長を狙って、きりりと弓弦をしぼった。

信長を守って、側を離れず駆けていた前田利家は、それと気づくと、ついとしゃがんだ。砂を一握りして、ぱっと投げつけた。

不意の砂煙で手元を狂わした勘兵衛の矢は、信長の前面に躍り出ていた利家の右目の下を貫いた。

が、利家は怯まなかった。貫いた矢をそのままに突撃して、自慢の槍で勘兵衛を突き倒した。刀を抜いてすばやく首を斬り落とすと、返す刀で、自分の耳の下に突き出た鏃を切り落とし、矢羽を摑んで引き抜いた。

どっと噴き出した鮮血で、真っ赤に染まった利家の凄まじい顔を見ると、敵兵は怯んでどどっと後退した。

出血はひどかったが、目にも、骨にも、筋肉にも障りはないようで、利家は、槍にたよらず、すっくと立つことができた。

(――お犬さま、ようやったな!)

どこからか、小夜ノ川で大物を仕留めたときのように、姫トラの称賛の声が飛んで来たように感じた。

だが、実際に聞こえたのは、信長の凛とした声であった。

「お犬! ようやったぞ。宮井の首などそこに捨ておくがよい。後退して血止めをしろ。おい、そこにいる小猿、きさま、手当ての手伝いをしてやれ!」

「へいっ」

サルづらの小男は、体に似合わぬ大声で応えた。

信長は生涯、戦陣に参謀を連れなかった。時に応じて、自身の頭に閃く戦法を用いて、ほとんど誤ることがなかった。

いまも、利家が斬り落とした首を、ぐさりと大刀の先に突き刺すと、滴り落ちる血潮もかまわず、馬上高くかかげて叫んだ。

「ものども、ようく見ろっ! 前田孫四郎は小伜ながら、剛の者、宮井勘兵衛をみごと討ち取ったぞ。きさまらも負けずに功名手柄を立てていっ!」

こう味方を励ますと、敵陣に向かっては、

「わしこそが尾張の主じゃ! 主を裏切る人でなしは断じて用捨せん! 天に昇り、地に潜って隠れようと、必ず見つけ出して成敗する。だが、前非を悔いて刀を引き、槍を引いて退散する者は、今回に限って許してつかわす。さっさと引きさがれいっ!」

と叫んだ。

平素でも、やや甲高い信長の声は大きくて、よく遠くまで響き渡ったが、このときの声はひ

ときわ高く大きかった。何か得体の知れない恐ろしい野獣の咆哮でも聞くようで、敵兵たちを怖れおののかせた。

「主を裏切る人でなし」という言葉も、敵兵たちにはこたえた。

世を挙げての下剋上の時代で、主従の観念が薄れていたとはいえ、織田の頭領に弓をひくことのうしろめたさが、全くないわけではなかった。

林兄弟、柴田勝家の命ずるままに勇躍出陣してきたものの、いまひとつ、気勢が上がらないのは、そういううしろめたさのせいだった、と気づく者もいた。

(無勢に多勢！　負けるとは思えない。だが、たとえ勝ったとしても、主を裏切ったという、あと味のわるさは、いつまでも残るだろう)

(いや、必ず勝つという保証もないぞ。なんせ、大うつけ殿の異常さは、何処にどんな秘策・奇略を抱いているか解らぬという無気味さでもある)

敵兵たちのそうした躊躇を見逃す信長ではなかった。

行け！　と馬に鞭打って、敵兵の真っ只中に突っ込んでいった。功を争って清洲勢がつづく。

敵兵たちは槍をつける術、刀をふるう術を忘れたように、おとなしく道を開けて通らせた。

敵陣の最奥には、林美作守光春と、彼を取り巻く幾人かの近臣がいた。信長は、取り巻き連中には目もくれなかった。

「美作、立てっ！　きさまだけは許さん。成敗するから、これへ出ろっ！」

と、憤りに燃える目で睨みつけた。

剣の達人として聞こえていた光春は蒼くなって立ち上がった。大刀を抜いて、

「ものども、何を躊躇うぞ！　刀を抜け、槍をつけろ！」

と喚いた。が、命令に従う者はいなかった。

「しゃーっ！」

信長は奇声を発した。馬上から横ざまに大刀を一閃させた。

胴体から離れた光春の首が、草むらをころころと転げていった。

光春の取り巻き連中は、茫然と立ち竦んでいるばかり……。戦意をすっかり失っていた。

彼らに向けて、槍をすすめる味方に、

「戦いはこれまで！　みなみな、槍を引けえっ！」

と号令した信長は、もじもじと立ち竦む敵に、

「きさまらも、もともとはおれの家来。命は預けておくから、よく考えて悔い改めろっ」

と言うと、さっと馬首をめぐらして、清洲に引き揚げていった。攻むるも退くも、いさぎよく、颯爽とした信長であった。

(二)

稲生合戦のあと、信長は、前田利家の勇猛果敢を賞して、知行百貫文を加増した。従来の五十貫と合わせて、利家の知行高は百五十貫文（三百七十五石）となった。十九歳の近習として

は破格の待遇であった。

前後するが、謀叛組に対する信長の憤りは激しかった。勘十郎信行は切腹、林佐渡守と柴田勝家、津々木蔵人らは成敗……と、心を決めていた。

信長の生母は、いち早く、勘十郎の助命嘆願に駆けつけた。

「そなたも、勘十郎も、わらわが腹を痛めて産んだ者、愛しさに変わりはない。この母に免じて、勘十郎のむごい処罰は止めてたもれ」

と泣き縋った。

(何を言うか)

と、信長は思わず眉をつり上げた。

(幼少の頃より、おれは除け者扱い、勘十郎を猫可愛がりしたくせに。何が愛しさに変わりがないだ)

怒鳴りつけたい思いであった。が、断乎として腹を切らせるとも言えなかった。

「大うつけ者のわれらに弓引くような、大、大、大うつけな真似を二度とせぬ……と、勘十郎めに誓紙を書かせたまえ。さすれば、こたびは命を助けてとらせましょう」

と、母に言った。

柴田勝家と津々木蔵人も、同じ日に清洲城にやって来た。両人とも、頭を丸め、死装束の白衣を纏っていた。

「林美作などの口車に乗ったわれらの愚かさ、如何ようにもご処分を……」

と申し出た。

十二歳も上とはいえ、よき友と思い、時にはよき兄とも思って、もっとも信頼してきた勝家の裏切りに、信長は激しく立腹していた。

「権六だけは堪忍ならぬ。よし、おれの手で首を刎ねてくれるわ」

と、大刀を手に立っていこうとする信長を引き止めたのは、近侍していた利家だった。

「殿、ご立腹はもっともと存じますが、柴田どのは、殿にとってはお役に立つお方でございます。ご処分のこと、何とぞいま一度、ご勘考願わしう存じます」

利家は、若年ではあったが、一旦、事が起きたときは信長の身辺にあって守護し、平時は、主従の間をうまく取りなしていく近習役として、懸命に勤めてきた。信長のために勝家は失ってはならない人物と思う気持ちも、真実のものであった。

「お犬っ！」

信長は、利家を睨みつけた。

(きさま、小伜の分際で、稲生での功名に心驕って、おれに指図する気か！)

と叱りつけようと思った。

が、宮井勘兵衛が放った矢疵を、まだ痛々しく右目の下に残している利家の緊張に蒼ざめた端正な顔を見ては、叱る気がなくなった。

「きさま行って、権六と蔵人を呼んでまいれ」

と、叱る代わりに言った。

利家は、止めても振り切って、信長がふたりの控えている部屋に行くようなら自分の進言に効果はなく、もし、呼んでまいれと言うようなら、効果はあった……と考えていいだろうと思っていたから、ほっとして、ふたりを呼びにいった。

「殿！　権六めは目が見えぬも同然でござった。おわびのしるしに、このとおり、坊主になり申した」

勝家は、信長の居室の廊下に坐って、両手をぺたりと突いて深く頭を下げた。

蔵人も、それに倣って頭を下げて言った。

「かかるお見苦しき装束にてまかり越しましたるも、三途の川を渡る覚悟を定めてのこと。存分のご処分を願いまする」

ふたりの頬をつたう涙が、雫になってぽたぽたと廊下にこぼれた。

信長は、しばらく、黙ってふたりを睨みつけていたが、突然、

「わはははは」

と爆けるように笑った。

「鬼の権六や、蔵人が坊主になり、涙をこぼすとは、さてもおもしろい世になったものよのう」

「……」

「両人とも、望みにまかせて三途の川に送ってやろう。覚悟はよいな」

信長は、すっくと立つと、手にした大刀をぎらりと抜いた。

「はっ」

ふたりは、首を差しのべた。

傍らに控えていた利家は、

（あっ、おれの予想は外れたか。やはりお斬りになるか……）

と胸を痛めて、信長を見た。

信長は、抜刀を二度、三度、大きく振って見せただけで、ぴたりと鞘におさめた。

「きさまらの汚い坊主首など、くれようとて欲しうないわい」

「……」

「権六も、蔵人も、よっく考えろ。駿遠に今川、甲斐に武田、美濃に斎藤と、尾張を狙う敵にはこと欠かぬ。織田が一門で争っている場合ではないぞ」

信長の声には沁々したものが籠っていた。

「両人とも、死に場所はまだ幾らでもある。いや、生きるも死ぬもおれといっしょ、三途の川を渡るもいっしょと、覚悟せい」

「う、うっ……」

勝家も、蔵人も、呻き声を洩らし、涙に咽んだ。

（この殿のためなら、おれだって、いのちは惜しくない）

と、利家も胸のうちを熱くしていた。

(三)

利家が、清洲城三ノ丸の足軽屋敷に、サル面の小猿を訪れたのは、右目の下に受けた矢疵も薄赤い痕跡となったころだった。稲生原の戦いから、もう一と月余りが過ぎていた。

利家が、宮井勘兵衛に受けた矢をものともせず突きすすんで、勘兵衛の首を落としたあと、信長の命によって、戦列から半町ばかり後退して、そこにあった小松原で、小猿の手当てを受けたが、それはまことに行き届いたものであった。

小猿は、腰に縄帯を巻いていたが、それには大きなひょうたんのほか、藺草で編んだ小籠や、布袋を二つ四つくくりつけて、ぶらぶらさせていた。

(まるっきり、殿のうつけ衣装のサル真似だな)

と、利家は見ていたが、小猿は、藺草の小籠から布切れを取り出して、ひょうたんの水で濡らすと、まず血で汚れた利家の顔をぬぐい、大きな蛤の殻を開けて、淡黄色の練り薬を取り出すと、

「ええあんばいに、血はもう止まっているなも」

と、にっこり笑いながら、目の下、耳のうしろの疵口に指で押し込むようにして塗りつけた。

「もう七、八年もむかしのことで、前田さまは覚えてござるまいが、わし、荒子のお城下で、お目にかかったことがあるでよう」

と小猿はしゃべった。

「いや、わしもよう覚えておる」

利家は、貧しい身装の商い少年を、よく覚えていた。

「そうきゃあも。わしのサル面、いっぺん会うたら、忘れやせんでなも」

小猿は、自分の醜い異相について、いっそ楽しそうにしゃべった。

「いっぺんで、人さまに覚えられるというのも、得なものでよう。ははは……、よくぞこういうおかしな顔に産んでくれたと、わしゃお母に感謝しとるだわ」

小猿が、そんな剽げた話をするのも、疵口に押し込む練り薬が、少なからず沁み痛みすると知っていて、少しでも利家の気を他に逸らそうと思う親切心からであった。そうした心遣いは利家にもよく解った。

「さあ、手当ては済みゃあした。これでもう大丈夫や。この疵薬は、旅暮らしのあいだにわしが見つけた名薬で、矢疵にも、槍疵にもよう効くでよう。一と月も経ったら、前田さまのええ男ぶりを少しも損なわず、疵口も綺麗に治るぜえも」

と、猿面をにこにこさせながら、目の下と耳下の疵口には、別の貝殻に入っていた青い練り薬を布切れにのばして貼ってくれた。

小猿のそうした行き届いた手当てのことを思い出しながら訪れた足軽長屋は、賑やかであった。ちょうど、夕食を済ました時刻で、ひとときの休息に、みんなの話がはずんでいるのだった。

小猿が七戸つづきの長屋のいちばん西の端の一戸に、六、七人といっしょに居ることは知っていた。

「小猿どのはいるかな」

と、外から声をかけた。

薄暗い戸内には、薄灯明が一つ、ぽつんと見えるだけ。談笑は聞こえたが、小猿が居るか居ないかは、利家にはよく判らなかった。

「へーい、小猿はここに……、あっ、これはこれは、前田さま！」

と、小猿は、すぐに飛び出してきた。ひどく恐縮した態でぺこぺこと頭を下げた。稲生の戦いの功によって利家が百貫文の知行加増を受け、一躍、近習の出頭人となったことは、小猿も知っていた。やっと小者頭になったばかりの小猿とは、身分が違うのである。

「やあ、小猿どの、あの節は大いお世話になった。お陰で、このとおり、疵口もきれいになった。これは、ほんのお礼のしるし」

利家は礼を述べて、持ってきた竹筒入りの濁酒を差し出した。

「ひゃあっ！　こんなことをしてちょうては、なんやら申しわけにゃあで、いかんわ。ほでも、せっかくやで、いただきますだ。みんながうれしがるでよう」

と、受け取った小猿は、竹筒を土間に置くと、戻ろうとする利家に、

「待っとくんさい。その辺までお見送りするでよう」

と声をかけて、長屋から飛び出してきた。

「小猿どの」

長屋から少し離れたところで、利家は言った。

「おぬしに、前田さまと呼ばれるのは、どうもくすぐったくていかんな。おぬしとわしは、小夜ノ川以来の知り合いじゃ。小夜ノ川畔で、おぬしがわしを何と呼んだか覚えているか？」

「さあて……」

小猿は、すっかり忘れていた。頭を掻いた。が、この猿面、自己宣伝も忘れなかった。

「おいらは、いや、わたくしめは、いっぺん会うたお人の顔、聞いたお人の名は決して忘れん……、そういう自信はあるんじゃがよう」

「わしは、おぬしより一年遅い天文七年、戊戌の生まれでなァ。それで名前はお犬と教えたはずだ」

「あっ、そうじゃったなも。あのころわしは、人から、猿吉とか、いまと同じに、小猿とか呼ばれておりました。……思い出しました。あなたさまは、世間では『犬猿の仲』といって、仲のわるいものの例えにしているが、おれとおまえは気が合いそうだ、そう仰有ってくだされた。あのときは、うれしかったなも」

「だから、改まって、前田さまなどと言うことはない。お犬でよい」

「やあ、それは、だちかんなも」

「……」

「むかしはむかし、今は今。身分ちがいだで、前田さまを、殿さまと同じようにお犬などと呼

んだら、組頭さまに、ぶん殴られるだわ」

「では、誰もいないとき、ふたりだけのときは、お犬にしてくれ。……わしはな、稲生原で小猿どのに世話になる前から、おぬしが信長さまに奉公していることは知っていた。荒子で会ったとき、おぬしは木綿針の旅商いをしていた。それがどうして武家奉公をするようになったのだ」

「はい、話せば長うなるだが、あのあと、尾張、三河から、駿河、遠江まで、旅商いをしてまわっただわ……」

小猿には辛い苦しい旅暮らしであった。何ぞいいことはないかと、きょろきょろと見回して歩いたが、いいことはなかった。銭こそは盗まなかったが、空腹に耐えかねて、柿を盗み、畑の大根を盗み、社寺のお供えを盗んで飢えをしのいだこともある。

遠江の引間の橋の上で休んでいたときも、空腹のため、歩くのも大儀になっていた。ちょうど、数名の供を連れて馬乗で通りかかった武家に、

「わたくしめを、小者としてお使いくださいませ」

と思い切って声をかけたのも、旅商いにも疲れ、武家奉公でもして、どんな荒家住まいでもいい、ひとところに落ち着いて、食べさせてもらいたいと思ったからだった。

「ほう、サルかと思ったが、ヒトであったか」

と武家はからかい、

「サルかと思えばヒト、ヒトかと思えばサル。そのほうのようなけったいな者を傭う物好きは、まずいないぞ」

と笑った。

「そうかい、そうかい。傭わんのなら、ただのヒトとヒトだ。おいらも言いたい放題、言わしてもらうでェ」

空腹で気が立っていたから、相手は武家、腹を立てて斬るかもしれないといった分別も忘れて喚いた。

「物好きで傭人を決めるようなやつだったら、どうせ料簡の狭い、ろくでもないやつに決まっとる。相手が大名だろうと、将軍さまだろうと、そんなやつに仕えるのは、こっちで願い下げだい」

「無礼なやつだ、捨ておかんぞ！」

供の武士たちがいきり立って、刀を抜こうとした。

「待て、待て」

馬乗の武家が、あわてて止めた。

「いや、きさまの言うとおりだな。よう言うた。気に入ったぞ。物好きで言うのではない。召し使うほどに、ついて参れ」

あっさりと自分の非を認めた馬乗の武家は、今川家の被官で、遠州頭陀寺城（浜松市頭陀寺町）を預かっていた松下嘉兵衛尉之綱であった。

使ってみると、よく機転が利き、陰日向なく働く、小猿であった。之綱に気に入られて、小

者（小人）から始めて、納戸役を勤めるまでになった。

だが、之綱の格別の寵愛、たちまちの抜擢が仇になって、小姓どもに妬まれ、憎まれた。

ほんとうに紛失したか、仕組んだか、

「やれ、笄が失くなった」

「おれは印籠を盗まれた」

犯人はあの猿面にちがいない……と、よく騒ぎ立てた。

之綱は、このままでは小猿も哀れだが、家中の紛糾も絶えまいと考えて、永楽銭三十疋を与えて、

「そのほうくらいの才覚のある者なら、何処に行き、何をやっても、必ずよい道が開けるはずである。ひとまず郷国に帰るがよい」

と、暇をくれた。

後年、秀吉は、当時の恩に報いて、松下之綱を、遠州久野城一万六千石の大名に取り立てている。

さて、一旦、尾張に帰ったものの、小猿は中中村の家に戻る気はなかった。

たまたま知り合った蜂須賀村（愛知県海部郡美和町蜂須賀）の郷士、小六の屋敷の厄介人になった。

蜂須賀小六は大永二年（一五二二）の生まれだから、小猿より十五歳の年長。小猿が転げ込んだのは小六が三十歳のときであった。

「大きな屋敷には、弓の稽古場や、槍や刀をしまう武器倉などもあって、いつも、屈強な若い衆たちが広い庭で刀槍の稽古をしよりました」

小猿は、ちょっと目を細めて懐かしそうに言った。

「それというのも、蜂須賀小六どのは、ただの郷士ではのうて、世に言う野伏の頭領でしてな。金で買われれば、村の若い衆を率いて、どこの大名のためにも働くわけじゃ。わしがおったころは、美濃の斎藤道三どのについておりましてな。……実のところ、わしを信長さまの小者に世話してくれたのも、小六どのでございましてな」

小猿は、あたりをはばかるように、声を落としてつづけた。

「段取りは、うまくおれがつけてやる。きさまは、織田家にもぐり込んで、ようすを探って報告せよ……と言い渡されましたのじゃ」

「なにっ。すると、おぬしは蜂須賀の諜者かっ」

利家は思わず声を荒らげた。

「と、とんでもない！」

小猿はあわてて、手を左右に扇ぐように振って、小声でつづけた。

「いえ、はじめは小六どのの言うままにするつもりでした。なにせ、信長さまが大うつけ者との評判は高く、それではやがて小六どのが味方している斎藤道三どのあたりに滅ぼされるじゃろう、うまくやれば、斎藤家で武士に取り立てられるかもしれんと思いましてな」

「……」

「とにかく、小六どのが、織田家の小者一若に話をつけてくれ、小者のはしくれとして、信長さまの草履を取らせていただくようになったのが、一昨年（天文二十三年）のこと。……ここでお断わりしておきますが、一若は、わしと同郷の中中村の者で、小六どのから幾らかの周旋料のようなものは貰ったかもしれんが、小六どののほんとの腹の中など、まるで知っちゃおりません。人の好い親爺でございます」

諜者を務めるつもりで織田家にもぐり込んだ小猿だったが、信長の草履取りとして、朝晩、身近に仕えているあいだに、信長が世間で噂するような大うつけ者どころか、名将の器ではないかと思うようになった。

短気、わがままであるが、理に叶うと思えば、身分の高下を問わず意見を入れ、人にあまり見せない優しい思いやりも持っている。これこそ真に仕え甲斐のあるお方、よし、この人のために懸命に働こう、と小猿はすっかり惚れ込んだのであった。

そうなると、小猿は出世欲は二の次、まず日本一の草履取りになって、信長に喜んでもらおうと思った。どんな早朝だろうと、夜更けだろうと、

「サル！」

と信長が呼べば、すぐに駆けつけるよう努めた。寒夜に、信長の草履をふところに抱いて温めたこともある。

「でも、お犬さまとちごうて、わしなどは名もない百姓の小倅。二年余りかかって、やっと小者頭です。出世は二の次と言うても、やっぱりちょっと恥ずかしうございます」

「いや、短慮なわしには、気長に辛抱するそなたの話、よい戒めになった。身分だとて、荒子の小城を持つまえの前田は、美濃安八郡前田村の百姓だったのだ。そなたと、どれほどの違いがあろう。おぬしの心をこめての勤めぶり、あの信長さまの炯眼、お見逃しになるわけがない。わしも励む、そなたもいっそう励むことだ」

利家は心から言った。

「だが、一つ心配がある。諜者を送り込んだつもりでいる蜂須賀が、何と思っているかのう。何の報らせもしないでは、おかしいと思っているのではないかな。そのために、おぬしの身に危険が及ぶということはないか」

「いえ、報らせは、時々していますわな」

小猿は、にっこり笑って言った。

「信長さまは、大うつけ者どころか、天下に二人とない名将、美濃の斎藤の傭兵働きにあまり深入りせぬほうがええ、といったことを……。は、は。小六どのが、わしの言ってやったことに素直に耳を傾けるか、反対に、サルめ、裏切りおったなと腹を立てるか、どっちかによって、あの仁のほんとの値打ちが解るというものだわなも」

十阿弥成敗

(一)

稲生原の合戦に敗北した勘十郎信行ではあったが、そのまま、兄信長に対する抵抗を止めてしまったわけではない。

彼は、丹羽・羽栗・中島・春日井の守護代、いわゆる上織田家の織田伊勢守信安・信賢父子と秘かに連携して、兄にふたたび叛旗をひるがえす機会の到来を待っていた。

「そのほうも、そのことをよく心得て、いつ何時でも起てるよう、軍備を怠らぬよう」

と、付家老の柴田勝家に命じていた。

「かしこまりました」

と、答えはしたが、勝家にはふたたび信長と戦う気は失くなっていた。

稲生原の戦いで敗れて後、信長に助命されたことへの感謝もあったが、信長の口から、尾張全土を統一して、今川、武田、斎藤らの侵略に備えるという胸の内を聞かされていた。

信長は尾張統一によって、今川、武田、斎藤ら、強敵の侵略から、一国を守ろうと考えているのだ。それに引きかえて、信行は、兄に代わって下織田家の頭領たらんと考えているだけである。料簡がけちくさい。しかも、狡智に長けた信安・信賢父子の手を借りようとするなど、愚の骨頂というものだ。

(このまま見過ごしては、いつの日か、下織田家は、上織田家に呑み込まれてしまうだろう)

と考えた勝家は、弘治三年(一五五七)十一月、思い切って信長に信行の密謀を通報した。

「よくぞ知らせた」

信長は、勝家が帰ってすぐ、小姓組の中でも、特に信頼のおける前田孫四郎(利家)、松平新太郎、池田勝三郎ら数人を呼んで、秘策をさずけた。

敵を欺くには、まず味方を欺け……である。いや、諜者だって、もぐり込んでいるかもしれない。ことはあくまで慎重に運ばねばならなかった。

信長は寝所に籠ると、

「殿は、俄に発病」

と、城中に触れさせた。

あわてて見舞いに駆けつけた者は、たとえ一族、重臣であっても、

「悪性の疫病ゆえ、感染のおそれがござる」

と言って、寄せつけなかった。

そして数日後、噂はもう末森城の信行にも伝わったであろう、そろそろよかろうというので、信長は生母に宛てて、

「――拙者こと、病だんだんに重く、も早、恢復の望みも失せ候。今のうち、跡目を、勘十郎

に譲り置きたく、急いで勘十郎を罷りこさせ給うよう……」

と、書簡を送った。

病状については、……大小便、血になり、吐瀉するも、みな血なり、と最悪の如くにしたためてあった。

母から信長の書簡を見せられて、

（棚からぼた餅……とは、このこと。やれやれ、戦さをする面倒がはぶけたわい）

信行は躍り上がって喜んだ。

さっそく、僅かな家臣を連れただけで、清洲城へと馬を飛ばした。城門を入ると、家臣どもを控えの間に残して、単身、

「信行がお見舞いに伺った。すぐに兄上の居ますところへ案内せい」

と、見舞人らしくもない大声で呼ばわりながら、勝手知った長廊下を、信長の寝所に向かってどたどた歩き出した。

「これは、これは、信行さま。しばらくお待ちくだされい」

利家が、行く手に立ち塞がって言った。

「殿は、あまりに見苦しい態は見せたくないと仰せられて、ただ今、身支度をなされています。暫時、あちらにてお待ちください。さ、ご案内つかまつりましょう」

「そうか。では、案内せい」

礼儀正しく温厚な人と言われてきた信行だったが、思いがけなく転げ込んだ幸運に、つい地

金を現わしたか、嘯くような高慢口調で言った。

「では、ご両所はご案内を……」

と、利家は、うしろに立っていた松平新太郎、池田勝三郎に声をかけた。

「さ、どうぞこちらへ」

新太郎が先導に立ち、勝三郎がうしろに付いた。前後を挟まれた恰好に、信行が疑念を抱きはせぬかと利家は心配したが、信行は無警戒で歩をすすめていく。

三人は御台所に入った。

うしろにいた勝三郎が、いきなり伸ばした腕を信行の左右の肩にかけて、抱き止めた。

「やっ、何とするぞっ！」

信行は暴れたが、剛力の勝三郎はびくともしなかった。

先導していた新太郎はすでに脇差を抜いていた。振り向きざまに信行の腹に突き立てて、二度、三度、抉った。

「うぬっ、計りおったな……」

と叫んで膝を折った信行の首に、勝三郎がとどめの刃をいれた。驚きと、憤りに歪んだ信行の顔は凄惨だった。

「殿、終わりましてございます」

と、利家は、寝所の襖の外に跪いて言った。

「であるか」

と答えた信長は、がらりと襖を開けて、
「仮病も、五日となると楽ではない。くたびれた」
と、大きく息をついた。
「少しお肩をお揉みしましょうか？」
「いや、それはよい。……それよりも、あと始末がまた厄介だな」
と、信長は眉間の皺を深くした。
事情はどうであれ、実弟を騙し討ちにして、信長も後味はよくなかった。
しかしとにかく、これによって「上総介さまだ」「いや、勘十郎さまがよい」といった騒ぎはなくなって、下織田家は信長のもとで一つにまとめられていった。
年が改まって永禄元年（一五五八）、信長はいよいよ尾張一国の統一に取りかかった。
七月十二日、清洲城から三十町の浮野（一宮市内）において、上織田家の伊勢守信安・信賢父子と戦った。この合戦における利家の奮戦ぶりは人目をひいた。
縦横無尽に槍をふるって、寄せる敵を突き倒し、刺し貫いた。
「かねて槍をよくするとは聞いていたが、これほどの使い手とは知らなんだ」
と、みなが嘆賞した。
（相手を敵と思えば、怯みもし、恐ろしくもなる。小夜ノ川の鯉か、鮒と思え）
というのが、この頃の利家の戦場心得であった。
この日の戦いは、信長方の大勝利に終わった。『信長公記』によれば、清洲に帰陣後の首実

検では、取った屈強の侍首は、千二百五十余を数えたという。上織田家の戦力に、大打撃を与えたのである。

（二）

利家が、通称の孫四郎を又左衛門と改めたのは、浮野の合戦後のことだが、このときの勇猛ぶりを讃えて「槍の又左」と呼ぶ者もいた。
二十歳を過ぎたばかりの若者のこととて、「槍の又左」などと呼ばれて、多少、天狗になった利家は、異様に裾の長い、派手な絵柄の入った羽織を着たり、鞘の先に小さな滑車を取り付けた長刀を帯びて、引きずって往来を闊歩したりした。信長同様、彼もかぶき好みであった。
六尺豊かな大男だけに、彼のそういう異様な風態は、ひときわ人目をひいた。
「あやつも困ったものだ。あの風態、物狂いとしか見えんぞ」
「嫁を持たせては如何でしょう。多少は行状も改まるでしょう」
「そうだ、それがいいかもしれん」
父利昌、兄利久らの考えは、その点で一致した。
問題は、あのかぶき天狗の嫁として、どんな女がよいかであった。
利家は、風貌からいえば、婦女なら誰しも惚れぼれする美男であった。武人としての資質に恵まれて、信長の覚えもめでたい。下織田家のエリートとして、将来性にも富んでいる。
したがって、嫁のなり手は選り取り見取り、いくらでもありそうだった。

（が、ただ好いた惚れたで来るような女子では駄目である。じゃじゃ馬でも困るが、あやつを上手に乗りこなす、手綱捌きのうまい、賢い、しっかり者でなくてはならぬ）

というのは、利昌、利久に共通する考えだった。

しかし、そう考えて見まわすと、齢頃の女は多かったが、これぞと思うのはなかなかいなかった。

何某の女は器量よし、齢も十六で似合いだが、体が弱そうだ、あれでは子も産めまい。何某の女は聡明の聞こえが高いが、それを鼻にかけている、天狗同士が鼻突き合うようでは、うまくいくまい。何某の女もよいが、少々、薹が立ち過ぎている……星の数ほどいる女の中から、これぞという唯一つの女星を探すのは難儀なものである。

「又左自身、誰ぞ心にかけている女がいないものでしょうか？」

と、利久は言った。

「そうさのう」

利昌も、そう思った。

「が、又左は旋毛曲がりじゃでのう。好いた女がいないかなどと言ったら、婢女か、村娘か、とんでもない者を持ち出すおそれがあるぞ」

「それも困りますなァ」

父や兄の、そうした心配をよそに、利家はかぶいた風でのし歩き、刀槍の鍛錬に汗をかく毎日。女子に気を惹かれるようすは、いっこうになかった。

「いや、足元暗しで、うっかりしておったが、又左の嫁女としてこれ以上ない女子が、わが家にいるぞ」

ある日、利昌が、にっこりとして、膝を打った。

「まつじゃ、おまつじゃよ、彼女なら又左にぴったりじゃ」

「おまつ？　でも、あれは稚な過ぎまする」

利昌の妻の久は言った。

まつは天文十六年（一五四七）七月九日生まれで、当年十二であった。

彼女は篠原主計を父として、尾張海東郡の沖ノ島に生まれたが、四歳のとき、父主計は病死した。母はしばらくして、まつを、前田利昌の妻となっていた妹の久に預けて、高畠直吉に再嫁した。

つまり、利家とまつは従兄妹同士ではあるが、長年、一つ屋根の下で、兄妹のようにして過ごしてきていた。

まつは、十二歳にしては背丈もすくすくと伸びて、いい体をしていた。知らない者は、十五、六と見るようだった。利発だった。思慮深くて、物事にあまり動じなかった。

それでいて、快活で明るくて、身分の上下の隔てなく、誰にも優しく接したから、

「おまつさま、おまつさま」

と、下婢たちにも人気があった。

「この縁談、おまつにも否やはございますまい。わたくしも嬉しうございます。が、又左衛門

が如何申しますか……」

久は、まつが自分の身内であることを遠慮して言った。が、利昌は、

「又左の存念など、どうでもよい。わしは、おまつなら、あやつの手綱を上手に取るよい嫁女になると思う。よし、このことさっそく津田どのに願って、あやつに話してもらおう。あやつは、親のわしの言うことより、津田どのの言うことをよく聞きおるでのう」

と、機嫌よく言った。

津田信家は、利家元服の折の烏帽子親である。織田信長の伯父で、利家が信長に仕える際、口を利いてくれた人である。

信家は、前田利昌から頼みを聞くと、

「うむ。これはよい縁談のように思う。よし、わしから又左どのにうまく話してみよう」

と、快く請け合った。

信家は屋敷に、さっそく利家を招いた。

「おまつを、拙者の妻に……と申されますか」

信家の話を聞いた利家は、渋い顔をした。

「拙者など、まだまだ妻を持つ身分ではござらぬ。よしんば持つとしても、おまつはご免でござる。あれとは、あれが四つ五つの頃より、同じ屋根の下で暮らして参ったゆえ、妹のようには思っても、女子とは思えません」

利家は、思わず雄弁になっていた。

「何より、拙者とおまつでは、齢が違い過ぎます。物事の考え方も違います。夫婦になっても、おそらくうまく参りますまいなァ」

利家は、まつに女子を感じないとは言ったが、彼女が年々、女らしく美しくなっていくとは思っていた。が、利家好みのかぶいた風を、可笑しいと無遠慮に言い、恰好がわるいと笑い転げるのに、いささか憎らしさを感じていた。

（あのような者は、妻となれば、もっと言いたい放題を言い、笑いものにしおるにちがいない。口弁では到底かないそうもない口達者な女でもある。へたをすると、しまいにはあやつの言うがままの、ただのつまらぬ男になり下がるおそれがある）

そんな予感さえして、どうにも乗り気になれなかった。

信家はしかし、織田家の長老らしく、急かずあわてず、のんびりとした口調で、利家に説いた。

「妻帯はまだ早いと言うが、そなたも今では百五十貫取りの侍じゃ。早く娶って、早く子をつくることも考えねばならぬ。よい後継者をつくることも、ご奉公のうちじゃでな」

「……」

「物事に対する考えが違うと言うが、それもわるく働くばかりとは言えない。たがいの考え違いをよく話し合って、短を矯め、長を伸ばして、結果を吉に持っていくためには、似たもの同士よりはよい」

「……」

「何よりも、おまつが十二にしては背丈が伸びやかなことじゃ。女子は十六、七までは伸びるから、あれはもっと大柄な女になる。六尺豊かなそなたと並べて、はたの見る目も似合いな夫婦となる。あれこれ申さず、一緒になることじゃな」

津田信家が挙げた最後の項目は、他のことはとにかく、体の寸法が合うから一緒になれということであった。

利家は、それを滑稽に思い、可笑しくも思ったが、妙に気に入りもした。

「はは……、大男に大女。寸法合わせでござるな。先々どうなるやらわかりませぬが、当分はふたりで、背競べしながら暮らしてみましょうかな」

と言ってしまった。

(三)

利家とまつの婚礼は、津田信家夫妻を媒酌人に頼んで荒子城内で執り行なわれた。

新婚夫婦に、信長は清洲城下の小屋敷を一つくれた。

小屋敷には、夫婦のほか、稲生合戦のあと、利家のただ一人の家来となった村井又兵衛（長頼）と、前田家でまつを引き取ったときから、その世話をしてきたいねという四十女の下婢と、四人が住んだ。

妻を娶り、屋敷持ちになったからといって、利家のかぶいた気性が、父利昌や、兄利久の注文どおりに、俄に改まるわけがなかった。

だが、他人の驚くような派手な長羽織の着用や、鞘の先に滑車を取り付けて引きずって歩く、長大な刀の佩用は止めた。

利昌や、利久の意を受けていた下婢いねの入れ知恵に従って、稚妻のまつが着せかける衣服を着け、大刀、脇差その他、差し出す物を黙って身につけた。

それまで、自分で始末していた髷も、いねに結わせ、伸び放題にして鼻下にたくわえていた髭も、剃り落とすにまかせた。

（おんな子どものすることに、いちいち文句はつけぬ）

というのも、かぶき者の心意気であった。

とにかく「槍の又左」に相応しい異形の利家は、生来の美男の利家に戻ったのである。

まつは、うっとりと夫に惚れ直し、用人村井又兵衛も、自分のあるじが、信長の近侍らしく身綺麗になったのを喜んだ。

まずは平穏な新世帯だったが、とんだ波瀾に巻き込まれたのは、それから僅か三月余りのち、年の改まった永禄二年（一五五九）の正月早々であった。

事の起こりは、清洲城の同朋の一人、十阿弥が、利家の脇差の笄を盗んだことにある。

同朋は、江戸時代になってお坊主と呼ぶようになるが、僧のように頭を丸め、城内では茶菓を運んだりする、身分の極めて軽い者であった。

彼らの中には、軽口をたたいて、とかく武張った城内の空気に明るい笑いを送り込む愛嬌者もいれば、おべんちゃらを振り撒いて、侍たちのご機嫌取りに長けた者もいた。

いずれにせよ、利家にはあまり好感の持てない連中だった。

そういう連中の一人が、愛用の笄を盗んだのだから、利家は激怒した。

笄は、髪掻きの約語である。髪を掻き分けるために作られたもので、婦人は髪を巻きつけるためにも用いた。

侍はみな、小柄とともに脇差に挿していた。この時代、洗髪などはあまりしなかったから、結った髷の地肌が痒くなることが多かった。そんなときに掻くため、また、乱れた髪を掻き上げるにも使った。

利家の笄は鼈甲に金の唐獅子を象嵌した贅沢なものであった。売れば高価な物と知って、十阿弥は盗んだのである。

わるいことはできないもので、利家は盗られたあと、すぐ気づいた。

「坊主、待て！」

と、十阿弥の帯を摑んで引っ張った。

帯のあいだに挟んで隠していた笄が、ぽとりと落ちた。

「城内で盗みをするとはけしからん坊主だ。殿のお許しを得て、たたき斬ってやる！」

ぽかり、と、坊主頭を殴りつけた。

「まあ、まあ、笄くらいなことで、斬るの何のと騒ぐことはなかろう」

ちょうど、その場に居合わせた佐々内蔵助成政が仲裁に入った。成政は利家と齢も同じなら、信長に仕えた時期も同じで、戦場でも功名を競い合う仲であった。

したがって、利家が殊に信長の覚えめでたいのを、いくらか嫉み妬んでいたし、十阿弥を贔屓にしてもいた。

「笄くらいなことで、とはなんだ。わしは、盗みが許せないから成敗すると言っているのだ」

「いや、そこを堪えてやってくれ。わしに免じて、頼む」

成政は分別くさい顔をした。利家は、成政のそんなところが嫌いだった。

が、このときは、信長に訴えるのは取り止めた。逆に、誰かから一件を聞いたとみえて、信長のほうから言ってきた。

「お犬、十阿弥のことは、おれも聞いた。今度だけは許してやれ」

利家は水に流す気になった。だが、それで事は終わらなかった。

小人というものは仕様のないもので、十阿弥は、

「侍が差料に付けた物を盗られるなんて、その身の油断のせいで、いっそ、恥ずべきことやぎゃあ。それをよう、目の色変えて大騒ぎや。恥の上塗りだぎゃあ。槍の又左も嫁貰て、身綺麗にはなったが、自慢の槍は錆びたかしれんな」

と、陰口を利き、佐々成政も、

「武士が一旦、斬ると口にした以上、殿が何と言われようと斬るべきだ。途中で思いとどまるくらいなら、はじめから口にせぬがいいのじゃ」

と、誰彼となくしゃべってまわった。

そうしたことは、当然、利家の耳に入ってくる。利家は腹を立てた。改めて、正式に信長

に、十阿弥成敗を願い出た。
「まだ、そんなことで、ごたごたやっておるのか。ならんと言ったら、ならん！」
と、怒鳴りつけるかと思った信長は、意外にも、
「きさまのことだ。許してやれでは収まるまいと思っておった。よし、十阿弥を成敗しろ」
と言い、
「ただし、こそこそとやるな。堂々とおれの見ている前で斬れ。言うまでもないが、喧嘩両成敗だ。きさまは、おれが斬ってやる」
とつづけた。
（何だ、そういうことか……。十阿弥と、このおれと、織田家にとってどっちが大事か、秤にかけずとも解るはずだ。それを両成敗とは、おれも殿を見損なっていたようだ）
利家は、思わず、信長を睨みつけた。
信長は、そっぽを向いた。何を考えているか解らない横顔だった。
「両成敗のこと、よくわかりました。では、ご免こうむります」
利家は、信長の横顔にたたきつけるように言って立ち上がった。
十阿弥成敗の機会は、存外、早くやってきた。
その日、信長は二ノ丸の櫓の上で、柴田勝家と辺りを見回しながら、何やら話していた。
櫓下を歩いていた利家は、ぱたりと十阿弥に行き会った。いつものように、脇を向いて通り過ぎようとしたのへ、

「十阿弥、待てっ」
と、声をかけた。
「へえ、なんだえも？」
十阿弥が小莫迦にしたように答えて見向いた。利家は大刀の柄に手をかけると、抜き打ちに、十阿弥を斬り捨てた。
（さて、こんどは、おれが成敗を受ける番か）
利家は、自分が落ち着いていることを確かめるように、大きく一つ息をついて、櫓の上を見上げた。
「お犬！　そこ、動くなよっ！」
信長は、声高く言うと、
「権六、ついて来いっ」
と、勝家に命じて、足音荒く櫓を降りにかかった。
「殿！」
勝家は、引き止めるように呼びかけた。
「又左衛門をお斬りになってはなりませんぞ。十阿弥の代わりはいても、又左ほどの者の代わりはございません！」
勝家は、林美作守らの嗾しに乗って、勘十郎信行の謀叛に加担した稲生合戦のあと、利家が宮井勘兵衛の弓に右目の下を射抜かれた重傷の痛みに耐えて、「勝家助命」を信長に強く進

言してくれたことを徳としており、恩を返すはこの時と思ったのである。
「きさまに言われずとも、解っておるわい」
信長は、勝家に答えた。
「いいか。おれは斬ると息巻くぞ。そこを執り成して斬らせぬようにするのが、きさまの役だ。巧くやれよ」
「はっ、相わかり申した」
信長の本心を呑み込んで、勝家は答えた。
櫓から降りて、利家のまえに立った信長の顔は厳しかった。
「城中刃傷が法度なるは、よく存じておろう。成敗は覚悟の上であろうな！」
甲高な声は、辺りに響いた。
「もとより、覚悟の上でございます」
「よし。この場で手討ちにしてくれる」
と、大刀の柄に手をかけた信長のまえに、ついと勝家が乗り出した。
「殿、早まってはなりませぬ。そもそもわるいは、盗みを働いた十阿弥でござる。又左の一命、この権六めにお預けくだされい。このとおりでござる。伏してお願い申す」
権六は跪いて、深々と頭を下げた。
「う、うーむ」
と唸った信長は、存外あっさりと刀の柄から手を離した。

「犬めの血などで穢しては、刀が泣こう。きさまに免じて、成敗だけは取り止めよう。だが只今かぎり、犬めには永の暇を取らす。おれの目につかぬところへ、さっさと立ち去らせろっ」
と、厳しく言い残して、信長は足速に去っていった。
勝家は、利家の側に寄ると、
「よいか、早まった真似をするなよ。数日ちゅうに、わしのほうから何分の連絡をする。それまでおとなしく屋敷で謹慎しておれ」
と、利家にだけ聞こえる小声で言い残して、信長のあとを追っていった。

熱田の森

(一)

十阿弥を斬った利家が、信長から永の暇を賜ったという噂は、その日のうちに、狭い清洲の町の隅々まで行き渡った。

その夜遅く、近習仲間の三人が、こっそり見舞いに来て、

「とんだことになったのう。だが、早まった真似をするなよ」

「そうだとも、殿のご気性は、おぬしもよく知っているように、嚇となるのも早いが、冷めるのも早い」

「二、三日もすれば、お犬はどうしている、なぜ登城をしないのか、と今日のことなど、けろりと忘れて仰せ出されるに決まっているさ」

と、口々に慰め、励ましてくれたほかは、誰も寄りつかなかった。利家の同類と見られることを恐れたためである。

ただ一人の家人の村井又兵衛は、

「ご牢人となられては、この家も明け渡さねばなりますまい。ひとまず、荒子の城に引き揚げましょう」

と、気の早いことを言った。

「そうもなるまいよ。とばっちりを受けては叶わんと、向こうは受け入れてくれないだろう」

と、利家は言った。

父の利昌や、兄の利久は、ずっと上織田家側についてきていた。したがって下織田の信長は、前田家に好意を持っていない。いま、信長の不興をこうむった利家を迎え入れては、信長にどんな難題を吹きかけられるかわからない。それを恐れて、利家の帰城を喜ばないに決まっている。

「何もあわてて、ばたばたすることはないさ。追い立てをくうまでは、じっと居据わっておればよいさ」

利家は、不敵に笑って言った。

「早まった真似をするな。わしからの連絡を待って、謹慎していろ」

と言った柴田勝家の言葉に甘えたわけでも、望みを託していたからでもない。

独り身だったら、さっさと立ち去るところだったが、稚い妻のまつがいる。さすがの利家も、簡単には行く末を決めかねたのである。

居据わりを決め込んだものの、勝家が言ったように、家の中で、おとなしく謹慎していたわけではない。又兵衛か、下婢のいねに、

「おい、酒を持て」

と言いつけて、ひとりで酒を飲んだ。

憂さ晴らしに飲む酒は、ほろ苦かった。それに憂いが晴れるどころか、逆に気が立ってきて、じっとしておれなかった。そんなときは、庭に出て、木刀を振りまわした。

三十坪ばかりの狭い庭だったが、隣屋敷の境界と、小径に面して、木槿の生垣があり、枝ぶりのおもしろい松や、楓が植え込んであった。

「えいっ」

「とうっ」

酒の勢いもあって、利家は、松の枝、楓の枝、木槿垣などを打ちすえ、たたきつけて、ことごとくささらのようにしてしまった。

「無茶はおやめください。この家の一木一草、すべて清洲の殿のものでございます。このうえ、お咎めを受けてはつまりませんぞ」

又兵衛は、蒼くなって止めたが、

「このうえの咎めなら、腹を斬れか、手討ちであろう。おもしろいではないか。このおれの血と、かの十阿弥めの血と、どちらが赤いか、大うつけ殿に、とくと見てもらおうではないか」

利家は、清洲城まで届きそうな大声で喚いて、かっかっか、と笑い飛ばした。

そんなふうにして、二日、三日……と経ったが、立ち退けとは言ってこなかった。利家は酒をくらっては、庭木を打ちつづけた。

時には、彼のそうした狂態を、恐るおそる見ながら、小径を小走りして通り過ぎる薬売りの男や、物陰に佇んで、じっと眺めている野菜売りの農婦の姿があった。

利家は知らなかったが、彼らは、美濃の斎藤や駿河の今川などの放った隠密であった。当時、隠密を美濃では素っ破と呼び、駿河では影と呼んだ。

彼らは、生薬や畑の物を商って、武家屋敷や足軽長屋を歩き回りながら、清洲城の防備のようすや、織田氏の動静を探っていた。本物の薬売り・農婦と、隠密のそれとの見分けは、容易にはつけにくかった。

織田家で「槍の又左」と名を売った剛の者が、信長の不興をこうむって永の暇の身となったこと、それが不満で、又左が荒れに荒れていることなども、彼らは、それぞれの国に報らせていた。主従間の不協和は、敵国にとっては望ましいことであった。

利家自身、後年、この頃を回想して、家臣に次のように語っている。

「――人は悲運に沈んでみねば、友の善悪もわからねば、自分の心も知れぬものじゃ。おれが若いとき、十阿弥を斬って牢人していたとき、かねて兄弟ほどに仲ようしていた朋輩ども、ほとんど全部、見舞いにも来てくれざった。森可成（三左衛門）、柴田勝家のほかは、二、三人のお小姓が、いろいろと心を運んでくれたばかりであった」（『亜相公御夜話』）

（二）

――今夜、戌の刻（午後八時）、人目につかぬよう用心して、拙宅に参るよう。

と、柴田勝家からの使いの者が、利家を訪れたのは、彼が居据わりを決め込んでから、六日

目のことであった。

勝家の屋敷は、清洲城の濠端にあった。

利家の屋敷からは、二町ほどあったが、一般に早寝・早起きのこの時代、夜の八時はもう深夜である。径を歩いている者はいなかった。濠端の警備兵だけに気をつければ、人目につく心配はなかった。

勝家の屋敷も、家人はみな遠ざけてあるのか、寝に就いたのか、暗くしんと静まりかえっていて、勝家自身が玄関に迎え、居室に案内した。

淡い灯明かりの下、真っ赤に燃えた炭火を山盛りした手焙りの脇には、酒肴の用意がしてあった。

「わざわざ呼び出して、すまなんだのう」

と言う勝家に、利家は丁重に手を突いて、

「先日は、お執り成しに預かりまして」

と、礼を言った。

「まあ、まあ、手を上げてくれ。それよりもまず一献じゃ」

勝家は酒壺を取って、利家の盃に酒を注いだ。

そして、二杯、三杯と酒を酌み交わすあいだ、勝家は、笑いながら、

「俄牢人の気分はどうじゃな……、だいぶ荒れておるそうだな……、いやいや、咎めているのではない。それでよいのじゃ……」

と、独りでしゃべったあと、ちょっと手焙りに乗り出すようにして、利家に顔を近づけ、清洲の三大音声（信長・勝家・利家、のちに木下藤吉郎を加えて四大音声といった）らしからぬ、潜めた声で、

「さて、そろそろ要談に入ろうかのう」

と言って、話し出した。

それは、利家には思いがけない話であった。

先日、利家の命乞いをしたのは、信長にそうしろと命ぜられたからのこと、つまり信長ははじめから、利家を斬る気はなかった、というのであった。

「それは、まことでございますか？」

利家は思わず、地の大声で言った。

「まことだ。何故だと思う？」

「思いがけないお話……、何故と申されて、解るはずがございません」

「そうであろうな。わしも、櫓を降りながら、『おれは斬ると息巻くぞ。そこを執り成して斬らせぬようにするのが、きさまの役だ。巧くやれよ』と殿に言われて、殿はおぬしを本気で斬る気はない、そこまでは解った。が、もっと深い殿のお考えまでは解らなかったものな」

「……」

「いや、わしは、後になって殿の考えを聞いて、今さらのように、殿は大うつけ者どころか、とてもわれらなどの及ばない知恵者というか、底の知れぬ怖いお人だと思うた」

勝家は一つ大きく息をついて、話をつづけた。

信長は、上織田家の織田信賢を討ち滅ぼして、尾張一国を統一するのは間もないことだが、それからが問題だと考えていた。

美濃の斎藤、甲斐の武田、駿遠の今川など、いずれ劣らぬ油断ならない強敵が、好餌として尾張を狙っている。中でも警戒すべきは、今川義元だった。

今川家はもともと、足利将軍家の一族で、将軍家に次ぐ名門である。武威においても海道一の弓取りと称えられている。

義元の時代になって、地味豊饒の遠江・駿河に加え、三河のほぼ全域を手中にして、約八十万石の大大名になっていた。

時の足利将軍は、十三代義輝だったが、すでに勢威は地に堕ちている。義元は、朝廷に、「応仁以来、乱れに乱れた四海統一」を奏するという名目で上洛して、足利将軍に代わって天下に号令するという野心に燃え、着々と準備をすすめていた。

義元が行動を起こせば、第一に尾張が蹂躙されることになる。

信長は、それは何としても避けねばならないと考えていた。父の信秀の時代に、一旦は松平広忠の嫡男竹千代（のちの徳川家康）を人質に取って三河で有利に立ったが、巧く義元に竹千代を奪い取られ、三河進出を阻止された。父の無念を晴らそうという気分も、信長に横溢していた。

「今川領内の各地に放ってある素っ破どもの報らせでは、今川軍団の上洛は、そう遠い時期ではないようだ。そこで殿は、素っ破の数を増やすとともに、彼らの指揮を執る有能な総指揮官を必要とされたわけだ」

勝家は、長い話を終えて、たてつづけに二、三杯、酒を飲んで言った。

「その総指揮官として、殿がお選びになったのが、又左衛門、おぬしじゃ」

「拙者が隠密の総指揮官？」

「そうじゃ。おぬしを、勘気に触れたとして牢人させたのも、今川の諜者どもを欺くため、殿が考えられてのことだ」

利家も盃を重ねていた。赤くなっていた顔に、露骨に不快の表情を浮かべて言った。

「戦場に出て、槍一筋の奉公をせいと仰せられるなら、この又左、いのち惜しみはいたしませんが、隠密の元締をしろとは、あまりに情けのうござる。拙者は、このとおりの大きな図体、こそこそと動き回るのは不得手でござる」

「そう申すものではない。殿が大うつけ者ぶりをして、お父上、信秀さま、傅役の平手中務どのをはじめ、味方の多くを欺き通してこられたのも、あの莫迦者の宰領する尾張など、いつにても取ることができる、あわてることはないと、四隣の敵を油断させるための忍の行動であった」

「……」

「又左なら、おれと同じに忍に耐える……とお考えになったからこそ、おぬしに隠密の元締役を仰せつけられたのだ、とわしは考える」

「……」

「おぬしも知ってのとおり、四隣の敵国の油断するあいだにも、殿は、織田軍団を鍛えぬいて、目を見張るばかりの強兵に仕立てられた。だが、今川の駿・遠・三の三国あげての大軍は、弓の上手、槍の上手だけで防ぎ切れるものではない。素っ破どもによる諜報が大事だ。隠密の総元締、おろそかにはできぬ大役だぞ」

「……」

「そなたがより大きくなるため、欠くことのできぬ試練と考えて、この大役、ぜひお受けしろ。そなたが嫌と言っては、成敗する、暇をくれると味方を欺いた、殿のせっかくの計略が無駄になる」

鬼柴田と呼ばれた勝家が、目にうっすらと涙さえ浮かべての説得に、利家も心を動かされた。

「相わかり申した。隠密の総元締、お受けつかまつります」

「そうか、承知してくれるか」

勝家は、ほっとした顔つきになって、一言、つけ加えた。

「申すまでもないが、このこと、ご妻女にも、誰にも内緒だぞ」

(三)

清洲の家を引き払った利家が、まつ、村井又兵衛、いねを連れて、荒子の城に帰ったのは、柴田勝家と密談した翌日であった。

まえに、荒子への帰城をすすめた又兵衛などは、

「そうもなるまい。とばっちりを受けては叶わんと、向こうは受け入れてくれないだろう」

と、はねつけた利家が、まるで手の裏を返すように、

「荒子に戻る」

と言って、立つ鳥のように帰城支度を急がせたには、いささか唖然となった。

だが、清洲に不当に居据わって、朝から酒をくらい、酔って庭木に八つ当たりする利家に、はらはらしているよりはましである。いそいそと移転支度をした。

帰城した利家一行を、荒子では、誰もそう嫌な顔をせず迎えてくれた。

しかし、利家が荒子城にいたのは、帰城しての一夜だけであった。

翌日には、早くも柴田勝家からの次の指令が入ってきた。指令を伝えに来たのは、意外にも、信長の伯父で、利家元服の折の烏帽子親、津田信家だった。

信家は、利家にはそっと、

「柴田権六に頼まれて来た」

と告げ、まつや、前田家の人々には、

「近頃、熱田の神域まで、怪しげなる者が侵入して、はなはだ物騒なそうじゃ。用心に屈強な者が欲しい、誰かいないかと、わしは頼まれていてのう。そこで思い出したのが、牢人した又左どののことじゃ」

と、巧く言いつくろい、
「どうだろう、力になってやってくれまいか」
と、利家に言った。
「こののち、如何にして身を立てようかと、思案をしていたところです。これからすぐに参りましょう」
利家は、まつに言って身支度させると、父の利昌、兄の利久には、
「しばらく、まつをお預かり願います」
と言い残しただけで、津田信家とともに荒子城をあとにした。
「おぬしも、気が早いな。荒子で二、三日、骨休めをしてからでもよかったのに」
と、城外に出ると、信家は言った。
「いえ、ぐずぐずしていては、父や兄が何を言い出すやらしれません。早いがいいのです」
と、利家は笑った。
熱田神宮では、信家が、社家の松岡守部に引き合わせた。
熱田神宮の境内は、現在でも六万坪の広大な地域を占めている。樹齢一千年を越す七本の楠の巨木をはじめ、鬱蒼と茂る森が、市街の車の騒音をはねつける別天地である。
利家の時代、森はもっと広く、境内には本宮のほか、別宮一、摂社八、末社十八が鎮座していた。
祭神は熱田大神といって、皇位継承のしるしの三種の神器の一つ、草薙剣を主神として、

剣に所縁の深い日本武尊、天照大神、素戔嗚尊、宮簀媛命、建稲種命の五神が併祀されている。
この熱田神宮と織田家は、信長の父の信秀の頃から関係が深かった。天文七年（一五三八）、信秀が美濃の斎藤と戦ったときには、大宮司の千秋紀伊守が自ら織田勢の第一線に立って戦い、稲葉山城下で奮闘、討死を遂げている。
利家を迎えた松岡守部も、すでに信長の意を受けていた。守部は利家を、多くの末社の中でも殊に森深いところの一社に付属して建っていた、高床式の建物に案内した。
そこは書物庫で、中には何万冊とも知れぬ和漢の書籍が収納されていたが、寝起きに不便のない空間には、寝具も整えられ、檜の一枚板の大きな座卓が置かれ、硯・紙・筆墨類も揃えて置いてあった。
「若い禰宜や、権禰宜たちの勉強のために蒐めた書物も、不勉強な者が多ござってな、そなたさまへの食事を運ぶ者以外、ここには誰も参りません。お一人で、この中を自由にお使いください。また、お暇なときには、お好きな書物を自由に取り出してお読みください」
という守部の言葉に、利家は、
（ふん、武士に読書など無用じゃわい）
と思った。が、まるでそれを見抜いたように、
「そなたさまの人相を拝見して、ただの侍では終わらぬ人とお見受けしました。武士も人の上に立つようになれば、弓の上手、槍の上手だけでは済みません。何が必要かは、ここにある書

物が、みな教えてくれましょう」

と、守部は笑いながら言った。

その守部が、利家と津田信家を残して立ち去ったあと、信家は言った。

「ここに、そなたがおることは、素っ破の主だった者たちにはもう知らせてある。必要に応じて連絡に来たり、指図を聞きに来たりするだろう。また、清洲に急報する必要のあるときは、あの松岡守部に伝えればよい。あれがよいように取り計らってくれよう」

「では、あの松岡という社人も、殿の諜者で？」

と、利家は驚いた。

「はは……、油断も隙もならぬと思うだろうが、食うか食われるかの乱世、誰が味方で誰が敵か解ったものではないぞ。そのへんのこと、よくよく心して、しっかりやってくれい」

そんなことを言い残して、信家は帰っていった。

一月下旬である。年古りた紙のにおいのする書庫の寒さは、鍛えに鍛えた利家の身にも沁みた。火事を用心してか、小さな火桶ひとつ置かれていなかった。

「わたくし、鷹丸と申します。お身まわりのお世話、何なりと、わたくしにお申しつけくださいますよう」

と、その夕方、夜食の膳を運んできた十二、三の少年に頼んで、利家は、木太刀と、三間ほどの細い丸太一本を手に入れた。

暖を取るには、書庫の脇の草地に降りて、汗をかくまで、木太刀を揮い、丸太を振りまわし

て、体の中から温めるより仕様がなかった。

そなたさまの相を見るに、ただの侍では終わらぬ人……、武士も人の上に立つようになれば……と言った松岡守部の言葉の暗示にかかったわけでもないが、時々は、書物も手に取った。

利家が、どんな書物を手にしたかは、解っていない。が、後年、秀吉に頼まれて幼少の秀頼の傅役となった利家が、秀吉の死後、

「曾子ノ曰ワク、以テ六尺ノ孤ヲ託スベク、命ヲ寄スベク、大節ニ臨ンデ奪ウベカラズ。君子人カ、君子人ナリ」

と『論語』巻第四の章句を引いて、加藤清正、宇喜多秀家、浅野幸長らを戒めていることなどから考えて、『論語』を読みおろすくらいの力は、ここでつけたのではなかろうか。

利家は、七、八歳ころには、荒子城からほど近い荒子観音（浄海山観音寺）の住職、全運法師に手ほどきを受けた下地があったから、ここでも、暇を持て余したときは、よく習字もやったことだろう。後年の利家は、なかなかいい字を書いている。

(四)

熱田神宮での書庫暮らしも、すでに一と月、二月半ばを迎えた。永禄二年（一五五九）の元日は、新暦では二月十八日だから、二月半ばはもう、春たけなわの陽気だった。

森の奥の高床式の書庫暮らしにも、すっかり馴れたが、閑静すぎるのと、話し相手のいないのが、若い利家には退屈だった。

柴田勝家の話では、隠密どもの総元締ということだったが、それらしい者が、姿を見せたことは一度もなかった。

毎日二度、食膳を運ぶ少年鷹丸のほかは、この一と月のあいだに松岡守部が、

「お元気ですかな」

と、二、三度、見舞ったばかりである。

守部は、この頃の陽気の話とか、神宮の由緒のようなことを、まるで祝詞をあげるような調子で小半刻も勝手にしゃべっていくだけだった。したがって、世上のことはさっぱり解らなかった。

(どうやら、修理どの(柴田勝家)に、いっぱい食わされたな。これでは、態のよい流人ではないか)

と思うこともあったが、ふしぎと腹は立たなかった。

それにしても、森の中の一日は長かった。毎日、日の出の頃——といっても、大木の鬱蒼と茂る森の中では、辺りが薄明るくなるだけだったが、とにかく、その頃に起きて、書庫の脇の草地で、木太刀か、丸太を半刻ほど揮って汗をかいたあと、朝餉を摂って書見をするか、習字をするかだけ。ほかにすることがなかった。

時には、森の中を歩いてもみた。春の訪れを告げる下草に咲く花、枝渡りする鳥影が増えたが、そういうものを愛でる趣味はなかった。

その日も、森の中をひとまわりしたあと、そろそろ夕餉の時間、書庫に戻ろうかと思ったと

き、ふと、前方三間ほどの木立のあいだに、鳥の動きとも異なった何かの気配を感じた。

(はて、何であろうかな。まだ見たこともないけものでもいるのかな?)

利家は、足を停めて、もう薄暗くなった木のあいだを透かして見つめ、耳を澄ました。

が、もう何の気配もなかった。

(だが、確かに何かいる)

と、思ったとき、ふわっと木の上から飛び降りたものがあった。利家との距離はおよそ三間……。利家は、

(むささびか、猿か)

と思ったが、立っているのは人であった。

姿が異様であった。黒木綿の着物に、同じ黒の裁着袴をつけて、柄も鞘も黒い脇差を腰に帯び、黒い布頭巾で顔を隠していた。が、その者から殺気は感じられなかった。

(ふむ、やっと現われおったか。権六どのが言った隠密にちがいあるまい)

利家は、黙って相手を凝視ていた。

相手は、黒い布頭巾を取ると、その場に片膝をついて蹲んで辞儀をした。黒髪をうしろに撫でつけて束ねている。顔が白かった。

「つらねに参じました」

と言ったのは、意外に涼やかな女の声であった。

(つらね? ああ、連絡だな)

と思いながら、利家は、
「そのほう、女子じゃな？」
と、解り切ったことを訊ねた。
女は、それには答えず、低く、しかしはっきりした口調で、上織田家の織田信賢が、美濃の斎藤義龍と秘かに盟約したこと、斎藤義龍が美濃の精鋭を選んで信賢の岩倉城に送り込むのを、来月末と決めたことを報告した。
「ふむ、それは確かなことだな？」
と言う利家の問いに、女はきっぱりと答えた。
「忍びは、不確かなことは申しませぬ」
「ふむ、それなれば、そなたが直かに清洲に報らせたほうが早かろう」
「今日か明日と、切迫したことなれば、わたくしが飛びもしますが、三月末のこと、少々、間があります。ここは、お犬さま、いえ、前田さまから報らせて、あなたさまのお手柄になさいませ」
「お犬さま、と申したな。そなた、わしがそう呼ばれていた荒子の頃を知った者のようじゃな」
「ふふ……」
女は含み笑いした。その笑い声に覚えがあった。
「や、そなた、メス虎、いや、姫トラだな。そうであろう？」

「やっとおわかりになりましたか」
「やはり、姫トラであったか。あの頃から、もう十年余りだ。背丈が伸びおったし、身装も鴉のように真っ黒では、見違えて当然じゃ」
利家は、少年時代にかえった気分だった。言葉遣いまで、少年時代にかえって言った。
「おれはな、時々は、小夜ノ川で一緒に魚突きをしたおまえを思い出しておった。美濃の在所に帰ったあと、嫁にも行き、いま頃は一人、二人の子の親になっていようと思っておったぞ」
「……」
「それが、そのような姿で、おれのまえに現われようとはな。……思いもしないことだったぞ」
「わっちは……」
姫トラも、少女時代の言葉で言った。
「嫁には行けぬ身じゃ。お犬さまに、おまえの父は何の仕事をしている、と聞かれたとき、知らんと言ったが、お父の姫ノ八蔵は、仲間うちでは、ちっとは知られた忍びの頭領……」
「……」
「その一人娘に生まれたわっちは、ゆくゆく忍びになるのが運命で、四つの頃から忍び修行をさせられまいた」
「では、小夜ノ川で会っていた頃もか？」
「ふふ……、あの頃、お父の八蔵が荒子におったんは、何のためじゃったと思いんさる？」

「……」

「それは、下織田家の信秀（信長の父）さまから、上織田側にいたお犬さまのお父上、前田利昌どのや、利久どのの動きの見張りを仰せつかっていたゆえじゃ」

「これは思いもかけぬことを聞いたな。おまえがおれに近づいたのも、父八蔵から言いつかってのことだったわけだな」

「それは違うぞ。わっちはまだまだ未熟で、忍びには使ってもらえなんだ。だが、お犬さまが、荒子観音裏のわっちらの小屋を探りに来たことは知っている。わっちが木の上から見ていたことに、お犬さまは少しも気づかず立ち去りんさった」

「そうだったか。いや、参ったな」

利家は、無邪気で暴れん坊だった少年の日にかえった思いで、頭を掻いた。

「ふふふ」

と笑った姫トラは、そこで不意に思い出から覚めたように、顔を引き締めて言った。

「わっちには、まだやることが多い。これでお別れするが、さっきの話、清洲へ報らせてくだされや。この宮の松岡守部どのに頼めば、すぐ使いを清洲に走らせてくれるはずじゃ」

「で、そなたは、これから何処へ行く？」

「それは、お犬さまにも言えぬ」

「……」

「必要なときは、お犬さまが何処におろうと、わっちのほうから会いに行く。では、ご免くださりませ」

おしまいの挨拶を改まった口調で言うと、姫トラは辞儀をして、さっと立った。そして人わざとも思えぬ速さで、木立のあいだへ駆け込み、たちまち見えなくなった。

書庫に戻った利家は、夕餉を運んできた鷹丸に、急いで松岡守部を呼ぶように頼んだ。

守部は、利家が膳の物の片づけも終わらぬうちに姿を見せた。利家は、姫トラから聞いたとおりを伝えた。

「一刻も早く、清洲に報らせいでは……」

と、守部は急いで出ていった。

織田信長が、七百の軍勢で、岩倉城包囲戦にかかったのは、三月に入ってすぐであった。

織田信賢は、美濃の援軍を待つあいだに戦備を整えておこうと、食糧・武器・弾薬など、集められる限りを集めていた。

だが、援軍を迎える三月末までにはまだ間があると、城下の備えには手をつけていなかった。

信長は、そこを衝いた。町に火をつけて焼き払い、岩倉を裸城にして、まわりには、竹と木材で編んだ鹿垣を、二重、三重に結い回した。

そして、火矢と、鉄砲で激しく攻め立てた。しかし、退路を全く絶たれた城兵は、たっぷりとため込んだ食糧と、

「今に必ず美濃の援軍が来る。そうなったら、内から外に打って出る。内と外から攻められては、信長勢は全滅じゃ」

という信賢の励ましの言葉を頼りに、よく耐えた。

だが、美濃の斎藤義龍は、信長の先制を知ったときから、岩倉城救援の考えを捨てた。小さな戦いで一兵も失いたくなかったのだ。信長が統一した後の尾張一国を、一挙に葬るぐらいの自信を持っていたからである。

三ヵ月を経て、岩倉城の食糧も、弾薬も尽き果てた。しかも頼りの援軍は来たらず、信賢はついに降伏した。上織田家の最後の抵抗は終わったのである。

信長は、岩倉城を跡形ないまで破壊して、清洲に凱旋した。父信秀以来の念願だった尾張一国の統一が、二十六歳の青年大名の手によって、ついに成就したのである。

桶狭間

(一)

信長が尾張統一を成就して、二ヵ月経った頃である。

「柴田修理さまから、この添え状を持って、駿河の御油に参るようとのおことづけがございました」

と、松岡守部が一通の書状を利家に差し出した。書状の宛先は「林通義殿」となっていた。

正直なところ、利家は、やれやれ、やっと自儘な身になれたなと思った。熱田の森の書庫暮らしに馴れたとはいえ、木太刀・棒槍、それに書物・筆墨を友として過ごす日々に満足していたわけではない。

「なお、修理さまからは、あくまで織田の殿の憤りに触れて追放を受けた牢人、前田又左衛門として通すように、とのおことづけもございました」

と言って、守部は、新しい小袖、袴、そのほか旅に必要な品や、路銀の入った布袋を揃えてくれた。

「では、出発は明朝早くにしよう。したがってもう、お目にかからぬが、長いあいだお世話に

なり申した」

利家は礼を言った。守部は、

「いえ、そう鳥が飛び立つように急がずとも……」

と言ってくれた。が、利家は一日も早く神の森の外の、俗なる風物に触れてみたかった。その晩の夕餉のとき、鷹丸に頼んで飯を握らせておいた利家は、翌日は未明の寅の刻（午前四時）に、誰の見送りも受けず、書庫の住まいをあとにした。

本殿まえの広場まで、森の中の小径を急いでいると、不意に木立のあいだから人影が飛び出した。利家は大刀の柄に手をかけて、身構えた。

朝靄の中におぼろに佇んだ人影は、朗らかな声を立てた。

「お犬さま、わっちじゃ」

「何だ、姫トラではないか。不意に飛び出して、危ないではないか。もう少しで斬りつけるところであった」

「わっちだって、用心をしている。やすやすと斬られはしなかったろうが」

姫トラは笑いながら近づいてきて、利家と並んだ。以前、会ったときのような黒装束ではなくて、ふつうの村娘風をしていた。

「それにしても、ちょうどいい時に来たものだ。もうちょっとで会えないところであった。わしは、この熱田の森を去ることになった」

「そのことを承知で、夜のうちから、ここで待っていました」

「ずっと起きて待っていたのか」

「いえ、眠っていました。忍びは何処ででも眠り、針の落ちる音も聞き逃さず目覚めます」

「……」

「前田さまは、これから訪ねる御油の林通義どのについて、よくご存じですか？」

「何だ、それまで知っているのか。わしは何も知らぬ。林通義、何者だ？」

「林通義どのは、駿河では聞こえた剣の達人。御油の林道場には、今川家の若い侍の弟子だけでも二百人はいましょう。でも、ご心配には及びません。修理さまの添え状に前田さまのことは、うまく書いてあるはずです。通義どのも、弟子たちも、前田さまを疑ったり、用心したりはしないでしょう」

「……」

「したがって、弟子の今川侍たちの話を通して、前田さまには、今川家の動静がかなりくわしく解るはずです。時折、わっちから前田さまをお訪ねして、お話を伺い、それを清洲に伝えます」

「どうも嫌な仕事だな」

利家は、顔をしかめた。

「それも、柴田修理どのの考えから出たことか」

「むしろ、信長さまのお気持ちと考えてお勤めください」

「ふむ」

利家は、しかめた顔のまま言った。

「一旦、引き受けたからは、いやでもやるほかなかろうな。ところで、姫トラは、わしのつなぎ役のほかに、どんな仕事をやっている？」

「それはいろいろでございます。忍びは忍び同士、つなぎを取り合って、いろいろ働かねばなりません」

「仲間は多いのか？」

「それは多ございます。今川・斎藤・武田・上杉の忍びが大勢、尾張にもぐり込んで働いています。信長さまも負けずに、各地に忍びを放っておられます」

姫トラが、そこまで話したとき、ふたりは森の小径から、本殿まえの広場に出ていた。

「これから先は、ご牢人と百姓娘が道連れでは怪しまれます。ひとまずお別れいたします。道中も、また林道場でも、くれぐれもご油断なきよう」

と言い残して、姫トラはもとの小径の方へ、あっという間に姿を消していった。

利家は、本殿に参拝して、熱田の森をあとにした。日の出まえの薄明かりが、利家には懐かしい俗世界を描き出して見せてくれた。

駿河の御油まで、急ぐこともあるまい。利家は、三河、遠江をゆっくりと旅して、五日目の夕方、御油の林通義方に着いた。

通義は、五十過ぎの穏やかそうな人物であった。つい一と月まえ、軽い脳出血で倒れたとかで、左腕にちょっと痺れが残っているため、道場に出るのは休んでいるということだったが、言語障害もなく、

「槍の又左衛門の名は、この駿河にまで聞こえている。わしの代わりをしてもらおう。よい代稽古を得て、大助かりじゃ」

と、喜んでくれた。

林通義も、もとは尾張者で、林佐渡守秀貞の遠縁であった。弘治二年（一五五六）八月、信長の弟勘十郎信行を守り立てて、林兄弟・柴田勝家が信長に叛旗をひるがえしたときは、勘十郎側について、稲生原に出陣した。

「その後、勝家や津々木蔵人は、上総介（信長）に、丸めた頭を下げて謝罪をしたが、わしは尾張がいやになってのう。牢人して、越後、甲斐と剣の修行旅をつづけてのち、ここに居着いてしまったわけよ」

と、身の上話も聞かせてくれた。

利家は、翌日からさっそく、林通義に代わって道場に出た。姫トラから聞いたとおり、門弟の数は多く、ほとんど今川家の家臣であった。

稽古の合間に、彼らがしゃべっているのを聞くともなく聞いていると、ことし二月、信長が御伴衆八十人ほどを引き連れ、上洛して将軍義輝に謁見して以来、今川義元が久しく機を狙っていた上洛をあせり始めているようすが、よく解った。

今川ではすでに、岡部元信の鳴海城、義元の妹婿、鵜殿長照を城主とする大高城を、前線基地として固めていたが、利家が御油に来て月日を重ね、年も改まって永禄三年（一五六〇）に

入ると、上洛のための準備はさらに速度をはやめていた。

東北方面では、尾張科野城を確保しようとするほか、海賊（水軍）によって、伊勢湾から木曽川の河口に軍勢を送り込んで、蟹江城を拠点とする西方からの攻撃を図っていた。

刻々ともたらされる忍びの報告によって、信長も対抗手段は講じていた。科野・蟹江の兵力は大したことはない、義元の本隊は、やはり東海道直進のコースを取るにちがいないと考えた。

そこで、鳴海城を包囲する形で、丹下・中島・善照寺に砦を設け、大高城と鳴海城の連繋を断つ形で鷲津に砦を築いて、織田信平、飯尾定宗以下、四百余名、また丸根に築いた砦には、佐久間大学允盛重を将に守兵七百余名を入れて備えた。

義元は忍びの報告で、そうした信長の備えを知ると、決戦の場はおそらく大高あたりになると判断した。そこで松平元康（のちの徳川家康）に命じて、大量の兵糧を大高城に運び込ませた。

そのあたりのことまで、利家が調べた頃、降りつづく梅雨の中、蓑笠で身を包んだ姫トラが秘かに林道場に忍んできた。永禄三年もすでに四月下旬であった。

「お犬さま、今川どのの総出陣は、遠からず行なわれると思います」

「おそらくな」

と、利家はうなずいた。この一両日、これまで稽古に来ていた今川家の家来たちが、一人も顔を見せなくなっていた。

「これからのことはみな、仲間の忍びにまかせてきました。お犬さまは急いで尾張にお戻りください。道中、わっちがお供をいたします」

「うむ、やっと尾張に戻れるか」

利家は莞爾とした。さっそく、林通義に師範辞退を申し入れに行った。

「いつ、その申し出があるかと待っておった。柴田修理どのの添え状には、信長公の不興をこうむって牢人をした者、よろしく頼む、とだけあったが、わしは、修理どのに何か魂胆があってのことと思っておった」

「……」

「いや、咎めているのではない。半病人のわしなどと違うて、おぬしはまだ若い。武術にすぐれた器量人でもある。牢人にしておくには惜しいと思っておった。わしに遠慮することはない。尾張に戻って、立派な武功を立てられい」

通義は、むしろ喜んで送り出してくれた。

今川義元が、駿・遠・三の全軍に総出陣の命を下したことを、利家と姫トラは、尾張に急ぐ途中、三河の池鯉鮒（知立）で聞いた。五月一日であった。

「義元どのは馬嫌いで知られています。どうせ輿に乗っての進撃、そう速くは進めますまい。わっちは、それを見届けかたがた、後からゆるゆると参ります。お犬さまはお先に参られませ」

姫トラはそう言って、元の道を引き返していった。

姫トラが言ったとおり、今川義元の乗馬嫌いは有名だった。『武功雑記』に、その理由は

「短足胴長」という体格のせいだったと書かれている。

それに義元は、お家柄で総髪に沈香をたき込み、歯には鉄漿をつけた公卿風で、駿・遠・三、百万石の大守らしからぬ、文弱人のように噂されていた。

だが、地頭領主を農村から切り離して寄親とし、これに在地武士や名主百姓を寄子として、今川軍団を鞏固に組織し、商品の流通に目を配って富強策を講ずるなど、大名として、やはり一流の人物であった。

上洛する今川軍団は、騎乗・歩卒あわせておよそ二万七千人。それが旗差物を風に靡かせ、鎧・兜を煌めかせての堂々の進撃であった。

義元自身は、駿府城を嫡子氏真に預けて、五月十二日に出陣した。姫トラが予想したように輿での進撃は疾風怒濤とはいかなかったが、それでも十六日には三河に入り、十八日には尾張に入って、沓掛城に本陣を置き、軍議を開いた。

それによって、丸根砦の攻撃には松平元康、鷲津砦には朝比奈泰能が当たると決し、義元は本隊を率いて、十九日早暁から一斉攻撃を開始すると決めた。

その頃、利家は熱田神宮にいた。

松岡守部が引き合わせた大宮司の千秋季忠に、

「織田どのご出陣の際は、この宮が将兵集結の場と定められている。その日まで、ここに滞在するがいい」

と、すすめられたからであった。こんどは書庫ならぬ、大宮司の居館に泊めてもらった。

季忠は、天文七年（一五三八）、信長の父信秀に従って美濃の斎藤と戦ったとき、壮烈な戦死を遂げた千秋紀伊守の子であった。

(二)

十八日には、「今川義元、沓掛城に入る」の諜報が、清洲城にも届いていた。

その日、夕刻から、信長は城内に、林佐渡守、柴田勝家、森可成、加藤図書、池田勝三郎、織田与一ら、主なる部将を招集して、戦略会議を開いた。

「今川勢は、少なく見積もっても二万五千は下りますまい。味方は三千名。八倍から九倍の大軍と、野戦において正面衝突をすればどうなるか。勝敗は戦わずして明らか……」

と、林佐渡守は籠城説を主張した。

清洲城は小城ながら、要害として知られていた。如何な大敵も、一挙に押し潰すことはできないだろう。相手の攻撃に、うまく対処して長期戦に持ち込めば、勝機を摑むこともできようし、万一の場合は脱出して、後図をはかることもできるという考えであった。

会議の大勢は、林説に傾いた。

それに対して、信長の考えはどうなのか。諸将の目はみな、信長に向けられていた。が、信長は、ある時は目をつむり、ある時はかっと見開いた目で一同を見回すだけで、何も言わなかった。

しかし、信長の腹は、すでに決まっていた。籠城して長期戦に持ち込み、勝機を見出そうな

ど、二倍、三倍ぐらいの敵勢に通じることで、八倍からの敵に通じることではない。

したがって、むしろ野に出て、縦横無尽、神出鬼没の機動戦を行なってこそ、勝機を摑むこともできよう。いや、敵が幾倍であろうと、要は総大将今川義元の首を取ることである。さすれば二万五千も三万もない。敵は烏合の衆と化するだけ、何も怖れることはない。

（戦いとは、そういうものだ。こんどの場合は、義元が死ぬか、おれが死ぬかだ。万一、おれが死ぬとしても、それはそれだけのこと、何も悔ゆることはない）

信長は、そう考えていたのである。

ポルトガル生まれのイエズス会の宣教師ルイス・フロイスが、永禄六年（一五六三）七月に、伝道のために来日して、慶長二年（一五九七）七月、六十五歳で長崎で死ぬまでに書いた膨大な『日本史』の中に、信長について、

「――神仏一切の拝礼、尊崇をおこなわず、占卜、迷信の軽蔑者」

と書いているが、確かに信長は無神論者であり、合理主義者であり、困難な企てに着手するに際しては大胆不敵、すべては自己の理性と、明晰な判断力に拠ってする男であった。

夕方から始まって、夜遅くまで、結論の出ないままだらだらとつづいた重臣会議を、

「よし、会議はこれまでじゃ」

信長は眠そうな声で言って打ち切ると、さっさと奥へ入ってしまった。

『信長公記』は、このあとのこととして、

「――家老の衆申すよう、運の末には智慧の鏡も曇るとは此節也と、おのおの嘲哢して罷り帰られ候」

と、誌している。終始、黙りこくっていて、自分の考えも述べないまま、会議を打ち切った信長の態度を、重臣たちは情けなく思い、織田家の命運も尽きたりと感じたのであろう。

だが、翌十九日、信長は深更に起きた。宿直の小姓に、

「いま、何刻か？」

と、尋ねた。

「丑の刻（午前二時）にございます」

「よし」

信長は、棚の上から鳴海潟と名づけた愛用の小鼓を取って、軽くポンポンと二つ三つ鳴らすと、広間に出て、日ごろ愛好していた幸若舞の「敦盛」の一節を、

人間、五十年
下天のうちをくらぶれば
夢、まぼろしのごとくなり
ひとたび生を得て
滅せぬもののあるべきか

張りのある声で謡い、静々と足を運んで三度舞った。信長の決意のほどを計ることができよう。

謡い終わった信長は、何事が起きたかと顔を出した、宿直の岩室長門守重休らに、

「法螺貝を吹かせろ！」
「具足を持て。馬、曳けっ」
と、矢継ぎ早に命じた。
こうして、全員総出陣を触れさせ、具足をさっさと着けた信長は、鎧櫃にかけて、湯漬け飯を掻き込み、表に走り出して、ひらりと愛馬にまたがり、
「ものども、つづけっ」
と、馬に鞭を当てた。
すでに武装を着けていたのは岩室重休のほか、長谷川橋介（好秀）、山口飛騨守弘寄、佐脇藤八、賀藤弥三郎のわずか五人だけであった。五人は信長につづいた。そのあとを追って、十名、二十名と、旗差物を揺らして騎乗で、徒歩でつづいた。信長は、一度も振り返ることなく、清洲から熱田神宮まで三里（約十二キロ）を、ひた駆けに駆けた。
つづいて駆け込んでくる将兵は、二百、三百と増えていったが、全軍が揃った辰の刻（午前八時）になっても、総数は二千に足らなかった。
具足に身を固めた前田利家は、参戦する千秋季忠大宮司に従いて広庭に出た。
フロイスの日記に、無神論者として書かれた信長も、二千に満たぬ兵で二万五千を越える大敵にぶつかるためには、味方の活力昂揚のため、神に祈らねばならなかった。
本殿まえに立って、大きく柏手を打って礼拝すると、かねて右筆の武田夕庵に命じてつくらせておいた戦勝祈願の願文を、よく通る大声で読み上げた。

将兵一同、粛然と頭を垂れた。神域いっぱいに静寂の気が流れた。
信長が願文を読み終えたときだった。突然、本殿の奥で、ガチガチと甲冑の触れ合う音がして、正面の扉が開くと、一羽の白鷺が飛びだして、悠然と大空に舞い上がっていった。
信長と千秋大宮司、それに利家と松岡守部だけが知っている演出であった。甲冑の触れ合う音を立てたのも、白鷺を飛ばしたのも守部だが、発案者は信長だった。信長は、こうした着想にすぐれていた。
「これは吉兆だぞ！」
信長は、空高く舞い上がり、遠ざかっていく白鷺を見上げて叫んだ。
「われらには熱田の神がついておわす。こたびの戦い、勝利疑いなしじゃ！」
「うおーっ」
「うわーっ」
将兵一同も、神の森を揺るがして喚声をあげた。
喚声の止んだところで、信長は今後の作戦を告げた。
「敵方には、織田の本隊が鳴海城攻略に向かったと思わせよう」
と、佐々成政の兄の政次、千秋大宮司の両人の指揮のもと、岩室重休ら三百名を囮部隊として鳴海に向かわせた。その中に利家もいた。
信長は、そのときになって、はじめて利家に気づいた。馬を寄せて、利家に近づくと、
「お犬、来ていたか。敵に本隊と思わせるには、ささまの大声が役立つ。しっかり働けよ。は

はは……、きさまは死ぬかもしれぬが、おれも死ぬかもしれぬ。そのときはまた、冥府とやらで会おうぞ」

と、口早に言いおいて、本隊の方へ戻っていった。久々に会った信長の身に沁みる言葉に、利家は目頭が熱くなった。

本隊を率いた信長は、山崎（名古屋市南区）まで来たところで、東南はるかに黒煙の立ちのぼるのを見た。丸根砦、鷲津砦の末期を知らせる煙であった。

松平元康の率いる二千五百の軍勢に攻め立てられた丸根砦では、守将の佐久間大学允盛重以下、七百名の守備兵のほとんどが死に、朝比奈泰能の率いる二千の寄手と善戦した鷲津砦も、飯尾近江守定宗以下、大半の将兵が戦死した。

義元の本隊が、沓掛城を出て、大高方面に向かったという諜報を信長が聞いたのは、丹下砦を経て、善照寺砦に入ったときであった。

ちょうどその頃、佐々政次、千秋大宮司に率いられた囮部隊は、敵を引きつけるため、鳴海近くに迫って鬨の声をあげていた。利家も生来の大声を張りあげた。

囮にひっかかった敵の大軍が攻めかかって、たちまち修羅の戦場となった。利家は、得意の槍を揮って、敵首を二つ、三つと挙げていったが、隊長の佐々政次、千秋大宮司は相次いで敵弾に倒れ、勇将岩室重休ら五十騎も壮烈な討死を遂げた。

こうした囮部隊の悲報も、善照寺の信長の耳に伝わってきた。

「おのれ、駿河のお歯黒（義元）めがっ」

憤然とした信長は、諸将が引き止めるのも聞かず、すでに落ちた丸根、鷲津の砦に近い中島砦へ軍をすすめた。

「丸根、鷲津、あるいは囮の部隊と連戦した敵は疲れているのだ。それに較べて、こちらは一戦もせぬ新手ぞろい。小軍が大軍に勝つ好機到来といえる」

「……」

「ここで勝てば、家の面目、末代までの高名を得よう。おれも全知全能を傾けて働く。きさまらも、おれに負けず働けっ」

と、信長は全軍を見渡して言った。

（殿は死ぬ気だ）

と、みんなが思った。だが、逃げ出す者は一人もいなかった。

（されば、われらも！）

ここを土壇場と思うことで、一同は度胸を決めた。士気は一段と昂まった。

（三）

中島砦から、さらに前進した織田本隊が相原近くに来たとき、かねて信長に心を寄せていた沓掛の土豪で、九之坪城主だった梁田政綱から、

「ただいま、われらが放っておいた忍びの者よりの報らせが参りました。今川勢の本陣は桶狭間方面に向かっている由にございます」

と、報告が入った。

信長は躊躇わず、全軍を桶狭間に向けた。

桶狭間は、現在の愛知県大府市の北、豊明市の南東部にある。現状はそうでもないが、当時でいうと、沓掛城と大高城の中間のかなり広い地域で、丘陵が多く、狭間あり、窪地ありで、隠れて行動するには恰好の地形であった。

時刻は、午の刻（正午）に近かった。この日は一年じゅうでいちばん日の長い夏至で、現在用いている太陽暦では六月二十一日。蒸し暑い日であった。

（敵は、鷲津、丸根での勝利で気をよくしているはずだ。どの狭間かで必ず休憩を取って昼飯にするだろう）

信長は、本陣近くに全軍を待機させて、諜報活動に使っていた姫ノ八蔵……ご存じ、姫トラの父に、

「配下の忍びを八方に走らせて、今川の本陣を突き止めよ。そのうえで、近在の寺社や名主百姓に、戦勝祝いの酒樽を今川本陣に贈るよう取り計らえ」

と、命じた。

「かしこまりました」

姫ノ八蔵は答えると同時に、飛び出していった。

義元が本陣を置いた場所は、すぐに突き止められた。それは桶狭間の中でも、まわりを低い丘陵が囲んだ、もっとも目につきにくい窪地であった。ただ面積が狭くて一町四方くらいだった。のちに田楽狭間と呼ばれるそこに、義元は、本隊五千人のうち、三浦義就の指揮する三百騎の旗本だけを入れていた。他の部隊は、それぞれの隊長（八隊に編成していた）があちらの狭間、こちらの窪地と分散させて、休ませていた。

乗馬嫌いの義元も、沓掛城からは馬で出陣していた。義元は乗ってすぐ、馬上から転がり落ちたが、家来たちの手を借りて、乗り直した。

その日の義元は、

「――胸白の鎧に、金で八龍を打った五枚兜をかぶり、赤地錦の陣羽織を着て、今川家重代の松倉郷の太刀に、大左文字の脇差をつけ……」（『続明良洪範』）

という、堂々たる大将ぶりだった。

「やれ、やれ、やっぱり馬は疲れるのう」

と、家来に抱きかかえられるようにして下馬した彼は、張りめぐらした幕の中に入って、床几にぐったりと腰をおろした。

信長の命を受けた姫ノ八蔵が、八方に飛ばした忍びたちの、

「いま、今川どのに祝い酒を贈っておけば、のちに必ずよいお返しがある。贈らねば、反対に祟りを受けるぞ」

という耳打ちの効き目で、その頃には、神職、僧侶、名主百姓たちが、ぞろぞろと今川本陣に、

「ご戦勝、おめでとうございます」

「おめでとうございます」
と、酒樽を運び込んできた。
こっちは総勢二万五千以上、敵は多く見て三千そこそこ。どう戦っても勝利まちがいなし、と自信に溢れていた義元は、
「せっかく贈ってくれた酒だ。みなに配ってやれ」
と、戦い疲れた将兵たちをねぎらう余裕を見せて、自分も盃を重ね、本陣の旗本部隊や、他の各部隊に配給した。
本陣に僅か三百騎、八部隊の分散、昼酒……どう考えても油断である。しかも、天が信長に味方した。
梅雨の末期に間々ある気象だが、西方の空を覆っていた黒い雲が、急速に移動して、またたく間に桶狭間一帯の天を覆って、烈風豪雨が襲った。
桶狭間のような地形のところに発生しやすい旋風に、豪雨が加わったのだから凄まじかった。二抱えもありそうな松、樟の大木が根こそぎ倒れ、小石がバラバラと吹っ飛び、木の葉、草の葉がちぎれ飛んだ。陣幕もめくれて舞い上がり、旗差物も吹っ飛んだ。三浦義就が、あわてて義元を、大木の陰に抱え入れた。旗本たちも、それぞれ適当な避難場所に逃げ込んだ。
「これこそ、熱田の神の援けぞっ」
無神論者の信長が叫んだ。
「みな、丘の上に急げっ」

もう馬の嘶き、甲冑の音、人声を心配する必要はなかった。すべての物音を、突然の天変がかき消してくれた。どかどかと丘上に登った織田勢は、
「かかれ、かかれっ」
と自ら槍を取って、叫びながら、窪地めざして駆けくだる信長につづいた。
ちょうど未の刻（午後二時）、やっと風雨が少し衰えて、ほっとしていたところへ、
「うおーっ」
「わあーっ」
と突撃してきた織田の火の玉軍団に、今川の旗本勢は、ただうろたえるだけだった。
この頃には、囮部隊にいた前田利家も、佐々政次、千秋大宮司、岩室重休らが戦死したあと、何処からとなく姿を見せた姫トラの先導で、生き残りの将兵ともども、織田本隊に合流していた。利家は、逃げまどう敵を、長槍を繰り出し、突き倒して前進した。
義元の旗本三百騎は、たちまち二百騎、百騎となり、遂に五十騎ばかりとなった。彼らは義元を守護するより、自分の身を護るのに精いっぱいで、ちりぢりばらばらになった。
「甚内！　早く義元を探しだせ！」
信長は、抜いた脇差片手に、ぎろっと大目玉を剝いて駆けまわっている桑原甚内を叱咤した。甚内は、早くから信長が、今川家の菩提所、臨済寺の寺男として放っておいた忍びであった。たびたび参詣する義元の顔をよく見知っていた。
信長の家来で、義元の顔を知っている者はほとんどいない。甚内が頼りであった。

その甚内のうしろには、われこそは敵の総大将の首級を挙げようという連中が、何人も従いて走っていた。

「いたっ」

甚内が、抜いた脇差をキラリと煌めかして指し示した彼方の泥濘に、どっかと坐り込んでいる立派な武将がいた。

甚内のすぐうしろにいた服部小平太と、毛利新助が駆け出した。

「うわーっ」

草陰にいた敵に斬られた甚内の悲鳴にも、ふたりは振り向かなかった。

「今川治部大輔どのとお見受け申す。御首級ちょうだいつかまつる」

と、まず服部小平太が槍を繰り出した。穂先が義元の左の脇腹をぐさりと突いた。

「下郎めっ」

義元は、大刀を横薙ぎにした。小平太は槍の柄を切られ、余勢で膝を斬られて蹲った。

それを飛び越えて、毛利新助が義元に体ごとぶつかって組み伏せた。

「ぐわっ」

と、大きく口を開けた義元の憤怒の形相は凄まじく、口にかかった新助の人差し指を、お歯黒をした歯で噛み切ったほどであった。

それに怯まず、新助は大刀で義元の首を掻き斬った。

総大将を討たれ、将兵あわせて三千八十三名の死者を出した今川勢は、ついに総退却してい

った。

申の刻（午後四時）には戦いは終わった。

前記したように、陽の長い夏至の日である。義元の首級を馬前に持たせて、清洲に信長が凱旋したときも、まだ明るかった。

この日をさかいに、尾張の大うつけ者は、

「末恐ろしきは、尾張の織田上総介」

と、注目を浴びる勇将となった。

桶狭間戦の論功行賞では、功労第一として、九之坪城の梁田政綱が、沓掛に三千貫文の所領をもらった。

だが、義元の死でもっとも幸運を得たのは、大高城の留守を命ぜられて、桶狭間に出撃していなかった松平元康であろう。戦後、彼は駿河衆が引き払ったため、天文十八年（一五四九）、八歳で今川の人質になって以来、十一年ぶりで本領三河の岡崎城に帰ることができた。十九歳になっていた。

松平元康を徳川家康と改め、永禄四年（一五六一）には、今川と完全に縁を切って、それまで敵対をつづけてきた信長と講和した。織田・徳川同盟は、信長が死ぬまで変わりなくつづいていった。

寧々ね

(一)

奇蹟的とも言うべき幸運にもめぐまれて、桶狭間で快勝した信長は、天下に名のとどろいたその頃から、ようやく本気で天下統一を考え始めた。

信長は永禄二年（一五五九）二月、八十人ばかりの供を連れて上洛したことがある。時の将軍、足利義輝に謁してのち、京都・奈良・堺を見物して回った。

そのとき、都を取り巻く地域、人心の想像以上の荒廃に、嘆きと憤りを覚えた。それを何の手も打たず放り出している将軍の無力、権威の失墜を、はっきりと感じた。だが、そのときはまだ、

（ようし、おれが将軍になり代わって……）

天下を治め、人心を一新してやろう、とまでは考えなかった。

しかし、今川に打ち勝ったいまは違う。

（関東に北条氏政、越後に上杉謙信、甲斐に武田信玄など、有力、強大な大名は幾らもいる。が、彼らは、それぞれ国の事情を抱えていて、易々とは動き出せない。いや、誰が動き出すにしても、いまや、おれという者が前路に立ちはだかっていることを、勘定に入れぬわけにはいくまい）

と、信長は胸を高鳴らせ、

（何よりもありがたいことに、おれは都に近いという地の利を得ている）

と思った。

地の利を得ていることでは、三河の若き俊秀、徳川家康も同様であったが、信長は、早々と家康とは同盟を結んでおいた。

（いまや、手強いのは、美濃の斎藤だけじゃ）

信長は、毎日一度は、清洲城の楼上に立って、美濃の空、美濃の山々を睨みつけた。

まるで信長の思いが、呪詛となって届いたかのように、永禄四年の五月、斎藤家は大きな不幸に見舞われた。当主の斎藤義龍が死んだのである。

義龍は身長六尺五寸（約一九五センチ）、膝高一尺二寸（約三六センチ）という、堂々たる体軀の持ち主で、蝮の道三に劣らず智謀、武略に長けていた。が、早くから体内に悪病を宿していた。それが重くなって、五月十一日に世を去った。三十五歳だった。

彼は、土岐頼芸から美濃一国を奪い、頼芸の愛妾深芳野を奪って妻にした道三の長子であった。が、道三が妻としたとき、深芳野はすでに孕っていたともいわれ、

（――義龍さまのご実父は頼芸さま。道三入道は義龍さまにとっては、むしろ仇敵なり）

といった風評も秘かにささやかれていた。

虚実いずれとも解らなかったが、義龍は風評のほうを信じた。

で、彼は、桶狭間戦が起きる五年まえの弘治元年（一五五五）には、道三が寵愛していたふたりの弟を騙し討ちし、翌二年四月二十日には、

「実父、土岐頼芸の仇敵、道三入道を討つ！」

と呼号して起ち、出陣した道三を長良川畔で討った。時に道三、六十三歳。

道三は、義龍との対戦をまえにして、女婿の信長に使いを走らせ、

「わしに味方をしてくれるなら、美濃一国をそこもとに……」

といった譲り状を送った。

譲り状一本で簡単に一国が手に入るとは考えなかったが、舅は援けてやりたかった。信長は直ちに出陣したが、道三が早々に討たれてしまったため、陣払いして引き揚げた。

その後、何度か、

「舅の弔合戦」

の名目で、信長は美濃に出撃した。が、兵の精強なるは甲州か、美濃か……と称されていた美濃勢には、どうしても歯が立たなかった。

だが、義龍の死は好機到来である。信長は、義龍の死から二日目の五月十三日には、早くも木曽川、飛騨川を渡って、美濃領内に兵を侵入させた。

桶狭間戦のあと、荒子城にはときどき帰ったが、まだ清洲の土は踏まず、姫トラに案内させて秘かに美濃の情勢偵察に当たっていた前田利家も、このときは駆けつけて織田勢の一人として戦った。

まだ義龍の葬儀も済んでいなかった。さすがの美濃側も、信長の迅速な侵入にはなすところなくあわてふためいた。

しばらくは広野を行く奔馬の勢いで織田勢は快進撃し、急峻な稲葉山（金華山と美称した）の頂上に道三が築き、難攻不落を誇る井之口城に迫らんばかりの勢いだった。

しかし、一度はあわてふためいた美濃勢も、そう易々とは井之口城には寄せつけなかった。義龍のあとを継いだ龍興は十五歳の年少。凡庸でもあった。が、重臣には、美濃三人衆と呼ばれた稲葉貞通（一鉄）、氏家卜全、安藤守就以下、名将・賢臣が揃っていた。

緊急会議の結果、美濃方は、墨俣（安八郡）から、長井甲斐守、日比野下野守（清実）を将とする精兵を森辺口に差し向けて、織田勢と対戦させた。

桶狭間での快勝が自信となって、尾張兵も見違えるばかりの強兵に変わっていた。よく戦って、敵将の長井甲斐、日比野下野はじめ、百七十余の首級を挙げ、要害墨俣の奪取に成功した。

このときの戦いで、利家は、美濃勢にあって、戦場で敵首を挙げることは随一と評判の高い頸取足立という者と、激しく太刀を交えて見事に討ち果たした。

「お犬っ、ようやったぞ」

と褒めた信長は、後日、三百貫を加増したうえで、諜者の総元締という奇妙なる役を解いて、もとの近習として清洲城への帰参を許した。

（やれやれ、やっとか……）

と、利家は、清洲を出てからの二年余日を回顧した。

その間の永禄三年（一五六〇）十月十三日、父の利昌が病死したが、死に目にも会えず、葬儀にも出られなかった。

しかし、ときどき荒子城に立ち寄るあいだに、まつが孕って、女の幸が生まれ、もう這い這いができるまでに成長していた。

清洲で与えられた屋敷には、利家夫婦と幸のほか、村井又兵衛、いね、それに幸のお守りに頼んだ荒子の農家の娘で十二になったばかりのしのを加えて、六人で移っていった。

屋敷は、四百五十貫取りの武家の住まいに相応しく、以前、拝領していた家よりは広くて、清洲城にも近かった。

（二）

利家が清洲に帰って間もない、ある日の黄昏どきであった。

下城した利家が、夕餉まえのひととき、裏庭で素振りでもしようか、と木太刀を執って立ち上がったところへ、妻のまつが入ってきて、

「おまえさま、表に妙なお人がおいでで、おまえさまにお目にかかりたいと……」

とまで言って、あわてて袂で口を押さえた。目が笑っている。笑い声を立てまいとしているようで、顔が赤くなっていた。

「妙なお人……名は聞いたか？」

「はい。サルでござると申されました」

と答えるなり、まつはもう我慢し切れなかったようで、ほほ……と、声を立てて笑った。かのお人は「サルでござる」と言ったが、皺の寄った狭い額、下がり気味の眉の下にひどく落ち窪んだ金壺眼、船形に両端のはね上がった唇、尖った頤、それは人というより、ほんとうに猿が人の衣装を着ているように見えた。

「なにを笑うておる。サルと申したのなら、あの仁にちがいない。すぐにこれへお通ししろ。いや、わしが迎えに出よう」

利家は、急ぎ足で表の間へ出ていった。

家のまえに立っていたのは、荒子の小夜ノ川の畔ではじめて会った小猿、四年まえの弘治二年（一五五六）八月の稲生の戦いで、宮井勘兵衛の射た矢に右目下を射抜かれたとき、適切な手当てをしてくれたサル、いや、今は中村藤吉郎と称する小者頭であった。

真っ赤な落日を浴びた顔が赤く染まって、猿面が、いっそう猿面に見えた。ふと、まつが笑ったのも無理はないなと思った。

「まずは上がられよ」

と、居間に通すと、中村藤吉郎は、行儀よく膝を折って坐り、

「ご帰参、おめでとうございます。長いご牢人ぐらしで、さぞご苦労もなされましたろうに、お変わりなくご壮健のようす、何よりとお喜び申し上げまする」

と、丁重に挨拶した。

どうやら、藤吉郎も、清洲を不在にした期間の利家が、諜者の役に就いていたことは知らないようだった。

「いや、ありがとう。牢人ぐらしは、苦労でもあったが、よい修行にもなった」

「そうじゃろうなも。わしなども、荒子の小夜ノ川べりで、お犬さま、いえ、前田さまに初めてお目にかかった頃も、そのあと先も、苦労つづきじゃったなれど、その頃に覚えたことが、みながみなでないまでも、いまになっていろいろと役に立っておるでなも」

藤吉郎は、そこまで尾張言葉でしゃべって、あわてて侍言葉に改めてつづけた。

「清洲に参りまして、殿さまにお仕えしてからも、他人さまがご覧になれば、余計な苦労をする阿呆なやつと見えましょうが、わたくしめは、一つひとつを修行と思うて、つとめておりまする。中村の貧乏百姓の暮らしに較べたら、いまの暮らしは、まるで極楽でございますよ」

「ふむ、ふむ」

利家は大きくうなずいた。

信長の草履取りから振り出したサルの藤吉郎が、利家が清洲を二年余日、留守にしていたあいだに、城の台所の改善、勝手方が使う薪炭の節約、壊れた城の石垣の修理などに、これまで誰も思いつかなかった才智を発揮して、信長の覚えもめでたく、今では小者頭にまで成っていることは利家も知っていた。

上に立つ者は誰しもそうであろうが、信長は殊に、おのれの命じたことに、はいと素直に答えてすばやく対処する者、身分の高下を問わず、実効ある提案をする者を愛し、重用する人使い名人であった。

(このおサルさんも、もっと出世をするだろう。おれもうっかりしておれんな)

利家は、そんなことを考えながら、猿面を眺めていた。ところが「サル」のほかに「しゃべりの藤吉」とも渾名されていた藤吉郎が、いったいどうしたのか、妙に落ち着きなく、これといって珍しい物もない部屋の中を見まわしたり、戸外に目をやったりして、閉じた口の辺りをもぐもぐさせ、黙り込んでいる。

「おい、どうした。おぬし、わしに何ぞ話があって来たのだろう。よっぽど切り出しにくいことと見えるな」

利家のほうから声をかけた。

「いや、実は仰有るとおりで」

藤吉郎は、猿面をくしゃくしゃにして真っ赤になった。

「……」

「思い切って申します。前田さま、このサルめに嫁御を世話してくださらぬか」

「嫁を世話せいだと?」

利家は、思わず大声で言って、藤吉郎の面相を熟視した。いや、今さら改めて見るまでもない。猿面の醜男である。背丈も五尺あるかない小男である。利家は、だからといって、いささかもこの小者頭を軽んずる気はない。むしろ競争の好敵手になりそうに感じている。

だが、女子という者は、どうなのであろうか。外見の美醜にとらわれるのではなかろうか。さしあたって、誰とて齢頃の娘の心当たりもないが、「どうだ、藤吉郎に嫁がぬか」とすすめて、すぐに「諾」と答える娘はいないだろう、と思った。

（さても難題を持ち込みおったものよ）

と、腕組みした。

藤吉郎は、利家の心中の思惑をまるで見抜いたように言った。

「嫁にもらい受けたい相手は、もう決めており申す。前田さまには仲立ちしていただきたいのでござって……」

「ほう、そういうことか」

利家は、ほっとして、

「で、それは、どこのどなたかな？」

「実は、そのう、浅野又右衛門どのの娘御の……」

とまで言って、藤吉郎はいっそう赤くなって、一つ大きな溜息をついた。

浅野又右衛門長勝は、織田家の足軽頭の一人で、弓の上手でもあった。利家はかつて、彼から弓を教わったことがあった。

浅野家には、娘が三人いた。といっても実子ではなかった。妻の実家の杉原定利が病死したため、その遺児三人をみな引き取って、養女としていたのである。

又右衛門は心根の優しい男だった。三人を実の子のように愛して、のびのびと育てた。いち

ばん上の娘おこいは、すでに自分の出身地、海部郡津島の従兄浅野又左衛門に嫁がせ、いま家にいるのはねね（寧々＝おねが正しいともいう）と、やや（良々）の二人だった。

ややは、まだ十歳になっていない。だから、藤吉郎が言おうとした名は、ねねにちがいない。ねねは背丈がのびのびしていた。天文十七年（一五四八）生まれで満で十三歳だが、藤吉郎とふたり並べたら、ねねのほうが背丈は少し高いかもしれない。頬のふっくらとした愛くるしい顔をしていた。どことなく、利家の妻のまつと感じが似ていた。思ったことをはきはきと言う、明るい朗らかなむすめであった。

「おぬしが欲しいと言うのは、ねねという娘のことであろう。……おぬし、あの娘とはもう、言い交わしてでもいるのか」

「と、とんでもございません！」

藤吉郎は大声で言って、小柄に似ず大きな手のひらを、真っ赤にした顔の前で団扇をあおぐように、ぱたぱた振った。

「ねねさとは直かに口を利いたことがありません。ただ、ご用向きのことで、浅野どのの長屋には、よう伺います」

「……」

「浅野どのとわたくしの話を、側で聞いているときなど、わたくしの顔がおかしいのか、言うことがおかしいからか、ねねさはよく、けらけらと声を立てて笑います」

「……」

「わたくし、その笑い声を聞いていると、何やら体中がほかほかしてきて、言いようなく、ええ気持ちになります。ああ、生涯を共にするなら、ねねさのような女子がええなと思うわけです。それでもって……」

「しゃべりの藤吉」が本領を発揮しだした。このましゃべらせておいたら、あすの朝までも「ねねさ、ねねさ」としゃべりまくるにちがいない。

「ようし、話はよう解った」

利家は、藤吉郎の、言い交わすどころか、直かに口を利いたこともないという純情、それに、彼女の笑い声が楽しいから生涯を共にしたいという理由が気に入った。

「諾と言うかどうかわからぬが、とにかく明日、浅野へ話しに行ってみよう」

と、請け合った。

(三)

利家は、ちょっと衣服を改めて、浅野又右衛門の長屋を訪れた。

「おう、よう参られた」

又右衛門は、弓の稽古にでも来たと思ったようだが、それにしてはいつになく整った利家の身装を、いぶかしく思ったふうでもあった。

「本日は、実は……」

利家は、言葉の調子も少し改めて切り出した。

「お娘御、ねねさの縁談でお伺いいたした」

「ねねの縁談？」

「はい。ねねさを、ぜひにもらい受けたいと思って……」

「たわむれを言うも、ほどほどにせられい」

めったに憤った顔を見せない温和な又右衛門が、きりっと眉をつり上げた。

妻もあり、子まである利家が、むすめをくれというのは、妾に寄越せということではないか。かつて城下の若い女どもに騒がれた美男が、四百五十貫拝領の近習に出世して、またぞろ、かぶき者ぶりを発揮して、いい気なことを言い出しおって、と腹を立てたのである。

「いや、たわむれではござらぬ。まっこと、どうしてもねねさを嫁にもらい受けたいと申す者がござってな。拙者、頼まれ仲人として参った」

「では、ねねをくれと言うのは、貴殿ではないのだな」

「浅野どのこそ、たわむれを申される。拙者には妻子がござるわい」

「いや、これはご無礼つかまつった」

又右衛門は、自分の早とちりを詫びて、

「して、ねねをもらいたいと仰せられるは、どなたでござるかな」

「そこもともよくご存じのサル……いや、中村藤吉郎でござる」

「なるほど、あの者でござったか」

又右衛門は、あまり驚かなかった。というのは、大した用でもないのに、ちょくちょく又右

衛門を訪れて、長時間、突拍子もない話をして、ねねや、ややを笑わせていく藤吉郎の本当の狙いが奈辺にあるか、又右衛門はうすうす感じていたからである。

「わしに異存がないと言っても、ねねの気持ちも聞かねばなりますまい。ねねを、ここに呼びましょう。これ、ねねよ、ちょっとこちらにござれ」

又右衛門は、襖越しに隣部屋に声をかけた。たった三間の長屋である。利家を迎えて、家人一同が、そちらへ引っ込んでいたのである。

「はい、ただいま」

明るく答えて、ねねは襖を開けた。塩漬けした八重の桜の花に湯を注いだ桜の湯を入れた椀の二つ載った盆を捧げて入ってきた。

利家のまえに、椀の一つを置いて、

「いらせられませ」

と、手をつかえて挨拶した。

又右衛門は、自分のまえに置かれた椀を手に取りながら、

「おまえを嫁に欲しいそうな。お相手は、この前田どのではないぞ。驚くなかれ……」

「中村藤吉郎どのでございましょう。おふたりのお話、隣部屋まで、よく聞こえまする」

ねねは、盆を脇に置いて、にこりと笑った。利家は、

(サルのやつ、この笑顔に参ったのだな)

と思った。ほのぼのと明るい、いい笑顔であった。

「なら、話は早い。そなた、中村をどう思うな?」

又右衛門は、ねねの顔を覗くようにして言った。

「遠慮はいらんぞ。否も応も、そなたの心まかせじゃ」

(さて、ここが肝腎なところ、何と答えるかな)

と、利家も、ねねの顔を凝視た。

「望まれて嫁ぐは女の冥利と申します。わたくしに異存はございません」

と、ねねは、はっきり答えた。

そう答えた彼女には、浅野家の家計もなかなか楽ではない、そんな中で永の歳月、三人もの他家の娘を、なに不自由なく、のびのびと育ててくれた。姉のおこいは嫁に行って一人口を減らした、自分も早く口減らしせねば……という気も半ばはあった。

また一方で、ひとが猿面と蔑む藤吉郎が嫌いではなかった。貧農の生まれを包みかくすことなく、漂泊時代の苦労を、むしろおもしろい話にして語る率直さ、明るさ、そしてひとが嗤おうと、罵ろうと、ご主君大事と懸命に励む姿を男らしいと思っていた。で、

「ほんとうにええのだな、ねね」

と言う又右衛門に、

「わたくし、あのおひとのお話を聞いていると、体の中が何やらほかほかしてきて、楽しくなります。あのおひとなら、何とかうまくやっていけそうに思います」

と答えた。

（ほう、サルとまるで同じことを言いおる。縁は異なもの、味なものじゃのう）

と、利家が考えていると、ねねは、

「わたくしは天文十七年、申年の生まれ、藤吉郎どのとは相性がよいのでございましょうな」

と言って、サルどのが、体中がほかほかしてくると言った、明るい笑い声を立てた。

「さて、ねねは承知をしたとして、前田どの、わしには一つ条件があるのじゃが」

又右衛門は言った。

「ご存じかと思うが、ねねは、わしの実の娘ではのうて、女房の実家の杉原定利入道道松という者の遺児でござる。杉原家にはさいわい後継者がござったが、母（のちの朝日局）方の木下家には後継者がござらぬ」

「……」

「そこで、どうでござろう。ねねが中村家に嫁ぐのでのうて、藤吉郎が入婿して、木下家を継いでもらいたいのじゃが」

利家は、その件、藤吉郎に話してみようと約束して、浅野の長屋を辞去した。

案ずるよりは生むがやすし……であった。利家から委細を聞いた藤吉郎は、猿面をくしゃくしゃにし、金壺眼を少し潤ませて、

「いや、これも前田さまという、いい仲人のお陰でございます。入婿、結構でございます」

と、喜んだ。

信長の許しを得て藤吉郎は、木下家に婿入りした。郷里の中中村に因んで付けた中村姓に未練なく、木下藤吉郎となったのである。

正式の仲人には、信長の従兄弟の名古屋因幡守夫妻を頼んだ。浅野又右衛門から、中中村にいる藤吉郎の母なか（のちの大政所）や、十六歳の弟小一郎（のちの豊臣秀長）、十五歳の妹旭、それに弥助に嫁していた姉ともにも招待状を送ったが、「身分ちがいゆえ」と、出席を遠慮してきた。

婚礼には、浅野家側の人々のほか、利家夫妻、それに大勢の藤吉郎の仲間だけが出席した。

後年、太閤の正室北政所となったねねが、婚礼の粗末さを語っている（『太閤素生記』、『祖父物語』）。

畳もない長屋の、藁の上に薄縁を敷いた即席の祝言式場。ねねの婚礼衣装は、信長が左義長（正月の行事、どんど焼き）をしたときの幟を継ぎ合わせたもので間に合わせた。

それでも土地の風習で、三日間は、飲めや歌えの酒の席がつづき、それが終わって、やっと藤吉郎は、ねねと肌を合わせた。

翌日、城に上がって、藤吉郎は信長に婚儀お許しの礼を述べた。

「妻を持ったとあっては、これまでのようではいかぬな。きさま、おれのところに来て、何年になったかな」

と言う信長に、藤吉郎は答えた。

「はい。天文二十三年（一五五四）の秋からでございますから、ちょうど八年になりまする」

「もうそんなになったか。……よし、きさまも、よう仕えてくれたから、わしも婚礼を祝って

騎乗を許してやろう」

と、機嫌よく言った信長は、そばに控えていた近習の一人に、

「ついでに、何処ぞの屋敷を、サルにくれてやれ」

と命じた。

騎乗を許すというのは、士分に取り立てるということである。小者頭が、足軽を飛び越えて士分となったのである。大抜擢である。ただし、禄高は三十三貫（八十余石）と低かった。

だが、戦場には騎乗し、侍兜をかぶって、家来数人を従えて行ける。城内で行なわれる祝宴、評定にも、末席ながら連なることができるのである。

城を下がった藤吉郎は、猿面を笑いで綻びっぱなしにして、家路についた。

（世には、福女陰を持った女がいて、そういう女と寝た男は福を得るといわれているが、ねねと夫婦をちぎった次の日にはもう、こういういいことが起きた。ねねのあれは福女陰であったのだ。ねねを抱くかぎり、これからも、きっと良えことがつづくやろう。出世まちがいなしじゃな。いやはや、おれは倖せ者よ。ええ嫁もろた。いや、ええ女の婿になった）

ああ、こりゃこりゃ……と、踊り出したい気分であった。

（四）

（ひゃあ。これもやっぱり、ねねの福ぼぼのお陰じゃ）

中村改め、木下藤吉郎は、心中、そう思って驚喜した。

というのは、信長の命によって近習が調べ、藤吉郎に貸してくれたのは、なんと前田利家の隣屋敷であった。

庭の広さは二百坪もあった。ちゃんとした門もあり、板葺きの家は台所のほかに四間があって、畳まで入っていた。ねねと祝言を挙げた長屋とは大ちがいである。

本来は、利家クラス（四百五十貫）の士に賜る屋敷で、三十三貫という士の中でも端くれの藤吉郎などの賜るところではなかった。

だが、あいにくと、小屋敷には空いたものがなかった。「ええい、めんどう」と、近習がちょうど空いていた利家の隣屋敷を配給したのである。

「ほんとうに、あんな家に住まわせていただいて、かまわないでしょうか？」

並の男だったら、信長に、そう伺いを立てたかもしれない。だが恐縮はしても、これも、ねねの福ぼぼのお陰、こののちも、そのお陰で、これだけの屋敷の当主に相応しい身分にきっとなる。蟹は甲羅に似せて穴を掘るという。わしもそう思えばいい、いや、きっとそうなるよう努めればいい……と、藤吉郎は、ねねと、僅かな世帯道具といっしょに、さっさと、分不相応な屋敷に引っ越した。

いきさつを知らない連中は、

「猿吉郎めが、また、殿に胡麻をすりやがって、うまくやりおった」

「小者上がりの分際で、生意気なやつだ」

と、妬み、嫉み、憎んだ。

だが、隣人が利家だったのは倖いであった。利家は、出生がどうの、身分がどうのということは気にしないほうであった。藤吉郎のすぐれた智力、才気を認め、努力を高く評価してもいた。

まつもまた、ねねとは、すぐ仲よしになった。両家をへだてた木槿垣越しに、気やすく立ち話をするうち、ふたりが実父に早く死なれたあと、母が再嫁したため、親族に預けられて育ったという共通点を持つと解って、いっそう親近感を覚え、親密度を増していった。

言うまでもないが、隣同士として、家族ぐるみで親交したことが、ずっと後年に至るまで尾を引いて、利家と秀吉の、他の大名とは異なった堅い結び付きになったのである。

それはさておいて、新婚早々の藤吉郎も、利家も、この頃からは、ますます忙しくなった。美濃と尾張の攻防戦が、激化していったからである。

西美濃では、墨俣の奪回を図った美濃勢と十四条（岐阜県本巣郡真正町）で戦って快勝したあと、信長はこの機逃さじと、七月二十一日、領内の全兵力七千名を動員して攻撃をかけた。はじめはうまくいった。稲葉山城の西、一里余まで迫った。しかし、いま一息というところで、若年の美濃の智将竹中半兵衛重治のたてた見事な戦法に嵌められた。

将兵の多数を失ったばかりか、信長本隊は四囲を敵にかこまれて、進むも退くもならぬ窮地に落ちてしまった。

このとき、藤吉郎はただ一人、うまく囲みから脱出して、駄馬に鞭打って、蜂須賀村（愛知県海部郡美和町）に急いだ。

蜂須賀村には、土豪蜂須賀小六（正勝）がいた。小六はただの土豪ではない。広大な敷地内には、母屋のほか、数棟の長屋、米倉、武器庫があって、常時、七十名近い屈強な男どもがいるほか、僧侶、絵師、浮浪の徒など、何であろうと、頼ってくる者に住と食を与え、そういう者だけでも三十人くらいがごろごろしていた。

彼らは、小六を、親爺さんとか、頭領とか呼んでいた。というのも、平素は農事を主としておとなしくしているが、武家に金で傭われれば、七十名のほか、居候のうち働けそうな者を引き連れて、小六は戦場に出かけていく。

援軍として働くほか、戦場に倒れた者からは敵味方なく、甲冑、武器を頂戴してしまう。

藤吉郎は、信長に仕える以前に一年ばかり、小六の屋敷に、ごろごろしていたことがあり、小六に才智を見込まれて、

「どうじゃな、正式におれの手の者になれ」

と、すすめられたこともあった。

駄馬を駆って、蜂須賀屋敷に乗り込んだ藤吉郎は、勝手知った母屋の小六の居間のまえで馬を止めて、

「よう、親爺さん、しばらくじゃなも」

と声をかけた。

小六は、見馴れぬ、それもあまり身分が高いとも思えない侍が、誰に案内もされず乗馬のまま、部屋のまえまで入ってきたのに不快を感じて、眉を顰めた。が、藤吉郎はかまわず、兜を

脱いで、
「親爺さん、懐かしいなも」
と、猿面をくしゃくしゃにして笑った。
「なんじゃい、サルではないか」
小六は不快の表情を、驚きの表情に変えた。もう十年近くも会っていなかったが、忘れられる猿面ではなかった。
「えらそうに武装しおって、いったい、どうしたのじゃ？」
「はは……、十年会わずんば、蛇も龍になり、猿も狒狒になるでよう。わしも今は、織田信長さまに仕えて、ひとかどの侍じゃ。いや、そんなことは、いずれまた、ゆっくり話すとして、今日は急ぎの頼みがあって来たのじゃ」
藤吉郎は正直に、信長が戦場で窮地に落ちていることを打ち明けて、救援を頼んだ。
小六は、尾張では信長の敵である上織田家に頼まれて与力し、美濃で斎藤道三、義龍に与力したこともあった。が、龍興に代変わりしてからは、おもしろくないことがあって、蜂須賀村に引っ込んだまま、いささか退屈をしていたところであった。
「むかし馴染みのサルの頼みでは、断わるわけにもいかんな。よし、すぐに行ってやろう。その代わり、給銀は大いにはずんでもらうぞ」
と、小六は承知して、配下を招集した。
藤吉郎の率いる小六の一行八十名は、夜陰に乗じて、戦場に赴き、渦中に信長本隊を巻き込んでいる斎藤勢のまわりの、あちこちに配置された。予め打ち合わせた丑の刻（午前二時）、みなが一斉に松明に火を点け、それを振って駆けながら、
「わあーっ！」
「うわあーっ！」
咽喉も裂けんばかり喚声を立てながら、辺りの野小屋や、積み捨ててあった藁の山に火を放って回った。
「尾張の新手だっ」
「夜襲だっ」
信長の本隊にかかるのは、明早朝と決めて寝込んでいた敵は、熟睡ちゅうを襲われて混乱した。小六の配下は夜目の利く連中が揃っていたが、彼らはそうはいかない。あっちへうろうろ、こっちへうろうろ、せっかくの包囲陣も、そこここに穴があいてしまった。
「殿、退くのは今でございます。ご先導いたします」
藤吉郎は、あいた穴の一角から、信長本隊を、一兵も損ぜず脱出させた。藤吉郎の大手柄であった。
「サル、ようやったぞ」
と、ひと息ついた信長に、
「いえ、これもみな、蜂須賀党の与力あってのことでございます」
と、蜂須賀小六を売り込んだ。

「よし、その者には、応分の礼金をおくろう。なお、こののちも、きさまの寄騎として、うまく使っていけ」

と、信長は言った。

そのころ前田利家は、信長の命によって、東美濃に潜入すると、姫ノ八蔵・トラ父娘の一党を駆使して、金山城（岐阜県可児郡兼山町）、関城（同関市）、宇留摩城（同各務原市鵜沼）、猿啄城（同加茂郡坂祝町）など、飛騨川、木曽川沿いの美濃の諸城・城下の情勢探索に奔走していた。

難攻不落の稲葉山城の、正面攻撃のたびたびの失敗によって、信長は、比較的手薄と思われる東美濃を手中にして、東と西南から、二面攻撃を考えはじめていた。

利家が、こうして清洲を留守がちにしているあいだに年が改まって、永禄五年（一五六二）正月、まつは第二子を産んだ。のちに前田家二代となる嫡男の利勝（利長）であった。

その産前・産後、隣家のねねは、親身になって、まつの世話をし、手伝いをしてくれた。

稲葉山城

(一)

死の日を目前にした斎藤道三が「美濃国譲渡」の書状を信長に送ってから、はや十余年の歳月が流れ去った。

その間、信長はただおとなしく待っていたわけではない。何度か美濃に出兵した。が、そのたびに手厳しい反撃を受けて退いた。

（しかし、いつの日か、美濃は必ずわがものにする）

という信長の決意は変わらなかった。

そのときのための手を、着々と打っていた。

永禄六年（一五六三）には、三河の徳川家康の嫡男竹千代（信康）と、自分の女を婚約させて、尾・三軍事同盟をより堅固にして、北東部から攻撃を受ける憂いを断った。

さらに、永禄十年早々には、近江の浅井長政に、美貌の愛妹市を嫁がせた。

この婚姻は、信長にとって二つの意義があった。一つは、美濃の斎藤龍興に脅威を与えること。もう一つは、先の先まで読んだ信長らしい考えで、将来の上洛の際、浅井氏の協力を得

るためであった。

さて、それよりまえの永禄七年には、姫ノ八蔵・トラ父娘と、その一党の協力を得て、東美濃の木曽川、飛騨川沿岸地帯をつぶさに探索してきた前田利家の、

「稲葉山城奪取のためには、美濃勢のうちでも殊に精強を誇る東美濃の川並の地侍どもを、各個撃破によって、斎藤と切り離し、できれば味方に取り込んでしまう必要がございます」

という献策を、信長は受け入れた。

東美濃攻略の指揮を執るに都合のいい小牧山に新しく城を築いて、清洲から移転すると、さっそく、東美濃攻略に取りかかった。

まず、加茂郡加治田城の佐藤紀伊守・右近右衛門父子を誘って味方につけ、彼らを先導に立てることにした。そして、

「東美濃の攻略、わたくしめに仰せつけください」

と申し出た木下藤吉郎に兵を与えて、攻撃の指揮を執らせた。

「出しゃばりめが」

「あの成り上がりの猿侍に何ができる」

「いまに泣きべそかいて、とても拙者の手には及びませんと戻ってくるだろう」

信長の近習の多くが嘲笑した。

「おぬしのこれまでの手柄は、十四条の戦いで、殿を敵の包囲陣からお救いした以外は、薪炭の節約、台所の改善、城壁の修築といった平時の裏方仕事ばかりだ。東美濃攻略に成功したら、もう成り上がりだ、猿侍だと軽んずる者もいなくなるだろう。気張り召されよ」

と、利家だけは激励した。

「おおきに、おおきに」

藤吉郎は窪んだ眼を潤ませた。おおきには「ごもっとも」とか「ありがとう」とかいう意味の尾張言葉である。

藤吉郎には、自信があった。信長から与えられたのは寡兵だったが、寄騎の蜂須賀小六が仲間の土豪たちに呼びかけて集めてくれた、三百人の暴れ者たちがついていた。

彼らは、戦場で拾い集めた甲冑をつけていた。不揃いで見苦しい兵団であった。武器もてんでんばらばらだったが、攻撃に際しての団結力は強く、勇猛果敢だった。

木下勢は木曽川を、犬山の上手の川幅の狭くなった坂祝（加茂郡）で押し渡ると、猿啄城の多治見修理を不意討ちした。

多治見は、土岐氏の一族で、修理は勇将として聞こえていた。が、乱波あがりの暴れ者が揃った蜂須賀党の不意討ちにはかなわなかった。城を捨て、家臣を捨てて、行方をくらましてしまった。

「猿啄とは、わしに当てつけたみたいでいやらしい」

藤吉郎は、猿啄を勝山と改称した。ここに信長から与えられた兵の半ばを残して守らせると、夜陰に乗じて、犬山城とは木曽川を隔てて向かい合った伊木山（各務原市）に移り、ここに堅固な砦を築いて本陣にした。

それより少し川上にある宇留摩城（鵜沼）は、高く聳えた峰の上に物見を備え、峰を取り巻くようにして城砦を構えていた。

昼になって、物見の報告で、伊木山の砦のようすや、すでに猿啄城も敵手に落ちたことを知った宇留摩城主の大沢次郎左衛門基康は、戦わずして降伏を申し出で、一子主水を人質に差し出した。

このことを信長に報らせると、

「大沢基康は油断がならぬ。腹を切らせろ」

と言ってきた。

藤吉郎は、小六に命じて、人質の主水を返して、基康ともども秘かに逃してやった。基康のその後はわからないが、主水は後年、藤吉郎を頼ってきて臣従している。

藤吉郎は、さらに金山城、関城を落とした。これによって、織田勢の稲葉山城攻撃に際し、駆けつけて斎藤方の強い戦力になっていた東美濃の木曽川沿い地帯の地侍のほとんどを、逆に織田の戦力に取り込んでしまった。

一方、西美濃では、すでに手に入れていた墨俣を、本格的な攻撃基地の一つにするため、信長は永禄九年（一五六六）、ここに城を築いた。

この地は、木曽、墨俣の二大川に臨み、西方に揖斐川という暴れ川が控えているため、築城は困難を極めた。

最初に普請奉行となった佐久間信盛、二度目の柴田勝家は、共に築城の途中、豪雨による三

大川の氾濫で、建築資材の木材のすべてを流失させ、多くの人夫を溺死させて、失敗している。

三人目の普請奉行は、信長の従兄弟の織田勘解由だった。洪水もなく、城の落成も間近になったとき、こんどはそれを待っていたように押し寄せた敵手にかかった。城は焼かれ、千五百の将兵、人夫は皆殺しにされた。

さすがの信長も、四度目には、誰かを名指して、きさま行けと言いかねて、

「誰ぞ、われこそはという者はいないか」

と、志願者の出るのを待った。

「わたくしめにお申しつけください」

と、志願して出たのは、またしても木下藤吉郎であった。

「よくぞ申し出た。よし、こんどは思い切って、兵五千を付けてやろう。人夫も好きなだけ集めて連れて行け」

と、信長は言った。

「いえ、兵は三百、職人は五百、それで結構でございます」

と答えた藤吉郎には、十分の成算があった。

東美濃での蜂須賀党らの働きを見てきた藤吉郎は、彼らが尾張兵に勝ることを知っていた。こんども、彼らを使おうと思った。職人もわざわざ尾張から連れて行くより、土地のことに明るい現地の者を傭い入れようと決めていた。

用材も、これまでのように、丸太のまま運び込んで、現地で切ったり削ったりせず、棟木、梁、柱、垂木その他、すぐ組み立てるだけで済むように仕上げたのを、川に流して運び入れることにした。

「築城に成功したら、おぬしたちももう、乱波ばたらきなどせずとも暮らしが立つよう、殿に願って織田家の臣にしてもらってやる。精いっぱい働いてくれ」

蜂須賀小六の呼びかけに応じて、尾張各地から、百、二百と配下を率いて集まって来た土豪たちを、藤吉郎はそう言って励ました。

築城の順序も、ふつうは建物が高くなるにつれて、足場の丸太を組んでいくが、藤吉郎は、はじめに足場の丸太を全部組み立てさせて、その外側は板で覆ってしまった。濠も、はじめに深く掘らせた。

それを川向こうの斎藤勢は、

（性懲りもなく、また始めやがった。板囲いをして進行のようすを見えなくしたつもりだろうが、どんなに急いでも、まず三月はかかろう。その頃になったら、総攻撃をかけて、城ぐるみ、たたき潰してくれるわ）

と、暢気に構えていた。

だが、築城は、彼らの予想を遥かに越えた速度で進行した。工事にかかったのが七月五日、外囲いの板を取り払ったのが八月二十日。その間、僅かに四十七日である。

後世に「墨俣の一夜城」と語り伝えられた城は、二層の櫓を持った幾棟かが、深い濠と土塁をめぐらした中に、「さあ、来るなら来い」といった恰好で、がっちりと建っていた。

斎藤勢は、攻撃も忘れて、「あっ！」と驚いた。

「サル、ようやったぞ」

信長は、藤吉郎の功を賞して、百貫文を加増し、墨俣城の城番とした。

小六も正式に士分に取り立てられ、五十貫文を給与され、墨俣在城を命ぜられた。小六が蜂須賀彦右衛門正勝と名乗るようになったのは、この頃からである。

（二）

信長は、謀略にもいろいろの手を使った。

永禄十年（一五六七）の半ば過ぎまでには、斎藤家の重臣で、美濃三人衆と呼ばれた安藤伊賀守守就（本巣郡北方城主）、氏家卜全氏直（大垣城主）、稲葉伊予守貞通（曽根城主＝大垣市内）を寝返らせるのに成功した。

三人衆が寝返りのしるしに人質を出すことになり、信長は人質の請取人を派遣したが、彼らが戻るより早く、

「三河に出兵する！」

と触れて、領内で動員できる限りの将兵一万五千人を小牧山に招集した。「三河出兵」は、領内に潜入している美濃の諜者どもを騙すため、ほんとうの目的は美濃攻略にあった。

八月一日。信長の命令一下、一万五千の尾張勢は、木曽川を渡って、旋風の勢いで稲葉山

城に向かった。

信長の謀略は、よく行き届いていた。中途を阻む何者もなく、逆に、地侍、農民がぞくぞくと駆けつけて味方に加わった。

すでに信長に寝返っていた安藤守就が、

「織田の総攻撃が近い。みな、城に籠れ！」

と命じたから、稲葉山の麓の斎藤館に龍興と僅かな近臣を残して、ほとんどの将兵が、家族を郊外に退避させ、自身は籠城した。城下の武家屋敷や、足軽長屋はすべて、空家と化した。

信長は、それらの空家を、ことごとく焼き払わせ、山麓には二重、三重に鹿垣を張りめぐらさせた。

稲葉山城は、割れんばかりに将兵を呑み込んだまま、完全に孤立した。その状態でじっとしていれば、やがては食糧が絶えて投降するにちがいなかった。

だが、悠長に一つの城攻めをやっているわけにはいかなかった。いつ、どこで、どんな異変が生じるかもしれない時代なのである。

「それにしても、攻めにくい城じゃな」

本陣を瑞竜寺山に設けた信長は、谷を隔てた向こうに聳りたった稲葉山城を睨みつけた。

現在の岐阜城（再建）を見てもわかるが、標高三三八メートルの稲葉山は、どの方向から眺めても険阻である。信長の時代、不落の堅城として、この山城の名は鳴り響いていた。

さすがの信長も、ここまで来て、詰めの手を思いつかなかった。

「誰ぞ、よい思案は浮かばぬか？」

信長は、城を睨んでいた目を、そのまま諸将に向けて言った。癇癪持ちらしい鋭い声であった。

「……」

諸将がみな、黙って俯くなかで、前田利家は、

「こんなときこそ、おぬしの寄騎となった竹中半兵衛が役に立つのではないか」

と、隣にいた木下藤吉郎に囁いた。

竹中半兵衛重治は、美濃三人衆の筆頭、安藤伊賀守守就の女婿で、不破郡岩手山城（菩提山城）の城主であった。天文十三年（一五四四）生まれの二十四歳。一見、色白で女のように優しい顔をしていた。

が、三年前の永禄七年（一五六四）三月、凄いことをやった。酒色に溺れて、国政をかえりみない斎藤龍興の反省を促すためと称して、僅か十六人の家臣だけを引き連れて稲葉山城を奇襲し、占領するという離れ業をやってのけたのである。

もちろん、目的は、龍興の反省を促すことにあって、道三流の国盗りではなかった。長居は無用と、あと始末を義父の安藤守就に頼んで、さっさと引き揚げた。岩手山城を、弟の久作に譲ると、自分は伊吹山の麓の草深い栗原郷に隠棲してしまった。

そうした話を蜂須賀小六から聞いた藤吉郎は、三顧の礼をもって、この若き智将を織田家に

迎えた。といっても、半兵衛は、

「拙者には、織田家に仕える気はござらぬ。貴殿の並々ならぬ熱意にほだされて、貴殿に仕える気になったのだから、そのつもりで……」

と言って、藤吉郎の寄騎になったのであった。いまも、藤吉郎の陣中にあった。

「やっ、これは拙者としたことが、うっかりしておった。なるほど、竹中先生なれば、何ぞよい思案があるやもしれませんな」

藤吉郎は、利家に、そっと片目をつぶって見せると、信長の本陣をこっそり脱け出した。

末席から姿を消した藤吉郎に、信長は気がつかなかった。

自分の陣屋に戻った藤吉郎は、自分より七つ歳下の半兵衛を、

「竹中先生」

と呼んで、先生は、自分を入れて僅か十七人で稲葉山城を占領した経験者、城の奪取に何かよい考えがあれば教えてもらいたいと頼んだ。

半兵衛は色白の顔を桜色に染めて、

「拙者が稲葉山城の乗っ取りに成功した際とは、事情がちがい申す。あの節は城に油断がござったが、いまは闘志に燃えた将兵がたて籠って、備えを固めており申す」

「それは解っている。だが、それでも何ぞ打つ手がござろう？」

「さよう、ただ一つだけござる。それは、長良川に面した懸崖を攻め登ることでござる。城方も、それはできないものと考えているゆえ、崖上の守備は手薄なはず……」

「う、うーむ」

藤吉郎は、猿面をくしゃくしゃにして唸った。

半兵衛の言うとおりにちがいなかった。が、長良川に面した稲葉山は、ほとんど垂直に切り立った絶壁であった。岩石が突兀として、木も草もかろうじて獅噛みつくように生えていた。

藤吉郎は、

「しかし、あれを登るのはけものでも無理だな」

と、大きく溜息をついた。

「いや、拙者もよくは知らぬが、あの懸崖にも、ここらの猟師どもが『長良ノ道』と呼ぶ、かくれた杣道があるにはあるようでござる」

半兵衛は、落ち着いた静かな声で言った。

「ただし、猟師なども、一人、二人がこっそりと通れるほどの険阻な径で、纏った軍勢でどっと押し登ることはできますまいな。つまり、いくさの役には立ちますまい」

「いや、待てよ」

藤吉郎の窪んだ目が、ぎょろりと光った。

「そんな小径でも、ないよりはましじゃて。一人、二人が通れるなら、八人でも登ることはできよう。それだけでも登ることができたら、あとはあと、また何ぞよい思案が浮かぼうよ」

「試みてごらんになるか。では、この絵図を差し上げよう。絵図は、この者が記憶を辿って描き上げたものでござる」

半兵衛は、藤吉郎に一枚の絵図を渡して、うしろに蹲っていた猟師らしい若者に引き合わせた。

「堀尾茂助と申します。この者の父は上織田家を牢人して以来、この瑞竜寺山の麓の日野の里に住みついて、半農半猟の暮らしをしていましたが、先年、亡くなり申した。茂助は、父の生前から、この山の峰つづきの舟伏山、涸山などを猟をして歩き、稲葉山の『長良ノ道』も両三度は登ったことがあると申します。もし侍に取り立ててくれるなら、案内にも立つと申して、さきほど絵図持参で、陣屋を訪れ申した」

堀尾茂助は、後年、豊臣政権下で中老まで累進して、出雲二十四万石の大名になった堀尾帯刀先生吉晴である。半兵衛より一つ歳上で、このときは二十五歳であった。

「よし、決めたぞっ」

茂助を先導にして、藤吉郎自身が『長良ノ道』を登攀することにした。

蜂須賀小六、改め彦右衛門正勝のほか、乱波ばたらきの経験に富んだ蜂須賀又十郎、稲田大炊助、加治田隼人、青山小助、日比野六太夫の五名を選抜して、連れて行くことにした。

木下隊の留守隊長は、いやがったのを無理やり中中村から連れ出して配下にしていた実弟の小一郎（のちの豊臣秀長）に、副隊長は義弟の浅野弥兵衛に命じた。

「わしらが、うみゃあ具合に『長良ノ道』を登って、城内にもぐり込んだら、方々に火をつけてまわる。おみゃあらは、昇る煙を合図に総攻撃にかかるんじゃ。このことは、他の部隊にも手落ちのう伝えておきゃあせ。ええなも、忘れたらあかんぜ」

小一郎と弥兵衛には、尾張言葉で言いおいて、藤吉郎は夜を待って出発した。小船で長良川を渡り、稲葉山の崖下に漕ぎつけた。堀尾茂助を先頭に一行は、木の根、草の根、岩角に摑まって、けもの道のような『長良ノ道』をよじ登っていった。

「あやつこそ、わしよりもよっぽど猿じゃぎゃあ」

はじめのうちは、敏捷な茂助の動きを見て、そんな冗談を飛ばしていた藤吉郎も、時が経つにつれて、まったく無口になった。

上に行くほど崖づらの様相は、いっそう険阻であった。とげが頬を刺す。流れる汗が目に沁みる。手はしびれる、足は辷る。一瞬の油断もならなかった。誰も口を利かなかった。みんながけもののような荒い息遣いをしていた。乱波ばたらきに馴れた者でも、そのありさまは尋常ではなく、生きる苦労を嘗めてきた藤吉郎にも、こんな辛さは初めてだった。

どれほどの刻が過ぎたか、空が薄明るくなって、長良の川面が霧でかすみ始めた頃、一行は、やっと崖の上に辿り着いた。そこは茂助がつくった絵図にあるとおり、二ノ丸の東北口であった。

竹中半兵衛が言ったとおり、敵もこの方からの敵襲はないものと考えていたのだろう、守備は手薄だった。それでも十人ばかり見張りがいたが、みな、槍や鉄砲を抱え込んで眠っていた。

稲田大炊助ら、乱波ばたらきの巧者は、一瞬の間に声も立てさせず眠る見張兵を刺殺して、彼らが着けていた、丸に井の字を書いた袖印をはぎ取って、藤吉郎以下、銘々の袖に取り付け

た。

あとは巧く運んだ。行く先ざきで出会う城兵には、袖印をつきつけて、

「見回りじゃ。みなみな、ご苦労じゃな。しっかりやってくれい」

と、大声で言って押し通った。誰も疑わなかった。

八人は、米倉、小者小屋、厩などに、片っぱしから火をつけて回った。あちらこちらで火の手が上がり、黒い煙が立ちのぼった。

「やっ、馬が逃げ出したぞ」

「裏切り者がいるぞ」

「いや、敵の忍びが入り込んだらしいぞ」

城内は大混乱に陥った。

一方、信長の本陣では、

「煙が上ったぞ。いまだ、総攻撃だっ」

と、小一郎の指揮する木下隊が飛び出した。

遅れじと、柴田隊、池田勝三郎隊などが、七曲口、百曲口、井之口坂の三道から攻め上った。

前田利家は、本陣の信長にぴったりと張り付いて、守護に任じていた。

夜明けまえ、城は完全に尾張勢が制圧した。

山麓の館で、斎藤龍興は悠々としていた。これまでにも何度か信長の攻撃は受けたが、そのたびにたたきのめして敗退させた。こんども同じこと、勇敢な城兵がうまくやると、信じていたのだ。

だが、ついに城が落ちたという伝令に、肩を落とした。取るものもとりあえず、僅かな守兵に導かれて、船で伊勢長島を指して落ちていった。

(三)

美濃の攻略は、父の信秀の頃からの長年の宿願であった。

「ついにやったぞ！」

信長にとって、桶狭間で今川の大軍に快勝したとき以来の、いや、それ以上の痛快事であった。居城を小牧山から稲葉山城に移すとともに、城下の町名を、井之口から岐阜に変えた。

改称は、僧沢彦の、

「この地は、むかしは岐阜と申しました。中国上代に周王朝を興した周公は、もとは岐山というところの一小侯に過ぎなかったのですが、そこから起こって、ついに殷に代わって王者になりました。阜は岡、つまりは山でございます。斎藤氏の用いた井之口よりは、旧名の岐阜が殿にはふさわしうございます」

という進言を入れたのであった。

信長は、城の修復・改装を急がせる一方、焼き払った城下に武家屋敷を新築させ、戦火を避けて逃げ出していた町民たちに帰還を命じた。

城の七曲口につづく七曲通りは農民に、百曲口につづく百曲通りは、大桑の町人に与えて家をつくらせるほか、尾張の町人を呼んで新しい町屋をつくらせ、城から小一里離れた加納にも町屋をつくらせた。

しかも、さかり銭（営業税）、門なみ諸役（家ごとにかかる諸役）を免除するほか、流れ者の職人・旅芸人に、原っぱや川原、寺社の門前に楽市を開かせ、往来を自由とした。

岐阜にはたちまち人が集まって来た。家が建ち並び、楽市・楽座は繁昌した。

キリスト教の布教に来日して、信長にも接見したポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、永禄十二年（一五六九）頃の岐阜について、その著『日本史』の中で、

「――人口は八千乃至一万人……、諸国から集まった商人で雑踏し、売り声の喧しさで、自分たちの会話がさまたげられるほどであった。また、泊まった家では、賭博に耽る者、飲食する者、仕事に励む者など、いつもごちゃごちゃしていて、どうにも落ち着かなかった……」

という意味のことを書いている。

さて、この岐阜でも、前田利家と木下藤吉郎は、清洲のときと同様、隣り合って屋敷を与えられた。

「ようございましたね」

と、よく気の合う、まつと、ねねは喜んだ。

長女の幸のあと、永禄四年に嫡男（利長）を産んだまつは、翌五年、次女の蕭（のちに家臣中川光重室）を産んでいた。

一男二女の母親らしく、落ち着いたなかにも、生来の明るさ、思慮深さを失わず、ねねにはよき話し相手、相談相手であった。

「おまつさまは、よいお子たちに恵まれて羨ましうございます。わたくしは石女やらしれませぬなあ」

結婚をして七年余、子宝に恵まれぬねねは、前田家の三人の子を、わが子のように可愛がった。

彼女らの夫の利家、藤吉郎は、岐阜の町づくりで、家をかえりみる暇もない忙しい毎日を送っていた。

このへんで、当時の織田家臣団の編成について触れておこう。といっても、和田英松の『官職要解』にあるとおりで、前代の鎌倉や室町、後の江戸時代などの武家の職制にくらべて、織田時代はあまりに短期であり、まだ国内統一に至らず、戦陣に明け暮れしていたため、確たる職制をしくには至っていなかった。

信長の子や血族たちによる一族衆のほかに、父信秀の代からの重臣に、筆頭（家老）の柴田勝家以下、林秀貞、佐久間信盛、丹羽長秀らがいて、平時には、時と場合に応じて、普請奉行、御作事奉行、大工奉行、薪奉行、相撲奉行などが、その適任者と考えられる近習から任じられた。

軍事面は、さすがにそれよりは整っていた。軍奉行、御目付、御使番、御小姓頭、小十人頭、御馬廻衆、御鉄砲衆などに編成され、戦時には本城に御留守衆が置かれ、各城に、城代、

城番が置かれた。

当時の戦場の中心は御馬廻衆だったが、信長はその中からこれぞと思う者を選抜して、赤母衣衆、黒母衣衆とした。彼らは戦場で信長の側近にあって、軍事上の機密、策戦上の相談にも預かる重要な役どころであった。

赤母衣衆に選ばれた九人の中には、次席として前田利家が入っていた。黒母衣衆は筆頭の佐々成政以下、十人だった。

この時点で、藤吉郎はすでにいわゆる墨俣の一夜城の城番であり、蜂須賀正勝の一党や、竹中半兵衛といった直臣を持っていたのだから、地位的には、利家を二、三歩追い抜いていた。だが、その隔たりは、戦前まであった日本の軍隊で言えば、少佐と大尉くらいの違い（一階級）で、友情の障害にはならなかった。

隣屋敷同士として、寸暇を得たときは、どちらからか訪ねて、酒を酌み交わしながら歓談の時を過ごした。

利家が、赤母衣衆に選抜されたときも、藤吉郎は酒壺持参で、第一番に、

「母衣衆と申せば、いずれは一城の主となるお方ばかり。貴殿もそのお一人となられたわけ、まことにおめでとうござる」

と、祝意を述べに来た。

「何を申される。貴殿こそは、とうに一城の主。拙者など、まだまだ働きが足らぬ」

「ははは……、墨俣の城など、稲葉山城を手に入れるまでは必要でござったが、いまは無用で

廃城も同然。わしなど、荒れ寺を預かった小坊主のようなもんでよう」

酒を酌み交わすほどに、藤吉郎の侍言葉は、だんだんと尾張の百姓言葉になり、それにつれて舌の回転もよくなった。

「それよりもよう、先ごろ殿は、足利将軍家の使者として来た明智十兵衛という仁を、いきなり五百貫文でお召し抱えになった。ということは、殿の上洛の腹が決まったということじゃで、わしらもこれからは、もっと忙しうなるちうことじゃわな」

足利将軍家は、永禄八年（一五六五）五月十九日、十三代将軍義輝が、松永久秀らに殺されたあと、次代の義栄は有るか無きかの存在となって衰え果てていた。

それを何とかして、もとの勢威ある将軍家にかえし、幕政による天下の平和と秩序を回復しようと考えていたのが、細川藤孝（のちの幽斎）、一色藤長らの幕臣であった。

藤孝らは、松永や、三好三人衆が殺そうと狙っていた奈良興福寺の一乗院門跡覚慶を秘かに脱出させ、還俗させて義秋と名乗らせた。義秋は、亡き義輝の舎弟であった。

義秋を足利十五代将軍として、幕府の権威復興を願った藤孝らは、義秋を奉じて近江に下り、諸所を転々としながら、各地の有力大名に御内書――幕府救援のため蹶起せよ、という義秋の密書を送りつけた。だが、どの大名家も、多かれ少なかれ、お家の事情を抱えていた。援助に乗り出す者はいなかった。

永禄十年十一月、義秋一行は、越前一乗谷の朝倉館に入った。朝倉義景を最後の頼みの綱としたのである。

義景は、一行を快く迎えはしたが、幕府再興に手を貸す気はなく、上洛の気配は見せなかった。

いらいらしながら日を送っていた細川藤孝と親しくなったのが、朝倉家で五百貫文の知行をいただいていた客将、明智十兵衛光秀だった。光秀は美濃の土岐氏の一族で、もとは東美濃の明智城にいた。が、斎藤義龍に城を落とされて逃げ出して以来、美濃を去って諸国を流浪したあげく、義景に拾われていたのである。

すでに四十歳、存分に世間の荒波を浴びてきた光秀は、世間智に長けていた。学問好きでもあった。同様に学問好きで、歌人でもあった藤孝とはうまが合い、話が合った。

ある日、両人の話のなかに織田信長の名が持ち出された。

室町幕府の再興を願おうにも、朝倉は頼りにならず、越後の上杉、甲斐の武田、中国の毛利、薩摩の島津などの大大名も起とうとはしない。この際、いっそ新興の織田を頼ってはどうであろうか、信長はまだ三十代半ばの覇気満々たる武将、豊穣の濃尾平野を領して富み、都に近いという地理的な利点も持っている。

(うまく持ちかけたら、承知してくれるかもしれない)

という点で、両人の意見は一致した。

使者の役は、美濃出身の光秀が引き受けた。朝倉から暇を貰い、将軍家の近臣として、名を義秋から義昭と改めて書いた御内書持参で、光秀が稲葉山城に信長を訪れたのは、永禄十一年(一五六八)初夏の頃であった。

乱世平定、天下統一――は、桶狭間で今川を破って以来の信長の夢であった。稲葉山城を手に入れて、濃尾を統一したのも、夢の具現への第一歩であった。

しかし、夢を現のものとするためには、まだまだ道は遠く、幾つかの面倒な手順(戦いも)を踏まねばなるまいと考えていた。

ところが、機会は向こうから転げ込んできた。

(おれは、将軍家から頼まれて、将軍家の権威回復のために上洛するのである。これ以上ない大義名分を得たぞ)

と、信長は上機嫌であった。

光秀を、義昭の近臣のまま召し抱えて、義昭との連絡将校にした。『明智軍記』には、美濃安八郡で四千二百貫文の所領を与えられたとあるが、『細川家記』には、朝倉家で給されていたと同額の五百貫文を与えられたとある。

さて、話を利家と藤吉郎に戻そう。

利家は、藤吉郎が、光秀を抱えた信長の胸の内をはっきりと見抜いていることに、驚きもし、感心もした。利家はまだそこまでは考えていなかったのである。

(人に滑稽感を与え、いまだに侮辱されている猿面どのだが、なかなかどうして、思っているより遥かに凄い、怖ろしい男かもしれぬぞ)

利家が、藤吉郎に無気味なものを感じたのは、これで二度目であった。

だが、藤吉郎は、酒の酔いでいっそう赤くなった猿面をくしゃくしゃにして、いつ、何処で

覚えてきたか、
今結(ゆ)た髪が
はらりと解けた
いかさま心も
誰(た)そに解けた

と、気持ちよさそうに小唄をうたい出した。平生は、ただ大きいだけが取りえのがらがら声だったが、歌声は存外、味があっておもしろかった。

家督継承

(一)

明智光秀と細川藤孝(ふじたか)がよく連携し、精力的に信長説得に努めたのが効を奏した。意外に早い永禄十一年（一五六八）七月十三日、足利義昭は、

「ひとまず美濃にお移りあれ……」

という信長からの書状を受け取った。

義昭は、これまで長きに亘(わた)っての庇護を朝倉義景に謝して、越前をあとにした。

途中、義景の盟友であり、信長の妹婿でもある浅井長政の小谷(おだに)城に寄って、饗応を受けた義昭一行は、七月二十二日には光秀の出迎えを受けて、西ノ庄の立政寺(りゅうしょうじ)（岐阜市西荘）に入った。

二十七日、信長自身、立政寺に挨拶に赴いた。『信長公記』によれば、信長は鳥目(ちょうもく)一千貫文のほか、太刀、鎧(よろい)、武具、馬などを贈って、義昭を喜ばせた。

「そのほうの忠誠、うれしう思うぞ。今後とも、ようつとめてくりゃれ」

と、まるで臣下に対するように言う義昭を、信長は冷ややかに眺めて、口も利かなかった。

信長は義昭を尊敬して献上品を奉ったわけではない。向後の彼の利用価値を考えて、一応の礼を尽くしただけのことである。

とにかく、その後の信長は、迅速に上洛の準備をすすめた。

八月七日には、わざわざ江南の佐和山（彦根市）まで出向いて、観音寺城に拠り、十七支城を構えて近江の南半分を支配していた六角義賢（承禎）に、上洛の際、通行を許可してくれるよう申し入れた。

だが、義昭が越前を去って美濃に向かったとわかったときから、信長上洛のことがあるやもしれぬと予想した三好三人衆（三好長逸、三好政康、岩成友通）は、いち早く義賢と同盟していた。したがって、当然だが義賢は、信長の申し入れを拒絶した。

ひとまず岐阜に引き返した信長は、僧沢彦に撰文してつくらせてあった「天下布武」の金印を押した文書を浅井長政、朝倉義景に送って、上洛に協力して援兵を出すよう要請した。

長政は応じたが、義景は黙殺した。

こうしたことは、都や近江各地の城将に傭われていた、忍びを得意とする甲賀、伊賀の地侍たちによって、早い速度で各地に伝えられていった。

（織田信長の上洛は、どうやら避けられぬらしい）

となって、もっとも動揺したのは、足利十三代将軍義輝を殺した松永久秀や、三好三人衆であった。

三好三人衆は、信長上洛の阻止力として六角義賢に望みをかけていた。が、彼らの補佐してきた三好義継や、松永久秀・久通父子は、変わり身の早いところを見せて、秘かに信長の内通者になってしまった。流れに逆らう者、うまく乗ろうとする者、信長の行く手は混乱が渦を巻いた。

九月七日、信長は上洛の途に就いた。従うは濃尾の軍団に加えて、岐阜入城まえに滝川一益をつかわして平定しておいた北伊勢八郡の兵、それに盟友徳川家康が松平信一を代将として送って寄越した三河・遠江の援兵など、合わせておよそ三万であった。

三千に充たぬ寡兵を率いて桶狭間に向かったときから八年、いま十倍の大軍の先頭に立った信長の胸中は、得意というより感慨無量だった。

木下藤吉郎、前田利家、そして新参の明智光秀も、この大軍の中にいた。藤吉郎と光秀は、それぞれ有数の兵力を率いる部隊長として騎乗し、利家は赤母衣衆の次席として信長のそば近く駒をすすめていた。

信長が美濃を取り込んでからの、最初の大戦になるはずであった。どこまで美濃兵が従属の実を示すかを試す好機として、信長は美濃三人衆のうち安藤守就、氏家卜全、稲葉貞通の誰かに先陣を命ずるにちがいないと、三人は共に覚悟を決めていた。

だが、九月十一日、近江に入って布陣した信長は、美濃三人衆は和田山（滋賀県神崎郡）の守備に就かせ、先陣は松平信一の率いる三・遠の援軍に命じた。家康の好意に報いてその派兵に一番手柄を与えようという、信長の心遣いであった。

十二日には、観音寺に向かうと見せかけて、一気に箕作城に攻め込んだ三・遠軍につづい

て、佐久間信盛、丹羽長秀、木下藤吉郎らの率いる部隊も先を争って出撃した。申の刻（午後四時）に始まった攻防戦は、夜になって止んだ。南近江勢の完敗だった。

観音寺城にあって十七の支城の指揮を執っていた六角義賢・義治父子は、戦わずして城を捨てた。領内の甲賀を経て、伊賀の国に落ちのびていった。

主将を失った六角氏の支城はもろかった。ほとんど戦わずして開城した。蒲生郡日野城の蒲生賢秀も抵抗をせず、十三歳の嫡子鶴千代を人質に入れて降伏した。鶴千代は後年、秀吉に属して智将と謳われ、累進して会津九十二万石の大守となった蒲生氏郷である。

二十八日、織田の大軍団はついに京に入った。

永禄十年（一五六七）、尾張一国の平定を成就した信長に下した綸旨の中で、「貴殿は古今無双の名将」と持ち上げた正親町天皇や廷臣、一般の人々も、

（信長といえば乱暴で聞こえた成り上がり大名。その家来どもとあっては、何をするやらわからない）

と、震え上がった。

正親町天皇は内侍所に三日間こもって、禍乱鎮定の祈禱をされる。三好三人衆は支持してきた足利義栄を、摂津に放り出しておいて退却する。人々は家財を車に積んだり、背負ったりして郊外に避難していく。上下を挙げて混乱を極めた。だが織田家は、信長の父信秀の時代から、伊勢の外宮の造営、皇居の修理費を献金している。江戸の幕末期に、倒幕の一つの手段として唱えた尊皇主義などと違って、もっと純粋に皇室を重んじてきた家柄である。信長も例外

ではなかった。

入洛早々、正親町天皇から、「将兵が乱暴狼藉を働かぬよう下知せよ」という綸旨を下されるまでもなく、菅谷九右衛門に命じて兵士の行状を厳しく取り締まらせていた。

『総見記』に、「一人の小者が、虎の威を借る狐で、市中の商人に狼藉を働いたのをからめ取って、信長が本陣とした東福寺境内の大木にくくりつけて、群衆の見せしめとした」という意味の記事がある。

この一例に限らず、信長は些細な悪も見逃さず、用捨しなかったから、家来たちも謹み、市中の人々も安堵した。

天皇や、公卿たちも、

（そういえば、織田家は先代以来の皇室思いであった）

と、やっと胸を撫でおろした。

信長は義昭を名実ともに備わった足利十五代将軍として、新御所をつくらせ、永禄十二年四月十四日には、義昭をそこに移した。

義昭は信長に感謝状をおくって、宛名には、「父　織田弾正忠殿」と書いた。三十六歳の信長は、三つしか齢下でない義昭から父よばわりされて、

（気味のわるい、甘ったれめが！）

と舌打ちした。

その信長は都には邸宅も構えず、何か事が起これば都へ、用が済めば岐阜へと、往ったり来

たりしていた。

「それでも何とも心細い、貴殿の名代の勤まる然るべき武将を、京都守護職として常駐させてもらいたい」

と、天皇も将軍義昭も懇請した。

天皇は、織田家四家老の柴田、佐久間、丹羽、林のうち誰かをと希望し、義昭は明智光秀を望んだが、信長は意表を衝いて、藤吉郎を京都守護職に任じた。

かつての花の都も、長い戦乱で荒れ果てている。皇居も将軍御所もある。信長不在を待って事を起こそうと目を光らせている近国大名もいれば、市中荒らしの悪党もいっぱいいる。そんなところの守護職は難役であり、大役である。

命じたことに、とやこう言われることをもっとも嫌う信長と承知しているから、

「はっ、謹んでお受けいたします。身命を賭して大役果たしまする」

と受けたものの、さすがの藤吉郎も心細くて仕様がなかった。

「いやァ、弱った。困った」

と、秘かに前田利家の陣屋を訪ねて、苦衷を訴えた。滅多に泣きごとを言わない藤吉郎の猿面がべそをかいていた。

「何の弱ることがあるものか。おぬしには世間智がある。気持ちが温かい。守護職として巧く都の人心を惹きつけ、治めていくことができるはずだ。おぬしを選んだ殿は、さすがに目が高い」

利家は励ました。

「だが、殿の代理とあれば、町の治安だけでは事が済むまい。天皇家、将軍家にも、出入りせねばなるまい。やれ、しきたりだ、礼儀だと、小うるさいことを言いおるだろう」

「はは……、おぬしらしくもないことを言う。礼を失せず、まごころで当たればそれでよい。おぬしは殿の名代だ。しきたりや礼儀は、こちらでつくっていけばよい。何も向こうさま本位でいくことはあるまい」

「うむ。それもそうじゃな」

藤吉郎は、猿面を少し明るくした。

「笑われること、ばかにされることには、拙者は馴れておる。笑われたり、ばかにされたりしながら、我流を通すか」

「その意気じゃよ。おぬしには竹中半兵衛がついている。蜂須賀党という頼もしい寄騎もいる」

「うむ、そうじゃったな」

「そうじゃとも、しっかりやれ。岐阜の留守宅のことは心配するな。拙者もいれば、まつもいる」

「わかった。おぬしと話してよかった。気持ちが軽うなった。……ねねのこと、よろしく頼む」

藤吉郎はやっと、いつもの晴ればれとした声に戻っていた。

(二)

信長は将軍御所の造営に引きつづいて、永禄十二年（一五六九）四月三日から、朝山日乗、島田弥右衛門尉を奉行にして、皇居の修築に取りかからせた。

長い戦乱期を経て、皇居の築地塀はところどころ破れて、浮浪者、子どもたちが入り込むありさまだった。

皇居修築は一万貫の費用と、二年半の歳月をかけて、元亀二年（一五七一）十月十五日に完了した。

とにかく、都はしだいに戦乱の妖雲を払って、明るい平和の光を取り戻しつつあった。が、地方では、なお争乱がつづいていた。

八月を迎えて、一日から十三日までの戦いで、但馬の山名祐豊を降して、貴重な財源の生野銀山を手に入れた信長は、同月二十日には、南伊勢の攻略に乗り出した。

これは山名攻めのように簡単には片づかなかった。

伊勢の霧山城（一志郡美杉村）を本城として、多くの支城を持っていた北畠具教は、当代一流の文化人であるばかりでなく、剣聖塚原卜伝から新刀流「一の太刀」の奥義を授けられた武芸の達人で、兵法に練達していた。

南朝の忠臣北畠親房の子、顕能以来、伊勢の国司として八代二百三十年に亘ってつちかってきた潜勢力も強く、国人は多芸御所と呼んで具教を尊敬していた。

信長の侵攻に対して、具教は山深い本城の霧山城を下って、息子の具房以下、日頃、鍛えに鍛えてきた精強の将兵とともに大河内城（松阪市）にたてこもった。

信長は城下に迫って町を焼き払い、五万の兵で激しく攻め立てたが、城はびくともしなかった。自慢の鉄砲隊で夜襲をかければ、あいにくの豪雨で鉄砲は役に立たず、逆に多くが死傷するありさまだった。

「俄に霧山から移ったのですから、兵糧のたくわえが多かろうはずがありません。ここは干殺し作戦でいくべきです」

京都から駆けつけて参戦していた藤吉郎の提案を入れて、信長は長期包囲の態勢に入った。

藤吉郎の言ったとおりだった。十分な兵糧もないところへ、いっぱいの将兵がたてこもったのだから、九月下旬になって、城内は餓死する者が相次いだ。

ついに抵抗を断念した具教は、信長の次男（信雄）を養子に迎えるという条件で和睦し、十月四日、城を明け渡した。

南伊勢への出陣から帰ってほどなく、前田利家の身に一つの変化が起きた。兄の蔵人利久に代わって、荒子城主になったのである。

信長の命であった。

もちろん理由はある。

利久には男子がなかった。そこで次弟安勝のむすめを養女に迎え、これに後妻が産んだ男子を妻合わせ、家督を相続させようとして、信長に願い出た。

ところが後妻の子に問題があった。彼女は、はじめ織田家中の滝川儀太夫に嫁していて、儀太夫の子を孕ったまま利久に再嫁したのである。つまり後妻の子は、前田家と血のつながりがなかった。

「そのような者に相続させることはならん。血のつながったお犬に相続させい」

と、信長は命じたのである。

信長の下命によって、相続者の地位を失った後妻の子が、のちに少々へそその曲がった快男子として名を売った前田慶次郎利太である。

『亜相公御夜話』によれば、信長の沙汰に腹を立ててヒステリックになった利久の妻は、

「この城に住む者に禍あれ……」

と呪い、衝立、屏風その他、城中の諸道具に、いちいち、これを使う者はみな災いがもたらされるようにと呪咀したという。昨日までの城主の奥方が今日は牢人の妻女、恨みも、呪いもしたかったであろう。

また『三壺聞書』には、次のような記事がある。

古くは前田氏と同格の家柄で、いつの頃からか臣従していた奥村氏の当代で、十八歳ながら家老職にあった助右衛門永福は、利家たちが移ってきても、

「利久さまご直筆の譲り状を拝見いたすまでは、明け渡すわけには参らぬ」

と頑張って、城門から中に入れなかった。

「もっともである。とくと見るがよい」

と、利家が譲り状を見せると、奥村助右衛門はやっと城門を開き、錠や鍵などを渡して、

「役目柄とは申せ、ご無礼つかまつりました」

と丁重に詫びて、立ち去っていった。

(あの若さでたいしたやつだ。惜しい、城に残ってほしかった)

と利家は見送った。

のちに、その思いを柴田勝家に話すと、勝家も、

「おぬしの言うとおりだな。召し抱えておいたら、ずいぶんと物の役に立つであろう」

と言った。

そこで利家は、再三、使いを立てて、助右衛門に帰参をすすめた。が、彼は、

「せっかくながら、蔵人さまとの主従の節義を守りたく存ずるので……」

と答えて、応じなかった。

この奥村助右衛門が帰参したのは、それから四年後の天正元年(一五七三)、信長が越前朝倉攻めを始める直前であった。利家を陣中に訪れて、

「拙者をなにとぞお使いくだされい」

と申し出たのであった。

さて、とにもかくにも、利家は三十二歳にして前田家の惣領、自分でかせいだ四百貫を加えて二千四百貫を領知する荒子城主になった。だが、いきさつがいきさつだったから、利家と兄利久は不仲となり、しばらくは、たがいの往き来も絶えた。

そうなってからのある日ある時、利家は柴田勝家、佐久間信盛、森三左衛門、佐々成政らと一堂に会したことがあった。いろいろ話しているうちに、利家の家督相続の話になった。

「又左どのは抜群の勇者。たびたび武功を立てたのじゃから、前田家惣領となったのは当然じゃな」

と、誰かが利家を持ち上げる一方、

「その点、蔵人どのはどうもな。武道に手ぬるかった」

と、利久を貶した。

人々は、前田兄弟の不仲を噂に聞いていたし、こんな話は利家を喜ばせるだろうと思ったのだった。が、利家はちょっと居ずまいを改めて言った。

「兄蔵人が、血縁もない者を跡目にと考えたことは、まことに不調法でござって、殿さまのご裁断を仰ぐことになったのは、お恥ずかしき限りでござる。さりながら、蔵人の武道については、拙者のいるところでは、とかくの評判をなさらぬよう、お願い申す」

「なるほど、これは心ないことを申した」

と、みなが大きくうなずいた。そして、陰では、

「又左は武勇の士というだけではないな。人柄もすぐれて、やはり、ただ者ではない」

と褒めた。

やがて、その話は信長の耳にも入った。信長は、

「わはは……、あのお犬はな、ただの猛犬ではない。おれには、とうのむかしから解っておったわい」

と、得意そうに言った。

信長忽忙

(一)

信長のおかげで将軍の座に就いた足利義昭は、はじめの頃は信長を「御父」と呼び、竹紋、鳳凰紋とともに、皇室の専用紋とされている桐紋や、足利家の「二つ引き両」の紋を贈与したりして、謝恩につとめた。

だが、信長はありがたいとも思わなかった。宿願の上洛を果たすために義昭をうまく使っただけのことである。その代償に松永久秀や三好三人衆が支持した十四代将軍義栄を阿波に追いやって、義昭を十五代将軍にし、立派な御所まで新築してやったのである。

桐紋のほうは、武門の名誉と考えて、裃につけてみたが、自分という後楯なしでは一日として存立できないだろう足利氏の「二つ引き両」の紋など、まったく用いる気がなかった。

義昭は、信長に向かってこんなことも言った。

「こののち攻め取った国のうち、貴殿には、どこなりと好きな国を与える」

(何を言いやがる)

信長は、腹の中でせせら笑った。

(武力もない将軍に攻め取るの、与えるのと言う資格があるか。おれは好きな国、欲しい国があれば、自力で勝手に攻め取るわい)

以心伝心で、信長のそうした気持ちが解るにつれて、義昭の謝恩の念は薄れ、逆に信長を怖れ、斥けようという気持ちを強くした。

彼はまたもや、諸国の有力な大名に、せっせと御教書を書き送り始めた。「信長を追討せよ」というのだった。甲斐の武田信玄にも、越前の朝倉義景にも送った。

そういう義昭の動きは、木下藤吉郎配下の蜂須賀党の乱波や、前田利家の忍びの姫ノ八蔵・トラ父娘の一味らがもたらす諜報によって、すべて詳細に信長の耳に伝えられていた。

義昭の御教書の送り先のうち、信長がもっとも恐れていたのは武田信玄であった。だが、信玄には早くから、

「――貴殿を古今無双の名将として欽慕し、武略と政道を御尊敬仕り居り候」

と持ち上げた書状に添えて、良質かつ多大な贈り物をたびたび送ってご機嫌取りをし、そのうえに、信長は姪(妹の子)を養女にして、信玄の次男勝頼に縁づけてもいた。

信玄はふたりのあいだに生まれた男児に、竹王信勝と名付けて、

「わしと信長の孫じゃ。どちらに似ても、天下無双の名将になるぞよ」

と、好々爺ぶりを発揮しているようす。差し当たって信長と事を構えるとは思えなかった。

(もう一人、問題なのは朝倉義景じゃ。彼奴がどう出るか、試してくれよう)

信長は永禄十二年(一五六九)暮れ、来る正月には将軍参賀に列するようにと、義景をうな

がし、年が改まって四月の二条ノ館の落成祝いの際にも、能楽見物に来るよう使いを出した。義景は二度とも応じなかった。

永禄十年（一五六七）、岐阜から義昭を奉じて上洛したとき、来援を頼んで応じなかったことと併せて、義景は三度、信長を無視したことになる。

（よし、このへんで朝倉をたたいておこう）

元亀――と改元になる三日前の永禄十三年四月二十日、ついに信長は、朝倉征伐に起った。

十本の大旗を押し立て、揃いの具足に身を固めた弓組、鉄砲組、槍組五百騎を従えた信長の武装は、紺地に金襴の包具足に、白星の三枚甲、黄金の八竜で飾った兜をかぶり、黄金づくりの太刀を佩き、利刀黒の駿馬に跨がるという華麗極まるもの。沿道の人目を驚かせた。

その頃の信長は、すでに十万人を動員する力を備えていたが、このとき率いていったのはおよそ三万人であった。

軍中には柴田、丹羽、佐久間、森といった重臣もおり、藤吉郎、利家、佐々成政、明智光秀もいた。変わったところでは公家の烏井雅敦、日野輝資、それに松永久秀もいた。

出兵の名目は、幕命に叛いた若狭の武藤上野介の討伐であった。二十五日に武藤を降すと、信長は馬首を越前に向けた。この頃、別路をすすんで来た徳川家康の率いる援軍五千も到着して合体した。

その日のうちに、朝倉方の部将寺田采女正の守る天筒山城を急襲して、千三百七十余の敵を討って降伏させると、翌二十六日には朝倉景恒らの守る金ヶ崎城に攻めかかった。

景恒は一戦を交えることなく、城兵を連れて一乗谷に逃げ去った。

それまでには、朝倉方の海賊（水軍）大将革島一宣が信長方に寝返って、軍船ことごとくを焼き、朝倉自慢の水軍を殲滅していた。

気勢大いに挙がった織田勢は、木ノ芽峠を越えて、一気に一乗谷に攻め込もうとした。

本陣を金ヶ崎城まですすめた信長を、赤母衣衆として護衛していた利家を訪ねて、髪も着ているものも土埃に塗れた女が駆け込んできたのは、このときだった。

「おう、姫トラではないか」

このところ、姫ノ八蔵からの連絡には、若い配下が使われていた。姫トラに会うのは久しぶりであった。

彼女は利家と同年で、もう三十になっていたが、いまも独り身を通して、忍びの鍛練をしているせいか、女鹿のように引き締まった体はしなやかで、二十半ばとしか見えなかった。

「久しいのう。……ところで、何事だ？」

姫トラ自身が来たのは、よほどの大事が起きたからにちがいない。

「浅井長政さまが朝倉に合力して起たれましたぞ」

「なに、浅井どのが？　長政どのは、わが殿のお妹御お市さまの婿どのだぞ。朝倉に合力……、そんな莫迦なことのあるはずがない。どこで摑んだ話か知らぬが、朝倉が流した虚報ではないのか」

「いえ、虚報ではございません。浅井さまよりの絶交状を携えた使者が、すでにこちらに向か

っております」

利家は急いで、信長に報らせた。

「まさか……。朝倉の流した虚報ではないのか」

信長は利家が姫トラに言ったと同じことを言った。だが姫トラの言葉どおり、虚報でも誤報でもなかった。浅井の絶交状を携えた使臣小野木土佐が、姫トラに遅れること半日で到着した。

(そういえば……)

と、信長は、天筒山城に向かう直前、お市が急飛脚を立てて、わざわざ届けてくれた陣中見舞いの品を思い出した。

枕くらいある布袋いっぱいに小豆を詰め込んで、袋の両端が紐で固くしばってあった。

(お市め、妙な物を寄越したな。これっぽかりの小豆では、いくさの勝利を祝った赤飯を全軍に配るほど炊けはせぬ。ははは……、枕に使えとでもいうのか)

と、信長は苦笑した。が、いま思えば、夫長政と朝倉の合力を知ったお市が、夫にはそむくことになるが兄を見殺しにするにしのびず、

「――お兄上さま、朝倉・浅井の挟み討ちで、織田勢は袋の中の小豆のように辛い目に遭います。早々、対処をご考慮なさいませ」

と、諷意をこめての報らせだったのである。

(お市め、賢い女である)

と、信長は今頃になって感心した。いや、感心ばかりはしていられなかった。このまま越前にぐずぐずしていては、お市の諷意どおり、袋の中の小豆と煮られ、潰される恐れは確かだった。

信長は急遽、諸将を招集した。事情を明かして全軍に撤退を命じた。

しかし、それにしても殿軍を誰に命ずるか、であった。撤退を知れば朝倉の追撃は猛烈を極めるにちがいない。殿軍は全滅の憂き目を見るかもしれない。

「さて、ところで……」

と、信長が心を決めかねて、諸将を見渡したときだった。

「殿！　しんがりは、拙者にお申しつけを」

と、まるで信長の苦しい胸の内を見抜いたように、藤吉郎が申し出た。

「猿、きさまが？」

信長は目を見張った。墨俣の築城や稲葉山城攻略で偉功を立てた藤吉郎を、得難い部将の一人と認めていたものの、一面、あやつは出世欲の固まりみたいなやつとも思っていた。九分九厘までは死と解っている殿軍を、自分から買って出ようなど、思ってもみないことだった。

「きさま、しんがりというものが、どういうものか承知しているのか？」

「必ず死ぬぞ、と仰せられたいのでございましょうが、ご安心ください。拙者、死にはいたしません」

「……」

「なにせ、死神どのは、拙者の面を好かぬそうでございます」
藤吉郎は猿面を、いっそう猿らしく、ぷっと頬をふくらまし、窪んだ目をくるくると回して見せた。緊迫した空気を和らげるため、藤吉郎が意識しての所作であった。
「わはは、こやつめが」
と、信長が破顔して、諸将もどっと笑った。
すかさず藤吉郎は、
「さあ、殿も、みなさま方も、一刻も早く陣払いを」
と、明るい声でうながした。
「よし。しんがりは猿と決まった。みなの者、急いで発て！　落ち合うのは京ぞ！」
諸将に命じた信長は、藤吉郎に三百騎と鉄砲五十挺を与えると、夜陰にまぎれて金ヶ崎から抜け出し、若狭湾沿いに西に急いだ。
従う者は地理にくわしい明智光秀、弁舌巧者の松永久秀、家老の森可成らを入れて十数騎。赤母衣衆の利家らも、信長の前後左右にぴたりとついて護衛した。
美浜（河原市）から先は、京都の北、大原、八瀬に通ずる山沿いの間道をすすんだ。途中、蜂起した土民の一揆や山法師の襲撃に遭ったが、森可成、利家らが奮戦して追っ払った。
朽木谷を越えるのが、もっとも困難と思われたが、松永が巧妙な弁舌で、その辺りを所領する朽木元綱を説き、協力を得て無事、越えることができた。一行は四月三十日、やっとの思いで京都に辿り着いた。

殿軍の藤吉郎は、苦戦をつづけた。
信長から与えられた三百騎に、
「ご苦労じゃな。少々ながら寄騎をお貸しいたす」
と、諸将が十騎、二十騎、三十騎と、分に応じて残していった者を併せて総勢七百騎。それに五十挺の鉄砲では、かさにかかって追撃してくる朝倉勢を振り切るのは容易ではなかった。
死神も嫌うはずの猿づら藤吉郎も、幾度か死地に陥り、味方の多くを失った。
それを援けてくれたのは、撤退軍の最後尾にいた徳川家康であった。精強の三河勢を引き連れて、殿軍に協力してくれたのだ。朝倉勢もついに追い討ちを諦めて退いていった。

（二）

思いもかけない浅井長政の挙兵だった。一乗谷を目のまえにしながら、朝倉討伐を果たしえなかったばかりか、さんざんな思いをしての撤退に、信長の腹わたは煮えくり返った。
撤収兵団の最後、藤吉郎ひきいる殿軍がくたびれ果て、ぼろぼろになって帰ってくるのを見届けた信長は、五月九日、ようやく帰国のため京都を発った。
途中、甲賀の石部城には、浅井に同心して信長の挟み討ちを狙った六角承禎がいた。承禎の呼びかけで蜂起した土民一揆も、至るところで待ち構えているはずだった。
信長は浅井勢の追尾に備えて、森可成、佐久間信盛、柴田勝家、中川清秀の弟左京允、蒲生賢秀らを、宇佐山城、永原城、長光寺城、安土、日野城の守備として留め、浅井勢の固める

鯰江城を避けて、美濃三人衆の一人、稲葉貞通を先導に千草越えの道をとった。

信長としては用心の上に用心しての行旅だったにもかかわらず、千草山中で鉄砲の狙撃を受けた。六角承禎が金で頼んだ杉谷善住坊という鉄砲上手の仕業であった。さいわい、銃弾は信長の小袖の袂をかすっただけであった。

岐阜から京都まで、降り積もった雪を蹴散らして僅か二日で駆けつけたことのある信長が、岐阜に帰着したのは五月二十一日。じつに十三日も費やしての行旅だった。

その日から信長は、ただちに陣容の立て直しにかかった。いまや武器として欠かすことのできない鉄砲用に、堺の今井宗久から大量の火薬・煙硝を買い取り、駿馬を集めた。

浅井方でも信長の報復を覚悟していた。放った諜者から、刻々と岐阜の戦備の進行状況を伝えてきた。長政は朝倉義景に出兵を求め、江濃国境の長競、刈安の砦を強化して、信長の侵攻に備えた。

一と月がかりで戦備を整えた信長は、六月十九日、尾・濃・勢三国の兵三万五千に、徳川家康の率いる援軍五千を連れて岐阜を発った。

それよりさき、前田利家は姫ノ八蔵・トラ父娘の一党に命じて、農夫、旅商人に変装させ、長競、刈安あたりで、

「こんどの織田さまの軍勢は、十万だそうや」

「いいや、二十万がほんとうやで」

と、さかんに噂を撒き散らして歩かせた。

それが、効いた。

織田勢が国境に迫ると、長競砦の守将堀秀村、刈安砦の守将樋口直房とも戦わずして投降した。指揮官を失った兵は、守将と行を共にする者、小谷に逃げ戻る者、いずこへとなく逃散する者で、砦は無人になってしまった。二つの砦で何日間かは侵攻軍を足踏みさせようとした長政の作戦は、まったく無効となった。

六月二十一日、織田勢は早くも小谷城下に迫った。城下一帯はもとより、城下から遠い農村にも放火した。すべて信長自身の立てた作戦だった。

天険に拠る小谷城の攻撃は難しい。籠城されては攻略に日がかかる。だが信長には策略があった。領地の治政に格別に心くばりしてきた長政は、城下ばかりか農村まで難に遭わされては、じっとしていられまい、必ず城外に打って出るだろう、と考えたのだった。

信長は小谷城の南、およそ一里（約四キロ）の虎御前山の本陣にあって、

（出てくるぞ、出てくるぞ。長政め、今にたまりかねて出てくるぞ……）

と、小谷城をじっと睨めつけていた。

だが、城門は堅く閉じたままだった。長政の動く気配はなかった。

長政は、朝倉の来援を待って、じっと我慢していた。

（よし、もうひと揺すりしてくれよう）

信長は小谷城に向けていた軍勢を、姉川をあいだにして小谷城の西南にある横山城に転進させた。

この作戦は功を奏した。横山城を失えば小谷城は防御に大きな影響を受ける。失ってはならなかった。長政はついに八千余騎を率いて押し出した。折よく越前からは、朝倉景健が一万余騎を率して来援した。併せて一万八千の朝倉・浅井勢は小谷の東方、大寄に陣をしいた。信長も本陣を虎御前山から、早々と奪取した横山城前方の竜ヶ鼻に移した。

両軍は姉川を挟んで対峙、いわゆる姉川の合戦となった。

伊吹山脈に源を発する姉川は、山脈の麓を西南に流れている。途中、上流を杉野川と呼ぶ草野川と、北国街道の栃ノ木峠を水源とする高時川を合わせて、琵琶湖の北東部に注いでいる。戦場となったのは、河口から二里ほど遡った野村、三田村だった。

三田村口には家康の希望で、五千の三河兵が朝倉景健の率いる一万の越前兵と対戦した。越前兵は勇猛で知られ、兵力も二倍。だが剽悍さでは三河兵も劣らなかった。

戦闘はまだ夜も明けきらぬ寅の刻（午前四時）に始まった。先鋒は酒井忠次の率いる部隊。双方の銃撃戦から始まり、渡河しての白兵戦になった。兵数で劣る酒井勢が退くと見せると、かさにかかって越前兵は、どどっと川に飛び込んで追撃してきた。このときを待っていた家康本隊と榊原康政の部隊が右翼から、大久保忠世、本多忠勝の率いる部隊が左翼から、包み込むようにして越前兵に攻めかかった。

川の水は血で赤く濁り、淵に、瀬に、越前兵の死骸が沈み、凄惨なようすを一面に漂わせた。未の刻（午後二時）に至って、越前兵は敗退した。延々十時間に及ぶ死闘であった。

「うーむ、三河どのの兵は強い」

と、竜ヶ鼻本陣の信長は唸った。

（それにひきかえて、わが兵たちの不甲斐なさよ）

と歯噛みした。

織田勢の持ち場は野村であった。

一陣・坂井政尚、二陣・池田信輝、三陣・木下藤吉郎、四陣・柴田勝家、五陣・森可成、六陣・佐久間信盛という編成で、各隊に三千を配していた。信長の考えた万全の陣容であった。だが先鋒に当てた美濃三人衆の部隊が、あまりにも脆く敗退したため、つづく各隊に影響して大混乱を起こしてしまった。

織田勢の二万一千が浅井の八千に思うように引っかき回され、討たれていく。勝家が森可成が、藤吉郎が、馬で河岸を、河中を駆け回って号令し、立て直しを図ったが、敵の攻勢を押し返すことはできなかった。

信長の本陣にあった利家は、

（こうなっては猿どのの智恵も役に立たず、腕の振るいようもないなァ。……だが、木下よ、死ぬな。部下を死なすなよ）

と、祈って見ているより仕様がなかった。

突然、攻勢だった浅井勢が後退を始めた。三田村口で朝倉勢を敗退させた家康の三河勢が、救援のため馬首をこちらに向けたのを見て、長政が引き揚げを命じたのである。

勝ち誇った浅井勢が、さっさと小谷城に引き揚げるのを眺めて、これ以上ないほど不機嫌な

顔をした信長は、

「ううーむ、ううーむ」

と、二度、大きく溜息をついた。利家は、一つめは「おのれ、長政め！」という憤り、二つめは「三河どのに大きな借りをつくってしまった」という詠嘆であろうと思った。

(三)

姉川の合戦は、浅井氏にも、朝倉氏にも、大きな損害を与えた。だが浅井久政・長政父子も健在なら、朝倉義景も健在、甲賀五十家を擁した南近江の六角承禎も健在で、遊撃戦をつづけていた。

しかし、信長は長く近江に関わっているわけにはいかなかった。将兵も疲れ切っていた。そこで信長は、兵を纏めて岐阜に引き揚げた。

いずれにしても、京都を留守にすることがやや久しくなった。隙を衝いて、反信長の動きが起こっていた。

その主なるものには、まず、信長の締めつけにより、名ばかりの将軍として、何の権力も与えられていない義昭の不満の爆発があった。表面はあくまで信長に従う風を装って、陰では甲斐の武田信玄に、越後の上杉謙信に、せっせと御教書を書き送っていた。

「――信長追討に、一日も早く上洛せよ」

と、相も変わらず、呼びかけつづけていたのである。

朝倉、浅井は連携をいっそう密にし、義景と親しい比叡山の僧兵団に働きかけて、戦力の強化を図っていた。

もっとも手強いのは、大坂の石山本山にあった本願寺十一代の顕如上人（光佐）であった。顕如は、そこに天下布武の本拠地を置こうと考えた信長から、石山の明け渡しを命ぜられて以来、宗門の敵として、信長には強い憎しみを抱いていた。

いずれにしても、ひと荒れきそうな情勢の中で、真っ先に動き出したのは、意外にも阿波に逃げていた三好長逸らの三好三人衆であった。秘かに摂津に帰った彼らは、細川昭元や美濃を追われた斎藤龍興ら、敗残の大名を誘い込み、兵を集めた。野田、福島などに砦を構えて「信長打倒、失地回復」を叫んだ。

（小鼠どもめが、こんどこそ捻り潰してくれるわ）

信長は八月二十五日、征伐に起った。六角氏に備えて南近江には明智光秀を、北近江には小谷城を目のまえにした野田城に木下藤吉郎を残して、本隊は一路、摂津をめざした。その中には利家もいた。

浅井長政は野田城に藤吉郎の率いる部隊が入ったのを見て、ふたたび織田勢が小谷攻撃を始めたと勘違いした。ただちに朝倉義景に来援を求めた。

一方、信長は摂津に入ると、枚方から始めて野田、福島の砦を一気に落とし、天満の森に陣をすすめた。

三好三人衆は、石山の顕如に救いを求めた。応じて起った顕如は、浅井、朝倉に連携を呼び

かける密書を送った。

後世、「織田が捏ね、羽柴が搗きし天下餅……」と諷詠されたが、信長の波瀾に富んだ生涯のうちでも、この頃がもっとも困難を極めた時期である。

顕如の命で起った大坂一向一揆の、宗門の敵信長の軍勢に対する攻撃は、紀伊の根来、雑賀から、海路来援した僧兵団を加えて、果敢、強烈を極めた。

根来、雑賀の僧兵団が得意とした武器は鉄砲であった。

鉄砲は当時からまだ三十年とさかのぼらない天文十二年（一五四三）に、ポルトガルの商人によって、たった二挺が種子島に輸入されたのが最初だった。が、現代日本の先進技術の優秀性に対して、何処やらの国が、日本人は創造性はともかく模倣性では世界に類を見ない国民……と、褒めるか貶すか解らない批評をしているが、模倣の特性はどうやら今に始まったことではなかったようである。

鉄砲が高価に売れたのに味を占めたポルトガル人が、翌年、ふたたび鉄砲の売り込みに来たときには、種子島だけにでも、ポルトガル商人が持って来たものに優るとも劣らぬ性能の鉄砲、数十挺がつくられていて、欲の皮の突っ張った彼らを唖然とさせた。

根来では紀州小倉の豪族、津田算長が種子島から一挺の鉄砲をもとめて帰り、これを根来寺の僧職にあった弟の杉坊明算に与え、僧兵団御用の刀鍛冶たちの研究・製造が盛んに行なわれるようになった。

信長との対戦には、三千挺の鉄砲が使われた。織田勢にも鉄砲はあったが、数量も、射撃の

腕前も、根来、雑賀の僧兵団にはかなわなかった。

九月十二日から十三日にかけての近江川（淀川）の戦いでも、織田勢はさんざんな目に遭わされた。つづいて十四日の春日井堤の戦いも、一番手の佐々成政が早々と傷ついて退いたあと、右翼から攻撃した弓組の中野又兵衛、左翼から攻めた野村越中守、湯浅甚介、毛利河内守（秀頼）、金松又四郎らはよく戦った。しかし、敵の猛反撃でしだいに後退するうち、野村越中守が討たれて、いっそう浮足だってしまった。

『当代記』には、味方が敗走する中で、二番手の利家の部隊だけが、堤上から一歩も退かなかったとある。

長身の利家は敵の目にもよくついた。

「あの大男こそ、槍の又左という剛の者じゃ。あやつを討ったら、堤の敵勢も怯んで退きよるやろう」

敵にも勇敢なのがいて、数人で一斉に突っ込んできた。利家は手傷を負ったが、利家のたった一人の最初の家来となって以来、常に身近にあって忠勤を励み、今では前田家になくてはならない存在となっていた村井又兵衛が、

「殿を討たせてなるか」

と奮戦して、敵を追っぱらった。

前田勢の孤軍奮闘ぶりを見て、一旦は退いた味方も、毛利河内守を先頭に勢いを盛りかえして戦い、どうにか春日井堤の戦いでは、織田勢の面目を保つことができた。『三州志』には、

「槍の又左の名に恥じぬお犬の働き、天晴であった」

と信長は激賞して、利家に近江長浜の一万石を与えたとある。

江戸時代の制度でいうなら、二千四百貫文の直参旗本だった利家が、このときから一万石の大名になったことになる。武家制度がまだ確立していなかった信長の時代でも、処遇的に利家が大名格になったことにちがいはない。

さて、顕如を対手に信長が苦戦していると知って、この際とばかり九月十六日、浅井長政は朝倉勢とともに南近江にすすみ、二十日には、まず織田方の宇佐山城を攻めて城将織田信治、森可成の首級を挙げた。

ついで坂本に陣した長政らは、大津付近一帯を焼き払ってのち、逢坂山を越えて山科、醍醐に火を放ち、京の目前に迫った。

「おのれ、長政め！」

愛する妹の婿とはいえ、重ねがさねの長政の挑戦に激怒した信長は、石山攻めを中止して九月二十三日、京都に戻った。

(四)

信長は京都の守備に、柴田勝家、村井貞勝、明智光秀らの部隊を残すと、本隊を率いて浅井長政らの本陣、坂本城を総攻撃した。

浅井、朝倉はたちまち敗走した。かねてから盟約を結んでいた比叡山に逃げ込んで、僧兵団と一体になった。

信長は、叡山に、

「――当方に一味して、浅井、朝倉を追放するか、さもなければ中立せよ。どれも聞き入れないならば、根本中堂、山王二十一社をことごとく焼き払うであろう」

という意味の厳しい申し入れを行なった。

天台宗の総本山延暦寺は、四明岳（標高八四八メートル）を主峰として、幾つもの峰を持った比叡山の山頂を、やや東にくだった傾斜地や、谷間を占めている。

平安時代の初期、最澄（伝教大師）が開山して以来、京都の鬼門に当たることから、王城鎮護の道場として、また日本仏教の根本中堂として栄えていた。いま信長を苦しめている顕如の本願寺の宗祖、親鸞も、その師の法然も、かつてここで修行をしている。

信長の時代、東塔、西塔、横川の塔のほか、十六谷にわたって三千の堂坊があった。仏法修行に一途の学僧も少なくはなかったが、勢威をふるっていたのは、仏門擁護の名のもとに組織されている僧兵集団であった。

彼らは、酒もくらえば、女人禁制のお山に女も出入りさせていた。そうした破戒僧をお得意とする俗人（商人）も入り込み、老若男女数千人で賑わっていた。風俗の紊乱は、俗界よりも甚しいと噂され、無神論者の信長は汚らわしい叡山など一気に踏み潰したい気分であった。

だが浅井、朝倉ぐるみ包囲するには、叡山は広域すぎた。兵数も十分ではなかった。このままでは、かなりの長期戦を覚悟しなければならない。

ここで長期戦になって、信長動けずとわかれば、あの策謀多い傀儡将軍の義昭、恐るべき石山本願寺の顕如、三好三人衆、近いところでは南近江の六角承禎、遠くは甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信など、襲いかかろうとしている無数の敵が動き出すだろう。

さすがに戦さ上手の信長も思案に暮れた。こんなとき、相談相手になる戦略家の明智光秀は、京都に駐留しており、藤吉郎とその軍師の竹中半兵衛は、六角氏に備えて甲賀に行っていた。

「お犬よ」

信長はちょうどそば近くいた利家に話しかけた。愚痴っぽくなく、現在、自分が置かれている状況を語って、

「こんなとき、きさまなら、どうする」

と訊ねた。

かぶき者といわれた若き日の、あの颯爽とした殿も、分別ぶかい齢頃となって、すこし弱気になられたか、いや、このところの働き過ぎで疲れておわすな、と思いながら、利家は答えた。

「拙者なら、算盤勘定でまいりますな」

「算盤勘定？　どういうことだ」

「一時に五者を相手にするのを止めて、四者には待ってもらい、まず一対一で一者を倒す。次には三者に待ってもらって、また一対一で一者を倒す、その次また……」

「もうわかった。五から一を引き、四から一を引く、というわけだな」

「はい。戦略家ではない拙者などは、多少は時間をかけても、確実に勝つ、そういう喧嘩をいたしまする」

「……」

信長は黙っていた。迅速を得意とする信長は、利家の考えは手温いと思った。が、この際、利家の算盤戦術でいくのがいいかもしれぬ、いや、それでいくのもやむをえまいと思った。

信長はまず、藤吉郎に命じて、六角承禎に和睦を申し入れさせ、将軍義昭を用いて浅井、朝倉との和議を図った。六角はすぐに応じたが浅井、朝倉は応じなかった。

折から、信長にはぐずぐずしてはいられない事態が生じた。十一月二十一日、伊勢長島の一向一揆が、尾張小木江城を守る弟の織田信興に攻めかかり、包囲落城させて信興を自刃させたのである。

信長は正親町天皇に綸旨を奏請して、浅井、朝倉との和睦を急いだ。

浅井長政は、

（さすがの信長も八方塞がり、討滅の好機到来……）

と、綸旨にそむいても、戦いを続行する気であった。

だが朝倉義景は、雪深い郷国の冬支度を思って、将兵が落ち着かなくなったこと、また深雪をおかしての食糧補給が絶えるのを心配して、浅井が止めるのも聞かず、十二月十二日、突然、越前に引き揚げていった。

やむなく、浅井も小谷城に帰って籠城した。
（やれやれ。ひとまずは、お犬の算盤戦術と、冬将軍に救われたな）
信長は長い戦陣ぐらしに疲れ切った将兵を率いて、岐阜に帰った。

叡山焼き討ち

(一)

信長は元亀二年（一五七一）の正月を岐阜で迎えた。
諸将が早朝から、年賀の挨拶に訪れた。
「明けましておめでとうございます」
「うむ。めでたいのう」
笑顔で答えている信長だが、べつに正月だから、元旦だからといって、めでたいと思っているわけではなかった。
ただ、年々歳々、年賀にくる者の頭数の多くなることには愉快を感じていた。
信長自身、あまり酒は嗜まなかったが、諸将には存分に振る舞った。
みなが上機嫌で酒を酌み交わして、楽しそうに談笑するのを眺めながら、信長はおよそ正月らしくない血腥いことを考えていた。
（さて、ことしもまた厄介な年になろうが、こちらが仕掛ける場合、お犬の言いおった算盤戦術、各個撃破を使うとして、最初の五から引く一には、どこにしたものか？）

考え始めると、もう、人声、笑声は耳に入らなくなった。

（浅井、朝倉をやるか。それとも、あやつらのうしろで糸を引く本願寺顕如に、ひと泡吹かせるか）

よし、いずれにせよ、向こうの出方を見てやろう……と、正月二日には、近江横山城へ帰っていく藤吉郎に、

「朝妻と姉川のあいだの商人の往来を禁じて、厳しく監視しろ。従わぬ者はかまわず斬れ」

と命じた。それは大坂から越前への通路を断って、石山本願寺と朝倉義景の連絡を妨害するためであった。

さらに二月に入って早々、信長は藤吉郎に、浅井側にとってもっとも重要な佐和山城（彦根市）の守将、磯野丹波守員昌の招降を命じた。

磯野員昌は勇猛で、気骨に富んでいた。

昨年、信長が朝倉・浅井を攻めたとき、ろくに抗戦もせず叡山に逃げ込んだ味方の不甲斐なさに腹を立てた員昌は、自分の率いる兵だけで、織田勢の包囲陣を突破して、佐和山城に帰ってしまった。

帰城以来、員昌は、

「殿もなさけない。何ぞといえば朝倉をあてにし、叡山を頼り召される。そんなことなら、はじめから織田どのを敵に回すような真似をせぬがよかったのだ。いや、浅井のお家も先が見えてきたな」

快々として楽しまず、酒に溺れる日々……といった諜報を、信長は耳にしていた。

藤吉郎の呼びかけに、員昌はすぐに応じて降伏した。信長は員昌を湖西の高島郡に移し、佐和山城には丹羽長秀を入れて守将とした。

ところで越前朝倉氏との連絡路を断たれたことは、本願寺顕如にとって痛手だった。顕如は、琵琶湖周辺に多い一向宗徒の蹶起を促し、同時に浅井長政に頼んで通路を開こうとした。

長政は、横山城の藤吉郎が信長との連絡のため、岐阜に行っていた留守を狙って、姉川に出陣した。まず、浅井井規に鎌刃城を攻撃させた。鎌刃城の守将は、もと浅井家の臣で江・濃国境の長競の砦の守将だった堀秀村だった。長政はこの裏切り者が許せなかった。

秀村はただちに使いを岐阜に走らせた。

藤吉郎の帰城は早かった。秀村を援けて井規の率いる浅井勢をさんざんに打ちのめして退却させた。

近江の敵の蠢動に対して、信長は浅井に対するより、彼を自由に操る顕如に腹を立てた。

（よし、算盤戦術で最初にたたく対手は決まったぞ！）

信長は一向宗徒の徹底的粉砕に起ち上がった。だが、行路に妨害者の多い石山本願寺への直撃は避けて、その一角を成す伊勢長島の一向一揆討伐から始めた。

長島の門徒はしかし、侮り難い勢力を持っていた。昨年は小木江城を襲って、弟の織田信興を自刃に追い込んでいる。

五月十二日、信長は尾張津島に出陣した。

長島は津島のやや西南、木曽、長良、揖斐の三大河が、河口で捩れ縺れしてつくった三角州上にある。

州上には幾つかの小集落があるが、どの集落も三大河の氾濫に備えて周囲を堅固な土塁でかこっていた。いわゆる輪中である。一向宗徒の根拠地、願証寺は、もっとも河口に近く、伊勢湾に面した輪中にあった。

ここの門徒たちは、毎年のように雨季には洪水の被害を蒙って死者を出していた。そして戦乱に巻き込まれて死ぬ多くの者を見てもきていた。したがって、今生はまことに果敢ないものである、ひたすら「南無阿弥陀仏」を念ずることによって、来世の極楽を求めるという一向宗（浄土真宗）に対する信仰心は、極めて真摯であり、熱烈なものがあった。

信長は彼らの本拠願証寺を、柴田勝家、佐久間信盛、市橋長利、氏家卜全、稲葉一鉄らの軍勢によって、三方から激しく攻め立てさせた。だが、なんとも攻めにくい敵であった。長島の地理に明るい彼らは、島中の輪中を防塁にして、弓矢、鉄砲を射かけ、湿地に誘い込んで攻め立てた。

形勢わるしと思えば、河童のように川に飛び込んで水にもぐり、生い茂った芦間に身をひそめてしまう。

（魔性のようなやつらだ、何とも始末におえんな）

と、織田勢は溜息をついた。信長も、

（これほど頑強だとは思わなかった。……といって、ここだけに手間暇かけているわけにはいかん）

と考えて、五月十六日、全軍に引き揚げを命じた。引き揚げる兵たちは、矢弾を受けない者も、顔を血塗れにしていた。土塁に生い茂る芒や、水辺に生える芦の葉に、かすり切られ、突き刺されたのである。湿地に誘い込まれて、泥塗れになった者もいた。

「いまいましいやつらだ」

兵たちは、途中の家々に火を放った。

一方、一向宗徒らは、

「とうとう逃げ出しおったぞ」

「阿弥陀さまに敵うものがあろうかい」

「二度と来ぬように、思い知らせてやるべい」

と、念仏を唱えながら、土塁の上から弓、鉄砲で激しく攻撃した。

殿軍を指揮していた柴田勝家は傷つき、美濃三人衆の一人で大垣城主だった氏家卜全も戦死し、ほかにも多くの将兵が死んだ。

（二）

稔りのない長島討伐を中止してより三ヵ月間、兵にゆっくりと休養を取らせておいて、信長は秘かに諸将と軍の立て直しを協議した。

諸国諸大名が放った諜者らが、さまざまに身を窶して岐阜城下にもぐり込んでいる。信長は

長島再攻を協議中……と偽報を流しつづけていた。

八月中旬、大軍を動員した信長は十八日、諸国の諜者どもの予想を裏切って、長島などには目もくれず、兵を近江にすすめて、ひとまず藤吉郎に預けておいた横山城に入った。

その日から九月上旬に至るまでに、柴田、中川、佐久間、丹羽の諸将に命じて、浅井方に与力してきた新村、小川、金ヶ崎の諸城を攻略させ、信長は横山城から園城寺（三井寺）の光浄院に移った。

信長はここで初めて、岐阜を発つときから自分の胸だけにおさめていた作戦を、諸将に打ち明けた。

「これよりは、兵を坂本にすすめて、山門（比叡山延暦寺）の山法師（僧兵）どもを討つぞ」

この時代、いま信長がいる三井寺もそうだが、東大寺、興福寺など、大きな寺は多かれ少なかれ僧兵を置いていた。貴族や武士団による寺領の侵略を自衛するためであった。

延暦寺が僧兵を置くようになったのは、この時代から六百年まえの天禄二年（九七一）である。

僧兵の数は年々ふえつづけて、中世末期には数千人にもふくれ上がった。それとともに、自衛僧団は刀槍を振るう暴力軍団となっていった。

彼らは何か要求すること、気に入らぬことがあると、朝廷に対してさえ、日吉大社の神輿を担ぎ出して、京都に押しかけて脅迫・強訴を行なった。

天皇の在位期間をふくめて、上皇・法皇として四十余年に亘って権勢をふるった院政の創

始者、白河法皇（一〇五三～一一二九）ですら、

「――自分の思うままにならぬもの、鴨川の水、双六の賽、山法師」

と、慨嘆したほどである。

だが、それもこの時代からは四百四十年以上むかしの話で、この時代には叡山の僧兵団にも、それほどの軍事力はなかった。しかし、織田氏包囲陣の一角にある朝倉・浅井への与力をやめない彼らを、信長はこれ以上、捨てておけなかった。

断乎たる処置を決意したのだった。が、その決意を打ち明けられた諸将はびっくり仰天した。

僧兵を憎む気持ちは信長と同様だったが、比叡山を神仏のお山と崇敬する気持ちは、中世の人々とほとんど変わらぬ形で、まだ諸将の胸の中に生き残っていた。

「殿、山法師を討つとは、つまり叡山に攻めのぼるということでござるか」

最初におそるおそる伺ったのは、佐久間信盛であった。

「当然じゃ。そのほかに打つ手があると申すか」

信長は莫迦なことを聞くなとばかり、目を光らせた。

「しかし、それではお山を血で汚し、まかり間違えば、寺社を焼くことになりましょう」

と、右筆の武井夕庵も震えながら言った。口には出さなかったが、「祟りが恐ろしゅうござる」と付け加えたいところだった。

「わはは……」

信長は大声で笑った。そして大声で命じた。

「おれはな、山門ことごとく焼き払い、山法師どもは皆殺し、と決めたのじゃ。きさまらは、早々にめいめいの部署に就いて、兵どもの指図をせい。行く手は坂本じゃ！」

ルイス・フロイスは『日本史』の中に、「彼（信長）は、神仏を礼拝せず、尊崇せず、占い、迷信を軽蔑し、目に見える物以外の存在を認めず、したがって来世などは信じない」という意味のことを書いている。

フロイスの観察に全く間違いがないとは言えないが、叡山焼き討ちに対して信長は何の躊躇もしなかった。広大な寺領を持ち、富裕にまかせて京都の高利貸どもに資金を貸して、中小の商人を圧迫し、健全な流通経済を阻害する叡山……、僧兵を養って自分の天下布武の大志に敵対する叡山……など、憎むべき邪魔もの以外の何ものでもなかった。

十二日、叡山の東麓、坂本にすすんだ織田勢は、日吉山王社から始めて根本中堂に至る東塔坂を攻めのぼった。東塔、西塔、無動寺谷の諸坊は、ことごとく焼き払い、刃向かう僧兵は勿論だが、逃げ出す僧兵もつかまえて首をはねた。

十三日から十五日にかけては、横川、その他、山上にあるすべての坊を焼き払った。

その結果、伝教大師の創設以来、円仁（慈覚大師）をはじめ、法然（浄土宗）、親鸞（浄土真宗）、栄西（臨済宗）、道元（曹洞宗）、日蓮（法華宗）、一遍（時宗）らの名僧が、一度は修行の場とした根本中堂をはじめ、山王二十一社、東塔、西塔、横川の塔、二百十六社、三千坊と、そこにあった貴重な仏像、宝物、膨大な和漢の典籍、経巻、文書などのことごとくを灰に

した。

紅炎渦巻き、黒煙覆う中を逃げ惑う者たちは、僧俗、老幼、男女を問わず、ほとんどが殺戮された。その数は数千人に及んだ。

ルイス・フロイスは信長を、「よき理性と明晰な判断力を持ち、貪欲でなく、人情味もあり、愛敬と慈愛を示した。が、その半面、家臣の忠言をほとんど聞かず、尊大、性急で、激昂すると恐ろしい人物……」、つまり味方にすれば実に頼もしく、敵に回したらどうしようもなく恐ろしい男と見ていたようだ。

そのフロイスよりも、はるかによく信長の美質を知り、怖さを知っていた藤吉郎や利家も、叡山焼き討ちの凄まじさに驚き、今さらのように信長に畏怖を覚えた。

横川香芳谷口の攻撃を命ぜられていた藤吉郎は、信長の命令で各部隊の監察に回っていた利家が来あわせると、煤煙で黒くなった猿面をこすりながら言った。

「やあ、前田どのか、拙者が受け持ったここだけは、武器を持たぬ学僧や、年寄りや、女子どもだけは、見て見ぬふりをしているのじゃが、だちかん（駄目）かのう」

「いや、かまわんだろう。ただし拙者は、貴殿の言ったことは聞かなかったこと、ここで見たことは見なかったことにするゆえ、そのつもりでのう」

利家は藤吉郎と並んで、しばらく、仏像や経典の入っているらしい大きな木箱を背負って逃げていく僧、取るものも取りあえず身ひとつでよろめいていく老僧、泣きわめく幼い子どもを小脇に抱えて駆けていく女たちを眺めていた。彼らはみな、大原口をめざしていった。

九月二十日、信長は焼け果てた日吉大社、延暦寺を含む志賀郡を、明智光秀に与えて岐阜に引き揚げた。

光秀は、坂本に城を築いて住んだ。

後年の本能寺の変について坂本辺りでは、光秀の突然の謀叛は、無残に殺された叡山の怨霊のなせるわざ、と気味わるそうに噂したと伝えられている。

(三)

信長が叡山を焼き討ちした翌月の十月三日、越後の上杉謙信と同盟を結んで、甲斐の武田信玄の動きを牽制しつづけてきた関東の強豪、北条氏康が死んだ。

しかも内心、武田の軍事力を高く評価していた氏康は、家の将来を考えて、死に臨んで後嗣の氏政に、信玄と講和するよう言い遺した。その遺言に従って、氏政は弟ふたりを人質に差し出して信玄と講和し、謙信との同盟を破棄した。

かねて将軍義昭からも、本願寺の顕如からも上洛を促されながら、背後を考えて動けずにいた信玄は、

(長年の望みだった上洛の時が来たぞ)

と思った。

(だが、念には念を入れて、根回しをしておかねばならぬ)

信玄は上杉謙信の妨害を受けないため、おたがいの夫人が姉妹である本願寺顕如に頼んで、

加賀方面の一向宗徒を蜂起させ、謙信がその鎮圧以外、他に力を向けるゆとりのないように図った。

さらに年が改まった元亀三年(一五七二)正月には、信長の右筆武井夕庵に宛てて、

「――たとえ自分が日本じゅうの大半を手に入れたとしても、信長どのと疎遠になるようなことはない」

という意味の書状を送った。徳川家康と信長の同盟に、行く手を邪魔させないためであった。

その正月、信長は岐阜城で十六歳の長男奇妙丸、十五歳の次男茶筅丸、同齢の三男三七丸の三人を同時に元服させた。のちの信忠、信雄、信孝である。

その祝賀に集まった武将たちに信長は、信玄から武井夕庵に来た書状を披露させて、一層の奮起を促した。

めでたい話では、前田利家に三女の麻阿が生まれた。この麻阿は十二歳のとき、人質として柴田勝家の北ノ庄城に送られ、のちに秀吉の側室加賀殿となった。秀吉が死んだあと、万里小路充房に嫁して一子利忠を産んだが、やがて離別して金沢城に帰り、慶長十年(一六〇五)、三十四歳で亡くなった。薄幸の戦国女性の一人だったと言えよう。

余談はさておいて、一応の根回しを行なった武田信玄は、十月、孫子の兵法にある、

その疾きこと風の如く　その徐なること林の如く
侵掠すること火の如く　不動こと山の如し

より採った「風林火山」の大旌旗を押し立てて、無敵の騎馬軍団を先頭に、堂々と甲府を出発した。

全軍を二軍に分けて、山県昌景を将とする五千には、信州伊那口から三河に入って、後方を攪乱しながら、遠州浜松城へと向かわせた。

信玄は北条氏政からの援軍を併せて二万七千の大軍で、十日には遠江に侵入、十二日には兵を二分して、一部は天竜川沿いに磐田郡を南下させ、自分は本隊を率いて周知郡を気田川沿いに進撃した。

これに対して、家康は十月十三日、浜松城から出撃した。率いる兵は僅か三千。信長には援軍依頼の使者が出してあった。その援兵が到着しなければ、武田の大軍団と本気で戦うことはできない。ちょっとした小競り合いののち、さっさと浜松城に引き揚げた。

ところで信長は、信玄と盟約して敵側にまわった松永久秀、三好三人衆、朝倉・浅井連合軍、さらに本願寺顕如と長島一揆が相呼応しての包囲網から目が離せなかった。

信玄が直接、美濃に侵入させた秋山信友の一隊も、東美濃を蹂躙してのち、刻一刻と岐阜に迫りつつあった。

家康の再三の援助依頼に、ただちに応と答えうる状態ではなかった。

そうした状況下で信玄は、悠々と策を立てて行動した。おそらく浜松城は最後の拠点として、家康は堅固に構えているにちがいない。そんな城の攻略に手間取るより、無視して上洛を急ごうというので、十月二十二日には本隊と山県昌景隊とを併せて三万二千で、浜松の北二里半（約一〇キロ）にある三方ヶ原台地に進出した。

浜松城内では、

「ここは、見て見ぬふりをしてやり過ごすが上策」

という説が有力であった。

だが家康は、

（ただ黙って見過ごしては徳川家の恥、無疵の甲州勢を差し向けるようでは、織田どのに対して申し訳ない。それに上洛を果たした暁には、甲州勢はやはり徳川打倒に乗り出すだろう。勝敗を問わず、腕を拱ねいて見逃すわけにはいかぬ）

と考えた。

徳川勢八千を挙げて、三方ヶ原に向かった。ようやく、信長が送った滝川一益、平手汎秀、佐久間信盛らの率いる援軍も到着した。ただし兵数は僅か三千。併せて一万一千で、勇猛をもって鳴る三万二千の甲州勢と対陣した。

小勢の徳川・織田連合軍が、敵を両翼から挟み撃ちする鶴翼の陣をしいたのに対して、優勢をほこる武田勢は、魚鱗の陣をしいた。弱小の両翼など蹴破って、一気に強行突破しようというのである。

家康の作戦負けであった。戦闘は二時間で終わった。甲州勢の戦死者、約四百人に対して、家康側は本多忠真、鳥居信元、成瀬正義、松平康純らの近習、織田家の援将平手汎秀はじめ約千三百を失った。

「わしの武運もこれまでじゃな」

と、一時は家康も自刃を覚悟したが、近習の夏目正吉が、

「殿にも似合わぬ弱気を仰せられる。ここは拙者にまかせて、ひとまず引き揚げられませい」

と、乗馬の尻を強く鞭打った。

驚いた馬は、浜松城に向かってひた駆けに駆け、家康は命拾いした。

信長が送り出した第二次の援軍は、三方ヶ原の敗報を聞き、家康がすでに浜松に帰城したと聞いて、途中から引き返した。

家康にはたびたび援助を受けながら、十分な援軍も送ることができなかった信長は、

(浜松どのには、こちらの事情はどうであれ、申し訳ないことであった)

と負い目を感じると同時に、

(破竹の勢いで寄せて来る甲州勢との単独の戦いを、もはや避けることはできない)

と思って、戦備の強化に努めた。

そんな折も折、策略の多い将軍義昭が、三好三人衆の与党や甲賀、伊賀の土豪どもに与力させて、近江の今堅田、石山の砦に拠って、慶長四年(一五九九)二月、反信長の狼煙を上げた。甲州勢の優勢を聞いて、「信玄の上洛、間近し」と考えたからであった。

信長は柴田勝家、明智光秀に命じて、二月二十六日には石山を、二十九日には今堅田を攻め落とさせた。

義昭は京都の二条館に逃げ帰った。信長は三月二十五日、手勢を率いて上洛し、二条館を包

囲した。策を弄して止まぬ義昭を、これ以上は放ってはおけないと思ったからである。

包囲されると、義昭は和議勧告の綸旨を賜るよう、正親町天皇に泣きついた。知恩院を本陣とした信長は、勅命に従って、義昭と和睦し、四月七日、京都を去って岐阜に帰った。

信長はしかし、信玄が上洛をやめぬ限り、義昭がそのままおとなしくしているとは思わなかった。

ところで、三方ヶ原の大勝以後の甲州勢の動きが妙であった。破竹の勢いで遠江から三河へ、さらに尾張へと兵をすすめそうなものなのに、正月十一日、徳川の部将菅沼定盈の守る豊川右岸の野田城を攻略後は、ぱたりと動きを止めてしまった。

実は、その頃から、信玄は持病の労咳(肺結核)の悪化で、咳と喀血に悩まされ、高熱に苦しんでいたのである。三河の鳳来寺で養生に努めたが、いっこうに快方に向かわぬどころか、ますます悪化するばかりであった。

信玄はついに上洛を断念して、甲府へ引き揚げることにしたが、途中、信州駒場(伊那郡)で息を引きとった。時に四月十二日、享年五十三歳。

信玄は子の勝頼や重臣に、自分の死を三年間は絶対に秘匿にするよう遺言した。

したがって将軍義昭は、信玄の死を知らないばかりか、近く必ず上洛すると信じていた。正親町天皇に泣きついて綸旨を賜ることで、信長が岐阜に引き揚げるや、兄の義輝を殺した松永久秀らと秘かに手を握って、七月にはまたしても反信長の兵を挙げた。

一方の信長は、その日のあることを予期していた。

五月十二日、岐阜から近江佐和山城に移って以来、多賀、山田の山中から材木を切り出して運ばせ、大工の岡部又右衛門を棟梁とし、大勢の鍛冶屋、大工などを集めて、琵琶湖を快速で横断できる巨船を造らせ、佐和山からじっと義昭の動きを監視していた。

しかも、信長は前田利家の諜者、姫ノ八蔵・トラ父娘の働きによって、三年間は絶対に秘匿されるはずだった信玄の死を、六月のはじめにはもう、耳に入れていた。

七月六日には、佐和山の麓の松原に隠しておいた快速船で、一気に湖を渡り、坂本を経て京都に入り、七日には早くも二条館を落とし、十八日には宇治の槇島城に立て籠っている義昭を攻めた。

槇島城は将軍家の老臣、真木島昭光の居城で、三千七百余の軍勢がいた。

義昭はここを難攻不落の堅城と信じ、ここで抵抗しているあいだには、必ず信玄の甲州勢が援けにくると信じていた。だが、信長の目から見れば槇島城など難攻不落ではなく、三千七百や八百の軍勢など、ものの数ではなかった。二手に分けた軍勢で、川上の平等院からと川下の五ヶ庄から攻めかけた。

「信長勢、来たる！」

と聞いただけで、槇島の城兵のほとんどが戦わずして降伏するか、逃散してしまった。

義昭はついに三位の局とのあいだに生まれた二歳の愛児を人質に差し出し、頭を丸めて降伏した。

「策略の多い義昭を生かしておいては、こののちとも、うるさいことでしょう。自刃を命じられませ」

と諸将は言ったが、信長は自分にとってずいぶん小うるさい存在ではあったが、将軍弑逆の汚名は残したくなかった。いのちを助けて京都から河内へ追いやるにとどめた。

とにかく、室町幕府の終焉であった。

信長の奏請によって、朝廷は七月二十六日をもって、元亀四年（一五七三）を天正元年と改元した。

なお、後日譚としての義昭について書いておくと、彼は信長打倒、将軍復帰の夢が捨てられず、三好、毛利、はては薩摩の島津まで頼って、各地を転々と流れていった。そして藤吉郎が豊臣秀吉となり関白となった天正十三年（一五八五）、飄然と大坂に帰り、秀吉から一万石の捨扶持をもらう身となり、秀吉の死に先立つこと一年、慶長二年（一五九七）、六十一歳で没した。

朝倉・浅井の滅亡

(一)

織田包囲網を陰であやつりつづけた足利義昭と、本願寺の顕如のうち、まず義昭を将軍の座から追い、京都から追放した信長は、顕如の始末はあとまわしにして、直接、包囲の壁の一角を打ち破る決心をした。

差し当たって邪魔なのは、岐阜と京都の往復に目障りな近江小谷城の浅井久政・長政父子であり、浅井家に何事かあれば出兵してくる越前の朝倉勢であった。

天正元年（一五七三）八月に入ると、信長は柴田勝家や、横山城を預けておいた木下藤吉郎に命じて、たびたび浅井家が所領とする江北六郡の各所に出兵させて、浅井家の城を攻撃させ、村落を焼き払わせた。

また盛んに諜者を放って、流言を飛ばさせ、主家と家臣の離反を図り、領民たちをおびやかした。

浅井家のもっとも有力な武将の一人で、山田山の城にいた阿閉淡路守貞征が、藤吉郎の誘いに応じて投降したのは、八月八日であった。

信長がその報らせを受けたのは、その日の夕方だった。軍備を整えて待ち構えていた信長は、

「行くぞ！」

と、家臣団に声をかけて、ただちに岐阜を発ち、翌九日には小谷城を目前にした虎御前山（東浅井郡虎姫町）に布陣した。

浅井長政から救援を乞われていた朝倉義景が、敦賀を発ったのも、同じ九日であった。

武将というよりは文人的で、優雅な生活を好み、戦場嫌いだった義景は、一向宗徒とのたびたびの戦いにも、一族の誰かを将として差し向け、自分は一乗谷の館にあって、美女を擁して歌舞音曲の娯しみに耽るという風であった。

こんども、自分では出陣したくなかった。

一族で大野犬山城主の朝倉景鏡か、勇将として知られていた金津城の溝江長逸を代わりに行かせたかった。

だが、景鏡は所労（病気）を理由に出陣を断わり、長逸は打ちつづく出陣で将兵の疲労が甚しいという理由で出兵を断わった。その実、ふたりにはすでに信長の謀略の手が及んでいたのである。

そうとも知らず、やむをえず陣頭に立って出陣した義景は、憂鬱そうで、顔色も蒼くて冴えなかった。率いる兵員は僅か一万。しかも部将間には、近江出陣を可とする者と、否とする者の両派があって、一致して敵に当たるという気勢を欠いていた。

それでもとにかく北国街道を南下した朝倉勢は、小谷城を南東にした余呉、木之元、田部山の線に布陣した。

浅井長政はどうしていたか。江北一帯にあった浅井家七十三の支城は、織田勢によって、とうに焼かれるか、占領されるかしていた。まったく孤立状態に陥った小谷城内には、僅か三千の兵がいるのみ。頼りにした朝倉勢も一万に過ぎないと知って、長政は敗北を覚悟していた。

総勢五万を率いた信長はしかし、ただひと揉みにできそうな小谷城を目のまえにしながら、いっこうに攻撃命令をくださなかった。

「彼は好戦的で傲慢不遜で……」と、ルイス・フロイスの『日本史』に書かれた信長は、同じフロイスに「心気広闊、忍耐強し……」と書かれる面も持っていた。小谷城内にいる美しい妹のお市や、その三人のむすめたちに、戦いの怖ろしさを味わわせたくなかった。不幸な思いもさせたくなかった。小谷城の周囲を用捨なく焼きながら、小谷城内に手をつけなかったのは、そのためだった。

（きさまのたびたびの謀叛は憎い、許しがたい。だが、いま降伏を申し出るなら、お市に免じていのちは助けてやる。長政、何をぐずぐずしておる。早く白旗をかかげて降伏せい！）

信長は大きな声で叫びたい気持ちで、小谷城を睨みつけていたのである。

そうした信長のいらだたしさが、朝倉憎しの気持ちをたかぶらせていった。

信長は虎御前山の陣に嫡男の信忠を留め置き、自身は小谷城を横目に見て山田山に陣をすすめ、さらに太山、大嶽、丁野山と朝倉勢の急造した砦を攻め落としていった。

砦の守将や、将校格は首を刎ねたが、兵卒どもには、

「立ち帰って、義景に首を洗って待てと伝えよ！」

と言い渡して退去させた。

信長は馬廻衆や、柴田勝家、丹羽長秀、佐久間信盛らと、丁野山の頂上に立って、退去する敵兵どもを見守っていた。

やがて本陣に帰着した彼らが、信長の言葉を義景に伝えたのであろう。朝倉勢は総退却を始めた。二手に分かれて、一団は中野河内方面へ、もう一団は刀根方面へ……。

「わはははは、義景も考えおったな」

信長は大笑いして、勝家、長秀らに尋ねた。

「おことら、義景はどの方面に行く軍中にいると思うぞ？」

「さあて……」

と、誰もが首を捻った。

「弱りましたな。どちらを追撃していいか、解らなくなりました」

と、信盛などは困ったように呟いた。

「お犬はどうじゃ。そちは算盤をどう弾いた」

信長は馬廻衆の一員として、すぐ近くにいた利家に声をかけた。

「されば……」

利家は思うとおりを言った。

「あの慌てようでは、行く手にこれといった城砦のない中野河内方面に向かったとは思えませぬ」

「そのとおりじゃ。義景めは引田、敦賀を目指して刀根方面に向かった軍中に必ずいる」

と、うなずいた信長は、ただちに全軍に、刀根方面に向かった敵の追撃を命じた。

利家、信長が考えたとおり、中野河内方面に向かったのは雑兵ばかり、義景は刀根に向かった軍中にいた。

織田勢が逃げる朝倉勢に追いついたのは、刀根山の頂上あたりであった。

利家が、兄の前田利久に代わって荒子城主になったとき、「利久さまご直筆の譲り状を拝見するまでは」と言って、利家を城内に入れなかった奥村助右衛門永福が、改めて、利家の麾下に加わったのは、この直前であった。十八歳だった永福も、二十二歳のよき若武者となっていた。村井長頼、小塚藤右衛門、木村三蔵らとともに、利家の手足となってよく働いた。

そこから敦賀まで、十一里（約四十四キロ）ほどある。

その十一里を、攻防を繰り返しながらすすむあいだに、多少とも名の聞こえた敵将三十名のほか、敵兵三千余の首級をあげた。

その中には、かつての美濃の国主斎藤龍興の首もあった。永禄十年（一五六七）八月十五日、信長に稲葉山城を奪取されて以来、まる六年、諸国を漂泊した果ての死であった。

(二)

追われる義景が一乗谷の館に帰ったのは、八月十五日の陽の落ちる頃であった。最後まで従いて来た家臣は、僅か四、五騎に過ぎなかった。他の者たちは敦賀を出て間もなく、木ノ芽峠を越えるときになって、

「拙者はこれ以上、殿と行を共にいたすのはご免こうむる」

といって立ち去った一族の朝倉景綱とともに、いずこへとなく逃げ散っていったのである。

いのちからがらの長路の退却に、義景はすっかり疲れていた。小谷を攻めると思っていた信長が、矛先を転じて、いきなり攻めかかってきたのも意外だったし、三年前の元亀元年に侵攻してきて以来、京都でも、近江でも何度か接触したときと較べて、一段と剛強となり大きくなった織田軍団に畏怖をも感じていた。

その織田の大軍は、木下藤吉郎を先陣に越前に侵入し、敦賀から一乗谷に向かって進撃していた。

八月十七日、信長は一乗谷を北東にした府中（武生市）の龍門寺に本陣を据えた。その先陣は、すでに一乗山の西麓まで押し寄せてきていた。

「もういかんな」

戦さ嫌いの義景も、一城の主である。最期だけは武将らしくと思っていた。四歳になったばかりの愛児、愛王丸に短刀を与えて言った。

「父もいっしょだ。そなたも武将の子らしく、それで腹を切って、立派に死んでくれ」
「何を仰せられますか」
老臣の河合吉家が、あわてて愛王丸のいたいけな手から短刀を取り上げて言った。
「殿、まだその時ではございません。この谷を出て、いずこかで再挙を図られませい。それが叶わなかった場合は致し方ないとして、いましばらく、いのちを大事になさいませ」
病気を理由に、江北への出陣を断わった朝倉景鏡も出仕していた。
「われらの犬山（居山）城にいらせられよ。城下の大野は土地豊かで、食糧には困りませぬ。近くには平泉寺があり、屈強の僧兵三千人がいます。信長とて、うかつに近づきはしますまい」
力強い景鏡の言葉だった。江北への出陣を断わったことで不快に思っていた景鏡を、義景は見直す思いだった。
「よく言うてくれた。おことだけが頼みじゃ。よろしく頼み入る」
と、めったに下げたことのない頭を下げた。
義景が館を退去するという噂は、たちまち一乗川に沿った城下町を大混乱に陥れた。
「織田の侍は、乱暴者ぞろいなそうや」
「女を辱め、子どもの首も刎ねるそうな」
老いも若きも、男も女も、泣くやら喚くやら、上を下への大騒ぎになった。
上城戸（一乗川の上流）へ行こうか、下城戸（下流）へ行こうかと、右往左往した。

館をあとにした義景は、母の広徳院、室の小少将、愛児の愛王丸のほかは、近習、上臈三十人ばかりを連れただけであった。
景鏡が先導するまま、大野に急いだ。大野では景鏡の居城の犬山城に入れてくれるかと思ったが、仮の住まいとして与えてくれたのは、東雲寺（洞雲寺）という古い寺であった。義景は寺僧から筆墨を借りると、早速、平泉寺の僧衆に宛てて、援助依頼の手紙を書き送った。
平泉寺の僧衆は合議した。
「武運の尽きた朝倉に与力したとて、何の得るところもあるまいよ」
「得るところがないばかりか、織田信長の怒りを買うことになろう。信長というのは叡山を焼き、僧俗三千を殺したというめちゃくちゃな男だ。怒らせたら何をするかわからんぞ」
「では、どうする？」
「むしろ、織田側について、信長の歓心を買うほうがよろしい」
合議の結果は、そうなった。
平泉寺僧衆は早速、行動を起こした。二隊に分かれて、一隊は義景たちがいる東雲寺のまわりに放火し、一隊は一乗谷まで出かけて北国の小京都と呼ばれた美しい城下町ばかりか、無人の城山に上って、櫓を焼き、二ノ丸、三ノ丸の建物のすべてを焼き払った。
すでに書いたように、景鏡は疾うに信長方に寝返っていた。親切ごかしに大野に誘ったのも、義景にいささかの抗戦力も持たせないためであった。
三百人ほどの兵を率いて東雲寺を訪れた景鏡は、寺のまわりに上る黒煙を指し示して言っ

た。

「平泉寺の坊主どもの仕業でござる。やつらのお味方が得られなかったのは、殿のご武運が尽きたるしるし。このうえは、いさぎようお腹を召さるることでござるな」

景鏡の態度は、冷ややかであった。

(やはり、そうであったか……)

景鏡の裏切りに気がついた義景は、

「きさま、汚いぞ!」

と叫んで、景鏡の顔にかっと痰を飛ばすと、脇差を抜いて、大きく腹を横に斬り裂き、摑み出した腸で、傍らの襖に、

七転八倒
四十年中
無他無自
四大本空

と、血文字で辞世の句を大書してのち、こんどは胸を突いた脇差を臍まで斬り下げて絶息した。凡庸だった義景も、最期だけは武将らしくいさぎよく壮絶であった。八月二十日、享年四十一歳だった。

景鏡が届けた義景の首級は、龍門寺で信長が実検してのち、家臣たちにも見せ、京都に持ち帰って獄門に曝したあと、さらに岐阜に送って十二月まで見世物にした。

すでに晩秋に入っていたとはいえ、三ヵ月余り腐敗しなかった。顔容は生ける如しであったと伝えられている。よほど怨念が深かったか、現世に未練があったのであろう。

(三)

朝倉討伐を終えた信長は、江北に引き返して、八月二十六日には虎御前山の陣所に戻った。留守を預かっていた嫡男の信忠に、信長が真っ先に訊ねたのは、

「長政からは、何も言って参らなかったか」

であった。

信長は江北に出陣してのち、順序からしては当然、まず小谷城を攻めるべきであった。それを敢えて回避して、主力を越前にすすめて二十日近くを費やした。

その間も信長は今日は来るか、明日は来るかと、浅井降伏の報せの入るのを心待ちにしていたのである。

「小谷はいっこうに動くようすもなく、籠城をつづけております。長政どのからは何も申しては参りません」

という信忠の返事であった。

(長政も強情なやつだ。何とか和解しようと思っているおれの気持ちが解らぬと見える。……残念だが、これ以上は待てぬ)

と、信長は、ぎゅうっと強く唇を噛んだ。

その頃、小谷城内では久政・長政父子のあいだに、意見の食い違いが生じていた。長政は、はるばる越前から救援に駆けつけながら、戦いらしい戦いもせず退去した義景は、もはや頼りにならず、このまま信長と戦いをつづければ、浅井家は必ず滅亡すると思った。

妻のお市や、嫡男の万福丸をふくめて、四人の子どもたちの行く末も案じられた。信長との和解を思いつづけていた。

だが、父の久政はあくまで頑固だった。

「わしの親父どの（亮政）以来、朝倉家からはどれほど恩誼を受けてきたかしれぬ。もしも朝倉家が滅亡するなら、浅井も共に滅ぶべきじゃ。ここで一戦も交えず織田に降っては、それこそ末代まで、忘恩の徒として世の物笑いになる」

「……」

「きさまが反対なら、きさまだけ妻子を連れて、信長に頭を下げに行け。わしは一人になっても城に残って、如何に難攻不落の堅城であるか、信長めに存分に思い知らせてくれる。そのうえで、城を枕に討死して、武門浅井の名を末代まで光り輝かせてやるわい」

（父の言うことは、老いの一徹の感情論で、まるでめちゃくちゃだ）

とは思ったが、長政はそういう父を見捨てることができなかった。結局は父子ともに、運命を城と共にしようということになったのだった。

二十七日、信長は、

「わしがよしと言うまで、城に火をかけてはならんぞ」

と申し渡して、藤吉郎に小谷城総攻撃の先陣を命じた。

この場に及んでもなお、信長は妹のお市と、そのむすめたちは救出したかったのである。

先陣を命ぜられた藤吉郎の働きは目覚ましかった。久政が自慢するとおり、小谷城は相当の兵数をもって籠城すれば、確かに難攻不落の堅城であった。

だが、兵数わずかに七百では、堅城の真価は発揮できなかった。城内の一ノ曲輪（本丸）には、長政と兵五百、二ノ曲輪（小丸）には久政と兵二百がいたが、その中間の京極曲輪は、空家も同然になっていた。

藤吉郎はまず京極曲輪を占領して、父子の連繋を遮断したうえで、二ノ曲輪を攻め立てた。口に徹底抗戦を唱えた久政も二百の兵では、藤吉郎の三千の兵には抗戦らしい抗戦もできなかった。その日のうちに自刃して、四十八年の生涯を終えた。

翌二十八日には、信長は京極曲輪に入って、自ら一ノ曲輪攻めの指揮を執った。

長政は生き残りの兵を指揮して、激しく抵抗したが、玉砕は覚悟の上だった。

侍臣に命じて十歳の嫡男万福丸を秘かに城外に脱出させ、室のお市と三人のむすめは、藤吉郎のもとに送り出してのち、二十九歳のいのちを絶った。

お市母子は藤吉郎によって、無事に信長のもとに送り届けられた。が、万福丸はやがて捕らえられ、十月十九日、磔殺された。亮政以来、三代にわたって江北に覇を唱えた浅井氏も、朝倉氏に遅れること僅か八日で滅亡した。

しかし、浅井氏の血脈は、なお戦国の世にひと騒ぎ起こしたばかりか、徳川氏の血脈に入り

込んで、長く後世まで残ることになる。

すなわち、長政の長女の茶々は、のちの秀吉の側室淀殿（淀君）となって秀頼を産み、久しく家康の悩みのたねとなる。次女の初（常光院）は、京極高次の室となっての平穏な生涯。もっとも幸運だったのが三女の小督（崇源院）であろう。徳川二代将軍秀忠の正室になって、千姫や、三代将軍となった家光らを産んだ。つまり徳川時代を通じて、浅井の血脈は絶えることがなかったのである。

余談はさておいて、信長は小谷城内で行なった戦後処理で、近江小谷城での藤吉郎の先陣働きに報いて、旧浅井領の江北六郡三十九万石のうち、三郡十八万石を与えて、小谷城主に抜擢した。先に江南を与えられて坂本城主となった明智光秀に次いで、信長が直命によってつくった城主大名の第二号ということになる。

「きさまも一城の主となったからはもう、猿呼ばわりもなるまいな。といって木下藤吉郎秀吉では、ちと軽い。もそっと大名らしい姓にせねばなるまいが、さて、何とするかな？」

と小頸を傾げた信長に、藤吉郎は申し出た。

「勝手ながら、姓は丹羽どのの一字、柴田どのの一字を頂戴して、羽柴といたしとうございます」

信長は吝嗇でそうしていたわけではなく、戦いに明け、戦いに暮れるあわただしさの中にあって、まだ家臣たちへの分与を考えている暇もないまま、これまでに得た約三百万石を直轄領にしていた。

当然、城持ち大名になるべき柴田勝家、丹羽長秀、佐久間信盛といった重臣も、城持ち大名の形にはなっていなかった。藤吉郎は手放しで喜ぶまえに、それら先輩たちの妬みを警戒したのである。

「丹羽と柴田から一字ずつか？　きさまらしくもない安直な発想だな」

信長は苦笑いをしたが、藤吉郎は真面目に答えた。

「いえいえ、ご両所の豪勇にあやかって、拙者も織田家に羽柴ありと言われるほどの武将になろうと存じます」

その場に居合わせて、難しい顔をしていた勝家や長秀も、思わず頬の肉を弛めた。満座の中で豪勇を讃えられて、悪い気はしなかった。

（いやはや、よく智恵のまわる男。わしに、あの真似はできぬな……）

利家はそんなことを考えながら、勝家と長秀、そして信長と藤吉郎の顔を、そっと見まわしていた。

さすがに信長も、藤吉郎の気遣いに気づいたようであった。

「羽柴藤吉郎秀吉か……うむ、わるくないな。丹羽、柴田同様、よく励めよ」

「はい、精いっぱい勤めますでございます」

藤吉郎は、信長に礼を言ったあと、忘れずに長秀と勝家にも、

「勝手に拝領させていただきました。なにとぞよろしくお願いいたす」

と、丁重に挨拶した。

その後まもなく筑前守に任ぜられて、藤吉郎は羽柴筑前守秀吉となった。そして、信長の許しを得て、不便な山城の小谷に代わる城を、琵琶湖の東畔、今浜に築き、城の名を長浜城と付けた。城下町も当然、今浜から長浜と変わった。

やがて秀吉は、故郷尾張の中中村から母のなかを、岐阜から妻のねね、妹のややとその夫の浅野弥兵衛を長浜城に呼んだ。

ねねは、出発前、利家夫妻に別れの挨拶に来た。

「おねねさまも、いよいよ御台所さまでございますなあ。ご出世、おめでとうございます」

と言うまつに、

「わたくしは岐阜にいて、おまつさまと勝手なおしゃべりをして暮らすほうが楽しゅうございます。お城暮らしは、きっと窮屈でございましょう。わたくしはあまり気がすすみません」

ねねは、ほんとうに鬱陶しそうに言った。

長篠の合戦

(一)

浅井氏の滅亡によって、琵琶湖の東に、北から南へ連なっていた邪魔な壁を突き崩すことができた。だが、信長に休む暇はなかった。

京都から追い落とした足利義昭を匿って、敵対行動を露にしてきた三好義継を、そのままに捨ておくわけにはいかなかった。

十一月四日に上洛して、二条の妙覚寺に陣を置いた信長は、丹羽長秀、佐々成政、それに利家らを将として、河内若江城に出兵した。

淡路、阿波、讃岐あたりからの援将、援兵はあったが、数は知れたもの、織田勢の激しい攻撃に、義継は手も足も出なかった。義継は妻子を自分の手で刺殺し、腹十文字に掻き斬って死んだ。

一味した将兵をことごとく討って、信長が岐阜に戻ったのは十二月二日だった。

この河内従軍ちゅうに、利家は母（法名・長齢妙久大姉）を失った。

明けて天正二年（一五七四）正月元日、信長は岐阜城に集まった諸将と年賀の祝盃を交わし

たが、宴も酣となったとき、

「さて、きょうは珍しい馳走をしよう」

信長は子小姓に命じて、黒塗りの箱を広間に運ばせた。

箱から取り出したのは、黒漆を塗った上に金箔をかけた三個の髑髏であった。滅多なことには驚かない諸将も、気味わるそうな顔をした。そういう顔をおもしろそうに眺めながら信長は言った。

「これは朝倉義景、浅井久政・長政父子の曝し頭じゃ。武将の酒盃として、これ以上のものはあるまい」

これを、信長の戦国武将らしい趣向と考えるか、茶目っ気と見るかは、読者のご判断におまかせするが、あまり気味のいい話ではない。信長という人、自分を苦しめた者に対しては殊に凄まじい報復を行なっているが、その心奥に生来持っていた狂的なものを、激しく表面にあらわすようになったのは、この頃からだと説く歴史学者もいる。

「さあ、これを肴に存分に飲むがよい」

と、信長が髑髏杯を受けるよう、第一番に指名したのは筆頭家老の柴田勝家、次が利家、つづいて秀吉であった。この順位は当時の信長の家臣に対する勤務評定に拠るものと考えられる。信長は秀吉を高く買ってはいたが、より高く利家を評価していたのである。

利家は先に髑髏杯を手にした勝家に倣って、平然と口をつけはしたが、飲む酒はひどくにがいものに思った。

さて、信長は長く正月気分に浸ってはいなかった。

（ことしも忙しい年になるな。まず目障りな本願寺顕如を何とか始末せねばなるまい）

と考えていた。

しかし、顕如は難敵であった。本拠石山本願寺が堅塁であるばかりではない。その勢力は紀伊、四国にかけては瀬戸内海賊（水軍）に及び、北陸は加賀、東海では三河、伊勢に及んでいる。しかも、来世の倖せのためには、今生の苦難など何ほどのこともないと考えている宗徒の団結力は強靱で、侮りがたい戦闘力を持っていた。

（彼らの始末には、どこからどのように手を付けるのがよいか？）

決断がつかぬまま、信長は春から夏にかけて戦備の強化に努めていた。

利家の妻まつが、四女の豪を産んだのは、そうした時期であった。

まつの腹がまた大きくなった頃、誰から聞いたか秀吉は利家に、

「おまつどのは、またおめでたじゃそうなな」

と話しかけてきた。十八万石の大名羽柴筑前守になっても、秀吉は利家には、時どきは尾張言葉でしゃべった。

「種子が悪いか、畑がわるいか、ねねにはいっこうに子ができん。そこでじゃがのう、今度おまつどのが産みゃあたお子、男児でも女児でも、拙者がもらい受けたい。このとおりじゃ、お頼もうす」

と、秀吉は手をついて、齢に似ず髪の薄くなった頭を下げた。

実際に豪は誕生して間もなく羽柴家にもらわれていった。ねねの寵愛のもと、美しい姫に成長し、後に宇喜多秀家の正室になった。

それはさておいて、信長は一向宗徒のうち、かつて自分を苦しめた伊勢長島の一揆の再討伐に真っ先に乗り出すことにした。

本願寺の救援を不可能にするため、佐久間信盛を西上させ、明智光秀らに協力させて、大和、摂津などの一向宗徒の拠点を攻撃させた。陽動作戦であった。

信長自身は七月十二日、嫡男の信忠、弟の信包以下の諸将を率いて岐阜を発し、津島に着陣した。

長島の一揆勢は、こんども手強かった。各所の輪中を土塁として防戦し、得意な水もぐり戦術で、葦間からの出没を繰り返して、激しく抗戦した。

だが、彼らのそうした河童戦術で、にがい体験をしていた信長のほうも、こんどは対策を立てていた。九鬼嘉隆、北畠信雄、神戸信孝らの水軍に、河童どもを海上から攻撃させた。

松ノ木、小木江……と、一揆勢を攻め立てた織田勢は、大鳥居砦の攻撃では、初めて大鉄砲を用いて砲撃した。

さすがの一揆勢も震え上がって降伏を申し入れたが、信長は「うん」と言わなかった。一揆勢は八月三日の夜、折からの風雨に乗じて砦からの逃亡を図った。が、待ち構えていた織田勢は、男女千余人を捕らえて皆殺しにした。

十二日には強硬だった篠橋砦が降伏した。

「大鳥居の者らのようになりたくないなら、長島陣中に入って寝返って手引きせよ。それを承知なら、きさまらは見逃してやる」

と言い渡して、みなを逃がしてやった。

信長は寝返りはともかく、篠橋の宗徒を送り込むことで、すでに輸送路を断たれて食糧に困り始めている長島を、いっそう困らせてやろうと考えたのである。

こうして八月二十七、八日までの半月余り、織田勢はじっと長島を包囲していた。その間に砦に籠っていた宗徒の半数以上が餓死したというから、包囲策は成功したわけである。

一揆勢はついに降伏した。信長は先に篠橋砦から寝返りを約束して入り込んでいた者たちも用捨なく、川岸に追いつめて殺し、船で逃げ出した者は銃撃して殺した。

憤激した七、八百人の宗徒は、裸のまま信長の本陣を襲って、織田一門の信広、信成、信次と、多くの将兵を殺傷した。

怒り狂った信長は、残る中江、屋長島の砦を取り囲ませ、四方から火を放った。砦にいた男女二万人の宗徒のことごとくが焼き殺された。

(二)

信長はこのさい一気に、加賀、越前の一向一揆の壊滅を、さらに顕如の本拠石山本願寺の討滅を……と考えていた。

が、顕如のほうが早く手を打っていた。流浪の元将軍足利義昭に働きかけて、

「――一日も早く上洛して、顕如と協力して、わしの帰京を図ってもらいたい」

といった御教書を、甲州の武田勝頼に送らせた。

効果のほどは疑わしかったが、万が一にも勝頼が動き出してくれたら、その間、信長は一向宗徒弾圧から手を引かざるをえない、反対に顕如は一揆の戦力強化を図ることができると踏んだのである。

御教書の効果はあった。

天正三年（一五七五）四月二十一日、武田勝頼は老臣たちの諫止も聞き入れず、軍勢一万五千を率いて甲府を発ち、信州を経て三河に入ると、本陣を医王寺山に置いて長篠城を包囲させた。

長篠城はいまの豊川市の北東六里（約二十四キロ）にあり、寒狭川と宇連川が合流して豊川となる、V字形を成した険阻な崖の上にあった。

もとは、この辺りまで勢力を張っていた今川氏の部将の築いた城だったが、今川氏の衰亡後は、武田氏と徳川氏の奪い合いになって、取ったり取られたりを繰り返してきた。この頃の城将は、武田方から徳川方に寝返った奥平貞昌であった。

城兵は僅か五百人だったが、勇敢に戦って、容易に武田勢を寄せつけなかった。しかし、五月十七日、一時的に食糧倉を占領されて、保有していた食糧の全部を持ち去られてしまった。

武田勢が包囲に入る直前、奥平貞昌は徳川家康に救援を頼む使いを出していた。しかし家康からの返事はまだなかった。そのうえ、食糧倉を空にされたのである。城内に残った食糧全部

を掻き集めても、あと四、五日分ほどしかなかった。

「どうやら、わしらは徳川どのに見捨てられたようだな」

「かくなっては、腹を空かしてふらふらになって降伏するより、すぐにも打って出て、華々しく戦って死ぬべきだ」

よく戦ってきた城兵たちのあいだにも、さまざまな混乱が生じてきた。そんなとき、ただ一人、

「わたくしめが城から脱出して、岡崎に行き、救援を急ぐよう、徳川どのにお願いして参りましょう。みなさまは今しばらく辛抱して、お城をお守りください」

と申し出た者がいる。鳥居強右衛門勝商であった。勝商は身分の軽い足軽だったが、この辺りの生まれで、地理によく通じていた。ふだんのときなら、

「足軽の分際で、出過ぎたことを……」

と一笑するか、叱りつけるところだったが、奥平貞昌も藁にもすがりたい気持ちであった。

「よし、そのほうに頼もう。しっかりやってきてくれ。だが、万一ということもある。言い遺すことがあれば聞いておこう」

と、貞昌は言った。

「わたくしめには、母と一人の伜がございます。こののち、殿がご運をお開きになりました暁には、ふたりのこと、よろしくお願い申します」

とだけ強右衛門は答えたと『総見記』にある。

五月十四日、夜更けを待って、強右衛門は城の裏手から脱け出した。暗闇の中、険しい崖を下りて、ちょうど寒狭川と宇連川がぶつかり合う辺りから、豊川の急流に飛び込んだ。

武田方では、脱出されない用心に、豊川の水中に幾条もの綱を張って、それに触れれば鳴子がガラガラと鳴るように仕掛けをしていた。

強右衛門は、一、二度、綱にひっかかった。ガラガラという鳴子の音に胆を冷やした。だが守備兵たちは、たびたび川魚が綱にかかって、そのたびに川中を引っ掻きまわす騒動をしていたから、

（どうせまた、魚であろう）

と思って、見にも来なかった。

お陰で途中、何事もなく、強右衛門は十五日の夕方には、岡崎に着いた。

「奥平は、よい家来を持ったのう」

強右衛門の報告を直接聞いた家康は、感動した。

「明日は織田（信長）どのが、援軍を連れてここに参られる。わしもいっしょに発つつもりだ。そのほうも疲れておろう。今夜はここで体を休めて、明日いっしょに参るがよい」

「ありがたいお言葉でございますが、このこと一刻も早く、城内の者に知らせて、喜ばせとうございますから……」

と、強右衛門は、その夜のうちに帰途に就いた。長篠近くでは、城を包囲する武田勢の陣中に、何くわぬ顔をして紛れ込んだ。機会を見て脱走して城内に駆け込むつもりだったが、敵も

そう甘くはなかった。

「見たこともない怪しいやつ」

と、つまみ出されて、直接、勝頼の取り調べを受けた。

強右衛門は、正直にこれまでのことを話した。明日は徳川・織田の連合軍が岡崎を出陣することも話した。そう言えば自分は殺されるだろうが、勝頼もあわてて城の囲みを解いて引き揚げるだろうと思ったからである。

だが、勝頼もさる者、家康ばかりか、信長までが救援に駆けつけると知って驚きはしたが、それはおくびにも出さず、

「ささまほどの勇士を殺してしまうのは惜しい。わしの家来になれ。必ず重く用いてとらせる」

「……」

「その代わり、長篠城のやつばらには、救援は来ぬ、ただちに降伏しろと伝えよ。どうだ、やるか」

「はい。仰せのとおりにいたしましょう」

強右衛門は、しおらしく頭を下げた。

勝頼は、長篠城とは宇連川を隔てて向き合った崖の上に、強右衛門を連れだした。十六日の朝陽を浴びて、懐かしい城は手を伸ばせば届きそうな距離にあった。

城兵たちは、早くも強右衛門の姿に気がついた。

「あっ、強右衛門だ！」
「可哀相に、捕まってしまったか」
大勢が悲痛な顔を城壁の上に突き出した。
「さあ早く、援軍は来ぬと言ってやれ」
と、背中を小突かれた強右衛門は、宇連川の川音を打ち消すような大音声を張り上げた。
「三日のうちには、徳川・織田の大連合軍が援けにくる。もう少しのご辛抱じゃ。しっかり戦いなされや！」
早口で、しかし、はっきりと解るように叫んだ。
「うぬっ、この嘘つきめがっ！」
甲州兵は、あわてて強右衛門を殴り倒した。
が、もう手遅れであった。長篠の城兵たちは、
「わあーっ！」
「強右衛門、ご苦労じゃった！」
「ようやったぞ！」
と歓声を上げた。
「強右衛門大明神さまだ。ありがとう、ありがとう！」
と、手を合わせて拝む者もいた。
腹を立てた勝頼は、強右衛門を有海ヶ原に引き立てて磔殺した。

のちの話だが——家康の家来の落合佐平次は、強右衛門の忠節と勇気を、戦場における自分の心構えにすると言って、強右衛門磔刑の図を描いて旗差物に用いた。

(三)

強右衛門が、有海ヶ原の露と消えていった頃、信長は三万余の援軍を率いて岡崎を出発した。
五月十七日には、家康の率いる軍勢と合体して野田ヶ原にすすみ、十八日には、長篠の北方一里半（約六キロ）にある設楽ヶ原に陣をしいた。
設楽ヶ原での織田軍は、豊川の支流の連子川に沿って陣をしき、陣の前には空濠を掘らせ、掘り上げた土で土塁を築かせた。それだけではない。さらに、諸所に出入りのための木戸をつけた三重の木柵をつくらせた。
信長はこの時代の武将ではもっとも早く、武器としての鉄砲の優秀性を認めて、近江の国友村や、堺の鍛冶屋に注文して鉄砲を買い集め、鉄砲隊を編成していた。
ただ当時の鉄砲は先込式銃だから、銃口から火薬を入れ、カルカと呼ぶ棒で銃の底まで押し込み、さらに鉛の銃弾を同じようにして押し込む。それが終わったら火皿に発火用の火薬を入れて、火縄で点火する。火は火穴をつたって銃の底に詰めた火薬を爆発させ、その爆発力で銃弾を飛ばす。
こんなふうに説明しただけでもわかるように、相当熟練した者でも一発の銃弾を撃つために

は、口の中でゆっくり二十かぞえるくらいの時がかかった。これが当時の鉄砲の欠点だった。

その欠点を補う方法を考え出したのも信長であった。信長は、武器としての鉄砲の優秀性、自分が考え出した鉄砲戦術の効果を、この設楽ヶ原の戦場で実証してみようと思っていた。

そのために、信長は三万の軍勢の中に、鉄砲を持った足軽三千人を加えていた。それを三個の部隊に編成して、第一列の千人部隊が射撃を行なうあいだに、第二、第三の部隊がすぐ射撃できるように銃弾・火薬をこめて待機するのである。

三部隊が入れ替わり、立ち替わりして射撃することによって、弾ごめや火薬ごめにひまがかかるという、当時の鉄砲の短所を補い、後世の機関銃ほどにはいかないまでも、切れ目なく撃ちつづけることができるようにした。

織田鉄砲隊の指揮には、前田利家のほか、佐々成政、福富秀勝、塙直政、野村三十郎らが当たった。これに倣って徳川鉄砲隊も、大久保忠世・忠佐兄弟らを指揮官として三段構えにした。

もちろん、武田勢も鉄砲を持っていた。だが、信長のように効率よく使うことは思いついていなかった。何よりも勝頼は、勇猛果敢をもって天下に鳴り響いていた武田騎馬隊に頼っていた。

医王寺山の勝頼の本陣では、信玄以来の重臣馬場信房、内藤昌豊、山県昌景らは、織田・徳川連合軍の布陣を遠望して、

「敵の備えは相当に堅うござる。こんな場合、信玄公ならひとまず退却して、敵に追尾させられます。そして、敵を地理不案内の伊那谷の奥に誘い込んだうえで、存分にたたきのめされたでしょう。この際、やはりその手を用いるがよろしかろう」

と進言した。

しかし、勝頼は従おうとしなかった。何ぞといえば父の名を持ち出して、自分を軽視する重臣たちに反感を持っていた。ここで自分の采配による見事な勝ちぶりを見せて、彼らをあっと言わせてやろうとも思った。

勝頼は二十日には長篠城の包囲を解いて、一万四千の本隊を、長篠城の南西の清井田原へ移動させた。

『信長公記』に、もし勝頼が鳶ノ巣山にのぼって軍陣を構えたら、織田方もどうしようもなかっただろう……とあるが、信長は、清井田原に移動する武田勢を眺めて、

「勝頼めは、やはり信玄ほどの名将ではないわ。こっちが仕掛けた罠に、自分のほうから嵌りに来よった」

と喜んだ。

清井田原に押し出した勝頼は、そこが一万四千の大軍をとどめるには不適当だと気づいた。狭すぎるのである。ここでは自慢の騎馬隊を縦横に駆けさせ、十分に働かすことができない。

結局、信長の思う壺に嵌って、設楽ヶ原へと繰り出した。

合戦は、二十一日早朝から始まった。

武田勢は騎馬隊を先頭に立てて、たびたび突撃した。

織田・徳川連合軍は騎馬隊が近づくと、それまで布陣していたところから退いて、さっと木柵の中に入って、出入りの木戸をぴしゃりと閉めた。

突進してきた騎馬隊は、空濠を飛び越えたものの、木柵を飛び越すことはできなかった。馬は木柵のあいだに鼻面を突っ込んで、うろうろする。

そこを狙って、連合軍の三段構えの鉄砲隊がガンガン銃弾を撃ち込んだからたまらない。馬も、騎乗の武士も、ばたばたと倒れていった。

(なるほど、鉄砲も使いようだな)

威力の凄さには、指揮に当たっていた利家も驚いた。

(これからは、織田の殿が仰せられていたとおり、鉄砲の時代だな)

と痛感した。

後年、前田家で異風組――前田家では鉄砲隊をそう呼んだ――の増強に努め、領内となった飛騨と越中の境の五箇山地方で、黒色火薬を製造するに欠くことのできない硝石の製造に力を入れたのも、このときに利家が受けた痛感がもとになっている。

長篠の戦いは信長の作戦勝ちであった。合戦を開始して四時間で、連合軍の勝利は決定的となった。

武田勢は一万人以上が戦死、または行方知れずになって、甲州に戻った者は僅かに三千人であった。武田方の戦死者は弓矢や刀槍で死んだ者より、銃弾に当たって死んだ者のほうがはるかに多かった。

「戦いには鉄砲」という、新兵器の時代の到来だった。

(四)

勝頼の止めを刺すことは家康に任せて、岐阜に帰った信長は、二ヵ月間の休養後、八月十二日に岐阜を発って、再度、越前に向かった。

先に朝倉義景を討ったあと、信長が越前の支配者に起用しておいた前波長俊、富田長秀を殺し、逆に石山本願寺が派遣した下間筑後法橋頼照を守護代と仰ぎ、わがもの顔に振る舞っている一向宗徒を征伐するためだった。

二ヵ月間の休養……と書いたが、その間、秀吉と利家は休養を取っている暇はなかった。海上、陸上の調略を、信長に命ぜられたからである。

秀吉は例のように蜂須賀党と、その与党を使って、三国港(坂井郡)の有力な回船問屋森田三郎左衛門、神波七兵衛らを誘い込んで、海戦力を確保した。

利家も姫ノ八蔵・トラ父娘の一党を使った。

姫トラは利家と同年だから、もう二十八の姥桜。だが独身を通していまも厳しい修練の日々を送っているせいか、小柄で引き締まった躰をし、いまだに二十と言っても通るくらい、邪気のない乙女顔をしていた。おやじの八蔵も、とても六十歳の老人とは思えない機敏な行動力を持っていたが、

「わしもそろそろ退き時じゃ。こんどが最後のご奉公のつもりで働きますじゃ」

と、ちょっとさびしそうに言って出かけていったが、トラは、

「わっちらも働くが、お犬さまもこんどは荒子などより、もっと大きな城持ちになるほど働いてくだされや。猿面どの（秀吉）などに先を越されたお犬さまが、わっちには歯痒うてならん」

と、いまいましそうに言い残していった。

この姫の一党は、よく働いた。一揆側についていた堀江景実、朝倉孫四郎、大井四郎らの国人層を寝返らせたばかりか、顕如に対抗する一向宗別派の高田派、三門徒派、それに日蓮宗徒らに働きかけて、各郷各村の有力者を信長の協力者として誘い込むことに成功した。

それとは知らない一揆勢の総大将下間頼照は、織田勢迎撃の第一線、木ノ芽峠と杉津口の天険のうち、杉津口守備の指揮を、寝返りを決めていた堀江景実に命じた。

景実は戦わずして、織田勢を引き入れた。

鉢伏、虎杖、今庄、燧石、府中龍門などの寺院や、砦には、それぞれ多くの坊主衆、農兵が集まって気勢を上げていた。が、侵入した織田の総兵力が十万五千余と聞いただけで、多くが逃散してしまった。

八月十五日から始まった織田勢の攻撃で、一揆勢は拠点を次々と焼かれて、総崩れとなった。

信長は京都奉行、村井貞勝に送った書簡の中に、

「――府中町は死骸ばかりにて、一円のあき所なく候。見せたく候。今日は山々谷々尋ね捜して打ち果すべく候」

といったことを書いたが、『信長公記』の記事が、そのことを裏付けている。

「――方ぼうから生け取りにして差し出された敵兵併せて一万二千二百五十余人、信長は、お小姓衆に命じてこれを殺させた。……生け捕りと殺された分を合わせると、三、四万人に及んだ……」

とある。

この殺戮には利家も関与している。彼の手勢が生け捕ったのは、もっとも手強い抵抗をした宗徒一千余人であった。当然、信長は極刑を命じた。躊躇を見せた利家に、信長は言った。

「仏のほかに怖い者なしの一揆の鎮圧は、情を持ってはできぬぞ、鬼にも蛇にもなれ。……それはまた、われらを狙って虎視眈々たる越後（上杉謙信）への示威にもなる。謙信はおのれを軍神毘沙門天の化身と信じているそうな。が、わしには、阿弥陀仏も、毘沙門天もない、と思い知らせておかねばならぬ。……解ったか利家！　解ったらすぐ極刑を行なえ！」

（殿の仰せのとおりかもしれない……）

一揆勢の、狂った山犬にも似た凶暴・執拗をたびたび目にし、苦戦してきた利家である。思い切って生け捕った一千余人を磔、釜煎りといった残酷な刑に処した。

一揆の総大将下間頼照は乞食に身を窶して、三国港から秘かに加賀への脱出を図った。だが、途中、高田派の門徒に変装を見破られ殺された。首級は柴田勝家のもとに届けられた。

越前の一向一揆に殲滅に近い打撃を与えた織田勢は、さらに加賀に攻め込んで能美・江沼二

郡を席捲し、信長自身も出陣して、大聖寺、檜屋に砦を築かせた。

その後、信長は越前に引き揚げて、九月二日、北ノ庄で北国戦の論功行賞を行なった。

柴田勝家を、越前五十万石を総括支配する守護に任じて北ノ庄に拠らしめ、大野郡五万石は金森長近（三万石）、原長頼（二万石）に分けて所領させ、南条・今立二郡十万石を、利家、不破光治、佐々成政に三分して与えた。

利家は姫トラの願いどおり、尾張荒子の所領六千百二十五石に加えて、計三万九千四百二十五石を有する大名としての第一歩を踏み出した。差し当たっては、府中龍門寺を仮陣としたが、やがて府中城に入城した。

利家・光治・成政は、「府中三人衆」と呼ばれ、柴田勝家と協力し、ある場合は競い合って、信長から与えられた治政上の掟に準じた北国経営に努めた。信長が彼らに与えた掟は、九ヵ条に及んでいた。

――領民に不法な課役を申し付けるな。

――地侍たちを気ままに使うことなく、親切に扱え。だが帯紐を解くように気楽にしてはならぬ。用心して、気遣いをしてやれ。

――訴訟に対する裁判は道理に従って、公平に行なえ。

――京都の公家たちには、争乱以前の知行地を返還してやれ。

――わしの他の支配地同様、越前でも関所を廃止せよ。

――油断なく武事を重んじて、武具、兵糧などは五年分、十年分を蓄えよ。したがって貢納はきちんと行なわせよ。子どもを可愛がらせ、賭博類、物見遊山などは禁止せよ。

――特別の場合以外、鷹狩りをしてはならない。

――常に二、三ヵ所は所領者のない土地を残しておけ。どんなに忠節を励んでも、もらう土地がないということでは、誰しも勇気、忠義心が浅くなるものである。

こうした条々のほとんどに、解らないことがあったら自分（信長）に相談せよ、と注意書きが添えてあった。

戦場における、あくまで冷徹、無慈悲、ときに狂ったかとも思えるほど残酷な武将信長の、優れた政治家としての面を窺わせる掟である。

（殿のこのへんのところを、よく学んでおくことだな）

利家は掟の九ヵ条を何度も読み返して、そう思った。

能登一州を領す

(一)

天正四年（一五七六）を迎えて、信長は丹羽長秀を普請奉行にして、近江安土（蒲生郡）に新しい城をつくり始めた。

安土築城は俄に思いついたことではない。僚友の徳川家康と、東西二分を約束したときから、いずれ近畿全域から中国・四国・九州までも攻略するためには、岐阜は根拠地として東に偏りすぎていると思っていた。

ほんとうなら一気に大坂の石山本願寺を攻め取って、そこに壮大な城をつくりたかった。が、顕如が強大な宗教集団に支えられて頑張っている限り、そうもいかなかった。

一歩下がって近江の何処かに……と、土地探しをさせた結果、現在の安土町の北にある安土山（標高一九九メートル）を選定したのだった。

築城のためには、京都・奈良・堺などから腕のいい大工・石工、その他の職人三千人を集め、長秀、秀吉、滝川一益らに一万余人の労働力を提供させて、昼夜兼行で急がせた。

規模壮大で、華麗に装飾され、わが国の城で初めて天主（閣）を持った七層の安土城が完成するのは、三年後の天正七年五月十一日である。

が、信長は、その前年、天正三年一月に、家督を譲った嫡男信忠を城将として岐阜城に残すと、二月二十二日に、あらまし本丸の造営なった安土城に移った。

背後に観音寺山、前面はるかに琵琶湖、北に愛知川、南に日野川。あとは一望の平原と、水溜りのように可愛い湖沼を幾つか抱いた湿原であった。

「ふむ。眺めもすこぶるよい。城下も町づくりに向いている。ここを選んでよかった。いまに京都以上のみやこにして見せるぞ。きさまたちも麓のよい場所を選んで早く邸をつくるがよい」

移転の手伝いに来ていた諸将に、信長は上機嫌で言った。だが、信長には、ここにじっと坐り込んで、完成していく城をのんびりと眺め、楽しんでいる暇はなかった。

越前の一向一揆が殲滅的な打撃をこうむって以来、しばらく鳴りを潜めていた石山本願寺の顕如が、四月になって、三たび反信長の兵を挙げた。

鳴りを静めているあいだ、ただおとなしくしていた顕如ではない。紀州雑賀から、鈴木孫一重秀を首領とする鉄砲の上手で知られる雑賀門徒を応援に呼ぶほか、中国の毛利氏、越後の上杉謙信、甲斐の武田勝頼らに助勢を依頼して、頃はよしと、自信を持って起ち上がったのである。

信長は越前の柴田勝家に出兵を命じて、近江に通う北国街道の守備に就かせ、明智光秀、細川藤孝、原田直政、荒木村重、筒井順慶らを石山攻撃に差し向けた。

一向衆に帰依する武士も多く、一揆勢の抵抗は強烈だった。摂津三津寺の戦いでは、原田直政が戦死し、四天王寺の戦いでは明智光秀が退却した。

五月五日、信長は自ら出陣した。本隊はさすがに勇敢だった。四天王寺の一揆勢を討伐し、すすんで石山本願寺を包囲した。雑賀門徒、三津寺、四天王寺から逃げ帰った一揆勢を、いっぱいに詰め込んだ石山である。

(たちまち食糧難に陥るだろう。包囲にそう日はかかるまい)

と、信長は考えた。

だが、かねて顕如から助勢を頼まれていた毛利輝元が、同族の元清や、西国の諸大名を誘って、備後の鞆ノ津にいた足利義昭を奉じて「反信長」に踏み切った。

義昭など信長から見れば、よいよいになった元将軍だったが、西国の田舎大名から見れば、まだ足利十五代将軍であり、信長の無法に追われたお気の毒な人であった。

輝元は勢力下にあった大島(能島)、来島、因島などの海賊衆の軍船八百艘に、食糧・兵器・銃弾などをいっぱい積んで、木津川口から石山に送り込んだ。

織田水軍も大型の軍船十隻を中心に、数百艘の小船で、侵入の妨害を図ったが、海上戦に馴れた瀬戸内の村上水軍、乃美水軍には敵わなかった。織田水軍はすべての船を焼かれたうえに、数百の将兵が戦死した。

「織田勢、大敗!」

の報は、諸大名が放っていた諜者たちによって、たちまち四方に拡がった。

(わしの出番が来たな)

と思ったのは、義昭から御教書を、顕如からは救援の嘆願状をもらっていた越後の上杉謙信であった。謙信は加賀、越前の一向一揆と連合して、ついに起ち上がった。

利家は、姫トラの通報でいち早くそのことを知った。

信長は石山で苦戦、柴田勝家は近江に出向いている。

(わしと不破、佐々の府中三人衆、それに金森長近、原長頼を加えた越前五人衆だけで、何としても、上杉勢の前進を阻止せねばならぬぞ)

利家は奮いたちもしたが、

(何しろ相手は、おのれを軍神毘沙門天の化身と信じている謙信であり、毘沙門を守護する鬼神軍団といわれる越後勢である。わしにも死花を咲かすときが来たということかもしれぬな)

と、身震いもした。

「毘」の一字を大書した旗をなびかせた上杉勢は、越中をひと揉みにすると、倶利伽羅峠を越えて能登に侵入した。

十一月十七日、折から降りしきる雪を衝いて、謙信は七尾城を攻撃した。七尾城は能登の守護大名畠山氏の居城であった。が、時の城主春王丸は、まだ四歳の幼童、しかもそれに仕える重臣たちは、たがいに勢力争いに明け暮れていると噂されていた。

謙信は簡単に降伏させられると考えていた。が、これは見込み違いであった。抵抗は頑強だった。そう短時間で片づかないと考えた謙信は、迫る酷寒の季節を思い、あまり長く郷国を留

守にすることに不安を感じて、一旦、引き揚げることにした。

見込み違いをしたのは、石山攻めにかかった信長も同じであった。食糧不足で短期間に音を上げるだろうと思った一揆勢は、毛利水軍による食糧・弾薬の補給で、一段と勢いづいた。雑賀鉄砲隊の正確な狙い撃ちは信長軍を苦しめた。信長は謙信のように引き揚げはしなかったが、包囲の長期化をやむなくさせられた。

そうこうしているうちに年も改まって天正五年（一五七七）、北国では閏七月、上杉謙信が九千の軍勢を率いて再び能登に入り、天神河原に布陣して、七尾城攻めにかかった。

まだ喪は伏せてあったが、幼君春王丸は城内に蔓延した疫病に罹って死んでいた。重臣の一人、長続連は、一子好運（のちに連龍）を秘かに城外に落として、信長に援軍を求めに行かせた。

だが、重臣団の筆頭遊左継光が抗戦派の長一族を皆殺しにして、九月十四日の未明、七尾城を謙信に明け渡してしまった。

霜は軍営に満ちて　秋気清し
数行の過雁　月三更
越山併せ得たり　能州の景
遮莫あれ　家郷　遠征を憶う

謙信の有名な「九月十三夜」の詩は、この夜の作といわれている。

一方の信長は、七尾城を脱出して駆けつけた長好運の援軍依頼に応じて、まだ石山本願寺の

始末もつけられず、紀州の雑賀・根来に起きた一揆勢との戦いもありという苦しいなか、柴田勝家を総指揮者として、利家ら越前五人衆のほか、秀吉、丹羽長秀、滝川一益らを、七尾城救援に差し向けた。

勝家らは富樫（石川県加賀市）、安宅（小松市）、小松などを経て、手取川を渡って陣をしいた。

ここで七尾城がすでに謙信の手に落ちたことを知った。勝家はしかし、苦しい手の中から大軍を割き与えた信長の義心を活かすためには、すすんで越後勢と戦って追い払うべきだ、と律儀に考えた。それに対して、

「七尾が開城しては、われらの役は終わったのです。こんなところにぐずぐずしていて、謙信の思う壺に嵌るのは莫迦々々しいこと。無駄ないくさで兵を失いたくはござらぬ」

と、秀吉は異を唱えて、兵を連れて勝手に長浜に帰ってしまった。

秀吉が言ったとおりで、北国の織田勢は十八日、越後勢とこれに協力した加賀一揆勢に、散々に討たれて敗退し、それまでに加賀に築いていたすべての拠点（城・砦）を、謙信に奪われてしまった。

だが、謙信が、

野伏する鎧の袖も楯の端も
みな白妙のけさの初雪

と詠じたように、北国はすでに寒冷な季節を迎えていた。勇猛な謙信にも弱点が一つあっ

た。痔疾に悩んでいたのだ。

退却する柴田たちを深追いせず、越後に引き揚げた。が、謙信は上洛の志を捨ててしまったわけではなかった。

天正六年（一五七八）の雪解けを待って、謙信は信長と対決するつもりだった。しかし、天は武田信玄に味方しなかったと同様、謙信にも味方しなかった。

出陣の日を五月十五日と決めていたが、十一日、厠で突然に倒れて意識を回復しないまま、二日後の十三日未の刻（午後二時）、息を引き取った。四十九歳であった。毘沙門天の化身と称して、生涯、女色を近づけず、清僧のように暮らした謙信が愛したのは酒で、相当な大酒豪であった。その突然の死は虫気（脳出血）によるものであった。

信玄の死後、勝頼によって、甲州の雄、武田家は衰微に傾いていったが、上杉家も謙信の死後、北条氏康の子を養子にした景虎と、一族の長尾政景の子を養子にした景勝とのあいだに後嗣を争ういわゆる「御館の乱」が起きて、結局は景勝が勝って家督を継ぐが、もう信長を脅かすほどの存在にはなりえなかった。

(二)

話を少々あと戻りさせて……天正五年八月十七日、松永久秀・久通父子は、本願寺の顕如と通謀して、突然、大和信貴山城（生駒郡平群町）で、「反信長」の旗揚げをした。が、策謀に策謀を重ねて、戦国乱世を渡ってきた怪物久秀も、押し寄せた織田の大軍に敵うわけがない。

十月十日、かねがね信長が欲しがっていた茶道具「平蜘蛛」を叩き毀すと、城に火を放って自刃した。六十六歳だった。

その後の十月二十三日、信長は、本願寺の顕如を援助する、毛利輝元一族の勢力圏内にある中国討伐の先鋒を、秀吉に命じた。

秀吉が能登の手取川から、謙信の越後勢との戦いをまえにして「援助する七尾城が開城してしまっては、もはや使命は終わった」と、勝手に近江に帰ってしまったあとで、それと知った信長は激怒した。残留した柴田勝家たちが苦戦し、敗走したこともあって、

「禿鼠め！　あとに残った味方の難儀を思いもしなかったのか。信義を重んずる武将のすることではないぞ！」

と、手厳しく叱責した。禿鼠とは信長が秀吉に付けた渾名である。四十を越える頃から、頭髪が俄に薄くなって、「猿」は「禿鼠」に変わったのである。

信長の機嫌を損じたままでは具合がわるい。何としてもご機嫌直しをしなければならなかった。

『信長公記』に、

「――播磨国中、夜を日に継いで駆け廻り、ことごとく人質を取り固めた」

とあるように、秀吉は播磨ばかりか、但馬でも次々と毛利方の城砦を攻略、開城させていった。

やがて秀吉は、播磨ではいち早く織田家に帰属した御著城（姫路市）の小寺政職の家老小

寺官兵衛の案内で、官兵衛の居城姫路城に入り、以後、ここを中国平定の足場にした。

小寺官兵衛は、のちの黒田孝高（如水）である。竹中半兵衛重治に優るとも劣らぬ天才的な戦略家で、秀吉にはなくてはならぬ名参謀となった。それでも後年、太閤となった秀吉が如水に与えたのは、豊前中津の十二万五千石に過ぎなかった。如水は関ヶ原戦では東軍について、「黒田節」でよく知られる筑前福岡五十二万石の大守となった。

信長は、中国での秀吉の抜群の働きに満足した。北国からの勝手な退陣に対しての怒りを解いたばかりか、天正六年（一五七八）正月元日、安土城に年賀に訪れた彼に、愛蔵の「乙御前」の茶釜を褒美として与えた。

正月が過ぎて、秀吉は播磨に帰陣した。留守中の黒田孝高の働きは目覚ましかった。諸城主を説得して、播磨一国をほとんど織田方に引き入れていた。

だが二月になって、播磨の旧守護赤松氏の流れを汲む名門で、播磨八郡を領していた三木城の別所長治が、

「軽輩あがりの分際で、名家別所氏に対する扱いが軽く、横柄である」

と、秀吉に反感を抱いた後見役の叔父山城守賀資にそそのかされて、秘かに毛利氏と通謀して叛旗を翻した。

三木城の抵抗は強烈で、秀吉は満二年に亘って手古摺ったが、最後は干殺し（食糧攻め）にかけて降伏させた。二十三歳の青年城主長治は、潔く自刃した。

さて、長年に亘って信長を宗門の敵として戦ってきた本願寺の顕如だが……、顕如は信長が

着々と威勢を増大していくなかで、最後の頼みの綱にしていた上杉謙信の死を知って、一時は茫然とした。

だが何としても、宗門の敵に石山を渡すことはできない。何とかして新しい味方、援助者を得なければならなかった。全一向宗徒の協力と経済的援助を確約して、顕如が新たに味方にしたのは摂津有岡城（伊丹城）の荒木村重であった。

さる天正元年、信長は初対面の村重に、

「これを馳走しよう」

と、佩刀の切っ先に饅頭を突き刺して差し出した。

「ありがたく頂戴つかまつる」

村重は這い寄って饅頭を口で取って、むしゃむしゃと食べた。

（好漢である……）

信長はその大胆が気に入った。それ以後、一部将として愛し、重用もしてきた。村重もそれに応え、機略、剛勇を発揮して、信長のためによく働いた。

その村重が、顕如について叛旗を翻したのである。さすがの信長も、

「それは、まことか？　誤報ではないか？」

と、すぐには信じなかった。が、まことであった。村重には、いとこの茨木城主中川清秀、高槻城主のキリシタン大名高山右近と、その父ダリオ飛騨守が協力者となった。

（好漢、惜しむべし。だが、捨ててはおけぬ……）

信長みずから兵を率いて摂津に入り、十一月五日には山崎に陣をしき、滝川一益、明智光秀に攻撃を命じ、越前からは利家ら府中三人衆を呼び寄せた。

当時の四囲の状況を考えて、こんなところで戦いに多くの時を費やしていることはできなかった。信長は茶道を通じて親しくしている古田織部を中川清秀のもとに、松井友閑と宣教師オルガンチノを高山右近のもとに、また知恵者の黒田孝高を荒木村重のもとにやって、降伏を勧告させた。

中川清秀、高山右近は勧告に応じた。が、荒木村重は拒否して、使者の黒田孝高を伊丹城内の身動きもままならぬ石牢に閉じこめてしまった。高山右近の父、ダリオ飛騨守も、降伏を息子と共にせず、伊丹城に走った。

戦いをまえにして、中川清秀、高山右近を失ったのは痛手だった。だが村重は、顕如の一揆勢と毛利氏の援軍を恃みにして、頑強に抗戦した。しかし、恃みの援軍は、どこからも来なかった。

「坊主（顕如）め、裏切りおったな！」

村重は歯噛みして口惜しがったが、それでも十ヵ月、伊丹城を守って戦ったあげく、自分の妻妾、子ども、有力な家臣の妻子ら、足手纏いを城に置き去って、尼ヶ崎城に移った。

村重は信長の過激な性格を知らないわけではなかった。だが、伊丹城に残したのは、か弱い婦女子ばかり、手心は加えてくれるだろうと思っていた。信長はしかし、殊遇した村重の謀叛、頑強な抵抗に、烈火のように憤っていた。可愛さ余って憎さ百倍となっていた。村重の

妻妾、子どもたち三十六人は、京都六条の河原で斬首し、長治の妻子ら百二十八人は、尼ヶ崎城からよく見える広場で磔刑にし、村重と行を共にしなかった兵五百余人も探し出して、焼き殺した。

それを見てさすがの村重も、信長の底知れぬ恐ろしさに震え上がった。深夜、秘かに尼ヶ崎から脱出して、姿をくらました。

安芸に走って毛利氏にかくまわれていた村重が、ふたたび姿を現わしたのは秀吉の時代になってからである。もう武将ではなかった。頭を丸めて千利休の高弟道薫となっていた。茶道をもって秀吉に仕えた。なお付け加えると、後年、徳川家の命を受けて、東照宮に三十六歌仙の額絵を描き、浮世絵の元祖になった岩佐又兵衛は、村重の末子である。

また、伊丹城の窮屈な石牢に閉じこめられていた黒田孝高は救出されたが、足腰を痛めて、生涯、片足が不自由の身になった。

思いがけない荒木村重の謀叛のため、中国を一挙に征服しようとした信長の計画も足踏み状態になった代わりに、村重の失敗で頼みの綱のすべてを失った本願寺顕如が、信長に対する頑なな態度を軟化させた。

顕如は信長の奏請を入れた正親町天皇が下された勅命に従って、天正八年（一五八〇）正月三日、信長と和睦し、四月九日には宗祖親鸞上人の影像などの寺宝を奉じて、石山から紀州の鷺の森に退去した。元亀元年（一五七〇）以来、十一年の長期に亘った信長対顕如の石山合戦も、やっと幕が下りたのである。

(三)

顕如の長男の教如は、なお、信長への抵抗を止めなかった。

顕如はそのために信長の怒りを買って、石山本願寺が焼かれるようになってはならないと、教如に父子義絶を言い渡して、弟の准如を後嗣にした。

「父が何と言おうと、宗門の敵、信長を倒さではおかぬ」

と豪語する教如のもっとも強力な支持者は、加賀門徒であった。彼らの中には、信長に滅ぼされた朝倉氏の旧臣が多く加わっていて、戦闘力に侮りがたいものがあった。

――南無阿弥陀仏

と大書した蓆旗を押し立てて、他宗の寺院や門徒外の豪農を襲って暴行・掠奪をほしいままにした。

彼らの討伐に当たったのは、柴田勝家を総大将とし、佐々信政、佐々成政らが指揮を執る二万の軍勢であった。その中には先年、上杉謙信の攻撃を受けた際、味方の裏切りによって、一族もろとも無惨に殺された七尾城の重臣長続連の伜連龍もいた。彼だけは、信長に援軍を頼むため、七尾城から脱出していて助かったのである。

天正八年（一五八〇）の九月から十一月のあいだに、勝家らは、加賀ばかりか能登の一揆勢をも制圧した。

その前後、利家は府中城を嫡男の利長に預けて、越前を留守にして中国に出陣していた。姫路城に本拠を置いて、中国の攻略に当たっていた秀吉に協力するよう、信長に命ぜられたからであった。

秀吉は吉川経家の因幡鳥取城の攻撃を始めようとしていた。

「おみゃあさんが来てくれて、わしも心強いて」

利家を迎えて、秀吉は例のごとく尾張言葉で言った。

鳥取城攻撃を前にして、秀吉と利家は、城まわりの巡検に出かけた。ふたりの身辺は、蜂須賀党、姫党の者が秘かに護衛していた。

鳥取城のある久松山（標高二六四メートル）の麓を取り巻くようにして、千代川の本流、支流が流れていた。

「こりゃあ、まともに攻めては難儀するなも。おみゃあさんなら、どう攻めやぁす？」

「さよう、堅城でござるな。もし半兵衛どのが生きていたら、三木城と同じように干殺しを献策するかものう」

と、利家は言った。

永禄十年（一五六七）以来、十余年間、名謀として秀吉の帷幄にあった竹中半兵衛重治は、昨年六月十三日、持病の労咳（肺結核）が悪化して、三木城の付城平山城で、三十六歳の生涯を終えていた。

「そうじゃろうなも……」

一瞬、秀吉は丸っこいきらきらした猿まなこを曇らせた。半兵衛を想い出したのであろう。

秀吉は半兵衛の七歳の遺児（重門）を、長浜城に引き取って養育していた。

干殺し――と決めた秀吉は、ただちに鳥取城周辺の作物を法外な高値で買い占めた。それと知って鳥取城内でも、これはいい商売ができるとばかり、食糧倉を開いて売りに出した者がいた。先にどんな悲惨が待つとも知らず、莫迦なことをしたものである。

毛利氏からの食糧・弾薬の補給を絶つために、海上からの通路になる千代川の河口に出兵して、厳しく見張らせるほか、毛利水軍の根拠地、伯耆（鳥取県西部）の泊城を攻撃して、港に繋留してあった軍船・輸送船六十五隻も、ことごとく奪取してしまった。

予め、こうした策を講じたうえで、七月十二日に、鳥取城を包囲した。城内の四千人は、八月半ばにはすでに食糧に困り始めていた。九月に入ると牛馬や犬はもとより、草根・木皮や、鼠・昆虫まで食べて飢えをしのぐありさま、十月になると浅間しい話だが、餓死者の肉まで奪い合うようになった。

そうした悲惨を見かねた吉川経家は、十月二十四日、ついに櫓に降伏の白旗を掲げさせ、自らは翌日、自刃した。

鳥取開城後も、年末まで、秀吉の副将として中国各地を転戦した利家は、天正九年（一五八一）正月元日、年賀言上のため、秀吉とともに安土城に伺候した。

その後、信長の許可を得て、利家は久しぶりで越前府中城に帰った。

九月になって中国戦での論功行賞があり、利家には能登一州二十三万三千石が知行地として与えられた。

（猿どのがよほどうまく、殿に売り込んでくれたとみえるな……）

利家は秀吉の厚い友情を感じた。

とにかく、越前の三万三千三百石の大名から、一躍して、二十三万三千石の一国一城の主になったのである。利家は七尾の所ノ口にある小丸山に新しい城を築いて、天正十年正月、府中城から移った。

はじめて北国に、室のまつや、子どもたちを呼び寄せたほか、十二年まえの永禄十二年（一五六九）、信長の裁断によって家督を譲らされて以来、「ご隠居さま」として、利家が扶養してきた長兄の元尾張荒子城主、蔵人利久夫妻や、利久の養子になって荒子城主を継ぐはずだった慶次郎利太らを、小丸山城に呼び寄せた。

なお、十二月になって、嫡男の利長は、前年、婚儀の整っていた信長の五女（玉泉院）を室に迎えると同時に、利家の越前の旧領を与えられて、府中城主となった。新郎の利長は二十歳、新婦は、まだ七歳のいたいけな童女であった。当時よく行なわれた政略結婚である。

話かわって――

元亀三年（一五七二）に、武田信玄への人質として甲州に送り、やがて武田の養子となっていた信長の末子御坊丸（勝長）を、天正九年十一月、武田勝頼は突然、信長のもとに送り還した。

養子と言っても、実質的には人質である。それを還すことによって、織田家との修好を図りたいという勝頼の考えであった。

だが、逆効果だった。

天正三年（一五七五）の長篠、設楽ヶ原の合戦以後、勝頼の仕置きは徳川家康まかせ……として、信長の胸中では、やや淡い存在となっていた。

（そうだ、甲州にはまだ彼奴がいた……）

と、思い出させてしまった。修好を図るため、といった勝頼の考えも、

（御坊を返しおったのは、絶縁の宣言であろう。彼奴がその気なら、徳川どのまかせにしておくわけにもいくまい。よし、おれ自身の手で片づけてくれよう……）

と、逆に解釈して、勝頼討伐の腹を決めた。

そんな折も折、織田方に寝返っていた木曽福島城の木曽義昌から、

「――甲州勢一万五千による攻撃を受けようとしている。援軍を乞う」

と頼んで来た。

信長は嫡男の信忠に五万の大軍を与えて、木曽口に向かわせると同時に、金森長近に飛騨口からの侵入を命じ、徳川家康には駿河口から、北条氏政には関東口からの攻撃を要請した。

五万の織田勢は、木曽の武田方の諸城を片っ端から蹂躙して、怒濤の進撃をつづけた。

徳川家康が受け持った駿河口でも、甲州防衛の第一線にある勝頼の姉婿で、江尻城主の穴山信君（梅雪）が早々と寝返って、徳川勢を引き入れてしまった。

信州諏訪まで出陣していた勝頼は、木曽方面の戦況がことごとく不利と聞くと、甲府の古城から移ったばかりの新府城（韮崎市）への退陣、籠城を考えた。が、小山田信茂は、

「新府は未完成の城で、脆うございます。われらが岩殿山（大月市）の城は、駿河の久能城、上野（群馬県）の吾妻城と並んで関東三名城と称される堅城。織田勢とて、たやすく攻められませぬ」

と誘った。すでに叛心を抱いていた信茂の誘いに、まんまと乗って勝頼は岩殿山に向かったが、途中、兵の多くは逃散し、おまけに笹子峠では、小山田勢からの銃撃を受けた。

「おのれ、信茂め！」

やっと騙されたと気がついて勝頼は、要害天目山を目指した。付き従う者は侍といくさには役立たない上臈たちで、併せて百人にも満たなかった。

途中、田野という山中の僻村の民家に匿れて休息を取っていたとき、滝川一益の探索の手勢が迫って来た。

「これまでじゃな。わしは腹を切る。そなたたちは降伏しろ。おそらく斬るとは言うまい」

十九歳の室は北条氏政の妹、十六歳の嫡子信勝は、信長の養女を母としている。降伏すれば勝頼の言うとおり、おそらく助命されただろうが、

「お供つかまつりまする」

と、死を共にした。四十一人の侍、五十人の上臈も、ことごとく殉死した。勝頼はこのとき、三十七歳であった。

「風林火山」の英雄、信玄の没後、僅か十年で迎えた武田家の滅亡であった。

甲州に入った信長の、武田一門と余類に対する殺戮は徹底して、悲惨を極めた。勝頼を騙し

にかけた岩殿山城の小山田信茂も、情けを知らぬ不忠不義の臣として、妻子とともに刺殺された。

信玄の菩提寺の恵林寺住職、快川紹喜が勝頼たちの遺骸を勝手に埋葬し、供養したことも許せないというので、一山の老若百五十余人を山門に追い上げ、下から火をかけて焚殺した。

このとき、快川が少しも騒がず、

「――心頭滅却すれば、火も亦涼し」

と、喝破したことは、後の世までの語りぐさになった。

戦後の論功行賞で、上野岩櫃城から来降した真田昌幸（信之・幸村兄弟の父）の所領を安堵するほか、上野と信濃の二郡を滝川一益、甲斐を河尻秀隆、信濃四郡を森長可にあてがい、駿河は家康の勝手とし、甲・信両国の法度を定めてのち、信長一行は富士を眺めて東海道を西上し、浜松、清洲、岐阜を経て、四月二十一日、安土に凱旋した。

本能寺の変

(一)

武田氏がすでに滅亡したというのに……、噂というものは、時にとんでもない誤りを伝えるものである。

越中方面には、

「――武田が奇襲攻撃して、織田信長・信忠父子を殺した」

と伝えられた。

織田勢によって、越中から追われていた小豪族、牢人、一向宗徒らは、

「わあーっ」

と歓声を上げた。

彼らは合同して、まず神保氏春の富山城に襲いかかった。神通川を巧みに利用して築いた要害の城も、たちまち二の丸、三の丸まで奪われた。氏春はかろうじて本丸を守って、援軍を佐々成政に請うた。

成政はただちに出兵して、一揆勢を追い払い、氏春を救出した。

織田父子戦死の誤報は、越後春日山城の上杉景勝の耳にも達していた。景勝は織田父子の死によって、越中でひと騒動が起きていると知るや、越中から能登にまで及んでいた先代謙信の威勢を挽回する好機到来と考えた。

五千の精兵を率いて春日山を出陣すると、越中に侵入して魚津城（魚津市）の東北、一里半ばかり（五、六キロ）にある天神山に陣をしいた。

魚津城の河田長親、松倉城（魚津市）の河田豊前らは、景勝の出陣を歓迎して気勢を上げた。これに対して、織田方からは柴田勝家の総指揮のもと、利家、成政、佐久間盛政らが出兵し、常願寺川を挟んで対陣した。

この対陣の最中、利家の能登で事件が持ち上がった。天正七年（一五七九）に能登から敗走した長一族の景連が、景勝の兵を借りて海路、能登に侵入して、棚木城にたて籠ったのである。景勝による後方攪乱策であることは言うまでもない。

もちろん、捨てておくわけにはいかなかった。利家は長連龍に、副将として富田流開祖の剣豪、富田治郎左衛門景政を付け、一千の兵を与えて棚木に向かわせた。七尾城の留守を預かっていた利家の実兄前田安勝が、これに協力し、二十三日には景連を討ち取った。

景連の首級と、捕虜にして荒縄で厳重にくくりつけた上杉貸与の兵たちを魚津に送り、城外に曝した。魚津城兵たちの士気を阻喪させるためだった。

その頃、上杉景勝に思いがけない報せがもたらされた。もたらしたのは、利家の家中にいた前田慶次郎利太であった。

慶次郎は能登一国の領主となった利家に引き取られるまで、各地を気ままに漂泊して過ごした。その間に、景勝と知り合い、妙に気が合って親しくなっていた。

「こんな処にいつまでも愚図々々していて、越後のことは大丈夫でござるかな？」

慶次郎は景勝に会うなり、ずばりと言った。

「貴殿が死んだと思っている織田父子は、ちゃんと生きている。敗死したのは勝頼どののほうでござるぞ」

「な、なんだと。いや、おぬしも今は前田どのの禄を食む身じゃ。騙しをかけに来たのであろう。その手は食わんぞ！」

「わはは」

慶次郎は豪快に笑って言った。

「拙者はこの真実の情報を手土産にして、貴殿の家臣にしてもらいに参ったのです。拙者には、どうも前田の家風が合い申さんで……」

慶次郎の言葉に嘘はなかった。利家は、

「おとなしくしていろよ。そのうちには二、三万石の支城の城将にしてやる」

と言ってくれていた。

が、むかし、かぶき者、暴れ者で鳴らした利家が、信長一辺倒の誠実顔の田舎大名になり果てているのが気に入らなかった。

（たかが二、三万石の城将が何だい。わしは景勝どのと大暴れして、必ず一国、いや、二国、

三国の大領主になってみせるわい）

そんな覇気を抱いて、秘かに利家の陣中から脱け出してきた慶次郎だった。

「景勝どの、急いで帰国されるがよい。拙者も春日山にお供つかまつる」

慶次郎に促されて、上杉景勝もやっとその気になった。天神山を陣払いして、越後に引き揚げた。

前田家を去って、上杉家の新参の臣になった慶次郎の旗指物に、

——大ふへん者

の五文字が書いてあったというのは有名な話である。

「自分で大武辺者と称するなど、いい気なものだ」

と、みんなが顔をしかめた。武辺者とは勇士のことである。

「拙者には妻もなく、従者も下婢もいない。日常、まことに不便。それ故に『大ふべん者』でござるよ」

と言って、慶次郎はからから笑ったと伝えられている。

余談はさておいて——寡兵をもって籠った松倉城攻めに、勝家の大軍は手古摺った。城も堅固、城兵も手強かった。

ついに勝家は、

「講和に応ずるなら、当方より人質を入れ申そう」

と、従弟の柴田専斎と、成政の甥の佐々新左衛門を無腰で城内に送り込んだ。

「それでは……」

と、勝家を信用して、講和会議のために三の丸に出て来た城将河田豊前らを殺し、一気に城内に攻め込んで、やっと落城させた。

(二)

北陸戦争の最中にも、神のみぞ知る大事変の日が、刻々と迫ってきている——

徳川家康が駿河を加封されたこと、穴山梅雪が旧領安堵されたことのお礼言上のため、ふたり連れ立って多大な献上品を携えて、安土に信長を訪れたのは天正十年（一五八二）五月十五日であった。

予め報らせを受けていた信長は、礼式に詳しい明智光秀に接待役を命じて、十五日から十九日まで、ふたりを手厚く遇した。

とはいえ、実のところ、信長は内心、いらいらし通しであった。

そのわけは、中国に出兵して、毛利氏の部将清水宗治の備中高松城を水攻めにかけていた秀吉から、毛利宗家の輝元（元就の孫）、吉川元春・小早川隆景兄弟（元就の子）が総力を挙げて攻撃に出向く気配があるので、

「ついては、急いで援軍をお送りください」

と、要請されていたからである。

信長は安土での接待を終えると、二十一日には、

「ついでに、奈良、都、大坂、堺など、ゆるりと見物されるがよろしい」

と、家康、梅雪を追い立てるように送り出して、ただちに出陣の準備にかかった。

安土城の留守係は津田信益。日野城主の蒲生賢秀らに命じて、二十九日には小姓、馬廻衆、女中など七十余人を連れて上洛の途に就いた。自分の乗馬の轡は、先年、ローマのイエズス会の巡察使ヴァリニャーノからおくられた、南蛮ギニア生まれの黒坊主（黒人）弥助に取らせた。途中、行き会う者たちのびっくりする顔が、いたずら好きの信長には愉快でならなかった。

辰の刻（午前八時）に安土を発った信長一行は、未の刻（午後二時）過ぎ、宿所の四条西洞院の本能寺に入り、夕方には濃姫を乗せた輿の一行も到着した。

嫡男の信忠は二百余人の旗本を率いて、二十一日に岐阜を発ち、すでに室町薬師寺町の妙覚寺に宿陣していた。

上洛以来、連日、公家や在地の分限者、茶人、僧職者などが、献上品を携えてご機嫌伺いに来た。信長は機嫌よく応対した。

中国出陣を四日後に控えた六月一日も、来客は多かった。夕方遅くまで茶会を催し、引きつづいて酒宴で夜更かしした信長は、湯を使ったあと、寝所に入った。

ちょうどその頃、家康、梅雪の接待役を中途で解かれ、備中高松の秀吉の援軍を命ぜられ、亀山城に帰り軍備を整えていた明智光秀は、一万三千の軍勢を率いて亀山を出発した。

亀山から中国方面へ行くには、三草峠を越えねばならない。だが明智勢は、暗闇の中、老の

坂をすすんだ。途中に岐路が幾らもあった。右に外れれば高槻、茨木、大坂だが、何処でも右折せず、まっすぐすすんだ。

「このままでは、京に行ってしまうではないか」

「いったい、どうなっているのだ」

と、兵の中には、そんなことを呟く者もいた。

沓掛（京都府乙訓郡）に着いて、全軍は休息を命ぜられ、

「いまのうちに、しっかり腹ごしらえをしておけ」

と、兵糧を摂らされた。

そして、桂川を渡ったところで、初めて、

「敵は備中にあらず、本能寺にあり……」

と、謀叛のことを明かされたが、兵に不服を唱える者はいなかった。

彼らには、主君光秀の謀叛の理由や、それがいつからの計画であったかなど、何もわからなかった。平素、家臣に優しく、智将として聞こえていた光秀である。

（この殿のなさること、間違いはあるまい）

と信じて、従いていくほかなかった。

明智勢が、四方に掻き上げた本能寺の堀のまわりに殺到したのは、六月二日のまだ明けきらぬ頃であった。彼らは堀を渡り、土居を越え、木戸を破って侵入すると、

「わあーっ」

と喚声を上げ、境内の各所にいた不寝番の兵を銃撃した。

いち早く異変に気づいたのは、信長の寵臣森蘭丸（森可成の子）と、枕を並べて寝んでいた弟の坊丸、力丸の三兄弟であった。三人はほとんど同時に飛び起きた。

「ふたりは、ここを動くなよ」

十六歳の蘭丸は長刀を手に、ひとり、渡り廊下に駆け出した。庭ではすでに戦闘が始まっていた。払暁の風に、水色に桔梗の紋を染めぬいた旗差物の翻るのが見えた。土岐源氏の明智氏の家紋である。

「殿！　蘭丸でございます」

蘭丸は信長の寝所の絵襖のまえに手をつかえた。

「おう、蘭丸か。外の騒ぎは何事じゃ？」

「明智どのの謀叛でございます」

「あのきんか頭めか！」

襖を開けた信長は白い練絹の寝間着の小脇に、赤柄の長槍を抱い込んでいた。金柑頭はその中高の頭の恰好から、信長が光秀に付けた渾名である。

「殿！　ここはわれらにお任せあって、厩口より妙覚寺にお退きください」

「よう智恵のまわるきんか頭に抜かりがあるものか。しかし、女どもを斬るとは言うまい。きさまは女どもを厩口に案内してやれ」

信長は、

（「人間五十年……」と、よう謡ってきたが、おれは一年早かったな）

と、死を覚悟していた。

信長の隣には、素早く着替えをすませた濃姫が甲斐がいしく襷で袖をからげて、薙刀を手に立っていた。

「そなたも女どもといっしょに逃げろ、と言いたいが、きんか頭め、そうはさせまいのう」

「織田家に嫁いで、はや三十年でございます。生きるも死ぬも、殿とご一緒が本望でございます」

「ふうーむ、さすがは蝮のむすめじゃ。大うつけのわしとは、まこと似合いの夫婦であったかものう」

ふたりは顔を見合わせてほほえみ交わすと、押し寄せた敵の二、三人を、長槍、薙刀で突き倒し、薙ぎ倒した。

「いいか、寄るなよ。寄れば用捨せぬぞ！」

信長はなお迫り寄る敵兵を、怖い眼で睨みつけた。これまで、拝むことも叶わなかった主君（光秀）の主君の一喝に、思わず竦み上がった敵兵を尻目に、信長夫妻は悠々と寝所に入って襖を閉めた。

茫然と見送っていた明智の兵が、はっと気を取り直して、襖を開けると、真っ赤な火炎と黒煙がどっと噴き出してきた。信長夫妻の姿はどこにも見えなかった。

その遺骸は、のちの探査でもついに発見できなかった。一世の風雲児らしい見事な去世ぶり

であった。濃姫は信長より一つ齢下の四十八歳だった。

明智勢は、防戦に不利と考えて、妙覚寺から押小路室町の二条城に移っていた信忠をも襲撃した。

信忠が岐阜から連れてきたのは旗本二百騎に過ぎなかったが、本能寺門外にあった京都所司代の村井貞勝も兵を呼集して駆けつけており、千五百人で守備していた。

信忠（二十六歳）は人柄も傑れて、信長以上の名将の器といわれていた。よく戦ったが多勢に無勢、敵うはずなく自刃して、午の刻（正午）過ぎには、二条城は明智勢の手に落ちた。

奈良や京、大坂の見物をすませて、その頃、穴山梅雪とともに泉州堺に遊んでいた徳川家康は、本能寺の変をもっとも早く知った武将であった。

しかし、如何に家康が名将でも、連れている僅かな侍臣だけでは、盟友信長の弔合戦に起つなど、できることではない。逆に明智勢の探索を受けて討たれる恐れがあった。

（いっそ、こっちから出かけて、本能寺の焼け跡で、盟友の冥福を祈って追い腹を切るか……）

と、一度は殊勝なことも考えたが、家臣たちの諫めに従って、ひとまず帰国を急ぐことにした。

質素倹約を重んじてきた家康だが、こんな場合はそれでは通らない。持参した金品を惜し気なく与え、後日の褒賞を約束して、途中に待ち受ける土寇を買収し、伊賀衆の援助を受けて、宇治田原から山越えして、伊勢白子から船で三河に渡り、六月四日、岡崎城に帰った。

その暇がなかったからか、故意にか、家康は穴山梅雪には何も告げないで堺を発った。そのため、やや遅れて堺を発った梅雪こそ哀れであった。家康が辿ったと同じ道を宇治田原に急ぐ途中、草地の渡しで土寇に襲われた。従臣ともども身ぐるみ剝がされたうえ、殺されてしまった。

北陸方面では――

勝家が奇略を用いて、やっと松倉城を落としたのが、奇しくも本能寺の変と同じ六月二日であった。

事変を報らせる早馬が、勝家の陣地に駆けつけたのは、翌々日の六月四日だった。戦勝気分はいっぺんに消し飛んでしまった。

勝家をはじめ佐久間盛政、佐々成政らは急いで領国に引き揚げた。信長死すと知った上杉景勝の逆襲も心配だったが、何よりも領国に混乱が生ずるのを恐れたのである。

その中でも、強硬な魚津城攻めを担当していた利家の立場が、もっとも深刻であった。攻める身から一転して、攻められる身となったのである。とにかく、一刻も早く、領国能登に引き揚げねばならなかった。

海岸沿いに、常願寺川、神通川を渡って、海老江から放生津（新湊市）へと急ぎ、ここからは海上を越中と能登の国境に近い大境に渡って、六月五日、七尾城に帰った。

嫡男の利長は……というと、信長に婚姻のお礼を言上するため、幼い妻の玉泉院を輿に乗せての上洛の途中、近江瀬田で本能寺の変を知った。

利家に劣らず剛勇、しかも沈着な利長は、玉泉院の輿は奥村治右衛門らに守らせて、在所の尾張荒子城に送り出し、自分は安土城に急行した。

留守を預かっている蒲生賢秀らと安土城の防衛を、さらには明智光秀討伐について相談するためだったが、賢秀は信長の側室たちを伴なって日野城に引き揚げようと、てんやわんやの騒ぎの最中で、話にならなかった。

やむをえず利長は、伊勢に向かって急いだ。伊勢松ヶ島城にいる信長の次男織田信雄と、弔合戦のことを相談するためだった。

若年ながら、信長の娘婿として、光秀への復讐戦をもっとも早く考えた一人は、前田利長であった。

(三)

だが、信長の弔合戦に、もっとも素速く行動を起こしたのは、羽柴秀吉であった。

秀吉が本能寺の変を知ったのは、六月三日の亥の刻（午後十時）である。陣所の辺りをごそごそ歩いている怪しい男を捕らえて取り調べたところ、光秀から毛利輝元に宛てた密書を隠し持っていた。

密書には、近年、自分は信長に対して憤りを抱いていたこと、遺恨黙しがたく、二日、本能寺・二条城において、信長・信忠父子を誅したこと。これによって将軍（義昭）もご本懐をお遂げ遊ばしたわけ、よろしくご披露賜りたくとあり、貴殿におかれても安心して、存分に羽

柴勢をお討ち召さるよう……とあった。

光秀の謀叛に理由はいろいろあったにちがいないが、足利将軍家の旧臣意識から完全に脱し切れていなかったことを、文面はよく示している。これでは、一時は新しい流れに乗ってはみたものの、しまいまで巧く棹を差し切れなかったのも道理である。

それにしても、どこまでも運の強い秀吉であった。光秀の密使は駆けつけはしたものの夜中のことで、毛利の陣と羽柴の陣の見さかいがつかなくて、うろうろしていたところを捕まったのである。密書が先に毛利方に渡っていたら、秀吉のその後はどうなっていたかわからない。

秀吉は光秀の密使を斬ると、四日には、毛利方にあって、秀吉との交渉係をしていた安国寺恵瓊を呼んで、領国割譲の件で妥協するほか、城主の清水宗治の自刃によって城兵全部を助命することを条件に、講和する旨を呈示した。

「このこと、毛利側に伝えても、清水どの救出を第一と考えている吉川元春どの、小早川隆景どのが強硬に反対して纏まりますまい。しかしながら、和平は望むところ、拙者の一存で、清水どのを説いてみましょう」

恵瓊はただちに小船で高松城に渡って、宗治を説いた。

「それで、将兵たちが救われるなら……」

宗治は潔く承知して、城外に小船で乗り出し、秀吉の出した検使、杉原家次のまえで見事に腹をかき切った。

宗治救援のために出陣してきた毛利方は、宗治が死に、高松城も返還し、要求していた領国

も割譲されるというのでは、もはや合戦の意義は失われたとして、和睦に応じた。

このときの恵瓊の一存は、秀吉にはありがたかった。後年、秀吉は僧衣の恵瓊を伊予六万石の大名に取り立てた。

和睦からあまり時もたたぬ頃、毛利方も、光秀が二人送り出していた密使の一人によって、本能寺の変を知った。

「猿め、知っていて清水に腹を切らせおった。汚い！　いや、許せぬ！　ただちに追い討ちしよう」

と、吉川元春はいきり立った。

だが、毛利輝元は、

「叔父御の申されるとおり、騙されたのは口惜しうござる。だが、羽柴筑前という男、あの智略で天下を掌中にするやもしれません。ここで、敵にまわしては、毛利一族の将来のためになりますまい」

と宥めて、全軍を引き揚げさせた。

一方の秀吉は、五日丑の刻（午前二時）、高松を発して、六日夜には姫路城に帰り、味方の諸将に弔合戦のことを伝えると、九日未明には姫路を発し、昼夜兼行で全軍を急がせて、十一日の辰の刻（午前八時）には、早くも摂津尼ヶ崎に到着した。

光秀からの協力要請を断わった茨木城の中川清秀、高槻城の高山右近らが、全軍を率いて秀吉陣営に投じ、四国の長宗我部討伐のため、大坂で出陣の準備をしていた信長の三男信孝、丹

羽長秀、池田信輝、それに信長の乳兄弟で伊丹城主の池田恒興（母が信長の乳母であった）らも駆けつけて合体した。

光秀は謀叛をまえにして、織田軍団の師団長格のうち、柴田勝家は越中で戦い、滝川一益は北条氏政と戦うため上州厩橋（前橋）にあり、丹羽長秀らは四国に渡る準備に忙殺され、秀吉は備中高松城に縛りつけられている、いまこそ蹶起の最好機と考えた。

しかも、信長の死を知れば上杉、北条、長宗我部、毛利は勇気百倍して柴田、滝川、丹羽、羽柴などを、各個撃破のかたちで殲滅するにちがいないと思っていた。

だが、誰よりも先に一味してくれると思ったむすめ玉（ガラシャ夫人）の婿、細川忠興と父の藤孝（幽斎）は、味方するどころか、玉を丹波の三戸野の茶屋に移し、自らは髪を切って謹慎してしまった。光秀の行為に対して非難を表明したのである。日野城の蒲生賢秀・氏郷父子、中川清秀、高山右近ら、誘った者たちからことごとく拒絶されて、

（これは、早まったかな）

と、孤立感と若干の悔いを噛み締めていた折も折、

（毛利との講和など、絶対に結べるはずはない。したがって、ほかはとにかく、羽柴との決戦はありえない……）

と信じていた秀吉が、尼ヶ崎で戦闘体制を整えて、早くも山崎に押し出してきたと知って、光秀は夢かとばかり驚いた。

しかも、羽柴方は、秀吉の手勢一万五千のほかに、一味の諸将の兵を併せて四万、光秀方は

一万七、八千のうち、五千はあわてて山城で徴募した農民兵で、物の役に立つとは思えなかった。

それでも、戦わねばならない。十二日、光秀は降りしきる雨のなか、桂川を渡って御坊塚を本陣にし、勝竜寺、西ノ岡、淀などにも、それぞれ二千、三千と部隊を置いた。雨のため、火薬をすっかり湿らせて、鉄砲が役に立たないという不利を抱えてであった。

山崎は摂津と山城の境にあって、桂川をへだてて天王山があり、西国街道の要衝である。戦いは十三日の申の刻（午後四時）から始まった。戦場の全貌を摑むには、展望のよく利く天王山が必要であった。

光秀は天王山を狙って軍勢を送ったが、秀吉軍の包囲攻撃に遭って散々に撃たれて敗退し、天王山は秀吉軍の先鋒、中川清秀勢が占領した。

明智勢もよく戦ったが、数の上での劣勢はおおいようがなかった。御坊塚にいた光秀はいらいらして、自ら先頭に立ち、予備隊に突撃を命じてすすんだ。が、途中、

（このまま、戦いつづけては、全軍滅亡）

と考えた、前線部隊の指揮を執っていた御牧兼顕からの、

「――ひとまず、お退きを」

の伝令を受けて、光秀はやむなく勝竜寺城に引き揚げた。勝竜寺城は、御坊塚の本陣より北の敵軍からは後退したところにある。

乱世に生きている農民、雑兵は敏感であった。

「本陣より後退したということは、敗けいくさの証拠だ」

「こんなところでうろうろしていては、首が飛ぶぞよ」

兵の多くは脱走し、近江方面、丹波方面へと逃走を図ったが、ほとんど羽柴方に捕まって殺された。

『豊鑑』の記述によれば、夜更けを待って光秀は勝竜寺城を脱出した。従兵わずかに五、六騎で坂本城を目指した。女婿の明智弥平次秀満らと合流するためだった。

敵の目を避けて間道を選んだ。久我縄手を伏見大亀谷に向かい、小栗栖村の竹藪道を通過中、敗残兵の武具・武器・持参品などの強奪を狙って待ち伏せていた土民の竹槍に、脇腹をひと突きされた。光秀は土民たちが狙いそうな鎧などは、はじめから脱ぎ捨てていた。鎧さえ着けていたら竹槍くらいに突かれても、さほどなこともなかっただろうが、運に見離されたときというのは、こうしたものである。かなりの重傷であった。

それでもしばらくは我慢して馬を駆けさせたが、出血がひどくて、とうてい坂本までは行けそうになかった。

「残念だが、これまでじゃ、首を打て」

と、従兵に首を落とさせた。五十五歳であった。

首は従兵が馬の鞍覆に包んで、藪の奥深くの窪みに隠した。が、のちに発見されて、本能寺に梟され、さらに屍骸とつなぎ合わせて、光秀の重臣斎藤利三の屍骸とともに、見せしめのためというので栗田口で磔にされた。

勝家とお市

(一)

秀吉の迅速な行動は、ほとんど思いつきと言っていい光秀の企てを打ち砕いて、いわゆる「三日天下」に終わらせた。

言うまでもないが、信長の弔合戦を考えた者は、秀吉だけではなかった。苦心して泉州堺から三河に帰った徳川家康も、出兵に踏み切った。だが、先鋒の酒井忠次が尾張津島に着いた六月十九日には、秀吉の使者によって、上方平定の報らせを受けた。家康は兵を引いて浜松城に帰ってしまった。

北陸の柴田勝家もまた、越中から北ノ庄に帰城して早々、佐久間盛政、利家らと図って上洛しようとした。が、魚津城を退いて能登に帰った利家は、それどころではなかった。信長の死、領主利家の不在を好機と考えた、能越国境の宝達岳陵の一峯、石動山にあった真言宗の古刹天平寺五十八坊の僧兵が、旧能登守護の畠山家の遺臣や、上杉景勝らと協力して、海陸両面から七尾城攻撃にかかって来ていた。

利家は勝家、盛政に援助を乞う一方、全軍を挙げて、石動山を逆襲した。もっともよく働いてくれたのは、姫ノ八蔵・トラ父娘の尽力で味方に馳せ参じた、美濃・尾張・伊賀の忍者たちだった。

彼らは、石動山一帯に張りめぐらされた防御の柵縄を巧みに掻いくぐり、堂塔伽藍、僧房に迫って、片っ端から火をつけてまわった。前田勢は狼狽して逃げまわる僧徒一千六百六十余人を討ち、重だった者二十三人の首級は天平寺山門に梟した。

上杉勢は海上を応援に向かっていたが、越中蛇ヶ島（氷見市）辺りの海上から、火炎に包まれた石動山を遠望して、

（もはや手遅れ……）

と、引き揚げていった。

とにかく、こうしたこともあって、北陸勢は信長の弔合戦に間に合わなかった。

だが、柴田勝家は織田家宿老の筆頭として、六月二十七日、信長の跡目相続者と、遺領の配分を決めるため、清洲城に羽柴秀吉、丹羽長秀、池田恒興らを招集して会議を開いた。

跡目については、信長の次男信雄、三男信孝が、もっとも意欲的であった。勝家は自分が烏帽子親をつとめたという贔屓からだけでなく、実際に秀吉とともに弔合戦に出陣している点で、

「信孝さまこそ」

と推した。

「だが、順当にはご次男の信雄さまでござろう」

と言う者もいて、容易に決まらなかった。が、結局、

「まだ稚なく（三歳）はおわすが、二条御所で討死あそばしたご嫡男信忠さまのご嫡子三法師君（秀信）をご後嗣とし、柴田どのご推挙の信孝さまを、三法師君が十五歳となられるまでのご後見とするが、もっともよいかと存ずる」

と言う秀吉の提案どおりになった。

次いで遺領配分についても、ほとんど秀吉の提案どおり、信雄は尾州御屋形、信孝は濃州御屋形として、尾張、美濃を……、また直接、弔合戦に出陣した丹羽長秀は若狭のほか、江州高島・滋賀の両郡、池田恒興は摂津の池田・有岡に加えて大坂・尼ヶ崎、堀秀政は近江佐和山二十万石、秀吉自身は播磨・山城・河内、それに光秀の旧領丹波を所領すると決まった。

勝家には秀吉の旧領、近江長浜六万石が配分されただけであり、宿老の中でも、本能寺の変のあと、北条氏政との関東での戦いに敗れて、本領の伊勢長島城に引き揚げていた滝川一益は、会議に招集もされず、遺領配分もなかった。

（弔合戦の第一の功労者とはいえ、筑前め、ずいぶんと勝手な振る舞いを……）

と、勝家は内心、はなはだ不快に思った。が、秀吉に対する丹羽長秀や池田恒興らの、まるで臣下のように遜った態度を見ては、

（織田家宿老の筆頭といっても、信長公亡くてはもう通らぬこと。これからのちは、あやつの思うままの時代になるやも知れぬな）

と考えて、口を噤んでいるより仕様がなかった。

勝家が得た新所領は少なかったが、秀吉がいつの日かわが側室にと望んでいた、浅井家滅亡後は寡婦をつづけていたお市の方と、信孝承知のもとに岐阜で祝言を挙げえたことは、勝家の大きな慰めとなった。

勝家は、お市と三人のむすめを乗せた輿を連ねて、北ノ庄に引き揚げた。

のちになって、そのことを知った秀吉は、

「いちばんの褒賞を、柴田どのにまんまと奪われたわい」

と、口惜しがった。

（二）

信長の百日忌にあたる九月十二日、勝家室となったお市によって、山城の妙心寺で法要を営んだあと、葬儀は、織田信孝側のたいせつな持ち駒として、秀吉からたびたび安土に移すようにと言ってきたのを無視して、岐阜城に留めておいた三法師を喪主に、信孝、勝家、滝川一益の手で執り行なうよう準備を整えていた。

だが、それに先んじて、十月十五日、秀吉は自分の養子に迎えていた信長の四男於次丸（秀勝）を喪主として、京都紫野の大徳寺で、甫庵の『太閤記』によれば前代未聞の盛大な葬儀を行なって、諸大名や京都の民を「呀っ」と驚かせ、

（天下は、羽柴時代に入った）

の印象を、強く人心に植えつけた。

清洲会議を不満としていた織田信雄・信孝兄弟や、勝家、一益らは、その葬儀には出席しなかった。

信孝はその後も、秀吉からの、

「――三法師君を、安土に移し参らせるよう」

というたびたびの催促を無視した。三法師を持ち駒にすることで、秀吉の地位がさらに強化されることを警戒したのである。

秀吉のほうでも、今後の政治は四者会議で決するという清洲会議での約束を、たびたび無視して勝手に振る舞った。秀吉が独断で、山崎の宝寺に築城の縄張りをしたときには、勝家は、

「いまこそ織田家中が心を一にすべきとき。故殿の盟友、徳川家康どのが北条氏政と対陣して苦戦、これを援助に行くというなら話は解るが、織田家領国内に新城を築くなど、誰を敵にしてのことか。無意味なことではないか」

という意味の抗議を行なった。

秀吉は、遅かれ早かれ、信孝、勝家、一益を一体の敵として戦う日のあることを予想していた。それに備えて、中川清秀、筒井順慶、三好康長ら、畿内の諸大名からは人質を取り、丹羽長秀、池田恒興、細川藤孝らとは談合を重ねて、陣営がために努めていた。

近江長浜城にいた勝家の養子、柴田勝豊の耳には、風聞として、そうしたことが入っていた。

（ここで万一にも、信孝どの、一益どのが事を起こすようなことがあっても、北陸はやがて雪になり、春遅い雪解けの頃まで、養父は援軍を送り出そうにも、出すことができない）

と考えた勝豊は、

「――いまは何ごともご自重が肝要、羽柴どのとは和議をすすめておかれますよう」

と、勝家に書簡を送った。

鬼柴田とか甕割り柴田とか呼ばれて、勇名を馳せたのはもう遠いむかしのこと。すでに六十一歳、老熟した勝家に「織田家中が心を一つにして」は真情であった。避けうるなら戦いなど避けて、何事も話し合いによって丸く収めておきたかった。

十一月、勝家は天正三年（一五七五）以来、共に北陸の地を領してきた前田利家、不破勝光、金森長近を上洛させた。自分の存念を秀吉に伝えさせ、家中一統について十分な談合をさせるためであった。

利家ら三人の立場は微妙であった。もともと信長は、勝家の臣として三人を北陸に配したわけではない。所領に大小はあったが、地方大名として勝家も三人も対等の立場にあった。

したがって、三人の上洛は勝家の代弁者というより、頼まれた調停者としてであった。秀吉のほうでも、そのつもりで三人を迎えた。

「寒さも厳しうなって、北国路もたいへんでござったろう。充分に馳走せずばなるまいな」

と、至れり尽くせりの歓待をした。

殊に利家に対しては、

「貴殿の顔を見ると、清洲で、岐阜で、隣屋敷に暮らして、猿どのよ、お犬どのよと呼んでい

たむかしを思い出す。おまつどのもお達者かの。いや、今宵は枕を並べて、男同士の寝物語をいたそうよ」

と、懐かしさをまる出しにして見せた。実際にその夜は、寝所に床を並べて語り合った。

「のう、前田どの。むかしもむかしのことじゃが、荒子の小夜ノ川といったか、あそこで水の流れ、時世の流れについて話したことがあったなも」

秀吉は、例のように、ちらりと尾張言葉を使った。

「覚えのよいことでござるな。いや、拙者もよく覚えている。あのとき、貴殿の言葉に従っていなかったら、拙者は溺れ死んで、ここにこうしていなかったやもしれぬ」

「わはは……、まさかそうでもなかったろうがなも」

秀吉はそう言ったあと、しばらく黙っていたが、少し改まってつづけた。

「前田どの、拙者はあの風来坊のむかしから、時の流れに乗るを望み、そのために懸命に努め、いまはどうやら思いを遂げたように思っている」

「そのようでござるな。いや、むかしとは顔つきまで変わった。近衛権少将の相になられた」

秀吉は十月三日、正親町天皇から従五位下に叙され、その任を受けていた。

「いやァ」

と、秀吉は照れ笑いして、

「面相のことは言わぬことじゃ。故殿（信長）が仰せられたとおりで、むかしの小猿が、四十男になった頃から禿鼠になっただけのことよ。……それにしても貴殿は髪も黒々、少しも薄くならぬのう。秘訣があるなら聞きたいものよ」

と、話を変えて、羨ましそうな顔をした。

「拙者の領国では、土地の者は『能登はやさしや土までも』と申すが、海の幸も豊かでござってな、拙者など海草をよく食べ申す。髪が黒いは、そのせいやらしれぬ。海草は髪にはよいそうな」

「能登はやさしや土までも……か、なるほどのう。だが、貴殿に能登一国では小さいのう。拙者はむかし、故殿に『拙者に領国を与えようとおぼし召すなら、朝鮮を賜りたい。そこを根拠地にして大明（中国）までも手に入れて見せましょう』と豪語して、大笑いされたことがござった」

「……」

「貴殿も、能登ばかりか、加賀も、越中も……と欲を持って、この大法螺吹きの筑前と一緒にござれ。いや、夢でも、けちな夢よりは大きな夢がよいでな」

諧謔を交えて穏やかに言ってはいるが、利家には、勝家との事が起きた場合は南軍（秀吉側）につけと暗に言っていると解っていた。

利家はしかし、血の気の多かった二十代のはじめ、お坊主十阿弥を斬って信長から追放を受けたとき以来、勝家からは一方ならず厚情を被ってきている。勝家の男らしくさっぱりした、それでいて情宜に厚い人柄も好きであった。秀吉が暗にすすめる裏切りに、すぐに応ずる気にはなれなかった。

「ははは……、さすがの槍の又左どのが困ってござるわ」

秀吉は顔じゅうの皺を深めて笑いながら言った。

「拙者とて、柴田どのが拙者を快く思っていないように、あの仁を快からず思っているわけではござらぬ。公平に見て、傑れた武将と思っている。ただ、あの情に脆いところが仇となって、信孝さま、滝川どのに引きずり込まれることが、拙者には目に見えている」

「……」

「柴田どのは戦さ上手じゃ。だが、もうむかしの元気はない。起つのは、死を覚悟してのことであろう。又左どの、何も死のうという人といっしょに、身を亡ぼすことはない。そうではないかな」

裏切りをすすめているわけでない、友情として言っている……という秀吉の心情であった。

「……」

利家が黙っていると、秀吉は、

「いや、拙者はもう眠うなった。ご免こうむって眠らせてもらう」

と、顔をむこうに向けた。すぐに寝息をかきはじめた。戦場暮らしの多い武将にとって、眠り就き上手も、大事な資質といえる。

利家も、眠就きのよいほうではあったが、この夜ばかりは妙に気が昂ぶって、なかなか眠就けなかった。

秀吉の人扱いの巧さと、意外な大歓待に、不破勝光と金森長近は、すっかり気をよくしていた。

「柴田どのが案ずるような事態は、まず起きることはあるまい」

「そうよのう。羽柴どのは、また一段と人物が大きくなった。三法師さまをいただいての天下一統も、おそらくうまく運ぶであろうな」

と、泰平なことをしゃべりながら、北国への帰途に就いた。だが、利家は、

(そう簡単に、ことは運ぶまいな)

と、重苦しい不安な気分から脱け切れなかった。

利家の不安は適中した。秀吉は利家一行を送り出すや、ただちに筒井順慶に命じて、近江に出兵させた。勝家が利家たちを和議の交渉に派遣したのは、深雪の北ノ庄からの援軍派遣の不可能を裏書きしたようなもの。この機に乗じて、信孝の手から三法師を取り上げておこうと、秀吉は考えたのだった。

筒井順慶には、柴田勝豊の長浜城を取り囲ませ、本領安堵を条件に降伏させ、伊勢長島城の滝川一益は、松ヶ島城(松阪市)の織田信雄に背後から牽制させて動けなくしたうえで、秀吉は三万の大軍を率いて、降り積もった雪の中、吹雪を衝いて美濃入りし、大垣城に拠って岐阜城の信孝と対陣した。

勝家、一益の援助なくして戦える信孝ではなかった。十二月二十日、信孝は三法師を秀吉に渡し、生母と女を人質に出して、かろうじて所領安堵を受けた。

(三)

三法師を奉じて安土に帰った秀吉は、年が改まって天正十一年（一五八三）閏正月二十八日、まだ雪深い安土に軍勢を集めた。伊勢の滝川一益を討つためであった。

羽柴勢は伊勢に入ると、一益の支城、峰、桑名、亀山の各城を攻め落として、長島に迫った。

一益から援軍を頼まれた柴田勝家は、やはり起たざるをえなかった。勝家は上杉景勝の来攻に備えて、佐々成政を越中に残留させ、二月二十八日には利家の嫡男前田利長を先鋒として北近江に南下させ、つづいて佐久間盛政、利家を送り出してのち、三月九日に北ノ庄を発った。

それを知った秀吉は、ただちに北伊勢から馬を返した。三月十一日には、かつて自分が築き、いまは堀秀政の居城になっている長浜城に入って陣容を固めた。

秀吉が上杉景勝に書を送って越中への出兵を要請し、本願寺の下間頼廉に加賀で一向一揆を起こさせて後方攪乱を計れば、勝家も岐阜の織田信孝を揺さぶって挙兵させた。

秀吉は岐阜に急行した。

その留守を狙って、佐久間盛政は大岩砦の中川清秀を攻め殺し、さらにすすんで高山右近を岩崎山に攻めて敗走させた。

「深追いをするな、ただちに帰陣せよ」

と、勝家は使いを走らせた。が、連戦連勝に気をよくした盛政は帰陣せず、余吾の湖の東、

大岩山一帯に野営した。

坂本にいた丹羽長秀は、広い琵琶湖を軍船で北から南に急行して、賤ヶ岳（伊香郡木之本町）の砦から、まさに退却しようとしていた桑山重晴とともに砦の守備についた。

大垣にあった秀吉は、大垣から木之本まで十三里三十六町（約六〇キロ）を、四月二十日申の刻（午後四時）から酉の下刻（午後六時半）までの僅か二時間半という驚異的な速さで、馬を飛ばした。

遅れてならじと駆けた将兵の中には、途中、馬を乗り潰す者、息を切らし、血へどを吐いて絶命する歩卒も数知れずいた。

だが、秀吉は木之本で短時間の休息を取っただけで、佐久間盛政の率いる一万五千が野営する大岩山の攻撃にかかった。

盛政が、幾千という松明の連なりを遠望したのは、翌二十一日の子の刻（夜半）過ぎであった。

（あの数から見て、羽柴めは早くも岐阜から駆けつけおったな……）

盛政は、あまりに早い秀吉の帰陣に気も動転して、将兵をたたき起こすと、引き揚げにかかった。途中の権現坂に野営していた柴田勝政が殿軍を引き受けて、追撃する羽柴勢と激しく戦い、佐久間勢の退陣を援けた。

だが、佐久間勢も安泰ではなかった。横合いからの丹羽長秀勢の攻撃に、散々に突き崩された。それを見て、北国街道の孤塚にあった柴田勝家の本陣の七千の将兵にも混乱が生じた。逃

亡兵が相次いで、三千に減ってしまった。

羽柴勢は柴田勝家・勝政、佐久間の敗残兵など三千、五千を、十時間に亘って執拗に追撃して、賤ヶ岳の決戦に持ち込んだ。

賤ヶ岳では、柴田勢が持てる限りの矢玉を使い果たしたとみるや、巳の刻（午前十時）頃、秀吉の近習は槍の穂先を揃えて、猛然と突きすすんだ。

福島正則、加藤清正、脇坂安治、加藤嘉明、平野長泰、片桐且元、糟屋武則、桜井左吉、石河一光ら九人の活躍は特に目覚ましかった。戦後、秀吉はそれぞれに感状を与えたほか、いずれも二百石ほどの所領をうけていたのを、福島正則に五千石、他の者に各三千石の知行を与えた。大抜擢であった。この中で石河一光は戦死したため、舎弟の長松一宗に一千石が与えられ、また脇坂安治は秀吉の弟秀長の近習だったから、ふたりを除いて「賤ヶ岳の七本槍」とし、武勲は後世に喧伝された。

それはさておいて、佐久間盛政の後詰として茂山に陣を取っていた前田利家は、盛政勢の敗退を見ると、急いで陣払いして後退した。

昨年十一月の一夜の、秀吉との男同士の寝物語以来、利家はすでに裏切りを決めていたのだろうか。はっきりと「利家の裏切り」と書いている人もいるが、私（筆者）には、そうは思えない。

利家も猛烈な追撃を受けている。自ら自慢の槍をふるって苦戦しながらの危ない退却をしている。長連龍も退却ちゅうに戦死している。敦賀街道を北上して、ようやく府中に辿り着いたとき、利家の身辺にいた者は旗本衆八人、徒士と足軽三、四十人に過ぎなかった。

柴田勝家も北国街道を北上、退却した。

七千が三千に減った本隊は、さらに逃散兵が相次いで、僅か七百人になっていた。

「これでは、羽柴の二万の大軍を対手に戦いようがございません。拙者に殿の馬標を下されませ」

毛受庄助が申し出て、勝家の馬標を頂戴すると、それを林谷山砦に高々と掲げた。この身代わりのお陰で、勝家は戦場に屍を曝さずにすんだのである。

府中城に帰った利家は、武装を解くと、迎えたおまつとも、ろくに口を利かず、居室に籠ってしまった。

秀吉とも戦いたくはなかったが、勝家のために十分、役に立ってやれなかったことを思って、心重かったのである。

「辛い、何とも辛い」

利家は口に出して呟き、深い吐息をついた。

柴田勝家が府中城を訪れたのは、それから間もなくであった。北ノ庄城に帰る途中、疲れ切って立ち寄ったのであった。

それを取り次ぎに来た荒子以来の老臣村井豊後（又兵衛）が、

「修理どの（勝家）の従兵は僅かでございます。ここで討ち取って、羽柴どのに忠節を示されるが得策と存じますが……」

と言った。

「おのれは長い年月、おれを見てきながら、おれをよう解ってはいないのか。おれがそんな畜生にも劣る真似をすると思うかっ」

利家は、すぐに出て行って、丁重に勝家を迎えた。

「面目ない。負けた、負けた。このざまじゃよ」

勝家は戦塵に塗れた髭面を撫でた。

「勝敗は合戦の習いでござる。北ノ庄に帰って再挙をお図りあれ」

「いや、もういかんな」

勝家の声は意外に明るかった。

「ご辺には、長年に亘って厚い交誼を受けた。一言、その礼を言いたくて、立ち寄ったまでだ」

「いや、それを申すのは拙者のほうでござる。このたびは何の役にも立てず、申し訳なく思っております」

「それを申されるな。ご辺はむかしより筑前とは入魂のあいだがら、こののちはわしへの義理など考えず、お家の安泰を計るが第一じゃ。……そうそう、お預かりしていた麻阿姫は、無事にお返し申すゆえ、心配ないようにな」

麻阿は利家の三女で十二歳。合戦まえ、人質として北ノ庄城に入れてあった。

勝家とその一行は、前田家で振る舞われた食事をすませて去っていった。利家は勝家の乗馬

がひどく疲れているのを見て、替え馬を贈った。

秀吉が軍勢を率いて、府中城に来たのは、勝家一行の去った翌日であった。

大軍迫ると見て、城内からは一斉に銃撃した。秀吉はあわてて、

「退け、退け！　退いて、待機せい！」

と、全軍を三町ばかり（約三〇〇メートル）下がらせ、腰をおろして休ませると、小者一人だけを連れて、

「城の衆よ、撃つなよ、撃つなよ！　われらはこのとおり、手ぶらじゃ、手ぶらじゃ」

と、両手を高く差しあげて振りながら、城門のまえまで来て、得意な大音声を張り上げた。

「又左どの、わしじゃ、筑前じゃ。会うて、もの申したい！」

「又左は、ここにおり申す……」

利家は門内から答えた。

「生き恥を曝しとうはござらぬ。ただ今、自害申すほどに、しばらくのご猶予を……」

「莫迦を言うては、いかん。わしは、おぬしの汚い屍など見とうはない。この辺まで来たついでに、久しぶりでおまつどのの顔を見て、冷や飯の馳走にあずかろうと思って寄ったまでじゃ。さっ、すぐに開門して、入れてくだされや」

まったく他意のない、明るい声であった。

門を開くと、小者をそこに留めた秀吉は、死を覚悟して佇んでいた利家・まつ夫妻、利長のほうに、つかつかと歩いてきて、

「利家どのや利長どのには会う折もござったが、おまつどのには久しぶりじゃのう。お変わりはなかったか」

と、真っ先におまつに声をかけて、

「まだ昼食を摂っておらぬでのう。すまんが、冷や飯を馳走してくだされや」

と、気軽に言った。

「ほんとうに有り合わせでございますよ」

と、おまつが整えて出した食事をたべるあいだも、秀吉はおまつを相手に、隣同士で暮らした頃の話をおもしろおかしくしゃべって、まるで戦いのことなど忘れてしまっているようだった。が、食事を終えると、少し改まって言った。

「さて、又左どの。面倒でも武具を着けてくださらぬか。この地のことは、わしにはよう解らんのじゃ。北ノ庄まで案内してもらいたい。いや、孫四郎（利長）どのは、そのままでよい。この城に残って、おふくろさまをしっかりとお守りなされよ」

秀吉はやはり、北ノ庄を一気に攻め落とす気でいた。利家は、「こののちはわしへの義理など考えず、お家の安泰を図るが第一じゃ」と言った勝家の言葉を思い出して、気が重かったが、勝家が言ったとおり、秀吉の要請に従うほかなかった。

二十三日には早くも羽柴勢は、北ノ庄城を包囲した。賤ヶ岳の敗残兵のすべてが帰城してからでは、戦いが長びくと思ったからである。

勝家は、かつて小谷城の浅井長政がそうしたように、お市と三人の姫を、城から落としてやろうと思った。が、お市は共に死ぬことを願って出城を拒んだ。結局、勝家は三人の姫と、利家のむすめの麻阿を、利家の府中城に送り届ける手配をした。時に、三人の姫の長女茶々は十七歳、麻阿は先に書いたように十二歳であった。

二十四日の早暁、寅の刻（午前四時）、北ノ庄城の総攻撃が始まった。城内の少数の兵の抵抗は激しかった。郭内の多くの門をめぐる戦いを経て、本丸に突入したのは午の刻（正午）。実に八時間もかかった。

なお、城内に残った三百の兵が天守に立て籠って頑強に抵抗したが、ついに生き残った者は、男女あわせて八十余人（三十余人ともいう）だけになった。

勝家は天守高く旗差物を掲げて、お市はじめ、妾、女房、郎党たちと最後の酒を酌み交わし、辞世の歌を書くと、女たちを刺殺してのち自刃した。勝家六十二歳、お市三十七歳。城は鉄砲薬（火薬）に点火して炎上させた。

織田家の旧臣中、もっとも怖るべき難物は、やはり勝家であった。彼を倒したことによって、秀吉は天下一統に向かって、さらに大きく歩をすすめえたのである。

北陸平定の論功行賞の結果、北ノ庄には丹羽長秀が入った。また、北ノ庄攻め先導の功によって、賤ヶ岳での敵対は帳消しとされた利家は、能登のほかに加賀の北半国を与えられ、佐久間盛政の旧城、尾山城に移ることになった。

尾山城はもとは加賀一向一揆の拠点で、御山といっていたのを、佐久間盛政が居城として、尾山城と改称したのであった。

その盛政は賤ヶ岳から敗退する途中、恩賞欲しさの百姓たちに捕らえられてのち、秀吉のもとに送られて、さらに後日、斬首され、六条河原に梟された。

なお秀吉は、盛政を捕らえた百姓十二人も、

「欲に目がくらんだとはいえ、傷つき難渋する武将を情け容赦なく捕らえるとは憎い。相応しい恩賞を与えてくれよう」

と言って、磔にしたと伝えられている。

いずれにしても、いろいろと怨念の籠る尾山城である。利家は高山右近に縄張りを頼んで、徹底的な改築を行なった。

城の名を金沢城と改めたのは、さらに後年、二代利長が改修を加えてのちの文禄元年（一五九二）のことである。

天下一統

(一)

「――秀吉が天成の大器であったことは言うまでもない。しかし、彼の人物と才能は、鳥取城攻めのあたりから急速に異様なほどのかがやきを加え、山崎合戦から柴田勝家をたおすまでの十か月間に絶頂の美しさを発揮し、その後の功業は惰性によってなされたものであると、ぼくは見る。小牧の役も、家康招降も、九州征伐も、小田原征伐も、勢いに乗じての仕事だ。相手方が催眠術にかかって萎縮していた観がある。さらに進んで朝鮮役の拙劣さに至っては惰性期をすぎて頽唐期に入っていたとしか思われない……」（『武将列伝』）

と、海音寺潮五郎氏は言っている。なかなか手厳しいが、長々と引用をしたのは、さすがに、海音寺氏は、よく見ていると思うからである。

だが、利家が、勝家の死後から自分が死を迎えるまでの十六年余り、秀吉と豊臣家のために尽くしたのは、秀吉の催眠術にかかったせいなどではない。

利家は、冷静に秀吉を観察して理解していた。そのうえで、同国人、織田学校の同窓生、家族ぐるみの交際などによって培われていた「貴様と俺とは同期の桜」的信頼感、友情から、

「朋友にして臣」（「臣にして朋友」でもいい）の立場に身を置いたのであった。かぶき者、槍の又左としての若い頃はともかく、利家は、戦国乱世にはめずらしく、信義心に篤い誠実の人であった。

さて、勝家を倒してのち、秀吉は五月七日に安土に帰ったが、それまでに、自らは主筋殺しの汚名を着ないために、織田信雄の手で、勝家に一味した岐阜の織田信孝の始末をつけさせた。

攻撃を受けた信孝は、岐阜を脱出して、尾張内海に身を潜ませたが、結局は五月二日、野間の大坊の通称で知られる古刹、大御堂寺で自刃させられた。二十六歳だった。

昔より主をば内海の野間なれば
　恨みを見よや羽柴筑前

と辞世の歌を遺している。

平治の乱（一一六〇）のあと、源頼朝の父義朝が、この地で内海の荘司、長田忠致に謀殺された故事をひいての、恨みをこめた歌である。

七月には、伊勢長島の滝川一益も、所領の伊勢五郡を差し出して降伏した。秀吉は、いのちは助けて、一益を越前大野城に移封した。信孝、勝家、一益を一体とした秀吉の敵は、一応、片がついたわけである。

その頃、利家の十二歳の女の麻阿に宛てて、秀吉から、

――（前略）坂本にい申候て、大ミ（近江）のちきよう（知行）あらためさせ、又ハ志ろ

（城）ともわら（割）せ申候ひ〈中略〉大さか（坂）をうけとり候ひ、人数いれおき、くに（国）のしろ（城）わりて候ひ〈後略〉……

といった当て字いっぱいの便りが届いた。ねね（北政所）宛の手紙を、老女こほ宛にしたり、侍女のいわ宛にしたりする秀吉である。麻阿宛の便りも、利家に読ませるためだったことは言うまでもない。

能登で、新領地の処置をほぼ終えた利家は、九月なかばに上洛した。おのれの威風を天下に示すため、大坂石山に巨城を築きにかかっていた秀吉から、割り当てられていた工事の手配りをするためでもあった。

利家は、冬の初めまで、京・大坂に滞在をした。その間、賤ヶ岳での敵対行動は一応、帳消しされたといっても、やはり忸怩たるものがあって、秀吉に対しては、万事に控え目に応対した。

そのため、かえって一時、秀吉は、

（又左のやつ、わしを避けてばかりいる。何ぞ心に含むところがあるからではないか……）

と、利家に警戒心を抱いて、秘かに諜者に命じて、利家の身辺調査をさせた。

だが、一点の怪しむべき節もなかった。そして利家の控え目な挙措の真の理由も判った。

（わはは……、そうであったか。誠実を絵に描いたような又左らしいのう）

秀吉は、腹の中で大笑いしながら、

（わしなどは、天正五年、能登に打って出た上杉謙信との戦いに、故殿（信長）の命で北陸に

出陣をしたものの、まずい戦さぶりの柴田どのと意見が合わず、勝手にさっさと長浜城に帰ってしまったが、殿に謀叛などと変に勘ぐられてはならずと、明け暮れ、飲めや歌えの乱痴気騒ぎをやったっけなァ。つまり、生来の横着で殿を安心させたものだ。……あの又左には、そんな芸は打てっこない。それがあの仁のいいところだ。いや、あの仁だけは、どんなときも信頼していいのだ)

と思った。

大坂城工事の賦課には、三十余国の大名が参加し、三万人余りの人夫が就役した、約二年半後の天正十三年(一五八五)四月ごろには、六重の華麗な天守台がまず落成する。

その落成以前の天正十二年には、正月の年賀に上洛伺候しなかったことから、秀吉と不仲になって、安土から伊勢長島に帰っていた織田信雄が、徳川家康の援助を受けた結果、小牧・長久手の戦いが起きている。

このとき、利家は丹羽長秀とともに、秀吉の命に従って、家康に合流する動きを見せていた佐々成政と対戦した。

成政は九月八日、一万五千騎を率いて富山を発った。その軍備は見事なものであった。佐々勢が目指すは、能登・加賀の喉首を守る末森城(羽咋郡押水町)であった。

九日の未明から始まった佐々勢の攻撃に対して、城番の奥村永福は、三千余騎に足軽勢を加えて反撃に出た。

よく戦ったが、多勢、かつ勇猛な佐々勢に、将兵の多くを死なせ、三ノ丸、二ノ丸を奪取された。永福は少数の兵とともに、本丸に籠城のやむなきに至った。

利家が、末森城の危急を聞いたのは、十日の午後だった。尾山城の留守をご隠居さま(利久)に頼んで、ただちに救援に向かった。出陣に際して、おまつが、

「いくさ上手の佐々どのに勝つためには、おまえさまが算盤上手で蓄えた金子で、槍一筋でも余計にお買いなさることですよ」

と、金銀をいっぱい詰めた革袋を差し出したと伝えられている。利家は、よく信長に「算盤上手」といわれていたことでも解るように、戦場にまで算盤を持参して、兵数の配置、敵・味方の勢力の強弱など、玉をパチパチ弾いて計算したというが、城にいても算盤をよく弾いて、家計はなはだ質素であった。それを、おまつが皮肉ったのだと説く人もいる。

十一日早朝、利家の命令一下、前田勢三千五百騎は、成政の包囲軍に突撃。そのときを待って、じっと包囲に耐えていた奥村永福以下七百の城兵も打って出て、激闘をつづけた。

隊長級十二人のほか、二千人に及ぶ戦死者を出して敗退した成政は、退路の村落・寺社に放火したばかりか、大日川上流の前田方の出城、鳥越城(石川郡鳥越村)を奪取して、加賀への基地を残していった。

その時期、秀吉は七万の大軍を擁して、小牧・長久手で、一万六、七千の家康の軍勢と対戦していた。形勢は必ずしも秀吉に有利ではなかった。長久手の戦いでは、司令官格の池田恒興と、その嫡男の藤九郎元助、女婿の森長可が戦死している。

十一月に入って、長期戦を嫌った秀吉は、まず信雄と、伊勢桑名の東方、矢田川で会見して

講和し、つづいて家康とも、たびたび使者を往復させた結果、家康の第二子於義丸を養子にすることで話がついて講和した。

於義丸は、秀吉と家康の名から一字ずつをもらった、のちの結城秀康である。

がっかりしたのは、信雄・家康連合の上に、うまく乗っかろうと考えていた佐々成政である。

奪取した鳥越城を拠点にして、前田勢と優勢に戦ってはいたが、信雄・家康と和睦した秀吉が、いつ利家の援助に乗り出してくるかわからない。あまり深入りはできなかった。

秀吉は、利家からたびたび援軍を乞われていたが、すぐには応じられなかった。信雄・家康とは和睦したが、翌天正十三年（一五八五）三月からは紀州根来寺、雑賀一揆の討伐、六月から八月にかけては四国の長宗我部元親征討と、多忙を極めていたからである。

八月八日になって、ようやく秀吉は北陸に出兵した。そのときには秀吉はもう、ただの武将ではなかった。前年の十一月の末、従三位権大納言に叙任されたあと、八ヵ月ばかりの間に、正二位内大臣、従一位関白と昇進して殿下さまと呼ばれる身分になっていた。

利家は、城兵を行路の両側にずらりと並べて恭々しく迎え、尾山城内でも手厚く遇した。

秀吉が従えてきたのは織田信雄・信包のほかに、丹羽長重、細川忠興、金森長近、池田輝政、蒲生氏郷、堀尾吉晴、山内一豊ら、名のある武将だけでも十六、七名に及んだ。『三州志』に、

「軍旅十万、旗幟雲の如し……」

とある。信長在世の頃、「虎の威を借る狐」と陰口をきかれた秀吉が、信長の没後、僅か三年半にして、自力で、それだけ動員できるまでになったのである。

二十日未明、利家、織田信雄を先鋒として、秀吉の軍勢は、倶利伽羅峠、砺波山を越えて越中に入った。あいにくの大雨つづきで増水した神通川をまえにして、佐々成政の全軍が籠った富山城への総攻撃を、二十八日まで待った。

その間、佐々家の老臣たちは、あくまで抗戦と意地を張る成政に、

「諜者どもの報告では、敵は七万とも、十万とも申します。如何に上手に戦おうとも、勝てるはずがござらぬ。いまのうちにご降伏を……」

と、たびたびすすめた。

成政が降伏と腹を決めて、謹慎の意を表して頭を丸め、黒い僧衣に身を包んで秀吉の本陣に罷り出たのは、秀吉がまさに総攻撃を始めようとした二十九日の未明であった。

（信長公の小者であった頃、こやつには、よう虐められた……）

平伏する成政を眺めて、秀吉は、

「腹を切れ！」

と言ったら、どんな顔をするか、と嗜虐的な快感を覚えた。実際に腹を切らせるつもりだった。が、先鋒をつとめた織田信雄から助命の懇請があり、成政にいちばん苦しめられた利家も、

「生かしておけば、まだまだ役に立つ男」

と殺すのを惜しんだので、降伏を許すことにした。ただし所領は、越中のうち新川一郡だけとし、身分はお咄衆として大坂に移るよう命じた。

利家は、佐和山から北ノ庄に移封となった堀秀政とともに、北陸一帯の仕置きを委され、十一月末には従五位下、左近衛権少将に叙任された。ちなみに秀吉は、天正十年（一五八二）十月、大徳寺での織田信長の葬儀をまえにして、その官位に就いている。利家と秀吉の地位の開きが随分と大きくなっていたことがわかる。

なお、同時に嫡男の前田利長は、越中三郡（砺波・射水・婦負）を与えられ、従四位下侍従に叙任、松任から越中守山城（高岡市）に転封された。

しかし、いいことばかりではなかった。十一月に近畿・東海地方を中心に起きた大地震は、北陸地方にも波及して、加賀木舟城が倒壊し、城番の右近秀継が圧死した。秀継は利家がもっとも愛していた末弟である。

(二)

日の出の勢いの秀吉にも、どうにもならない人物がいた。徳川家康であった。小牧・長久手の戦い以後、家康の第二子於義丸を養子に入れることで話がついて、一応、講和が成立したにもかかわらず、上洛する気配は見せなかった。後世、

——鳴かぬなら、殺してしまえ時鳥。

——鳴かぬなら、鳴かしてみしょう時鳥。

——鳴かぬなら、鳴くまで待とう時鳥。

と、三人の戦国英雄（信長・秀吉・家康）を性格づけて諷詠っているが、家康は歴史の流れのなかで、たまたま「鳴くまで待とう」という形になっただけのことである。

ほんとうのところは、性急で血腥さを漂わせていた信長の方式を継承したかった、出生の卑しい秀吉の下風に立つ気など、毛頭、持っていなかった。

一方、秀吉は、家康のそうした心底など知る由もなかった。小牧・長久手戦の結果はともかく、本気になれば、家康をたたき潰すくらいの戦力は持っていたし、勝つ自信もあった。

（——が、故殿〈信長〉が朋友とした家康とは、やはり戦いたくはない。味方にすれば、随分と頼もしい男である）

という思い込みのほうが、より強かった。

したがって、家康を味方に取り込むためには、どんな手でも使うつもりになっていた。まず織田信雄の斡旋によって、天正七年、築山殿を死なせて以来、正室を持たなかった家康に、すでに佐治日向守の妻となっていた妹の朝日姫を離婚させて、家康に嫁がせた。朝日姫は家康より一歳下の四十四歳の姥桜、猿面秀吉の妹だから美女でもなかった。完全な政略結婚である。人質として送り込んだのである。

それでも家康は、上洛しようとしなかった。重臣たちが、主君の身を憂慮して、強く上洛に反対したからでもある。

そこで秀吉はまた、今や大政所（天瑞院）と呼ばれている大切な母のなかを、朝日姫に対

面ということで三河に下らせること、つまり二重に人質を入れて、家康の上洛を求めた。重臣たちは、それでも上洛を危ぶんで反対した。だが、家康は、なりふりかまわぬ秀吉の真率さには、さすがに心を打たれた。

天正十四年（一五八六）十月二十日、一万の将兵を率いて岡崎を発った家康は、二十七日には公式に大坂城内で秀吉と会った。それより連日、秀吉は、酒宴・能狂言を催して家康主従を歓待したが、そのあげくには、自分の計算どおり、

「徳川どのの援軍も到来して、まことに心強い。九州平定のときが来たようじゃ」

と、諸大名を総登城させ、家康を筆頭の席に坐らせて、九州征伐の評定を行なった。

（これで、わしもとうとう猿殿下の家臣並みか……）

家康は腹の中で、ほろ苦く笑ったが、

（まあ、しばらくは、それで我慢しよう……）

と、心を決めた。以後、秀吉が死ぬまでは、実際に頼もしい協力者として終始した。

九州は、長年に亘って、大友家と島津家の対立抗争によって、騒乱の地となっていた。

秀吉は、この年の四月、大友宗麟・義統父子の要請に応えて、黒田孝高、仙石秀久を軍奉行として毛利軍、長宗我部軍を九州に出陣させたが、島津氏与党の猛反撃に遭って惨敗した。

それだけに、こんどは慎重だった。畿内・北陸・南海・中国の三十四ヵ国から二十五万騎を動員し、長期戦に備えて、数千艘の船で三十万人が一年間保ちこたえられるだけの兵糧、馬二万頭分の飼料を赤間関（下関）に送った、と『甫庵太閤記』にある。

実際のところはわからないが、島津方の心胆を寒からしめるために、秀吉がもぐり込ませた諜者は、それくらいのことを触れ回ったにちがいない。

利家は嫡男利長の手勢を併せて八千騎を率いて参戦した。が、評定によって、利家は、堀尾吉晴、山内一豊とともに、京・坂の留守番を命ぜられた羽柴秀次に協力することになった。

利家は手元に五千騎をおき、利長に三千騎を与えて九州に従軍させた。

秀吉が、即位して間もない後陽成天皇に願って太政大臣となり、豊臣の姓を賜ったのは十二月十九日だが、これも九州征伐の総帥として、一段と貫禄をつけるためであった。

天正十五年正月二十九日、豊臣勢は、先鋒の宇喜多秀家が、つづいて秀吉の弟の豊臣秀長が出発した。

秀吉自身は、三月一日、佐々成政、浅野長政以下の諸将を率いて大坂を発った。途中、備後赤坂で、前将軍足利義昭に会って酒を酌み交わした。一方は今や天下の関白殿下、片や毛利家に養われる流謫の身、ふたりが抱いた感慨はどんなものだったのだろう――。

その後、厳島神社に詣でたりして、秀吉が赤間関に着いたのは三月二十五日。ここでも彼は、源平合戦のさい、二位尼のふところに抱かれて壇ノ浦に沈んだ、幼帝安徳天皇を祀る阿弥陀寺を参詣して、歌合わせの会などを開いた。戦場に臨むというより、物見遊山に出かけたような悠々たる軍旅であった。島津など、はじめから呑んでかかっていたのだ。

三月二十八日、九州に渡って豊前小倉城（北九州市）に入ってのち、秀吉は肥前―肥後路、弟秀長は豊後―日向路に分かれて進撃した。島津に与力した九州の諸将の城をことごとく蹂

蹣して、押しに押した豊臣勢は、四月二十五日には薩摩の出水に入り、五月三日には川内川ちかくの太平寺に本陣を置いた。

それより早く、もはや勝ち目なしと考えた島津義久は、先手の大将佐々成政に斡旋を頼んで、豊臣秀長に降伏を申し出ていた。

秀長は、秀吉より三つ齢下の四十七歳。秀吉がねねを娶って、初めて清洲に小宅を拝領した頃は、尾張中中村で百姓をしていたが、再三の兄の誘いを断わり切れなくて、その家臣となった。はじめ小一郎を名乗ったが、主の信長、兄の秀吉の一字ずつをもらって長秀と名乗り、官位の上で故信長より秀吉が上になると、名もひっくり返して秀長と改めた。そういう剽軽さは兄に似ていたが、従三位参議、大和郡山四十万石の城主（九州平定後、従二位大納言となる）となった今でも、寸暇には畑を耕し、種子を蒔くのを楽しむ素朴な人柄であった。また、寛容で出しゃばり嫌いでもあり、人望が篤かった。

そういう秀長の取りなしで、謹慎の意を表して髪を剃り落とし、名も龍伯と僧風に改めた義久を、秀吉は太平寺の本陣に呼びつけて、正式に降伏を受け入れた。

義久の案内で、一万騎を率いて鹿児島を訪れた秀吉は、桜島や、南国の風光を賞で、義久に所領安堵を言い渡して帰路に就いた。義久は弟の義弘に留守を頼んで、秀吉と行を共にした。十五日、鹿児島を発った秀吉一行は、二十五日、筑前筥崎（箱崎）に至って、ここに二十日余り滞在した。その間に論功行賞を行なって、越中富山城主からお咄衆に身を落としていた佐々成政に、戦功抜群として肥後一国五十四万石を与えて隈本（熊本）城主に抜擢した。

だが、これは成政にとって倖せとは言えなかった。肥後人はもともと気性が荒い。そこに気性の激しい成政では、うまくいくはずがなかった。一揆が続発した。近国諸大名の助勢を受けて、何とか鎮圧した成政は、秀吉に謝罪し、兼ねて報告を行なうため、大坂に向かった。が、尼ヶ崎で足留めされ、天正十六年（一五八八）五月、切腹を命じられて、波瀾に富んだ五十三年の生涯を終えた。

秀吉は、筥崎・博多（福岡市）がひどく気に入った。戦乱つづきで荒れ果てているこの地を、在家十万軒といわれた繁昌の港町として、泉州堺にも劣らない明国・南蛮国との交易の拠点にしようという夢を抱いたのである。いや、夢を抱いただけではない。黒田孝高に命じて、町の復旧を講じさせるとともに、天正十五年六月十五日には、対馬（長崎県）の島主、宗一鷗に、

「朝鮮国王に、来朝するよう使者を立てろ。聞かなければ、出兵も辞さないと伝えよ」

と、命じた。明国への橋渡しに朝鮮国を使おうと考えたのである。海音寺氏の言う「拙劣な朝鮮役」への種子がもう、この頃には蒔かれようとしていたわけである。

キリスト教の布教に対して、信長と同じにむしろ寛大であった秀吉が、一転して、布教の禁止に踏み切ることになったのも、九州征伐の副産物であった。

九州のキリシタン大名（大友宗麟・有馬晴信・大村純忠ら）が、天下の法度よりキリシタンの宗法を重く見て、家来や領民に入信を強要し、社寺の破壊、僧侶の迫害を行なっているばかりか、日本人を奴隷としてインドに輸出している実情を現地で見聞して、激怒したからであ

る。こののち、信長が僧兵・一向一揆の潰滅のために、キリシタンを保護したと同じ伝で、秀吉はキリシタン圧迫のために、一向宗に寛大になっていった。

さて、筥崎を発してのち、秀吉は中国で毛利輝元、小早川隆景らと親睦を計って、天正十五年（一五八七）七月十四日、ようやく大坂に帰り、二十五日には、ほとんど造営の成った華麗な聚楽第に入った。

それより二十日ばかり後の八月十四日、北陸の前田家では不幸が起きた。利家の厄介人として、尾山城内で晩年を過ごしていたご隠居さま、長兄の蔵人利久が、世を去ったのである。

十八日に利家は早馬によって兄の死を報らされた。が、豊臣方の将兵の帰洛、秀吉の聚楽第への移転などで、京・坂の留守役をしていた利家は多忙を極めており、尾山に帰る暇がなかった。

利久の葬儀は、能登七尾城にあった前田安勝と、一時は臣従した上杉景勝のもとを去ってのち、能登に帰って阿尾城（氷見市）の城番に納まっていた前田慶次郎利太らによって盛大に行なわれた。

遺骸は尾山城の南の野田山に葬り、法号は、そのさびしい生涯を想わせて、真寂院孤峰一雲居士。その夫人は髪をおろして、法名、真徳院を号した。

利家には、その後も、領国に帰る暇がなかった。

十月一日には、大坂北野の森で、茶の湯の総家元と称する秀吉が、諸大名から一般庶民にまで、天下人ぶり、大物ぶりを見せつけるための、いわゆる「北野の大茶会」を開いた。たった

一日だけの行事だったが、準備はたいへんであった。

年が改まって天正十六年を迎えた正月には、秀吉に従って宮中に参内、二月二十四日には鷹狩りの供、四月十四日から十八日までの後陽成天皇の聚楽第の行幸には、利長とともに盛典に出席……という具合で、秀吉は、利家を片時も側から離さなかった。

秀吉としては、家康に全く心を許していたわけではない。その点、若い頃からつき合いがあって気心も知れ、人間としても信頼できる利家を、家康に対抗できる地位に置く必要があった。その後も秀吉は、家康が大納言なら利家を中納言、家康が内大臣なら利家を大納言と、地位の上であまり大きな差をつけないよう、心をくばって利家を重用した。

その年の秋、利家は秀吉の許しを得て、自分の知行範囲、加賀・能登・越中のうち、能登一国を利長に譲った。五十一歳は当時としてはもう老齢である。わが身に万一のことがあれば三国すべては没収になる。せめて一国だけでも後代に残るようにと、算盤上手の利家は考えたのである。

利家が領国分割後の処理を行ない、兼ねて秀吉の「刀狩令」を領内の百姓に下達するため尾山城に帰ったのは、北国も雪深くなった十一月の半ば過ぎであった。

「――関白殿下の大仏建造に必要な釘や金物にするため、天下平穏となって無用となった刀・脇差・槍・鉄砲などを、ことごとく差し出せ。隠し持つ者は成敗する。嘘偽りないよう、各村のおとな百姓は、尾山城に参って誓紙を出せ」

と、各地に厳しい布告を出したあと、利家は、長兄利久と、さきに地震で圧死した末弟秀継

の墓参を行なって、懇ろに供養した。また久方ぶりで、一家団欒、一族重臣そろっての酒宴を催した。だが、何の場合にも、阿尾城番の慶次郎利太だけは顔を見せなかった。

（臍曲がりめがっ）

利家はいまいましく思ったが、ある日、自分から阿尾城に出かけていった。

「やあ、叔父上、しばらくでございますな」

利太はしゃあしゃあとして出迎えた。総髪を茶筅に結い、髭づらも汚れて、よれよれの小袖に、爺むさい綿入れの袖なし羽織をひっかけていた。

「ひどい恰好だな」

利家は顔をしかめた。阿尾城は常時、二百人の城兵がいるだけの小城であった。それにしても城番が、そのような身装をしていては示しがつくまいぞ、と怒鳴りつけたいところだった。が、利太は天文二年（一五三三）生まれで、叔父に当たる利家より五つ歳上で、もう五十六歳。怒鳴って訓戒する歳ではない。顔をしかめるにとどめた。利家のそんな気分が、利太にも通じたのであろうか。

「湯浴みなどして、少しさっぱりとしてお目にかかろうと存じましたが、それよりもまずご挨拶と思って、このようなむさくるしい態で……」

と言い訳をし、

「如何でしょう、湯加減もちょうどよいと、婢女が申していました。まず叔父上からひと風呂お浴びください。そのあとで拙者も幾らかは身綺麗にして、一献差し上げたいと存じますが」

「うむ」

利家は、それより早く、酒でも酌み交わしながら、少しやんわりと訓戒したうえで、知行も今の五千石から一万石に引き上げて、城もどこぞもっと大きな城を守らせたいと考えていた。が、利太は、

「さ、さ、どうぞこちらへ」

と、もう湯殿へ案内する気で立ち上がっていた。

（ここはまァ、あの拗ね者の言うとおりにしておくか）

と、利家は利太に従いていった。

「では、どうぞごゆるりと……」

湯殿の木戸を開けると、利太は去っていった。利家は脱衣して、浴槽の方に歩いていった。褌は除らぬ。股下を洗ったりもしない。いきなりざぶりと浴槽に飛び込んで、

「ひゃーっ」

さすがの利家も悲鳴を上げた。

よい湯加減どころか、冷水であった。十一月なかば過ぎの北陸は真冬の気候である。五十一歳の裸体に、冷水は砕氷をこすりつけたほどに感じられた。

「おのれ、慶次郎めっ」

久しぶりに激怒した。急いで浴槽から飛び出し、体を拭き、衣装を纏うと、

（悪戯にしても度が過ぎる。もう容赦ならん）

と足音あらく広間に戻ったが、利太の姿は見えず、代わりに、利太の末娘の花が、

「これを父上より、叔父上さまにと……」

と、一通の手紙を差し出した。

「拙者には、窮屈なる城勤めは向かぬようです。今日をもっておいとまを頂戴して……、女三人は残して参るゆえ、よろしく……」

といったことを認め、末尾には、

「――お寒い折柄、精々温かくして、くれぐれもお身ご大切に」

といった添え書きがあった。

（あの横着者めが、何が精々温かくしてだっ）

利家は腹が立ったが、見えない相手ではどうしようもない。怒鳴る代わりに、二つ三つ、つづけざまに嘘をした。

利太は武芸にすぐれ、茶の湯、生け花は一流の域に達し、詩歌にも長じていた。が、性格的に武人として肩肘はって暮らすより、文人としての気ままな市井暮らしを好んだ。北陸を去ってからは、妻とふたり、一時は京都で、晩年は大和の僻村で暮らした。当時としては長寿で、利家より遅く、慶長十年（一六〇五）十一月九日まで生きて、七十三歳で没した。

（三）

さて、九州平定によって、西日本のすべてを服属させた秀吉は、三河以東、箱根山の手前の東海地方の仕置きは、徳川家康に任せるとして、箱根より彼方にある関東八州（相模・武蔵・常陸・上野・下野・安房・上総・下総）から、奥羽地方に目を向けねばならなかった。

関東での大物は、何といっても相模小田原城を拠点にする北条氏であった。当主は、若き日を伊勢新九郎といった戦国大名の魁、北条早雲から五代目の氏直だったが、その父の氏政もまだ健在であった。

氏政は、名将として名を馳せた父の三代氏康とともに、たびたび来攻した武田・上杉の軍団を寄せつけず、ついに関八州三百万石を所領する大大名家をつくり上げた傑物であった。

「織田信長の草履取り上がりの猿面関白が、次に狙うは、この小田原ぞ」

と、息子の氏直に言い聞かせて、関八州の諸城の強化と、軍備の充実を怠らなかった。

一方の秀吉は、北条父子が自分を「猿面関白」と侮っているとは知らない。天下人の権勢をもって、戦わずして北条氏を、島津氏同様、臣従させたいと思っていた。

そこで、天正十六年（一五八八）五月と、翌十七年正月と、二度にわたって北条父子の上洛を促した。だが北条父子は、二度とも応じなかった。

あいだに立って困ったのは家康だった。

「あくまで上洛を拒否する所存なれば、お督を返してもらいたい」

といったことを含めて、起請文を北条父子に送った。督は家康の次女で、氏直の室になっていた。

いざという場合、舅として当然、女婿の味方をしてくれると思っていた家康の起請文は、さ

すがに氏直の胸を衝いた。あわてて、伊豆韮山城主をしていた末弟の北条氏規を上洛させた。

「上州沼田城を、北条に賜りとうございます。それなれば、明年には必ず氏直が上洛いたしましょう」

秀吉に謁して、氏規は言った。

（上洛の見返りを寄越せとは、関東武士も汚いな……）

秀吉は不快にも思い、軽蔑もしたが、この時点では、まだ出撃までは考えていなかった。

真田昌幸が沼田城にあることの前後の事情を、北条方が申し立てるまま聞き入れて、昌幸に命じて、沼田領の三分の二を北条方に返させて、名胡桃城だけを昌幸に安堵した。

ところが、利根川を挟んで沼田城と向かい合った秀吉方の城の存在を、目障りと考えた北条は、策を弄して名胡桃をも奪い取った。

名胡桃城は、真田家が武田氏に仕えていた時代からの、歴代の墳墓の地であった。昌幸は、ただちに秀吉に挽回のことを泣訴した。

秀吉は昌幸に同情した。何より、自分の好意的な裁決を蹂躙した北条方のやりかたに、強い憤りを覚えた。ついに関東への出兵を決意して、諸大名に出陣を命じた。

天正十七年（一五八九）十二月十日、秀吉は聚楽第に家康、利家のほか、上杉景勝らを招集して作戦会議を開いた。これが秀吉の国内における最後の戦いとなるわけだが、東海・北陸以西の諸国から動員した兵力は二十二万に及び、兵糧奉行の長束正家は、米二十万石を用意したほか、黄金一万枚を投じて、伊勢・尾張・遠江・駿河などから食料を買い集めた。

秀吉は、全軍を一体の豊臣軍団として総括し、厳しい軍律を定めて進撃を命じた。

東海道の先鋒は家康の率いる三万余騎。東山道の大将を命じられた利家は、天正十八年二月十六日、利長の将兵と併せて一万八千を率いて出発した。北陸路は昨冬以来の残雪がまだ深い。まず美濃に出て、木曽路から中山道を東進した。信州の笛吹峠を越えて上杉景勝勢と、さらにすすんで真田昌幸勢と合流して、上野に入った。

上野では松井田城その他の城砦を、武蔵に入っては松山城、厩橋（前橋）城、蓑輪城、河越（川越）城を落とし、鉢形城（埼玉県寄居町）を攻めた。五万の包囲軍に対して善戦した城主北条安房守も、十二日後には、頭を丸め、法衣を纏って開城降伏した。安房守が前田家に仕えて千石の知行を受けるようになるのは、なお後年のことである。

秀吉は、北条攻めでは、敵に対してこれまでになく厳罰主義をとった。城主、部将は斬殺して、帰農すら許さなかった。が、利家は秀吉の方針に反して、多くを助命し、服属させた。このことで、一時、秀吉の不興を買うことになる。

秀吉が本隊を率いて京都を発したのは三月一日。四月三日には、小田原に到着して、はじめ北条氏の菩提寺、早雲寺に本陣を置いた。だが、小田原城内にも内応者があって、城内を一望するためには、城の西南にある笠懸山が適所であると教えた。

さっそく工事にかかってつくらせたのが、世に言う「石垣山の一夜城」である。言うまでもないが、一夜で出来たわけではない。四万人がかりで、およそ八十日間をかけてつくられた、天下人秀吉の本陣に相応しい立派な城だった。

小田原城は、東は荒波打ち寄せる相模湾、西は天嶮箱根山、南北に早川・酒匂川の急流、自然が守る中に築いた東西二十五町（約二・七キロ）、南北二十町（約二・二キロ）、二十余の曲輪を持った堅城。しかも、城地に町屋も取り込んで、まわりには四里（約一六キロ）に亘って塁濠がめぐらされ、敵に包囲されても、たちまち日常の暮らしに困るようなことはなかった。かつて、上杉や武田に攻め込まれたときも、向こうが攻め疲れて退陣していくまで、じっと籠城していた。

そうした過去の経験が、

（猿面殿下も、そのうちに包囲にあきて引き揚げていくだろう）

という、氏政・氏直父子の楽観につながっていた。

将兵たちが籠城にあきないよう、酒宴、遊芸・音曲などは勝手とし、碁・将棋・双六で遊び、茶の湯・連句などを楽しむのを自由にしていた。町屋の賑いも平時と変わらなかった。

秀吉のほうも心得たもので、まるで北条父子と根競べするように、石垣山の本陣にどっかりと腰を据えて、長期の包囲態勢をとった。

京・大坂から遊芸人を呼んで、将兵を慰安し、従軍させていた千利休に陣中茶会を催させ、自身、側室淀殿（茶々）を呼び寄せたが、諸大名にもすすめて女房を呼び寄せさせた。

根競べも、三ヵ月、四ヵ月となると、籠城の北条父子のほうがあせってきた。何よりも、味方してくれると思っていた氏直の舅の家康が敵に回ってがっくりしていたところへ、いざという場合は救援すると約束をしていた奥州黒川城（のちの鶴ヶ城。会津若松市）の伊達政宗まで

が、秀吉陣営に投じたとわかっては、心細い限りであった。兵糧も乏しくなってきた。後世に「小田原評定」のたとえ言葉を遺したが、城内では毎日のように、

「――降るか？」

「――籠城をつづけるか？」

「――いっそ、打って出るか？」

の評定をつづけた。主として、

「草履取り上がり風情に頭が下げられるか」

と、体面に拘る氏政によって、評定はつねに結論を得ないままに終わったが、次第に部将たちのあいだに降伏説が強くなってきた。

「これまでだな」

ついに、氏直は心を決めた。七月五日、城門を開いて、秀吉に降伏した。

秀吉は家康に遠慮して、氏直は助命したが、その父の氏政と叔父の氏輝、それに内応してくれた松田憲秀、大道寺政繁の二家老を切腹させて、降伏を認めた。

関東平定につづいて、秀吉は奥羽平定のため、全軍を東北にすすめた。

弱冠二十四歳ながら、奥州六十六郡の約半分、三十余郡を領して、奥州の独眼竜と怖れられた伊達政宗さえ、すでに軍門に降していた秀吉は、北条攻めのときとは異なって、奥羽諸大名には、早く来降・通好する者には寛大、遅れる者は用捨せぬの態度で臨んだから、さして抵抗も受けず、奥州仕置きを終わった。

小田原参陣に遅れた罰で、政宗は、略取したばかりの旧芦名領、会津二十万石のほか、大半の所領を没収されて、黒川城から羽前米沢城（米沢市）へ、のち、さらに陸前岩手山城（玉造郡）に移された。

秀吉は、伊勢松ヶ島城（松阪市）の蒲生氏郷を抜擢して、会津に封じ、黒川城を与えた。

その黒川城で三日すごした秀吉は、八月十二日に発ち、九月一日、京都に凱旋した。

利家病む

(一)

関東・奥羽平定によって、秀吉の海内統一は、ほぼ完了した。だが、痛恨事が起きた。小田原征伐まえから、体の不調をうったえていた実弟の豊臣秀長が、天正十九年（一五九一）の正月二十日、大和郡山城で没した。

秀長は秀吉の下にあって順調に栄進し、大和郡山百十四万石を領する権大納言になっていた。すでに述べたように、人柄は朴訥、穏和で、諸大名もみな、親しみと好意を寄せていた。若い頃から、なかなかの戦さ上手でもあったが、内政面で殊にすぐれた手腕を発揮して、豊臣政権にとっては大切な人物であった。

「まるで片方の腕をもぎ取られたようじゃ」

と、秀吉は嘆き、泣いた。

秀吉にとって、徳川家康は頼もしい味方には違いなかったが、対等の立場にある実力者として距離をおかねばならなかった。むしろ隙を見せることのできない好敵手であった。

「秀長に代わって、わが豊家のために尽くしてくれる者は、まず、あの仁以外にいまいなあ

……」

と呟いて、秀吉が思い浮かべるのは、近来、とみに重厚味を加えてきた前田利家であった。

同郷人であり、信長学校の同窓生であり、清洲・岐阜で隣人として家族ぐるみ親しく付き合って、おたがいの気心はよく解っていた。それに女の豪を襁褓のうちから養女にくれ、麻阿（加賀殿）という側室もくれている。

それに何よりも、利家が行動の根本に「義」を置いている点を、秀吉は重視した。利家が義の人、真実一路の清々しい人柄であることは、何も秀吉だけでなく、諸大名も認めていた。そこに利家の人気があった。

「もしもだ、もしも太閤が亡き人になったとして、次に天下人になるのは誰であろうか」

といった話が、諸大名のあいだで出たとき、蒲生氏郷が、

「前田どのを措いてはなかろう」

と言い、諸大名がみなうなずいたという話は、かなり喧伝されていて、実は秀吉も小耳に挟んでいた。

しかも、利家のおもしろさは、天下人になろうなど、夢にも思ったことがないこと、大領を得ようとか、実力者であろうとか考えたこともない、天性無欲というか、まるで仙人のように超然としていることを、秀吉は長年のつき合いでよく知っていた。

（そうじゃ、これからは又左が好むと好まざるにかかわらず、前田家に、徳川家に対抗できるだけの力を持たせねばならぬ。それが、わが豊家のためでもある）

秀吉は、こんどは胸の内で呟いた。

利家が従三位を拝し、参議に列せられたのは、それから間もなくのことであった。それは利家が、豊臣政権の将来を支える中枢に据えられた手始めで、秋にはさらに、利家・利長父子は、細川幽斎（藤孝）・忠興父子らとともに、昵懇衆に加えられた。昵懇衆は、御伽衆などと違って、秀吉の軍事・政治顧問として、機密な相談にもあずかり、遠慮なく提案をすることもできた。側近中の側近を意味している。

しかし、一方で秀吉はその頃から、海音寺氏の言う「惰性期をすぎて頽唐期に入った」としか考えられない行動も見せはじめていた。

秀長の死から間もない二月はじめ、それまで茶頭として重用し、三千石を給していた千利休を突如、堺に追放し、追いかけるようにして十三日に、七十翁の皺腹を切らせた。

後世、利休が京都大徳寺に新しく建った山門の上に利休像を置いたことを、僭上の沙汰と秀吉が立腹したためとも、女の吟を側室にと望まれて撥ねつけて不興を買ったためとも、あるいは、秀吉の外征について、

「唐攻など、太閤の力をもってしても、明智征伐のように易々とは参るまい。阿呆な考えは捨てることやな」

と陰口したことを、石田三成が告げ口したためとも、いろいろ理由が挙げられているが、すべて推測の域を出ない。今日に至るも真相は謎である。

それはともかく、秀吉が五十二歳にして初めてもうけた嫡男、側室淀殿が産んだ鶴松が、病むこと四日、僅か三歳で死んだのは、利休の自刃から半年と経たない八月五日であった。

「宗易（千利休）どのの祟りじゃ……」

と、巷間、秘かに囁かれた。

目に入れても痛くないほど愛していた鶴松の死に号泣した秀吉は、

「淀の方よ、早ようもうひとり産んでたもれ」

と、二十三歳の瑞々しい淀殿の体に溺れていった。

当時の権力者として、正室のほかに何人かの側室がいるのは異常なことではない。伊達政宗の家臣が書いたものに拠れば、秀吉には、淀殿のほかに、京極高吉の女で美貌を謳われた松の丸殿、主君だった信長の五女の三の丸殿、利家の女の加賀殿、蒲生氏郷の妹の三条殿、信長の弟織田信包の女の姫路殿、そのほかに甲斐姫、おたね、南殿、広沢局など、十六人の側室がいたという。

時期的に多少のずれはあったが、多くの側室との荒淫に精気を費やしていた秀吉が、五十なかばで、後嗣ほしさとはいえ、若い淀殿との閨の睦みに精を出すなど、心身によかろうはずがない。一世の英雄の急速な頽唐と、決して無関係ではなかっただろう。

そして頽唐の極なるものが、わが国で文禄・慶長の役と称し、韓国で壬辰倭乱という、前後七年に及ぶ、朝鮮侵略戦であろう。奈良興福寺の学僧、多聞院英俊らが書き残した『多聞院日記』（写本）に、

「――稀代の不思議」

と誌し、ルイス・フロイスも『日本史』に、

「――なぜ、そのように大胆かつ、無謀な企てに手をつけたのだろうか……、日本中の人をおどろかし、不思議に思わせた……」

という意味のことを書いている。

せっかく天下が一統され、世の平穏を迎えることができるか、と胸をさすっていた庶民たちには、太閤はついに狂ったとしか思えなかったにちがいない。

とにかく天正二十年（十二月八日に改元して文禄元年となる）三月二十六日には、淀殿を伴って秀吉は京都を発ち、四月二十五日には、朝鮮侵略の基地として北九州の肥前に造らせた名護屋城に入った。

秀吉は、滞陣の長びくことを考えて、他の部将たちにも、婦女子の帯同をすすめた。

前田利家は側室第一号となるちよを伴った。ちよはおまつに仕えて、髪梳役をしていた。利発でよく気のつく二十三歳の美しい娘であった。身の回りの世話をさせるため、おまつに頼んで借りたのであった。

名護屋では、前後してちよ、淀殿が懐胎した。利家は夏のはじめ、ちよを金沢に帰し、秀吉も秋に淀殿を大坂に帰した。

文禄二年（一五九三）四月十六日、ちよは男児を産んだ。猿千代と命名したこの子が、長じて前田家三代となり、名君と称された利常である。

淀殿も同年八月三日、男児を産んだ。のちの豊臣秀頼である。幼名は拾丸。

さて、文禄の役で、秀吉が諸大名に命じて動員したのは陸・海あわせて三十万五千三百人という大軍であった。そのうちの十五万五千八百人を、九つの軍団に編成して渡海させた。

九つの軍団は、釜山の辺り一帯に上陸してのち、三方から攻撃、北上して、一と月あまり後の五月三日には、漢城（現在のソウル）を占領した。

侵略軍の優勢は、秀吉を狂喜させた。「今日こそ……」「明日こそ……」と、自らの渡海を言い出した。予想以上に弱い敵勢に気をよくして、自ら全軍の指揮を執り、鴨緑江を渡って一気に明国まで攻め込もうと考えたのだった。

太閤が一石米を買いかねて
今日も五斗買い（御渡海）明日も五斗買い

という落首が行なわれたのは、この頃のことである。作者は秀吉の暴挙を、醒めた冷ややかな目で見つめていた御伽衆のひとり、曽呂利新左衛門とも伝えられているが、むしろ一般民衆のあいだから起こった侵略反対、暴挙反対の声である。あるいは、天の声というべきだったのではなかろうか。

秀吉の渡海に強く反対したのは利家であった。

「殿下は……」

と、利家は敬称する。むかしはむかし、今は今である。いまでも陰で秀吉の出自の卑しさを言う者がいるが、利家は違う。面と向かっても、陰でも、殿下と呼んだ。そういう人であった。

「殿下は、この国にとって、かけがえのない大事なお人でござる。風土も詳かならぬ異土に渡って、万一のことがござっては、この国の一大事。唐戦さは、小西（行長）・加藤（清正）・福島（正則）・島津（義弘）その他の働き盛り、戦さ上手にお委せあれ」

「それも、そうじゃなも」

と、秀吉が逸る気持ちを抑えているあいだに、淀殿が懐妊した。秀吉も渡海を口にしなくなった。その後、淀殿を大坂に帰し、やがて拾丸が出生したことは、既述したとおりである。

「どんな小猿が生まれたかのう。一度、この目で見たいものじゃが」

と、秀吉は利家に言った。

「ごもっともこと。一度、大坂にお帰りになるがよい。ここには、徳川どのもござれば、拙者もおり申す。ご心配無用でござる」

「そうやのう。そうさせてもらおうかなも」

秀吉はわくわくしたように尾張言葉で言った。天下人の秀吉が、いまもお国訛りで気楽に話すことのできるのは、大政所と北政所のほかには、利家だけであった。

秀吉は、八月二十五日に名護屋を発って、大坂へ帰っていった。

その頃、朝鮮戦線では、枯野を焼く火のように進撃していった豊臣軍団の足が、滞りはじめていた。弱小の正規軍に代わって起ち上がった、朝鮮民衆の組織した義兵（義勇軍）の抗戦力が、次第に強烈になってきたからである。

殊に、今日も、韓国の人々の誇りである名将、全羅左道水使の李舜臣が、カメの形をした新

型軍船亀船（日本側は亀甲船と呼んだ）を縦横自在に乗りまわして、閑山島沖・安骨浦その他で、海域に不案内の秀吉の水軍（海軍）に潰滅的な損害を与えて、制海権を奪ってからは、それでなくても戦線が拡大して兵糧・武器・弾薬の補給に苦しんでいた侵略軍の戦力は、急速に低下していった。

それに反して、義兵の戦力はますます強化されてきた。九月になって、明軍が、鴨緑江を渡って朝鮮救援に駆けつけた頃には、慶尚道だけでも、義兵は七万八千人に膨れ上がっていた。

渡海軍の損害は、日ましに大きくなった。

一例を挙げると、第一軍（小西行長・宗義智・松浦鎮信・有馬晴信らの率いる九州勢）一万八千七百人の八〇パーセント強、第二軍（加藤清正・鍋島直茂・相良頼房らの率いる九州勢）二万二千八百人の四〇パーセント強が戦死した。

文禄三年（一五九四）五月、渡海軍団は、釜山その他に僅かの和平交渉のための部隊を駐留しただけで、半島から撤退した。

(二)

渡海軍団の去ったあと、小西行長と明使沈惟敬によって、和平のための予備交渉がつづけられた。むろん、その段階で談判決裂となるかもしれなかった。平和はまだ遥かであった。だが、大坂に帰って拾丸の顔を見た秀吉は、外征のことより、関心の八割が愛児に移ってしまった。

「やがて、この大坂城は拾丸のものじゃ。わしの隠居所を用意しておかねばのう」

と、気の早いことで、伏見城（京都市伏見区）の普請に取りかからせた。城は文禄三年の暮れには出来あがった。

自分が入るはずの伏見城に、まず淀殿と拾丸を移した。いずれ秀吉も伏見に移って、当分はいっしょに暮らしたいと思ったからである。

その頃、「おひろいへ」として、大坂城から秀吉が出した手紙に、

「――返すがえす、御ゆかしく候まま、やがて参り候て、口を吸うべく候……」

といった文句がある。子どもの二、三歳は可愛い盛りである。秀吉はきっと、愛情表現として、よく接吻をしたのであろう。文字どおりの猫可愛がりであった。

そのことが、血腥い事態を起こすことになる。

秀吉は、実姉とも（瑞龍院日秀尼）の子、つまり甥の秀次を世嗣として、関白職を譲ったことを「早まったり」と後悔しはじめた。

全国を五分して、四を秀次に、一を拾丸にとするか、いや、それより拾丸と秀次の女を娶して、いずれ政権を拾丸に譲渡させようか……と、いろいろ考え、秀次に伝えもした。

もともと、短慮・粗暴な秀次であった。秀吉の庇護のもと、温くぬくと育てられ、栄進に栄進を重ねてきた彼は、苦労知らずのわがまま者であった。拾丸の誕生によって、俄に冷たくなった叔父秀吉への反撥が、常軌を逸した行動を誘発した。正親町天皇が崩御して諒闇ちゅうにも拘らず、京都近郊で派手な遊宴を催し、相撲興行を打たせて楽しんだりした。

殺生禁断の比叡山で狩りをし、妊婦の腹を裂いて胎児を見るといった残虐も行なった。

秀吉をもっとも憤らせたのは、正室（池田氏）の死後、寡婦となっていた菊亭大納言晴季の女を、十一歳の女子ともども引き取って室とし、母子と寝所を共にして戯れる、つまり母子併姦を行なったことであった。

秀次の私行を調べさせていた石田三成、長束正家からの報告を聞いた秀吉は、

「かやつは、もはや人ではない。犬にも劣る畜生である」

と、文禄四年（一五九五）七月八日、秀次を木下吉隆の屋敷に呼び出して、坊主にして高野山に護送させ、七日後の十五日、福島正則らを検使に差し向けて、腹を切らせた。

秀次の首を曝した三条河原には、彼の妻妾と、彼女らの産んだ子ら三十余人を男女、幼少の区別なく引き出して斬刑に処した。

秀次の処刑は、その所業の当然の報いにしても、母のふところに縋って泣き叫ぶ二つ三つの幼児までの斬殺は惨すぎる。

「関白も畜生じゃったが、太閤も、血も涙もないこの世の鬼じゃ」

と、京の人々は悪評した。秀吉は秀次を高野に追い上げた直後、前田利家を拾丸の傅役とし、秀次の旧領越中新川郡と、秀次の伏見館を傅役料として与えた。これによって、能登・加賀のほか、越中全郡が前田家の所領になった。

その後、秀吉は七月十二日から二十日の日付で、諸大名に、拾丸に忠誠を誓う起請文を差し出させた。

「――敬白、天罰霊社上巻起請文前書事

一、おひろい様へたいし奉り、聊かも表裏別心を存せず、御為の然るべき様にもりたてまつるべき事……」

に始まって、子々孫々に至るまで忠功を尽くすことを誓約する条々を立て、おしまいは、

「――右の條々、若し私曲、偽り御座候においては、此の霊社上巻起請文御罰を深厚に罷り蒙り、今生にては、白癩黒癩の重病を請け、弓矢の冥加七代に尽き、来世においては、阿鼻無間地獄に堕在し、未来永劫浮かぶ事これあるべからざるものなり。仍って上巻起請文件んの如し。……」

と、何とも無気味な字句で結んである。

十二日の日付で増田長盛、石田三成が連署血判して差し出し、二十日の日付で、前田利家と宇喜多秀家が個々に、また同日、長谷川秀一、京極高知、前田利長、蜂須賀家政、蒲生氏郷、徳川家康、上杉景勝ら、重だった大名二十七人が連署血判して差し出している。

文禄五年（十月二十七日に改元して慶長元年となる）四月、四歳になった拾丸は早々に元服させられて、秀吉の後嗣らしく秀頼と名乗ることになる。

五月九日、父秀吉、傅役利家に介添えされて上洛した秀頼は、後陽成天皇に拝謁した。えんえんとつづく豪華な行列は、沿道の人々の目を驚かした。秀頼は従五位に叙せられ、利家は権中納言から、権大納言に昇せられた。

六月二十日を過ぎて、かねて和平交渉のために来朝を伝えられていた明使一行が、泉州堺に

入港した。一行は堺に宿泊して、副使沈惟敬だけが引見の日取り、次第などを打ち合わせるため、伏見に来た。その接待を秀吉から命じられた利家は、彼を前田邸（旧秀次邸）に宿泊させた。

明使と前後して来日するはずの朝鮮使節団の到着が遅れたため、沈惟敬は二十日あまりも前田邸に滞在したが、その間の七月十三日、京都・伏見・淀を中心に、いわゆる慶長の大地震が起きた。地震は夜中の子の刻（午前零時）に起こり、相当ひどい余震が一ヵ月にも及んだ。伏見城の被害は甚大で、金色まばゆい瓦を葺いた天守をはじめ、諸門や、建物のほとんどが崩れて、女だけでも五百人以上が圧死したと伝えられている。

このとき、真っ先に伏見城に駆けつけたのは、文禄の役で小西行長と不仲となり、行長と親しい石田三成の讒言によって、秀吉から謹慎を命じられていた加藤清正と、前田利家であった。

余震のつづくなかで、幼い秀頼を抱いて蒼くなっていた秀吉は、利家の顔を見ると、

「虎め（加藤虎之助清正）がさっそく来てくれたが、あやつ一人では心もとのう思っておった。よう来て給うた。ほんとに心細かった」

と、涙を浮かべて喜び、

「秀頼もこのとおり、何の障りもなかった。さあ、爺に抱いてもらえ」

と、秀頼に言った。

「爺、よう参ったな」

と、小さな手を首に巻きつけてきた秀頼を、利家は強く抱き締めてやった。

「怖うはござらなんだかな？」

「うん、怖うはなかったが、怖かった」

と、幼い声が答えた。

「わははは……」

「ははは……」

秀吉と利家は、同時に笑い声を立てた。

傅役として接近していた利家は、幼い秀頼に、並ならぬ素質のよさを見出していた。秀吉との交誼の情と別しても、この子のため、豊家安泰を計ってやりたいと思っていた。

地震のために延びのびになっていた秀吉と明使との謁見は、九月一日から大坂城で行なわれた。明の正使は楊方亨、副使は前田家に宿泊していた沈惟敬。二日には、酒宴のあと猿楽などを催して、秀吉は機嫌よく饗応に努めた。

だが、宴も終わって、明国王よりの勅書を、相国寺の西笑承兌に読ませたところ、秀吉が明に要求していた七ヵ条について何も触れず、

「――特に爾を封じて日本国王と為す」

とあるのを聞いて、秀吉は激怒した。

使者を追い返して、朝鮮再侵略の令をくだし、慶長二年（一五九七）二月二十日には、西国の諸大名による渡海軍団の部署が定められた。

徳川家康や上杉景勝ら、関東の大名は留守をまかせられた。利家も秀頼の傅役として、留守を護ることになった。

(三)

地震で崩れた伏見城の修復を急がせる一方、秀吉は京都箱瀬ヶ崎に新しい邸を築き始めた。落成したのは慶長二年（一五九七）九月二十六日であった。

秀吉はさっそく、秀頼と傅役利家らを連れて、新邸を見に行った。

四歳の秀頼は、まだ何の道具も入っていない広い座敷や、造園もこれからということで草原のように広々とした庭が、ひどく気に入ったようで、

「爺といっしょに、ここに住もうな」

と、利家に言って、座敷を庭を、犬ころのように駆け回った。

それを目を細めて、楽しそうに眺めながら、秀吉は、

「秀頼は、おぬしがよほど好きなようじゃのう、ありがたいことじゃ。秀頼には、わしのほか、おぬし以上に頼れる者はおらんのや。くれぐれもよろしう頼みいる。……それにつけても、おぬし、くれぐれも体を労ってくりゃれ。秀頼が十五、二十に成人するまでは守護してもらわねばならん。いや、わしだとて、その頃までは目を瞑らぬつもりじゃが……」

と、しみじみした口調で言った。

利家は実は、この正月過ぎから体調がすぐれなくて、大納言の官位も辞退していた。が、秀

吉・秀頼父子には、そんなそぶりも見せぬよう努めた。

「殿下とわれらは、齢は一つ違い。死ぬのも同じ頃でござろうな。ま、八十までは、かのお子のためにも生きねばなりますまい」

遊び戯れている秀頼を見て言った。

その翌日（二十七日）には、秀頼を連れて参内した秀吉に、利家も傅役として同行した。秀頼は前年には従五位に叙せられていたが、この日、従四位下に昇叙され、左近衛権少将に任ぜられた。そして、さらに翌々日には右近衛権中将に進められた。朝廷が授ける官位など、太閤の権力でどうにでもなった。

その後、数日して秀吉は、徳川家康、蒲生氏郷、浅野幸長らを連れて、前田邸を訪れた。少し遅れて秀頼も饗応の席に加わった。

秀吉は、秀頼傅育の礼物として、愛用してきた志野の茶壺と「富士」の銘を持つ茄子の茶入のほか、三池小伝太の脇差などを利家に贈った。どれも諸侯垂涎の品であった。利家は、秀頼に銀子二百枚、華麗な馬具、衣服などを贈った。

豊臣家、前田家の親密な関係を、秀吉は特に家康と、智将の誉れ高い氏郷……このふたりの危険な男に見せつけておきたかったのである。

だが利家の体調は、秋が深まり寒さがつのるにつれて、いっそう悪くなった。小用の際、時に思わず顔が顰むほど下腹部が痛んだ。排尿量も少なく、したがってたびたび小用に立たねばならなかった。常に腰部にいやな鈍痛を感じた。その症状からして、病気は前立腺の患いでは

なかったかと考えられる。

たびたび尿意を催す煩わしさもあって、精励をもって知られていた利家も、しばしば登城を休むようになった。

（何ともいやな持病に取りつかれてしもうたな）

その日は、大仏殿再興の式典の執り行なわれる日であったが、利家は出席を取り止め、

「用があれば、こちらから呼ぶ。誰も近づくな」

と、家人、近侍に言いつけて、ひとり床に静臥していた。少し熱もあるようで、うつらうつらしていると、不意に、声もかけず廊下側の障子をするすると開け、入って来た者があった。清涼な山気のようなものの漂いが感じられた。

「ほう……」

利家には懐かしい姫トラの匂いであった。

利家は、九年前の天正十六年（一五八八）秋、嫡男利長に能登一国を譲ったとき、

「これからのち、姫の一党は、利長のため、わしに尽くした如く尽くしてやってくれ」

と、姫ノ八蔵・トラ父娘以下、美濃の姫郷の忍びの者たちに言い渡した。爾来、姫の一党は、利長・利政兄弟の指揮のもと、よく諜者の勤めを果たしてくれているようであった。

一年に一度か二度、姫トラは利家に何かの連絡で姿を見せた。いつも清涼な山気を漂わせて、そよとした風のように現われ、また風のように去っていった。

その日は、およそ半年ぶりの訪れであった。

「姫トラじゃな。かまわぬ、近う寄れ……」

利家は横臥したまま言った。

「お久しうございます」

姫トラは、枕ちかく躙り寄って、丁重に挨拶した。その聡明そうな広い額、きりっとした太い眉、黒曜石のような瞳、恰好のよい口許は魅力的であった。

「わしは、このとおり老い、病み衰えてしもうたが、そちは少しも変わらぬのう」

利家は詠嘆するように言った。五年まえ、父の八蔵が八十歳で世を去ったあと、トラは姫一党の女首領として働いている。利家とは同年のはずだから、老女でなければならなかった。初めて尾張荒子の小夜ノ川原で会った頃と、まるで同じとは言えなかったが、娘盛りの頃とあまり変わらなかった。黒髪に、まだ一筋の白髪も混じってはいないようだった。

「いつ見ても若い、化けものじゃな」

利家は羨ましそうに言った。

「化けものは酷うございます。トラは、ご側室さまがたとの睦びごとに精を濫費あそばした大納言さまとは違って、いまも正真、処女でございます。おかげで齢は取りませぬ。ご覧くださいまし」

姫トラは、黒い忍び衣装の胸元を寛げて、片方の乳房を出して見せた。顔は陽焼けしているが、胸乳は輝くように白く、むっちりと盛り上がっていた。これまで利家が持った五人の側室、ちよ（東丸殿）、いわ、在、阿千代、於古和の誰のものより美しく、魅力的であった。

「トラと一度も睦むことがなかったのが、いまとなっては悔やまれるわい」
利家の声には実感が籠っていた。
「少しはお元気が出たようでござりますな」
姫トラは、すばやく乳房をしまって、手にしていた黒い布袋を差し出した。
「きょう伺いましたのは、忍びのご用ではございませぬ。大納言さまお患いと伺って、忍び仲間の用いる薬草をお持ちしました。煎ずるご面倒もございません。朝夕、ひと摘みほどを口にして、よくお嚙み遊ばして飲み込めばよろしゅうございます。お体に必ずよいと存じます」
「……」
「大納言さまのご登城ないのを倖いと、追い落としを図って、大納言に謀叛の計ありなどと、太閤殿下に吹き込む輩もございます。いまのところ、殿下は信じてはいらせられませんが、一日も早くお元気におなり遊ばして、殿下にお顔をお見せにならねばなりません」
「うむ、それが言いたかったのじゃな。この薬草を、そなたの気持ちとともにありがたく嚙みしめて、早く元気になるよう努めよう」
「お願いいたします。……また、お会いする折もございましょうが、利長さま、利政さまよりお知らせがない限り、トラも前田家のおため、達者で働いているものとおぼし召しくださいまし」
「うむ。たのんだぞ」
「はい。どなたかこちらに参られますようす、トラはこれにて失礼いたします。どうぞ、くれぐれもお大事に……」

姫トラは一礼すると、来たとき同様、障子の開け閉めにも音を立てず、すうーっと風のように去っていった。それとほとんど入れ替わりに、
「誰ぞ参っておりましたか……」
と、姿を見せたのは利長であった。大仏殿の式典から戻った足で見舞いに寄ったのである。
「誰が参っていたのでもない。むかし読んだ『論語』の章句を思い出しながら、病気平癒の祈念代わりに口誦んでいたのじゃよ」
利家は、そう答えて、
「――子曰、苟に仁に志せば、悪しきことなし……」
と、『論語』の一節を口誦した。もう遥かなむかしのことになったが、茶坊主十阿弥を斬って信長に追放されたあと、熱田神宮で書庫暮らしをしていたとき、初めて『論語』十巻に触れたのであった。
他の本にはあまり興味を持たなかったが、『論語』だけは、巻一の「学而第一」、
「――子曰、学びて時にこれを習う、亦た悦ばしからずや。朋あり、遠方より来たる、亦た楽しからずや。人知らずして慍みず、亦た君子ならずや」
を読んで、心に沁みるものを感じて以来、その多くを暗誦できるまで、繰り返して愛読してきた。
姫トラが見せた美しい乳房と、若い日に愛読した本の章句の口誦に、利家は、久しぶりに元気づけられていた。

白山鳴動す

(一)

慶長三年（一五九八）の春を迎えて、利家の病状も、やや好転した。

三月十五日、昨年の春につづいて、秀吉が山城（京都府）の醍醐寺三宝院で催した花見の宴に、利家は室のまつを杖代わりに頼んで出席した。

その日、秀吉は秀頼を伴って出席し、北政所のほか、側室西丸殿（淀殿）、松の丸殿、三の丸殿、加賀殿はじめ、女房衆だけでも三千人が顔を揃えるという華麗な宴であった。

しかし、海の彼方の朝鮮では、再征の諸軍が各地で一進一退の苦戦をつづけて、終結の見通しも立たないまま、泥濘にはまった様相を帯びていた。

「異郷で苦労している将兵たちのことを思うては、とても花見気分にはなれぬのう」

「さよう。せっかくの美酒が、いっそ、にがいわい」

招かれた諸侯の顔は冴えなかった。

一般庶民たちの顔はもっと、にがにがしげであった。

「ばかな戦さで金を使うて、そのうえに花見とは、太閤さんもいい気なもんや」

「その万分の一の金でも、わしら貧乏人に回してくれたらのう。太閤はんも偉うなり過ぎて、むかしの貧乏の苦労を忘れはった」

と、不平たらたらだった。

秀吉の外征と、豪華絢爛好みを支える庶民の生活は苦しく、世情は暗く、不平不満が渦を巻いていた。いつ不逞の輩が蜂起してもおかしくない情勢に備えて、醍醐寺周辺は、弓・槍・鉄砲を携えた兵たちで、固められていた。

かつて、北野で大宴会を催したときのような、明るい伸びのびとした雰囲気は何処にもなかった。およそ花見らしからぬ重苦しさが漂っていた。

それでも山内には、八つの茶屋を設けて珍味佳肴を振る舞い、趣向を凝らした店舗まで設けられていた。女房たちは、咲き盛る花の道をそぞろ歩いて、飲食、買い物を楽しみ、盛んに嬌声を上げていた。

病み上がりの利家には、むしろ苦しいおつき合いであった。だが、歯をくいしばって苦痛に耐えた。誰にも大儀そうなようすは見せなかった。そして、歌会の席では、

さきつづくわが枝の花も今年より
　匂ひは代々の春につきせじ

と、三宝院に献詠し、もう一首、

あひをひの松に桜の咲きそひて
　みゆきの山に千世をかさねん

と、豊臣家の弥栄を祈って詠んだ。

前の歌は、前田一族の永遠の繁栄を祈願したものであろう。この二首は、生前にかなりの歌をつくっている利家の最後の詠草になった。

醍醐の花見に、無理をして出席したのは、やはりよくなかった。病状が悪化した。下腹部から始まる痛みが、背筋を這い上って、肩や胸を不快に圧迫し痛ませ、顔面、頭部まで痛ませた。尿の色は薄黒く濁っていた。明らかに前立腺の患いの悪化による血尿であった。

四月を迎えて、利家は秀吉の許しを得て、下の病いにいいといわれていた上州草津温泉へ湯治に出かけた。

草津に行くまえ、利家はまず金沢城を訪れた。四年ぶりのお国入りであった。そのことも出発まえに秀吉の内諾を得ていたが、これまでどおり秀頼の傅役をつづけることを条件に、所領のすべてを世子利長に譲渡して、自分は隠居することにした。それを伝えるための帰城でもあった。

金沢城のあと、越中守山城（高岡市）に立ち寄って、そこで前田対馬の手で養育されていたちよの産んだ子、末っ子の猿千代と初めて父子の対面を行なった。猿千代は、目もと涼しい利発そうな子で、もう六歳になっていた。顔だちはわしにより、ちよに似たようだ……と思った。

「病気知らずで健やかにお育ちになり、まことにご利発、末頼もしき若君にござります」

対馬が、まるでわが子の自慢をするように、後年、前田家三代の当主となり、名君と謳われた利常となる猿千代を褒めちぎった。

「これこれ、当人を目のまえにして、そのように褒めるものではない。当人のためにならぬ」

と、対馬を戒めながらも、行儀よく坐っている猿千代と、名護屋の陣で震えながら抱かれたちよの可憐さとを重ね合わせて、

「わしが父じゃ。さ、ここにござれ」

と、利家は優しく声をかけて、猿千代を膝近くに呼び寄せた。用意させてあった刀、脇差を手ずから腰に差し与えて、

「爺（対馬）の言うことをよう聞いて、文武に励み、前田の家のため、立派な大将になれよ」

と、愛しさをこめて、切禿にした頭をしばらく撫でていた。

さて、草津の湯では、毎日数度、黄色く濁った硫黄泉に浸かり、鍼の上手といわれていた伊白の治療を受けた。鍼の効き目はあまりなかったが、硫黄泉はよかったようである。

薄黒い尿は止まらなかったが、差し込む痛みは軽くなり、間遠くなった。

五月二十一日には草津をあとにした。途中、富山・金沢に立ち寄り、七月はじめに伏見城内の屋敷に帰った。

さっそく、秀吉に旅土産を携えて挨拶に行ったが、驚いたことに秀吉はげっそりと痩せ衰えていた。赤いが当然の猿面も青白く、ぎょろりとした目のまわりには黒く隈が出来ていた。

「おう、戻られたか、戻られたか。よう戻られた。わしは待ちかねていましたぞ」

利家が挨拶するより早く、秀吉は利家の手を取って迎えた。妙に熱っぽく、そのくせかさか

さに乾いた手触りであった。

「おことが湯治に旅だったすぐあとじゃ。わしの体具合がわるくなった。一度はもうあかん、おしまいやと思うほど、わるかったのじゃよ」

目をしょぼしょぼさせて、涙さえ浮かべた。

病気にはまるで無縁のように頑健だった秀吉が、咳気に悩まされるようになったのは、文禄四年（一五九五）、伏見築城にかかった頃からであった。それがひどくなったのは、ことしの五月五日の端午の節句の日からだった。

昼間はさほどでもなかったが、夜、床に入ってからがたいへんであった。息もつけぬほど咳き込んで、胸を掻き挘って苦しんだ。淀殿などの側室や、奥女中などが寝もやらず介抱したが、それでおさまるものではなかった。秀吉自身、病痛と睡眠不足で、急に痩せ衰えていった。

秀吉の死病となったのは、老人性の労咳（肺結核）とも、気管支炎とも、喘息とも伝えられているが、名医の誉れ高い侍医の曲直瀬養安院が、自分ひとりでは手に負えないというので、治療の応援に京都じゅうの名のある医師を呼び集めたというくらいだから、何病にしろ、相当悪化していたのであろう。

利家が帰って来たのは、何とか危機を脱した頃であった。秀吉は看護につききっていた者どもを遠ざけて、利家と二人きりになったひととき、

「のう、大納言どの。人は多いが真に頼りになるのは、おこと一人だけじゃ。もしもわしに万一のことがあったときは、秀頼をわが子じゃと思って、よろしく守護してたもれや。こ、このとおりじゃ、お頼申す」

秀吉は、枯枝のように痩せ細った指を畳につかえて、額を畳にこすりつけた。

利家は、狼狽した。

「秀吉どの、いや、殿下。殿下らしくもない真似はお止めなされい。さ、さ、まずはお手をお上げあれ」

「……」

「拙者はのう、サルよ、イヌよ、と呼び合うたむかしも、殿下、大納言と呼び合う今も、ご貴殿が好きじゃが……」

むかしに返ったつもりで、できるだけ砕けた調子で、利家はつづけた。

「秀頼さまはもっと好きじゃ。ずっとお傅をしてきたせいでもあろうが、わが子同様、可愛うござる。拙者の目の黒いうちは、殿下の願いに背くことはござらぬ。諸侯と一心して、必ず秀頼どのを守護し、豊家守護に努め申す。決してご案じ召さぬよう」

「大納言どののそのお言葉、そのお気持ち、百千万の味方を得たよりも心強うござる。頼みいる、頼みいる」

秀吉は目を潤ませて言うと、また、畳に額をこすりつけた。

(二)

秀吉が正式の制度として、徳川家康、利家、宇喜多秀家、毛利輝元、上杉景勝を五大老に、前田玄以、長束正家、浅野長政、石田三成、増田長盛を五奉行に任じたのは、七月十三日であった。

そして、一日おいた十五日には、伏見と大坂に、東国、西国の諸侯を招集して、かねて右筆に命じて書きとめさせておいた十一ヵ条の遺言を伝えさせた。

第一条は家康、第二条は利家、第三条は徳川秀忠、第四条は前田利長という、いわば両巨頭の父子にあてたもの。以下、第五条は宇喜多秀家、第六条は上杉景勝と毛利輝元、第七、八条は五大老全員に、第九―十一条は前田玄以と長束正家に宛てたものであった。

利家に宛てた第二条には、

「――利家どのは、幼な友達の頃より律儀な人柄と知っていて、秀頼さまの傅役を仰せつけたのである。それを考えて、よくよく秀頼さまのためになってやってもらいたい。このことは、家康どのはじめ五大老のいる席で、たびたび仰せられたことである」

とあり、利長に宛てた第四条には、

「――父の利家どのが齢をとり、患いがちとなっても、秀頼さまの傅役をつづけるよう、取り計らった。それを忝く思って、よくよく秀頼さまの世話をするようにと仰せられて、そのほうを中納言にすすめ、橋立の茶壺、吉光の脇差を下され、祝儀として十万石を与えられた」

とある。

その他の条々、すべて秀頼の成人の日までの世話を懇々と頼み、五大老の心得を述べている。そして、特に家康、利家を重しとし、よく両人に従って行動するようにと命じている。

秀吉のこの遺言に対して、即日、五大老、五奉行とも、それぞれ神に誓ってご遺言に違わぬという起請文を書き、花押、血判をした。

それを取り纏めて差し出した八月五日、五大老を召し出した秀吉は、まさに燃え尽きようとする火が、一瞬、最後の光を放つように、気力を振起して遺言をしたためた。

「秀頼事、成りたち候やうに、此の書付のしゆ（衆）を神たのみ申し候。なに事も此のほかにわ（は）、おもひのこす事なく候。かしく

八月五日　（太閤花押）

いへやす
ちくせん（利家）
てるもと
かけかつ
秀いへ
まいる

かえすがえす、秀頼事たのみ申し候、五人の衆たのみ申上候、いさい五人の物（者）に申しわたし候。なごりおしく候。以上」

秀吉は、五日の遺書でも、なお心安まらず、七日には将来、仲間割れなど起こさない用心に、五奉行には姻戚の縁を結ばせ、八日には、家康、利家、秀家らに、さらに誓書を入れさせた。

その後はもう、ほとんど意識が混濁して、つききって看護していた淀殿の顔、秀頼の顔も識別できなかった。

それでもなお、この世への断ち切りがたい執念が、微かにでも心臓を鼓動させていた。が、それも帰国していた上杉景勝を除く家康、利家、輝元、秀家の四大老が看取るなか、八月十八日、丑の刻（午前二時）には、まったく止まって、風雲波瀾に富み、栄耀栄華を極めた英雄は、六十二年の生涯の幕を閉じた。

つゆとをち　つゆときへにし　わかみかな
　なにわの事も　ゆめの又ゆめ

辞世の歌である。万一に備えて予めつくり、自筆して孝蔵主に預けておいたものといわれている。老碌っ気を感じさせない、率直で人間臭い、いい歌である。

秀吉の死を秘匿したまま半月経った九月三日、家康の独走に危機感を抱いていた石田三成の提案に、利家も賛成して、五大老、五奉行は熊野牛王の誓書を差し出した。たがいが勝手に徒党を組んだり、争いを起こしたりしないことを、武将の信仰篤い熊野の神にかけて誓約したのである。

(三)

さて、五大老、五奉行が、太閤死後の処理として、何を措いても緊急に行なわねばならないのは、渡海して朝鮮にいる部隊を、無事に撤収させることであった。

主将の宇喜多秀家はすでに帰国していたが、かの地にはなお十万の将兵が残されていた。家康と利家が相談して、秀吉の喪を秘して朝鮮に密使を派遣した。各部隊に対して、それぞれ当面する敵と講和をし、すみやかに釜山に集結して帰国するよう伝えたのである。

一方、筑前博多には毛利秀元、浅野長政、石田三成を派遣した。帰国部隊を手落ちなく迎え入れるためだった。

十一月に入って、撤退部隊がぞくぞくと帰り始めた。ただし、その頃にはもう秘していた秀吉の死は、朝鮮側にも知れ渡っていた。撤退軍はいずれも果敢な朝鮮水軍の攻撃を受け、追撃を受けて、将兵ともに疲れ果てての帰国だった。

島津義弘の率いる薩摩軍団などは、もっとも酷い目に遭った。執拗な追撃を避けて、あちらの島影、こちらの島影と逃げまわって、容易にすすむことができなかった。が、十一月十九日、朝鮮水軍の名指揮官、李舜臣が戦死して、朝鮮勢の追撃が鈍った。

十二月十日、薩摩軍団はやっとの思いで博多に帰着した。それによって、日本軍団すべての撤収が終わった。

慶長四年（一五九九）正月一日、伏見城で諸侯の年賀を受けた豊臣秀頼は、十日には秀吉の

遺言に従って、生母淀殿とともに、大坂城西の丸に移った。同時に傅役の利家も大坂城に入って、総支配役の任に就いた。

秀頼が去ったあとの伏見城には家康が入った。秀吉が死を間際にして決めた、三年間は在京せよという指図に従ってのことだった。

秀吉はふたりの実力者、律義な利家と、誠実者と思われる家康を、大坂と伏見に置き、たがいに協力させることによって、万が一、豊家に謀叛を図る不届き者が現われても、うまく討伐してくれるだろうと考えたのであった。

五大老、五奉行が、前述したように、前年九月三日、熊野牛王の誓書をつくったのも、秀吉のそうした希望に沿おうと考えたからであった。

だが、秀吉が穏和な猫と思ったのは、実は牙を研ぎすまして攻撃の機を狙う獰猛な虎であった。家康は、誓書をつくった直後から、堂々と誓書破りを始めていた。

伊達政宗の女を六男忠輝の室に迎え、縁故の者の女を養女として、福島正則の嫡男忠勝や、蜂須賀家政の嫡子至鎮と娶すなど、さかんに諸侯と姻戚関係を結んで、与党がためを行なった。

その結果、伏見城の家康と、病気持ちの利家の補佐役として大坂城入りをし、ほとんど思うままに政務を執りしきっていた若手の切れ者、石田三成とのあいだに対立が生じ、それが次第に険悪になっていった。

伏見方と思われるのは、京極高次、伊達政宗、最上義光、藤堂高虎、池田輝政、黒田長政、

金森長近、蜂須賀家政、大谷吉継らの諸侯。大坂方は五奉行のほか、宇喜多秀家、毛利輝元、上杉景勝、佐竹義宣、立花宗茂、小西行長、長宗我部盛親らの諸侯、そのほかに三成が主将となるなら味方はせぬが、利家の命には従おうという細川忠興、加藤清正、加藤嘉明、浅野幸長らがいた。

歴史を語って、もしもを言うのは仕方のないことであるが、「関ヶ原戦」が、もし翌年（慶長五年＝一六〇〇年）ではなくて、病い篤しとはいえ、利家存命ちゅうのこの時点で起きていたら、右に羅列した諸侯の配置は、もっと違ったものになって、大坂方が格段に優勢になっていただろう。そうして、如何に戦さ上手の家康でも、そう易々とは勝利を得られなかったことだろう。

すでに書いてきたように、若い日の利家は異風を好むかぶき者であり、槍の又左と豪勇ぶりを発揮し、信長の面前であえて十阿弥を斬るといった快男児ぶりを見せてきた。信長型の若者であったといっていいだろう。

だが、信長と違って、十阿弥を斬ったあとの牢人暮らし、賤ヶ岳戦における苦境と、人生の挫折感を味わい、生死紙一重といった危地にも立ってきている。そうしたことは、利家の人柄を、信長とも秀吉とも、ひと味ちがったものとして形成させていた。

多少、利家に似た人物を挙げるなら、秀吉の弟の豊臣秀長であろう。秀長は実弟として、利家は親友として、後年になるほど、秀吉の陰の存在に徹しようとしている。しかも、行動の基本を義に置き、真実一路を貫いて、妙な欲心を持たなかった点、傑れた武人でありながら、同

時に哲人的な生きようを見せている。

加・能・越百万石の大守だからといって、利家は一度も、前田氏をして天下の覇者たらしめようという野望を抱いたことがない。ただ領国、領民の平穏を願い、繁栄繁昌を願って、家臣には民政に力を入れさせた。秀吉の没後は、病軀を押して「托された孤（秀頼）」を守り、豊家二世を安泰に置くことだけを考えた。傳役として秀頼をわが子同様に愛しくも思っていたという理由によってだけではない。長年の戦乱つづきに倦み疲れた将兵たちのためにも、庶民のためにも、友人秀吉が生涯かけて築いた天下泰平をつづけるためには、それが最善の道と思ったからであった。

その点、諸侯の多くが、次代の覇権を狙って露骨に野望の目を光らせる老獪な家康より、利家に親しみを感じ、敬愛もしていた。

（いまただちに東（徳川氏）西（豊臣氏）の激突となれば、今日の味方も明日の敵で、大方の大名は、大坂のため、秀頼さまのためというより、加賀大納言のためと、豊臣方につきよるであろう……）

家康も、そのへんの機微は十分に心得ていた。もしも利家が健康そのものであったら、

（わしももう五十八歳じゃ。あまりゆっくりはしておれぬ。ひとつ毒でも盛って、早いところ大納言殿を片づけてしまうか……）

くらいは考えかねない心境であった。

だが、そうまでする必要はなかった。利家の病状は悪化する一方で、体は衰えきっていた。

利家は、そんな状態でも、無理をして伏見に家康を訪れ、家康が大坂を訪れれば、いまの今まで病床で呻吟していた身を起こして、

「徳川どの、天下泰平のためでござる。拙者に万一のことがあった場合、秀頼さまをよろしくおたの申す」

と、律儀な傅役の顔で言って、頭を下げた。

「ご存じのように、拙者は故殿下の妹（故朝日姫）婿でござる。豊家の不為を計る輩があれば、きつう懲らしめ申す。いささかもご懸念なく、それよりも病気ご養生に努めて、はようお元気にならるるよう……」

誠しやかな顔で答える家康は、腹の中では、

（このようすでは、大納言の余命ももう、そう長くはないな）

と北叟笑んでいた。

家康が思ったとおり、利家は衰弱する一方であった。

三月二十一日、利家は右筆の高畠定吉を呼んで、秀吉に倣ったわけではないが、十一ヵ条の遺言を書き取らせた。

各条を挙げる煩わしさを避けるが……、自分の遺骸は金沢へ送って、野田山に葬れといったことをはじめ、子どものない利長は弟の利政を子とも思って仲良くせよといったこと、戦いに際して信長公は小人数なりとも国外に討って出られたが、それは大事なことである、決して敵を国内に入れず敵地に踏み出して戦え、といった心得まで書かせている。

また、隠居の身とはなっているが、老臣の村井長頼、奥村永福は、自分の死後も剃髪させず大事に扱って、いざという場合には兵を預けて身辺護衛に使え。長連龍、高田南坊（右近―当時、前田家に身を寄せていた）は律儀な者ゆえ、茶の料など遣わして情けをかけてやるよう。なお、徳山五兵衛は他家の密偵である。自分の死後は適当に処置せよ……といった人事問題のほか、文武に傑れた者を探し出して召し抱え、新参といえども情けをかけて使えとか、遺産配分についても適切に指示している。

同じ病衰した人の遺言でも、秀吉のものと較べて、よく行き届いた、しっかりしたものである。後事を託して不安のない立派な後嗣のいた利家、覇権を求めず敵を持たなかった利家には、憂いも動揺もなかったのである。

しかし、注目すべき条目もあった。それは、利長・利政兄弟の下にある一万六千の兵の半ば、八千をもって利政は金沢城の留守をまもり、利長は八千を率いて大坂に詰めること、万一、事の起きた場合は、利政も八千を連れて上洛し、兄弟力を合わせて事に当たれと書いている。自分の死後、徳川家康と大坂（秀頼）とのあいだに紛争の生ずることは、避けがたいと考えていたのである。

前記にある徳山五兵衛長徳（松任四万石）は、利家が見抜いていたとおりで、他家（徳川家）の密偵をつとめていた。利家が死んだ翌日には、さっそく逃げ出して、家康のふところに飛び込んでいる。

三月の末、いくらか気分のいい日、利家は輿で西ノ丸に秀頼を訪ねた。それとなく今生の訣れをしておこうと思ったのである。

「やあ、爺、よう参ったな。加減はいいのか。大丈夫か」

秀頼は、小さな体で利家に纏いつくようにして迎えた。

「このとおり、大丈夫でございます」

利家は微笑して答えた。秀頼は七歳、幼年の顔から少年の顔に変わる齢ごろである。猿面の秀吉に少しも似ず、淀殿によく似て、匂い立つような美少年であった。この子の行く末を見守ってやれないのは、やはり残念であった。

「そうか、大丈夫か。せいぜい養生いたせよ。そして、もっとたびたび顔を見せに来てくれ」

大人びて言う秀頼に、涙を見せまいとして利家は、

「かたじけなき仰せ、せいぜい養生につとめまする」

と、顔を伏せて礼を言い、

「この爺は、ここにいなくとも、秀頼さまが何をしておわすか見透す術を心得ておりまする。それをお忘れなく、おかかさま（淀殿）、ねねかかさま（北政所）の仰せられることをよくお聞きあそばして、立派な御大将となるよう、何ごともよう励みなされませよ」

と、傅役としての恐らく最後の言葉を残して辞去した。事実、それきり、秀頼に謁することがなかった。

閏三月三日朝、利家の容態が急変した。つききりで看護していた正室まつの周章のさまを眺めて、

「あわてるな。生あるものに一度は訪れる死の時が、迫っただけのことじゃわ」

利家は、存外しっかりした声で言った。

まつもしっかり者である。かねて自分の手で縫い上げておいた経帷子を取り上げて、

「おまえさまは、槍の又左と呼ばれた若い頃から始めて、ずいぶん多くの人を殺めておられます。後生のため、これをお召し遊ばせ」

と、着せようとした。

「そのようなもの、無用じゃ。わしは、戦国の武将として、確かに数多の人を殺しはしたが、不義不理の殺人をしたことはない。それでも地獄に堕ちて、閻魔にせめられるとあれば、わしより先に死んだ家来どもを集めて、閻魔めと一戦するまでじゃ」

「……」

「わしが死んだあとの心配より、そなたは秀頼さまのこと、そしてわが前田家のことをよくよく考えて、倅どもが道を誤らぬよう教えてやってくれ。しっかり者のそなた故、そつはないと思うが、くれぐれも頼みおくぞ」

それが臨終の言葉となって、卯の刻（午前六時）には息を絶った。享年は秀吉と同じ六十二歳。死に顔は安らかであった。

遺骸は、翌四日、遺言どおり、長持に納めて金沢に送った。街道では領民たちが、金沢では家臣、城下の庶民が、死して帰国した利家を粛然として迎えた。

葬儀は四月八日、金沢の宝円院で名雲和尚を導師として厳粛のうちにも盛大に行ない、故人の願いどおり、城南の野田山に葬った。法名は高徳院殿先亜相桃雲浄見大居士。

亜相というのは大納言のこと。宰相に亜ぐ位だから亜相といったのである。朝廷はこの元大納言に、従一位を追贈した。

（やれ、やれ、やっと死にやったか）

と、息をついた者もいた。家康である。

敬愛する利家がいるからこそ大坂側についていた諸侯も、多くが徳川方へ流れていった。

そのようにして、豊臣家と徳川家のあいだに横たわる溝が広く、深くなったところで、翌慶長五年（一六〇〇）九月の「関ヶ原合戦」が起きた。それを前哨戦として、十四年後の慶長十九年（一六一四）十―十二月の大坂「冬の陣」、元和元年（一六一五）五月の「夏の陣」が起きて、秀吉が一代にして築いた豊臣家は、儚く消えていった。

利家が死んだとき、加賀で霊山として信仰されている白山が、七日間に亘って鳴動したというが、利家の死を惜しみ、同時にその後に起きる動乱を予告するものだったのかもしれない。

すでに、天下は徳川氏のものとなり、前田家も三代利常の時代になって十余年たった元和二年ごろから、利家の野田山の墓所の辺りに方丈の草庵を結んで、一人の尼僧が住むようになった。

黒布で裹頭した姿の美しい尼であったが、色白で頬のふっくらした顔を見ただけでは、齢のころは定かでなかった。ひどく年寄りだと言う者もあれば、いや、まだ若い女だと言う者もい

た。

尼僧は、花の咲く季節には、毎日、欠かさず新しい山野の花を利家の墓前に供え、雪の季節には、墓のまわりの雪を綺麗に掃き清めて、朝夕の長い勤行を怠らなかった。

方丈は、利常が建ててやったといわれており、前田家の家来たちも、いつとなく尼僧を「御虎尼さま」と尊称した。

この御虎尼さまが、忍びの頭領を隠退した姫トラの後身であったことは、本書の読者には、改めて説くまでもあるまい。彼女は、およそ十年も、そうして墓所の守りをしていた。九十歳近くまで生きていた勘定になる。

●「前田利家」関係年表

年代	西暦	事項
天文　七年	一五三八年	尾張の国、荒子城に前田利昌の四男として生まれる。
天文二十年	一五五一年	織田信長の近習となる。元服し、孫四郎利家を名乗る。
永禄　元年	一五五八年	通称を又左衛門と改める。篠原主計の娘まつと結婚。
永禄　二年	一五五九年	信長の同朋衆、十阿弥を斬り、主君の勘気をこうむる。
永禄　十年	一五六七年	利家が赤母衣衆に加えられる。
永禄十二年	一五六九年	利家が信長の命により、兄利久に代わって荒子城主となる。
天正　三年	一五七五年	利家、越前に三万三千三百石を与えられ、荒子より移る。
天正　十年	一五八二年	本能寺の変。信長が明智光秀によって襲殺される。
天正十一年	一五八三年	賤ヶ岳の戦い。利家は戦わず越前・府中城に帰投。これにより能登一国および加賀半国を得て、加賀・尾山城に移る。
天正十二年	一五八四年	利家が末森城において佐々成政の軍勢を壊滅させる。
天正十六年	一五八八年	利家、豊臣秀吉の許しを得て、能登一国を利長に譲る。
天正十九年	一五九一年	利家・利長父子が秀吉の昵懇衆に加えられる。
慶長　二年	一五九七年	慶長の役。利家は豊臣秀頼の傅役として留守を護る。
慶長　三年	一五九八年	利家が徳川家康らと共に五大老となる。秀吉、伏見城で没す。
慶長　四年	一五九九年	利家、秀頼・淀殿と大坂城に移る。三月、大坂屋敷で没す。

あとがき（旧版より）

戦国時代の武将で、信長・秀吉・家康を書いた伝記や小説は、山ほど出ているが、いわゆる天下取り（盗り）リレーのランナーには加わらなかったせいもあってか、前田利家を書いたものは、武田信玄・上杉謙信と較べても意外に数が少ない。だが、利家は、人物としても、事蹟からいっても、同郷（尾張）人の信長・秀吉と較べて、そう見劣りしないと思う。

愛知県では、県（尾張・三河）が生んだ信長・秀吉・家康をたたえる「英雄まつり」をやるとか、やったとかいう話を、聞いたか、読んだかしたことがあるが、それをやるなら、当然、利家を加えるべきであろう。

天下取りリレーといっても、信長は中途で高ころびに転んで脱落し、秀吉は完走しながら、バトンタッチに失敗している。これを仮に事業に例えるなら、織田会社は、ワンマン社長の自己過信がひきがねになって倒産し、豊臣会社は一代限りで潰れたということである。

その点、前田会社の初代社長利家は、いわば織田・豊臣両社の子会社から出発しているが、一代にして百万石の大会社をつくって、家康が礎いた大徳川会社とは、もう親会社、子会社という関係ではなく、ほぼ対等の立場を取るほどの会社に育てている。

ハイテク、ハイメカで息つく暇もない競い合いの最中、オイルショックに揺さぶられ、円高の追いうちにあって、大会社といえども必ずしも安泰といえず、中小企業とともに一所懸命を必要とする現代に当てはめて考えた場合、経営者、管理職たる者、信長・秀吉・家康の誰を手本にされるであろうか。わたしは、利家をこそ見直してみるべきではないかと思っている。かれは、若い頃の体力と覇気を、うまく気力、勇気に転換して、信長・秀吉から学ぶべきは学びながら、天下取りなどという修羅場に入り込む愚を避けて、独自の道を歩いていった。しかも、後継者に見事な精神的・経済的遺産をのこしている。加賀に、平和と、独特にして深味のある北都文化の基盤をとどめていった。

歴史は繰り返すというが、現代は国際的規模における経済戦国時代とも謂えよう。かつての猛烈な国内的戦国乱世を、見事に生きた利家の足跡から、学ぶところが少なくはないであろう。

なお、いまの若い人々が歴史に深い関心を持ちながら、よく知る機会の少ないのを嘆いているとは、よく聞くことである。わたしはこの作品では、利家という一人の人物を縫い針として、かつての戦国時代のあらましを知ってもらえるよう書きすすめてみた。

おしまいに、遅々たる筆の歩みを見守り、励ましてくださった伊藤叢文社社長に深甚なる感謝を申し上げる。

著　者

著者紹介
花村　奨（はなむら・すすむ）
明治44年、岐阜県生まれ。東洋大学東洋文学科卒業。「首途」で第9回直木賞候補となる。平成4年没。
『美しき首途』『最上徳内』『鉄砲伝来物語』『勝海舟物語』『風雪会津藩物語』など、多数の著作がある。

PHP文庫　前田利家
——秀吉が最も頼りにした男

1996年3月15日　第1版第1刷
2001年11月30日　第1版第17刷
著者　花村　奨
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
東京本部　〒102 千代田区三番町3-10
第四出版部　☎03-3239-6221
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431
印刷所
製本所　図書印刷株式会社

© Atsumi Hanamura 1996 Printed in Japan
落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-569-56871-8

☆本書は、かつて叢文社から刊行された『不倒の城　前田利家』（昭和六十二年二月）を、再編集したものです。

PHP文庫

池波正太郎 霧に消えた影
池波正太郎 信長と秀吉と家康
池波正太郎 さむらいの巣
稲葉　稔 大村益次郎
石川能弘 山本勘助
奥宮正武 真実の太平洋戦争
小和田哲男 戦国合戦事典
大島昌宏 結城秀康
加野厚志 島津義弘
加野厚志 本多平八郎忠勝
神川武利 秋山真之
菊池道人 丹羽長秀
黒岩重吾 古代史の真相
黒岩重吾 他 時代小説秀作づくし
黒鉄ヒロシ 新選組
堺屋太一 豊臣秀長 上巻
堺屋太一 豊臣秀長 下巻
佐竹申伍 島左近
佐竹申伍 真田幸村
芝　豪太 公望
瀬島龍三 大東亜戦争の実相
武光　誠 18ポイントで読む日本史
高野　澄 井伊直政
立石優(ゆう)・范(はん)蠡(れい)
寺林峻 服部半蔵
童門冬二 上杉鷹山の経営学
童門冬二 戦国名将一日一言
童門冬二 上杉鷹山と細井平洲
戸部新十郎 忍者の謎
土門周平 参謀の戦争
中村晃 児玉源太郎
中村整史朗 本多正信
中津文彦 日本史を操る興亡の方程式
中江克己 日本史怖くて不思議な出来事
日本博学倶楽部「歴史」の意外な結末
野村敏雄 宇喜多秀家
半藤一利 日本海軍の興亡
半藤一利 ドキュメント太平洋戦争への道
浜野卓也 黒田官兵衛
浜野卓也 吉川元春
花村　奨 前田利家
葉治英哉 松平容保
葉治英哉 張良
羽生道英 東郷平八郎
秦　郁彦 ゼロ戦20番勝負
星　亮一 山口多聞
保阪正康 太平洋戦争の失敗10のポイント
宮野　澄 小澤治三郎
満坂太郎 榎本武揚
三戸岡道夫 保科正之
森本　繁 北条時宗と蒙古襲来99の謎
八尋舜右 竹中半兵衛
八尋舜右 立花宗茂
竜崎　攻 真田昌幸